

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第51集

祝 田 遺 跡

平成4年度二級河川都田川住宅宅地関連公共施設設備促進事業工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

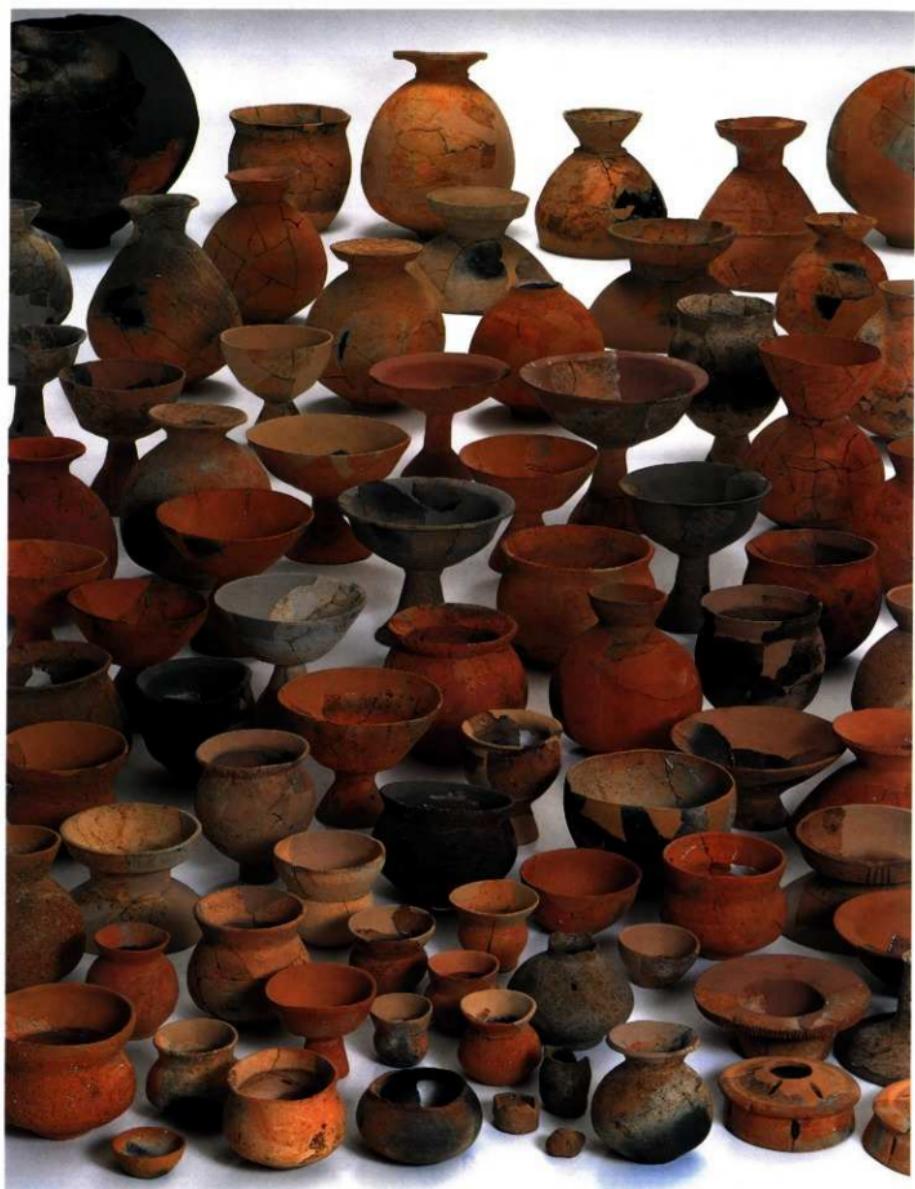
静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第51集

祝 田 遺 跡

平成4年度二級河川都用川住宅宅地関連公共施設設備促進事業工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



弥生時代溝（SD54）出土土器

序

祝田遺跡は、以前より手培形土器や瓦の出土地として知られ、都田川下流域の中で主要な位置を占めている遺跡である。現堤防下を調査した昭和57、58年度の調査でも弥生時代後期の方形周溝墓、土坑などの遺構と中世の掘立柱建物跡、井戸などの遺構と共に瓦の出土をみることができた。

今回は、以前の調査区に接する旧堤防下を対象としたもので弥生時代の遺構として、環濠・方形周溝墓、中世の遺構としては、たくさんの柱穴群・溝・井戸跡などの検出をみることができた。特に環濠は、上流の椿野遺跡で出土した銅鏡と併せてこの時代の社会的緊張を示す証として貴重な発見となった。また、中世の瓦と遺構の関連を示す根拠は今回も明確にされなかったが、寺の存在をさらに強く推定させる調査となった。

調査の実施及び報告書の作成に当たっては、静岡県浜松土木事務所・静岡県教育委員会・細江町教育委員会の各位に、深い理解と協力をいただいた。ここに関連各位に深い感謝の意を表すとともに、調査及び資料整理に従事した本研究所員及び作業に参加された多くの人々の労苦に感謝するものである。

1994年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長 斎藤 忠

例言

1. 本書は、静岡県引佐郡細江町に所在する^{はづか}祝田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成4年度二級河川都田川住宅宅地関連公共施設整備促進事業工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県浜松土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
3. 現地発掘調査は、平成4年4月から同年11月まで行い、ひき続き整理作業を平成6年3月まで行った。
4. 調査体制は次のとおりである。
平成4年度
所長 斎藤忠、常務理事 鈴木勲、調査研究部長 山下晃、調査研究1課長 平野吉郎
調査研究員 鈴木光一、山崎仁資
平成5年度
所長 斎藤忠、常務理事 鈴木勲、調査研究部長 植松章八、調査研究3課長 佐野五十三
調査研究員 鈴木光一
5. 本書の執筆は、鈴木が当たり、遺物写真撮影は、楠本真紀子氏（楠華堂）が行った。
6. 発掘調査資料は、すべて静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。
7. 本書の編集は、静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
8. 発掘調査及び報告書の作成に当たっては、次の方々から御教示や御協力を賜った。特に細江町教育委員会には、大変なお世話をいただいた。記して厚くお礼を申し上げたい。
加藤理文 久野正博 栗原雅也 後藤建一 松井一明 森田香司

凡例

本書の記述については、以下の基準に従い、統一をはかった。

1. 出土遺物は、10m方眼のグリッドごとに種類別に通し番号を付して取り上げた。

2. 遺構・遺物の標記は次の通りである。

遺構 (S)	遺物 (R)		
A 構	W 木製品	J 織器	
B 垣穴住居跡	P 土製品	NB 動物遺存体	
D 渾	S 石製品		
F 上 坑	M 金属器		
H 掘立柱建物	B 土 級		
P 小穴 (Pit)	E その他		
R 旧河道		土器は番号のみで符号なし	
X その他			

目次

はじめに

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
(1) 縄文時代	3
(2) 弥生時代	5
(3) 古墳時代	5
(4) 奈良時代	5
(5) 平安・鎌倉時代以降	6

第2章 調査の概要

第1節 調査の方法	7
第2節 調査の経過	8

第3章 遺構

第1節 弥生時代後期の遺構	10
(1) 方形周溝墓	10
(2) 溝状遺構	15
(3) 土坑状遺構	19
第2節 奈良時代から中世の遺構	23
(1) 溝状遺構	23
(2) 井戸	28
(3) 土坑状遺構	31
第3節 近世以降の遺構	31

第4章 遺物

第1節 弥生時代後期の遺物	40
第2節 古墳時代の遺物	90
(1) 頸済器	90
(2) 土師器	90
第3節 奈良・平安時代の遺物	
(1) 奈良時代の遺物	91
(2) 平安時代の遺物	91
第4節 中世の遺物	
(1) 山茶碗	92
(2) 墨書き器	94
(3) 磁器	94
(4) 土師質小皿	94

第5節	その他の遺物	
(1)	瓦	124
(2)	土錘	131
(3)	金属製品	131
(4)	土製品・石製品	131
(5)	木製品	131
第5章	まとめ	
第1節	祝田遺跡出土の山茶碗について	
(1)	法景について	136
(2)	胎上から	136
(3)	出土資料の分類	137
第2節	中世の祝田遺跡	
(1)	祝田御厨について	140
(2)	出土遺物から	141
第3節	おわりに	142
特論	静岡県、祝田遺跡における自然化学分析	144

挿表目次

第1表	弥生時代方形周溝墓一覧表	34
第2表	弥生時代溝一覧表	34
第3表	弥生時代土坑一覧表	35
第4表	その他の遺構一覧表	35
第5表	中世溝一覧表	36
第6表	中世井戸一覧表	38
第7表	中世土坑一覧表	38
第8表	弥生土器観察表	72
第9表	奈良～中世遺物観察表	104
第10表	土錘観察表	132

挿図目次

第 1 図	調査区位図	1
第 2 図	遺跡周辺地形分類図	2
第 3 図	祝山遺跡周辺の遺跡	4
第 4 図	土壙柱状図	7
第 5 図	グリッド配置図	7
第 6 図	調査経過-1	8
第 7 図	調査経過-2	9
第 8 図	弥生時代遺構全体図	11
第 9 図	1号・3号方形周溝墓実測図	13
第 10 図	2号・4号方形周溝墓実測図	14
第 11 図	弥生時代溝（SD50）実測図	16
第 12 図	弥生時代溝（SD54）実測図	17
第 13 図	弥生時代溝実測図	18
第 14 図	弥生時代土坑（埋設土器）実測図	18
第 15 図	旧河川跡断面模式図	19
第 16 図	弥生時代土坑実測図	20
第 17 図	奈良時代から中世の遺構全体図	22
第 18 図	中世溝（SD23）実測図	24
第 19 図	中世溝（SD37・38・39）実測図	25
第 20 図	中世溝実測図	27
第 21 図	中世井戸（SE03）実測図	29
第 22 図	中世上坑実測図	30
第 23 図	古墳時代遺物出土状況	32
第 24 図	近世溝（SD11）実測図	33
第 25 図	SD50 出土土器構成比率	41
第 26 図	SD54 出土土器構成比率	42
第 27 図	弥生時代方形周溝墓出土土器実測図1	44
第 28 図	弥生時代方形周溝墓出土土器実測図2	45
第 29 図	弥生時代方形周溝墓出土土器実測図3	46
第 30 図	弥生時代方形周溝墓出土土器実測図4	47
第 31 図	弥生時代溝（SD50）出土土器実測図1	48
第 32 図	弥生時代溝（SD50）出土土器実測図2	49
第 33 図	弥生時代溝（SD50）出土土器実測図3	50
第 34 図	弥生時代溝（SD50）出土土器実測図4	51
第 35 図	弥生時代溝（SD50）出土土器実測図5	52
第 36 図	弥生時代溝（SD50）出土土器実測図6	53
第 37 図	弥生時代溝（SD50・SD54）出土土器実測図	54
第 38 図	弥生時代溝（SD54 上層）出土土器実測図1	55
第 39 図	弥生時代溝（SD54 上層）出土土器実測図2	56

第 40 図	弥生時代溝（SD54 上層）出土土器実測図 3	57
第 41 図	弥生時代溝（SD54 上層）出土土器実測図 4	58
第 42 図	弥生時代溝（SD54 上層）出土土器実測図 5	59
第 43 図	弥生時代溝（SD54 上層）出土土器実測図 6	60
第 44 図	弥生時代溝（SD54 上層）出土土器実測図 7	61
第 45 図	弥生時代溝（SD54 上層）出土土器実測図 8	62
第 46 図	弥生時代溝（SD54 上層）出土土器実測図 9	63
第 47 図	弥生時代溝（SD54 上層）出土土器実測図 10	64
第 48 図	弥生時代溝（SD54 中層）出土土器実測図 1	65
第 49 図	弥生時代溝（SD54 中層）出土土器実測図 2	66
第 50 図	弥生時代溝（SD54 中層）出土土器実測図 3	67
第 51 図	弥生時代溝（SD54）出土土器拓影	68
第 52 図	弥生時代溝・土坑出土土器実測図	69
第 53 図	弥生時代土坑・グリッド出土土器実測図 1	70
第 54 図	弥生時代土坑・グリッド出土土器実測図 2	71
第 55 図	須恵器（合子状坏蓋）法量表	90
第 56 図	古墳時代土坑・グリッド出土土器実測図	95
第 57 図	奈良時代溝（SD40）出土土器実測図	96
第 58 図	奈良時代溝（SD40）・グリッド・中世溝出土土器実測図	97
第 59 図	中世溝出土土器実測図	98
第 60 図	中世溝（SD23）出土土器実測図	99
第 61 図	中世溝・土坑・ピット出土土器実測図	100
第 62 図	中世井戸（SE03）出土土器実測図	101
第 63 図	グリッド出土土器実測図 1	102
第 64 図	グリッド出土土器実測図 2	103
第 65 図	瓦実測図 1	125
第 66 図	瓦実測図 2	126
第 67 図	瓦実測図 3	127
第 68 図	瓦実測図 4	128
第 69 図	瓦実測図 5	129
第 70 図	瓦実測図 6	130
第 71 図	土錘実測図	133
第 72 図	金属製品・土製品実測図	134
第 73 図	木製品実測図	135
第 74 図	山茶碗法量表	137
第 75 図	小碗・小皿法量表	137
第 76 図	山茶碗・小皿胎土別構成比率	139
第 77 図	渥美湖西系山茶碗の高台形態による分類比率	139

図版目次

- | | | | |
|-------|---|-------|--|
| 図版 1 | 調査区周辺空中写真 | 図版 14 | ①3号方形周溝墓
②4号方形周溝墓
③4号方形周溝墓鉄製品出土状況 |
| 図版 2 | ①調査区発掘前近景
②調査区周辺環境 | 図版 15 | ①SD50上器出土状況
②SD50土器出土状況
③SD50土器出土状況
④SD50土器出土状況 |
| 図版 3 | ①中世遺構全景
②中世遺構全景（排土置場下） | 図版 16 | ①SD54鉄製品出土状況
②SD54底部遺物出土状況
③SD54完掘状態 |
| 図版 4 | ①SD11完掘状態
②SD11の石組み
③SD12遺物出土状況 | 図版 17 | ①SF50土器出土状況
②SF51上器出土状況
③SF53土器出土状況 |
| 図版 5 | ①SD23遺物出土状況
②SD23土層断面
③SD23完掘状態 | 図版 18 | ①SX07土器出土状況
②SX07土器出土状況
③SX11上器出土状況 |
| 図版 6 | ①SD23丸瓦出土状況
②SD34土層断面
③SD34土器出土状況
④SD34完掘状態 | 図版 19 | ①SX12壺出土状況
②SX16壺出土状況
③SX18壺出土状況
④SX19壺出土状況 |
| 図版 7 | ①SD37完掘状態
②SD37・38土層断面
③SD37・38完掘状態 | 図版 20 | SD50出土土器集合写真 |
| 図版 8 | ①SD40風字硯出土状況
②SD40土層断面
③SD40完掘状態 | 図版 21 | 方形周溝墓出土土器1 |
| 図版 9 | ①SE01検出状況
②SE03土器出土状況
③SE03完掘状態 | 図版 22 | 方形周溝墓出土土器2 |
| 図版 10 | ①SF01完掘状態
②SF23完掘状態
③P251根固めの石
④P306土器出土状況 | 図版 23 | 弥生時代溝（SD50）出土土器1 |
| 図版 11 | ①P521土器出土状況
②P913刀子出土状況
③12区の遺構検出状況 | 図版 24 | 弥生時代溝（SD50）出土土器2 |
| 図版 12 | ①方形周溝墓群 東より
②弥生時代の遺構全景 | 図版 25 | 弥生時代溝（SD50）出土土器3 |
| 図版 13 | ①1号方形周溝墓
②2号方形周溝墓
③2号方形周溝墓土器出土状況
④2号方形周溝墓ミニチュア土器出土状況 | 図版 26 | 弥生時代溝（SD50）出土土器4 |
| | | 図版 27 | 弥生時代溝（SD50）出土土器5 |
| | | 図版 28 | 弥生時代溝（SD54）出土土器1 |
| | | 図版 29 | 弥生時代溝（SD54）出土土器2 |
| | | 図版 30 | 弥生時代溝（SD54）出土土器3 |
| | | 図版 31 | 弥生時代溝（SD54）出土土器4 |
| | | 図版 32 | 弥生時代溝（SD54）出土土器5 |
| | | 図版 33 | 弥生時代溝（SD54）出土土器6 |
| | | 図版 34 | 弥生時代溝（SD54）出土土器7 |
| | | 図版 35 | 弥生時代溝（SD54）出土土器8 |
| | | 図版 36 | 弥生時代溝（SD54）出土土器9 |
| | | 図版 37 | 弥生時代溝（SD54）出土土器10 |
| | | 図版 38 | 弥生時代溝（SD54）出土土器11 |

- 図版39 弥生時代溝（SD54）出土土器12
- 図版40 弥生時代溝・土坑出土土器
- 図版41 弥生時代溝・土坑・グリッド出土土器
- 図版42 弥生時代土坑及びグリッド出土土器
- 図版43 弥生時代土坑及びグリッド出土土器・石製品・鉄製品
- 図版44 SD34 出土土器集合写真
- 図版45 SF17出土土器集合写真
- 図版46 古墳時代土坑及びグリッド出土土器
- 図版47 古墳時代土坑・奈良時代溝（SD40）出土土器及び風字硯
- 図版48 奈良時代溝（SD40）、中世溝出土土器
- 図版49 中世溝出土土器1
- 図版50 中世溝出土土器2
- 図版51 中世溝（SD23）出土土器、瓦
- 図版52 中世溝・土坑・ピット出土土器
- 図版53 中世溝・土坑・ピット・井戸出土土器
- 図版54 中世井戸（SE03）出土土器
- 図版55 グリッド出土土器
- 図版56 青磁・土鍤
- 図版57 瓦1
- 図版58 瓦2
- 図版59 木製品・鉄製品

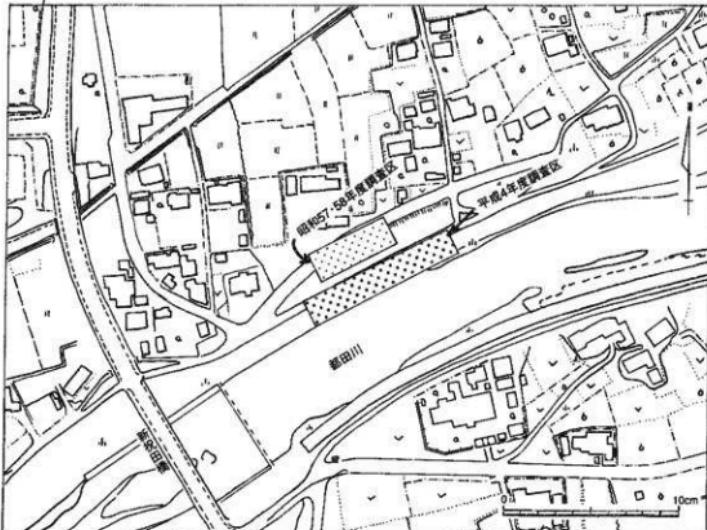
はじめに

都田川は、浜松市都田町地区や細江町中川地区にとって古来からこれらの地区のかなめであり、人々の暮らしはこの川とともにあったといえる。しかし、ここに住む人々の暮らしも度重なる河川の氾濫により常に脅かされてきた。

昭和49年7月の台風8号は、各地に洪水による大きな被害をもたらしたが、都田川も新祝田橋上流の左岸堤防が決壊し、下流域一帯が大洪水にみまわれた。このため静岡県土木部は、河川拡幅、護岸補強の内容で防災工事計画を策定し、昭和51年度より着工した。都田川流域では、たくさんの遺跡の存在が確認されている。細江町内の工事予定区域にも7ヶ所（祝田、田代寺、茂塚、森、岡地船渡、川久保、市場）遺跡の存在が知られている。そこで、細江町教育委員会は、河川改修工事に先立ち、祝田、茂塚、森、川久保の4地区で遺跡範囲確認のための予備調査を実施した。（『都田川流域の遺跡』1981 細江町教育委員会）その結果、祝田、川久保の両遺跡で発掘調査が必要であることが明らかになった。関係諸機関の協議により、川久保遺跡は県教育委員会と細江町教育委員会が共同で調査を行い、祝田遺跡は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を行うことになった。

祝田遺跡は、以前から手焼形土器や中世瓦の出土地として知られていた。細江町が行った予備調査でも、12世紀末～13世紀前葉の遺物とピットを中心とした遺構が確認されている。研究所による調査は、昭和57年12月～58年3月まで、58年12月～59年3月までの2回に分け現堤防下約1600平方メートルの範囲で行われた。その結果、古代末から中世の遺構として溝、井戸跡、掘立柱建物跡などが検出され、特に溝は大体東西南北を示しており、規則性があることが報告されている。また、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構として、方形周溝墓、溝、土坑、上器植などが報告されている。

今回の発掘調査は、新堤防の完成により、不要となった旧堤防部分の解体とともに実行されたもので、静岡県浜松土木事務所から、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所に委託された調査である。



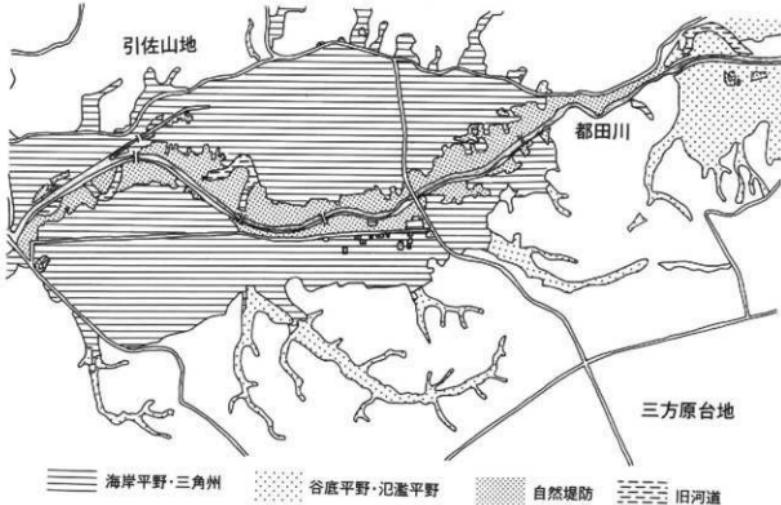
第1図 調査区位置図

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

静岡・愛知県境の鷺の巣山（661.5m）に源流をもつ都田川は、引佐町西平の寺野川と川宇連川の合流地点を起点に浜北市との境を区切りながら南下し、浜松市都田町で沖積低地に入り、釣り針状に湾曲して西に向かい、細江町中川地区を貫流して浜名湖に注いでいる。細江町中川地区を流れる都田川は、引佐山地、三方原台地の境界にそって流路をとっている。北側の引佐山地は、浜名湖北部の三岳山（423.8m）、駒ヶ峰（423.9m）、板築山（222m）などを主とする山地で、西南日本を縦断する中央構造線の外帯に属し、秩父古生層からなっている。都田川北部は、このうち三岳山を中心とする地域に含まれ、地質的には都田層を中心とする地域である。都田層は、主に砂岩・チャート・粘板岩からなり、標高250～200mの山地を成している。引佐山地は、都田川などによって開析され全体的に急斜面が卓越するが構成層が緻密で堅く、深層風化もあまり進んでおらず、斜面は崩壊地なども少なく比較的安定している。

南側の三方原台地は、平坦度の高い原面をもち単一の地形面からなっている。台地面は、北東から南西方向に4.5～6.9%の勾配で傾斜しており、その周辺は崖をもって沖積地に移行している。この台地面は礫層からなる堆積面で、天竜川によって形成された扇状地性の堆積物の厚さは3～20mで主に10m以下の薄層となっている。礫層の上には、厚さ1～2mの赤褐色細粒土層がのっている。高度は、東北端で115m、南部で25m程度である。都田川に接する北部の谷は、崖を開析した谷の延長が台地面にはいり浅谷状緩斜面を形成する所もある。台地の北部には、大草山、根本山、恩塚山、向山など台地面から突出している古生層赤色チャートからなる山々が分布している。これらの山には、恩塚山古墳などの古墳や向山遺跡などの高地性集落が立地する。



第2図 遺跡周辺地形分類図

都田低地（中川沖積平野）は、浜松市都田町から細江町気賀の浜名湖岸に至る約10Kmの地域で幅は、最大でも約2km程度である。吉影・瀬戸・氣賀などに谷の狭窄部があり、その上流に袋状の堆積地を形成し、それらが交互に分布している。都田低地は、瀬戸の狭窄部を境にその下流域は三角州的な性格をもち、地盤高も2m前後の低平な地域である。低地の中央部を弧を描いて流れる都田川は、過去においてかなり屈曲していたことが旧版地形図（明治23年測量2万分の1）などによって明らかになっている。往事の名残である旧河道が現在でも川久保・提花付近に残っている。（浜松市都田の椿野遺跡付近にもみられる）また、自然堤防も現在の河川に沿って連続して発達しているが、いずれも小規模なものである。現在でもこの自然堤防には集落が立地し、上流から祝田・田木寺・船頭・提花・森・川久保と続いている。自然堤防上に集落が立地するのは都田川下流の都田低地にはみられるが、中流域の浜松市都田町中野須部付近や吉影一色付近の袋状低地の自然堤防上にはみられない。なお、この自然堤防は集落の他、普通煙やミカン煙に利用されている。

都田川流域の特徴として、両岸に発達する河岸段丘群が上げられる。特に発達がよいのは、右岸の細江町広岡から石岡にかけてと、吉影・須部付近にかけての地域で、左岸は、一色・中津付近などである。下流域の段丘は、気賀段丘と呼ばれ、特に広岡付近でもっとも広く発達する。標高は、金指で20m、広岡で17mで、西にいくほど低くなる。気賀段丘は、5~10mの段丘疊層をのせており、現在は集落が立地するほか、茶畠やミカン畑に利用されている。石岡・広岡には、縄文時代の遺跡もみられ古くより盛んに生活域として利用されていたことがうかがわれる。また、宿名・中野付近では水田面より5~6mの比高をもつ刑部面と呼ばれる低位段丘があり、都田低地南側の重要遺跡である岡の半・宿名岡遺跡が立地する。

引佐町井伊谷は、井伊谷川が引佐山地を開拓して形成した袋状の沖積地である。この付近は、都田層の上部にのるチャートを中心とした井伊谷層からなり、輝緑凝灰岩もかなり含まれている。また、引佐町柄庭付近には石灰岩が分布し、大規模な採掘が行われていた。この井伊谷沖積地の東側丘陵地には、北岡大塚古墳をはじめとする古墳が立地する。

都田川は、暴れ川で都田低地に住む人々の歴史は、まさに水との闘いの歴史といつてもよいほどである。明治に入ってからも86回という被災記録を数え、特に今回の調査のきっかけとなった七夕豪雨は、瀬戸より下流域すべてが水没するという大水害であった。今回の河川改修工事は、そうした人々の願いを込めて行われているものである。

第2節 歴史的環境

(1) 縄文時代

都田川下流域で、特に河岸段丘の発達がよいのは、浜松市の吉影・須部付近、一色・中津付近、細江町広岡から引佐町石岡にかけてで、ほとんどの縄文時代の遺跡は、この段丘面に位置している。調査例が少ないため詳細は明らかにされていないが、これらの遺跡は、縄文時代後期から晩期に営まれたもので、岡の平遺跡のように弥生時代後期まで存続する遺跡もある。

存在が確認されている遺跡としては、都田川の中流域で三方原台地北縁部の侵食谷中腹に位置する前原Ⅲ遺跡がある。前原Ⅲ遺跡は、縄文時代中期の環状集落跡がほぼ完掘されている。また、遺跡より西側小丘陵先端部には、弥生時代後期の集落跡である前原Ⅰ・Ⅱ遺跡がある。また、段丘上に位置する川山遺跡は、数千点の多種多様な石器類を出土しており、石器制作跡は検出されなかつたが、この地方における縄文時代晩期の中核的集落だったと推定される。また、沖積平野へ岬状に突き出した標高30mほどの小丘陵上には、向山遺跡があり縄文時代晩期終末櫛土式の土器棺2基が報告されている。



遺跡名	時代	遺跡名	時代	遺跡名	時代
1 祝田遺跡		12 青木遺跡	縄文～中世	23 釜下古窯	中世
2 田米寺遺跡	古墳	13 陣内平古墳群		24 石岡古墳	
3 船渡道路	古墳	14 恩塚山古墳群		25 石岡道路	縄文
4 堤花道路	古墳～中世	15 囲の平遺跡	縄文～古墳	26 本屋敷道路	弥生
5 茂塚遺跡	縄文～中世	16 宿名遺跡	縄文～弥生	27 北岡大塚古墳	
6 森遺跡	古墳	17 悪ヶ谷遺跡	銅鐸	28 馬場平古墳	
7 船渡遺跡	銅鐸	18 七曲り遺跡	銅鐸	29 谷津古墳	
8 川久保航渡	弥生～中世	19 穴ノ谷遺跡	銅鐸	30 椿野遺跡	弥生～近代
9 川久保道路	縄文～中世	20 不動平遺跡	銅鐸	31 一色遺跡	縄文
10 市場遺跡	縄文～中世	21 潟戸古窯	近代	32 吉影C古墳群	
11 手船遺跡	縄文～古代	22 宝林寺境内古窯	中世	33 向山遺跡	縄文～古墳

第3図 祝田遺跡周辺の遺跡

下流の中川沖積平野には、三方原台地から伸びている丘陵の末端部の刑部面と呼ばれる低位段丘面に位置する岡の平遺跡がある。岡の平遺跡は、180m×120mほどの広さで段丘面上には縄文時代晩期から弥生時代中期初頭の遺物が散布し、段丘末端部から沖積地にかけては、弥生時代後期から古墳時代におよぶ遺物が出土している。遺物には、縄文時代晩期後半の五貫森式土器・水神平式土器・牙製装飾品、打製石斧、遠賀川式土器が報告されている。また、井伊谷川、神宮寺川流域の井伊谷遺跡、柄塙南遺跡からも縄文時代晩期の土器、石器が発見されている。祝田遺跡北側段丘面には、石岡遺跡があり、土器・打製石斧・石錐などが採集されている。

(2) 弥生時代

岡の平遺跡は、稻作開始への移行期を示すものとして大変重要な遺跡である。しかし、弥生時代前期から中期にかけては、わずかに上器が出土する程度での時期を明らかにする遺跡は少ない。この時代で活況を呈するのは、水田耕作の拡大に伴って自然堤防上に進出してきた中期以降になる。特に、後期の欠山期には、出土土器量も膨大になる。祝田遺跡もこの時代の典型的な遺跡であり他に川久保船渡遺跡、森遺跡、茂塚遺跡、堤花遺跡、椿野遺跡などがある。祝田遺跡の前回の調査で、中期後半の長床式の埋設土器が検出されていることなどから中期後半には自然堤防上に立地したものと思われる。また、岡の平遺跡、向山遺跡など段丘面上の遺跡も存続していることから、段丘面上の遺跡が稻作の拡大と共に自然堤防上に進出してきたと考えるより、むしろこれらの遺跡は水田耕作の拡大に伴って形成された新興集落であると考えられる。高地性集落の向山遺跡出土の磨製石錐や椿野遺跡から出土している10点の銅鐸、祝田遺跡で検出された環濠の存在などは、これらの集落間で争いがあったことを物語っている。これららの集落は、自然堤防の背景に広がる広大な後背湿地を舞台に稻作を行い、互いに影響を受けながら古墳時代へ突入するのである。

都田川流域の都田から細江町にかけては、銅鐸の出土地としても知られ、特に岡の平・宿名両遺跡を取り口に持つ小谷は、6口の銅鐸を出土し「銅鐸の谷」と称されている。この付近では、確認されているだけでも11例に及ぶ出土をみている。銅鐸は、近畿式、三連式入り乱れて出土している。両形式とも新しい形式に属す。これらの銅鐸と弥生時代後期に活況を見せた都田川流域の遺跡との関係は、今後の調査でも統けて追及及ぼしていくことであろう。

(3) 古墳時代

この地域の古墳の出現は、弥生時代の遺跡があまり知られていない井伊谷から始まる。4世紀後半の北岡大塚古墳がこの地方の古墳の初現である。墳丘の規模は、全長46.5mの前方後方墳である。統いて画文帯神獸鏡などを出土した全長47.5mの前方後円墳である馬場平古墳へと続く。中川地区へ古墳が進出してくるのは、全長約55mの前方後円墳、陣座ヶ谷古墳が築造された5C後半になる。いずれも被葬者はこの地方を統率した小首長であり、磐田原台地上の大首長層とのつながりが極めて強かったことが考えられる。

後期になると直径20~30mぐらいの群集墳が各地に築造されるようになるが、都田川流域においては、その数は少なく散在的に分布している。中川沖積平野周辺にも恩塚山、石岡、五日市、小野などの古墳群がみられる。この時代の集落跡として調査されたのは、川久保船渡遺跡で古墳時代前期の堅穴住居跡などが検出されている。また、詳細は不明であるが、祝田遺跡より南の三方原台地上に坂上遺跡がある。祭祀に使ったと思われる土製模造品が多数出土している。遺物の中には機織具の形代のような伊勢神宮祭器に共通するものも混じっているという。

(4) 奈良時代

『和名類聚抄』に「遠江国郷」として引佐郡 京田(美也古多) 刑部(於佐加倍) 清伊(井以) 伊福(以布久) の4郷の名が記されている。それぞれ現在の浜松市都田、細江町中川、引佐町井伊谷、

細江町気賀に比定されている。また、「延喜式」の式内社6社もこの地方に分布し、祝田遺跡の南西にも峰前神社がある。また、中川地区は条里制の名残をよくとどめている。

この時代の遺跡はあまり知られていないが、川久保船渡遺跡では、陶馬2体を含む約100個体以上の土器を出土した上器溜まりが報告されている。これらの土器はかなり意識的に配置されており、この時代の祭祀遺構として注目できよう。

(5) 平安・鎌倉時代以降

この地方は、「神風鉢」に伊勢神宮の御厨として、都田御厨、祝田御厨、刑部御厨の名がみえる。しかし、文献資料も少ないため詳細は不明である。祝田は、かねてよりこの時代の瓦の出土地として知られており、祝田御厨との関連を追及して今回の調査を行ったが、確証を得るにはいたらなかった。しかし、風字硯を出土した溝の検出、大量の瓦を投棄した溝と井戸の存在と山茶碗などの豊富な遺物の存在は、環濠で囲まれ、塗敷跡と推定される例のある川久保船渡遺跡とともに中川地区における中心的な存在であることを思わせる。また、山茶碗などを出土する遺跡が現在の集落とほとんど一致することからこの時期には、自然堤防上を生活の場とした因式が完全に定着しており、以降現代まで継続るのである。

また、中世末から近世にかけて注目できる遺跡として、初山宝林寺周辺に分布する初山古窯跡群がある。昭和58年には釜下古窯が調査され、天目茶碗・皿・茶入れ・水滴・瓶・すり鉢などが出土している。川久保船渡遺跡や祝田遺跡からもここの製品が出土している。また関東地方でもこの窯の製品が確認されているという。この時代には、船運などを使った交易が、かなり広範囲に行われていた様子がうかがえる。

(参考文献)

- 「土地条件図」浜松（1：25000）国土地理院
「土地条件調査報告書」国土地理院 1982年3月

国土調査昭和46年8月10日指定（総理府告示第38号）

- 『土地分類基本調査図』（開発地域土地分類基本調査）523704
「地形分類図」浜松
「土壤図」浜松
「土地利用現況図」浜松

引佐町教育委員会「引佐町史」上巻

- 栗原雅也 「初山焼 釜下古窯発掘調査報告書」細江町教育委員会 1985
栗原雅也他 「川久保船渡遺跡調査報告書」細江町教育委員会 1993
佐野五十三 「祝田遺跡調査報告書」I 駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所 1984
佐藤山起男 「都田川流域における弥生時代の開始」『静岡県考古学研究』17 1985
静岡県「静岡県史資料編」1、2 静岡県
静岡県教育委員会「引佐郡細江町中川地区銅鐸分布調査報告」 1969
向坂鋼二 「浜松市都田町中津・坂上出土の祭祀遺物」『考古学雑誌』50-1号 1964
細江町教育委員会「細江町史」資料編二

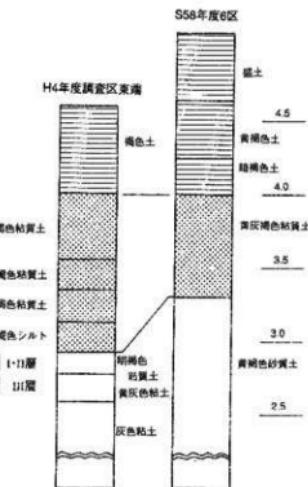
第2章 調査の概要

第1節 調査の方法

調査区は、浜松土木事務所が工事にともない設定した都田川北側堤防3075ポイントと3150ポイントを結んだ線を軸に10mのグリッドを組んだ。グリッド名は前回調査区の延長線上に設定し、北からD, E, Fとした。南北軸は、N 20° -Wである。ベンチマークは、調査区東側新堤のBM3064mを利用した。

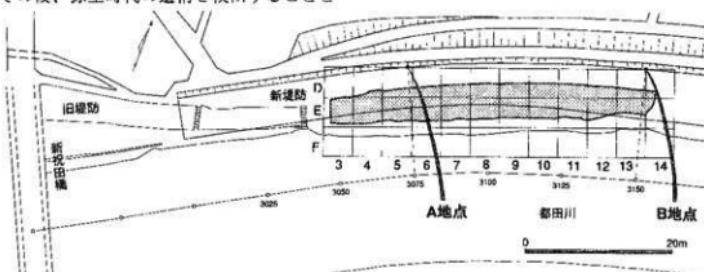
実測図は、20分の1縮尺図を原則とし、遺物の出土状況等には、10分の1縮尺図を用いた。また写真は、中型(6×7cm一眼レフ)一台と小型(35mm)3台を使用して撮影を行った。

土層確認は、県教委文化課と細江町教育委員会で確認した調査区東端の断面にて行い、前回(S58年度6区)の土層断面図と比較した。その結果、前回IV層とした黄灰褐色粘質土が、今回第III層とした黄褐色粘質土の上層にあたると考えた。第III層は、粘質が強く色調によって4つの層に分類されるが、中世と弥生時代の遺構が掘り込まれている層であり、層位からは時期的な差は見いだせない。今回は、上層の中世遺物包含層はすでに消失しており、遺構の上面もかなり削平されていることが判明した。また、第III層には、中世の遺物だけでなく弥生時代の遺構も掘り込まれていることから、この面で、中世・弥生時代の遺構検出を行った。そのため、表土除去は、第III層の直上まで行い、最初に、黒褐色の埋没土を持つ中世遺構を検出し、その後、弥生時代の遺構を検出することとした。



第4図 土層柱状図

地点	X軸	Y軸
A地点	-132024.67	-74112.32
B地点	-131989.66	-74038.75



第5図 グリッド配置図

第2節 調査の経過

調査は、平成4年4月より準備を進め、5月から11月まで現地調査を行い、その後整理作業を平成6年3月まで行った。

平成4年4月 準備工程、発掘調査工程を確認し、発掘資材の調達・搬入業者との打ち合わせを経て、24日に事務棟・作業員棟を設営、現地作業開始準備をした。また、細江町中川地区的自治会、学校等にも説明を行い、調査に対する理解と協力の要請を行った。調査区は、静岡県教育委員会文化課と細江町教育委員会立ち会いで、ある程度表土除去を行ってあったため、28日に立ち会い面から調査区東端壁面で土層確認を行った。その結果、上層の褐色土を第Ⅰ層、黄味がかった褐色で粘質が強く、不安定な色調の土を第Ⅱ層とし、暗黃褐色で砂が混じる粘質土を第Ⅲ層とした。第Ⅲ層は、色調も安定しており、遺構の断面も確認できる。前回の調査で確認されている中世遺物の包含層は今回確認できず、すでに削除されていると考えた。この第Ⅲ層には中世の遺構と弥生時代の遺構が掘り込まれており、最初に中世の遺構を調査した後、弥生時代の遺構を調査することにした。

5月 発掘資材、ベルトコンベア等の搬入と調査準備作業を行った。ゴールデンウィーク明けの6日より重機による表土除去を行い、15日までに基準杭の設定を済ませ、法面の養生など安全対策を行ったのち、19日から本格的に発掘調査に入った。後世の攪乱が調査区全体に広がり、また、当初現河道のぎりぎりまで調査する予定であったが、旧堤防部分から南側が、それ以前の堤防を造成するときに破壊されており、調査区南側の約3.5mほど範囲を狭めて調査することにした。調査は、中世の黒褐色粘質土と灰色粘質土の覆土の遺構を検出することから始めた。遺構は、ピットと溝が中心であり、幾重にも切り合って検出されるため、新旧関係の検討を度々行いながら調査を進めた。

6月 雨の影響で、現場作業を休止する日が続いたが、天気の合間にねって遺構検出を進めた。その結果、規則的に配置されている数条の溝と多数のピット、3基の井戸を発見することができた。

7月 遺構の検出と遺構掘りを進め、廃土置き場を除いて中世の遺構の調査を終了したため、21日に全体写真撮影を行った。その後、中世については一応区切りをつけ、弥生時代の遺構検出を行った。

8月 弥生時代の遺構は、覆土が明確でなく、



調査区表土除去風景



遺構検出状況



発掘調査風景

第6図 調査経過 - 1

なかには遺物が露出するケース多いため、夕方散水して、シートをかぶせ翌日の午前中に遺構検出を行いうる方法で作業を続けた。しかし、水が思うように地面にしみこまず、乾燥して堅くなってしまい遺構検出は困難を極めた。土器の出土範囲を手がかりに溝（SD50）を検出した。

9月 調査区全体の遺構検出を進めた。覆土確認が困難なため土器を目安に検出を進めた結果、1・2号方形周溝墓と数基の土坑を確認することができた。方形周溝墓の主体は、すでに消失しており確認できなかったが、周溝からは、廃棄されたたくさん土器片が出土した。また、埋設土器と思われる壺も検出することができた。

10月 当初は、直径3mにも及ぶ土坑と考えていた遺構が、サブトレンチ等による精査の結果幅約5.5m、深さ約1.5mの大きな溝（SD54）であることが判明した。上層は黄灰色粘質土が広がり、周囲の土と区別がつかなかったが、2層目の黒褐色土を手がかりとして検出した。黒褐色粘質土の部分に大量の土器が投棄されていた。雨天続々により、作業を急ピッチで進めたがこの遺構の調査だけで約1ヶ月近くを要した。

11月 3・4号方形周溝墓の完掘と廃土置き場部分の調査を終え、遺構検出の一応の区切りとした。5日に全体写真撮影を行った。その後、調査区の上層図作成やレベル等の測量、遺構図の確認作業等を行った。最後に重機により調査区を東西に30mほどトレンチを掘り、下層の河川跡を確認した。その後、資材・ベルトコンベアの撤去、調査区の整地を行い、17日に浜松土木総合支所に現地引き渡しを行い現地作業終了とした。

12月 現地片付け、引き上げ準備をして、10日に引っ越し、その後プレハブ撤去を行い、現地からは完全に引き上げた。

平成5年1月～3月 報告書作成のための整理作業遺物注記、土器接合、復元作業を行う。あわせて遺構図面の整理、検討を行う。

平成5年4月～平成6年3月 報告書作成のための整理作業 遺物接合、復元を行うとともに中世遺物から実測作業にはいる。遺物実測点数は、中世・弥生と合わせて500点以上に及ぶ。また、遺物写真撮影を12月に行う。遺構検討を行った後、遺構図版作成を行い10月から遺構トレース作業にはいる。遺物のトレースは、11月より始め、その後、原稿執筆を行った。



弥生溝（SD54）調査風景



遺跡見学会風景



土器接合作業



土器実測作業

第7図 調査経過 - 2

第3章 遺構

第1節 弥生時代後期の遺構

弥生時代の遺構は、5グリッドより東側に分布している。覆土が、黄味がかった褐色粘質土で、第Ⅲ層とほとんど見分けがつかず、検出は困難を極めた。遺構上面部は、後世に削平されており本来の遺構の掘り込み面より底に近いところで検出されているため、遺構掘削時の規模等、原形を推定することはむずかしい。

遺構は、方形周溝墓4基、溝5条、土坑6基、単独出土の壺を出土した遺構3基を発見することができた。

(1) 方形周溝墓

1号墓（第9図）

1号墓は、D-11グリッドからD-12グリッドにかけて検出された。南溝は、E-11グリッドの北境の線上を走る形で検出されており、ほぼ調査区のグリッドメッシュと方位を同じくしている。周溝は、北半分が調査区外に延びているが、前回調査では、この続きは検出されていない。前回調査で検出された方形周溝墓はいずれも周溝の全辺がつながるものではなかったが、今回検出のものは、周溝が全周するものばかりである。南溝は、外長で約12mで、途中近年の搅乱により切られている。西溝は、隣接する2号墓と途中溝を共用するような形で検出されている。また、東溝は、4号墓と隣接するが、切り合いをつかめなかったこと、4号墓南溝とは形状が違うことから共用していたかは疑問である。各溝は、幅約0.7~1.1m、深さ0.3~0.4mの上部がやや開いたU字形の断面を持ち、南東のコーナーは少し浅くなっている。

周溝の覆土は、分層はできなかったが、第Ⅲ層よりやや暗い色をした黄褐色粘質土で、炭化物が混じる。また、搅乱が入り込んだ部分は、還元され青緑灰色に変化しているところもある。周りの土とのわずかな違いと、土器の出土状況を目安に検出を進めたが、底や壁の下部は、汚れや堅さによってようやく判断することができた。

（遺物の出土状況）

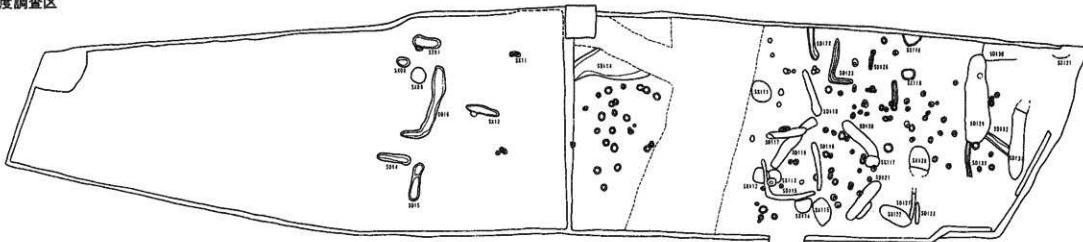
遺物は、検出時にはすでに一部が露出する状況で、溝の底より30cm程上位からの出土が多い。南溝中の搅乱の東側の土器は、レベルで約4.1mぐらいのところから出ており、溝の底から測ると約1mも上になる。周溝の底には、ほとんど遺物はみられず、溝にともなったと考えられるものが少ない。

遺物は、周溝内で割れたものではなく、接合関係のない土器片が集中して出土している。ほぼ完形の壺38-2は、東溝から出土しており、底より約30cm程上位に横たわった状態で発見された。土器片が集中していたのは、南溝南西コーナー付近で2号墓の南溝出土のものと接合できることから、1・2号墓の溝が埋まる過程で大量に投棄されたものと考えられる。

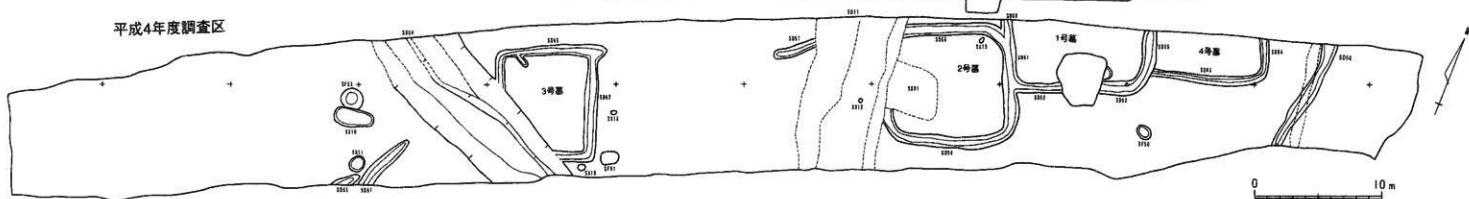
2号墓（第10図）

2号墓は、1号墓の西D-10, E-10グリッドにかけて検出された。西溝を中世の溝SD34と後世の搅乱に切られており、北溝、東溝、南溝と西溝の一部の検出となった。東溝は、1号墓と共用した形態をとっており、途中から枝分かれする。規模は外長で約12mでほぼ正方形に近い形を呈している。各溝は、幅が0.9~1.1mで深さが0.3~0.4m程度で断面形は、ややいびつなU字形である。覆土は、1号墓と同じ黄褐色粘質土で、東溝の南半分の土器片が多量に出土した地点では、炭化物などの混じりが強かった。北溝は水の影響を強く受けており、還元されて灰色に変化した部分もみられる。1号墓同様上面に後世の搅乱が広がっていたため、溝の検出されたレベルが一定ではない。

昭和57・58年度調査区



平成4年度調査区



第8図 弥生時代遺構全体図

(遺物の出土状況)

遺物は、東溝の1号墓南溝に枝分かれする地点から南側から南溝の東半分にかけての部分と北溝から出土している。ほとんどの遺物が底から30~40cm程浮いた状態で出土しており、底に近くなるに従い土器片の出土量が減少する。完形品(27-1)は、東溝の南東部から出土し、レベル3.5mのところから出土している。この近くには、15~20cmぐらいの角謄もいくつか検出された。南溝出土の高坏(30-7)は、欠山期のものであるが、北溝出土の壺(29-2)は、土師器と呼んでもよい。また、北溝の西側に検出された溝SD57からも、複合口縁を持ち胎土が精製された壺が出土していることから、北溝は、他の溝と出土遺物にやや時期差がある。単に埋没時期の差なのか、それとも同時に存在したものなのかな、北溝の遺物がほとんど小破片のため、はっきりしない。いずれにしても各溝の遺物の出土分布の片寄りは、意図的なものではなくこの部分が窪んでいたために集中して投棄されたものと考えられる。

3号墓(第9図)

3号墓は、他の方形周溝墓よりやや離れたD-7からE-7グリッドに位置し、西溝と南溝の一部を溝SD54に切られた状態で検出された。方位は、他の周溝墓とはほぼ同様であり、規模は南北が約12mのほぼ正方形である。各溝は、幅が0.7~0.9m、深さが0.3~0.5m、断面は、U字形を呈している。覆土は、暗黄褐色粘質土で、やや炭化物が混じる。北溝と東溝の境の部分がやや突出しており、また北溝の西の部分に突起状の溝がみられ、その覆土も同じであることから、何らかの意味を持って同時に掘削された部分と考えられる。3・4号墓は、遺物がほとんど含まれないため、1・2号墓検出時点では発見されていなかったが、一定期間放置した後に平面プランを確認することができた。西側に隣接するSD54との切り合い関係は、後世の溝SD33の影響などで還元が進みこの部分が完全に青灰色の粘土になっていたため、確認できなかった。

(遺物の出土状況)

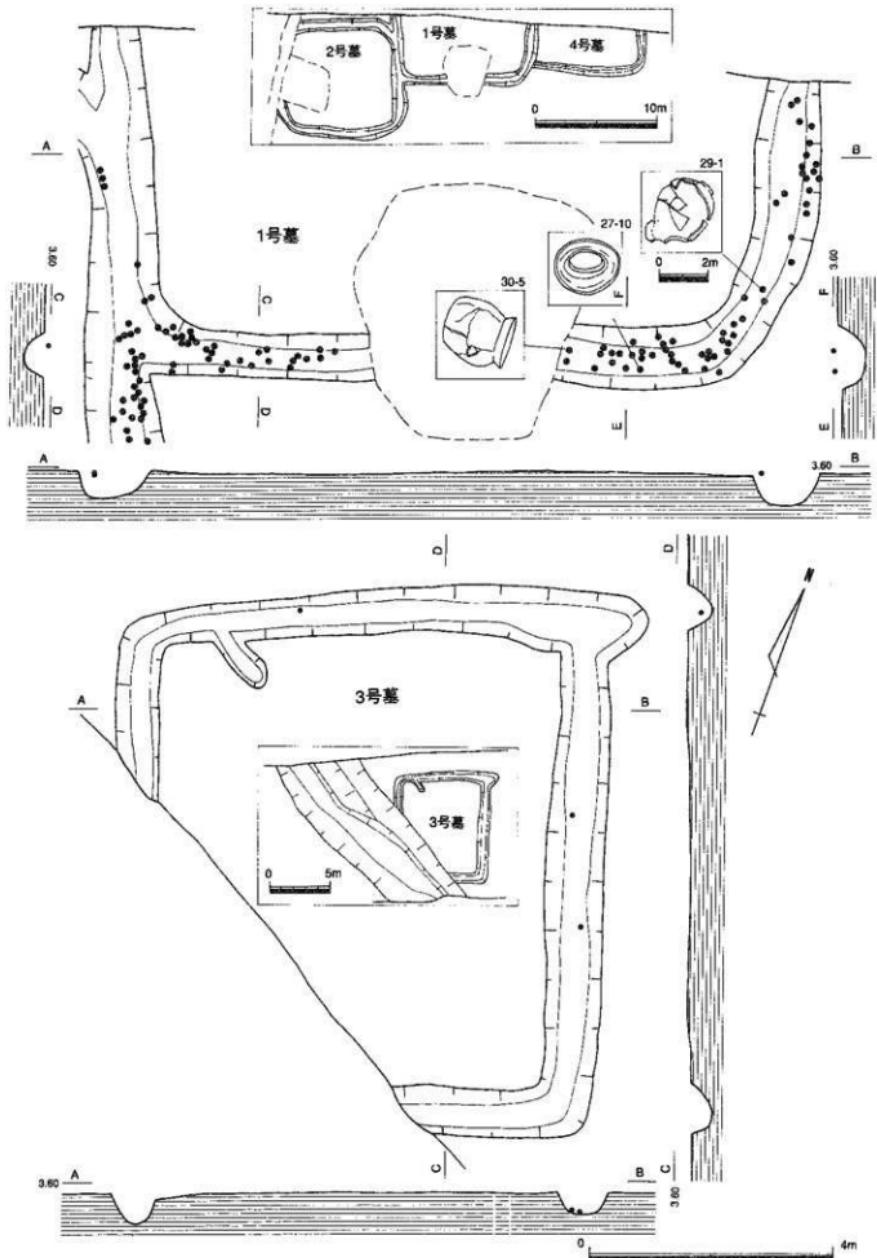
遺物は、北溝中層部から壺の底が1点、東溝から高坏脚部片が出土したが他に器形がわかる破片はない。南溝の溝SD54と接している部分からは、多量の土器片が出土したが、SD54の土器が混入していると考えられるため、この溝は、溝SD54より後に掘削されたものとも考えた。

4号墓(第10図)

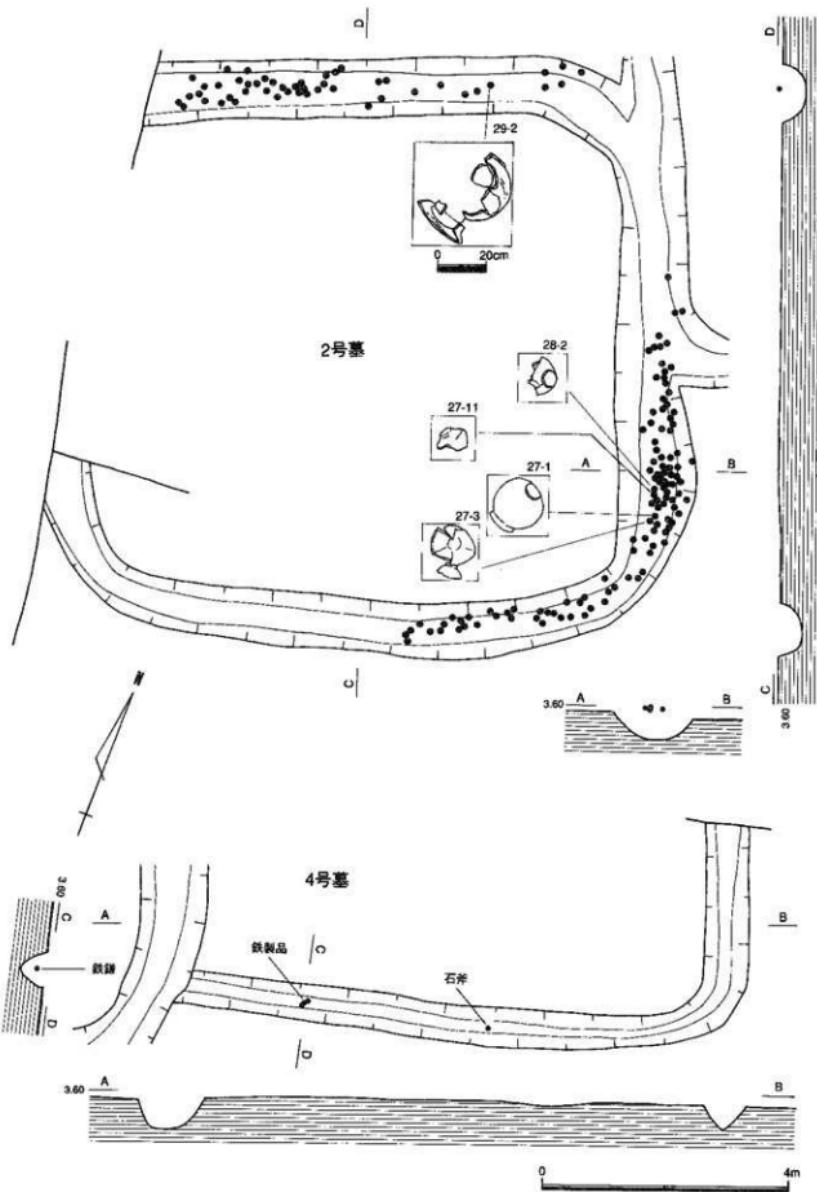
4号墓は、1号墓の東に隣接しておりD-12~D-13グリッドにかけて検出された。北半分は調査区分外で、東溝と南溝は、同じ形態のものであるが、1号墓の東溝とは、断面形態が異なるため共用していたかは疑問である。しかし、3号墓の規模から推定すると、1号墓東溝に4号墓西溝が重なっていることはまちがいないと思われる。規模は、南溝の残存長で約12m、各周溝は、幅0.6~0.7m、深さ約0.4mと3号墓とはほぼ同じ規格を持つ。溝の断面は、ほぼV字形を呈し、覆土は暗黄褐色粘質土でやや砂が混じる。この周溝墓の続きも1号墓同様で前回調査区では検出されていない。

(遺物の出土状況)

3号墓と同じように4号墓周溝からは、遺物がほとんど出土していない。南溝から壺片数点が出土した程度で、東溝からはまばらである。しかし、南溝の中央付近で、ほぼ底に接した状態で打製石斧が1点出土した。また、南溝から鉄製品が4点集中して出土した。その出土位置は、底から約15cm高いところで、出土状態は、規則正しく並べられたというよりも投棄された状態に近いと判断された。3・4号墓は、遺物の出土状況から推定して2号墓南溝西側や1号墓西溝と同じように遺物が検出されたレベルまでは、比較的短い期間に埋没したものと推定される。



第9図 1号・3号方形周溝墓実測図



第10図 2号・4号方形周溝墓実測図

(2) 溝状遺構

溝状遺構は、5条検出された。SD50、SD57、SD61は周溝墓の一部を構成する可能性も考え検出を行ったが、対になる溝を検出できなかったため、単独の溝とした。SD50、SD54からは大量の上器が出土し、SD61は3号墓と似た覆土が認められ、遺物はほとんど出土しなかった。SD61は、調査区南端から旧堤石垣の下に潜り込んでしまっているため、性格もはっきりしない。以下、主要な溝をとりあげて説明を加える。

SD50（第11図）

SD50は、D-13～E-13グリッドにかけ調査区を南北に走る溝である。中世の溝SD02に中央部を切られ、検出時には遺物がかなり露出していた。検出した長さは約9mで、ほぼ直線的に走っている。上層部は、すでに削平されており、遺構本来の規模は分からぬが、幅は中央部の広い部分で約1m、南西部で約0.6m、深さ約0.4mを検出することができた。断面形状は、ゆるやかなU字状で立ち上がる。覆土は、第Ⅲ層と類似したやや暗い黄褐色粘質上で、部分的に炭化物が混入する。中央部よりやや南には、小礫が集中する部分があった。

（遺物の出土状況）

遺物は、底から10cmほど高いレベルから溝の全域にわたってまんべんなく出土した。破片が多く、なかには底に近いところから完形品が出土する例もあった。器種は多様で、出土状態に規則性もないことから、溝の埋没途中に投棄されたものと考えられる。

SD54

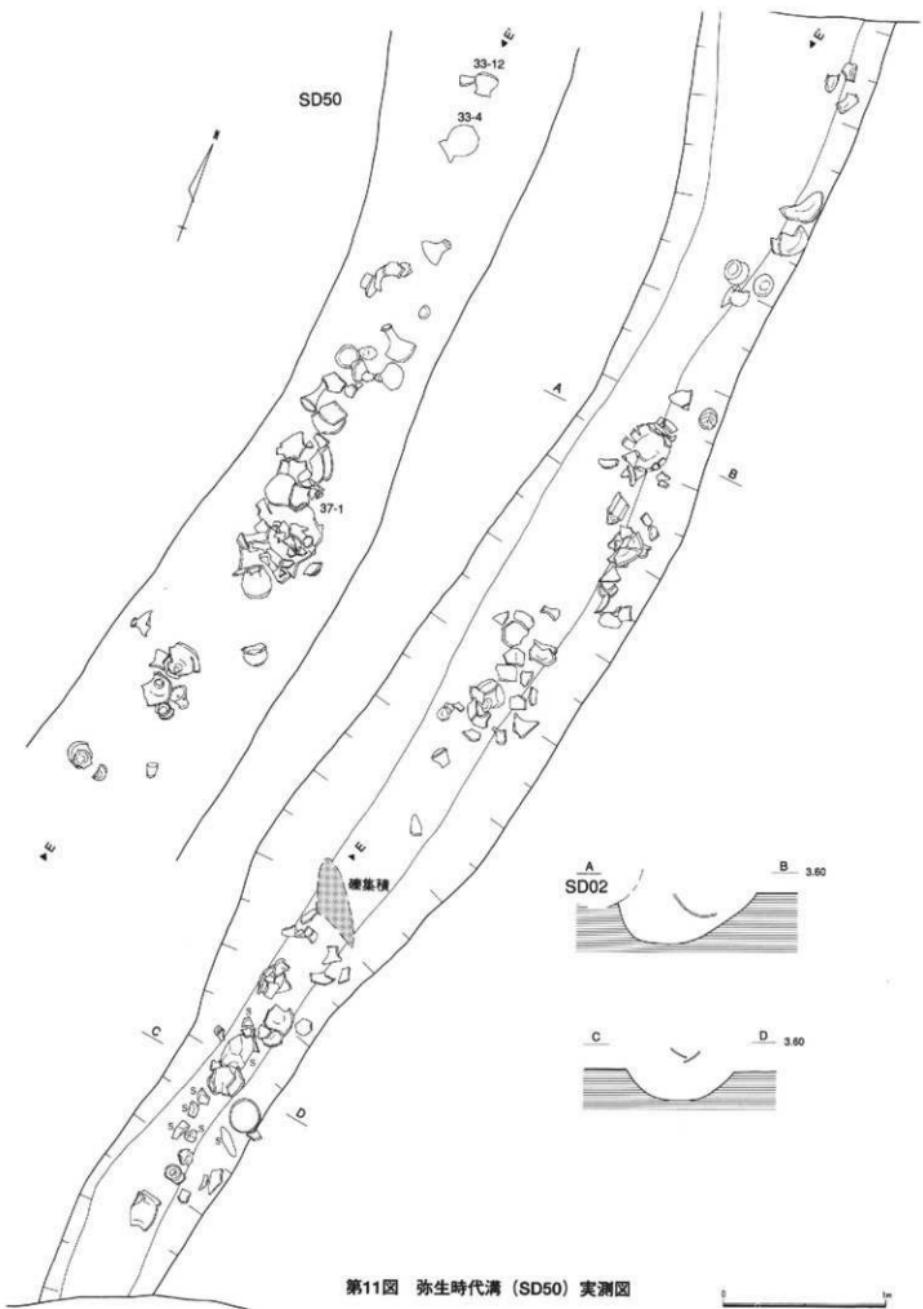
SD54は、D-6からE-6、E-7グリッドにかけて調査区を斜めに横断する溝である。調査した長さ約15mで、最大幅が北側約6.5m、平均の幅5.6m、深さは、約1.5mを測る。断面形は一定せず、北側が、ゆるいV字形を呈するのに対して、南側は、U字形である。また、東壁は、中央部より北側中段にフラットな面を持ち、底が狹くなる傾向がみられる。現堤に近い部分は、法面の勾配を確保する関係上、調査不能であった。このフラットな面には、炭化物が黒くたまつた上坑状の窪みを断面で観察できたが、平面形態は、現堤下になるため明らかにすることはできなかった。おそらく、この溝が埋まる過程でこのいくつかの土坑が連続して配置されていたと考えられる。

覆土は、第12図に示したように基本的に7層に分けることができる。1層は、黄灰色粘質上で不安定な色調の黄色が強い土である。この土層は、5、6、7グリッドに広く広がっており、中世の遺構は、この土層を掘り込んでいる。SD54の南側は近代の溝SD33に切られていたこともあり、この土がほとんど見られない。このことから、1層は、中世以前に洪水などによりこの付近に一気に堆積したものが入り込んだと考えられる。2層は、炭化物が多く混じった黒褐色土で土器の多くはここから出土している。3層は黄灰色粘質上でほとんど粘土に近い。炭化物が部分的に混入し、土器も少量含まれる。下層は、灰色で粘土化しており、6層からは、流木とみられる木が入り込んでいる。中には、板状に加工してあるものも出土している。土器は、数点破片が出土している程度である。

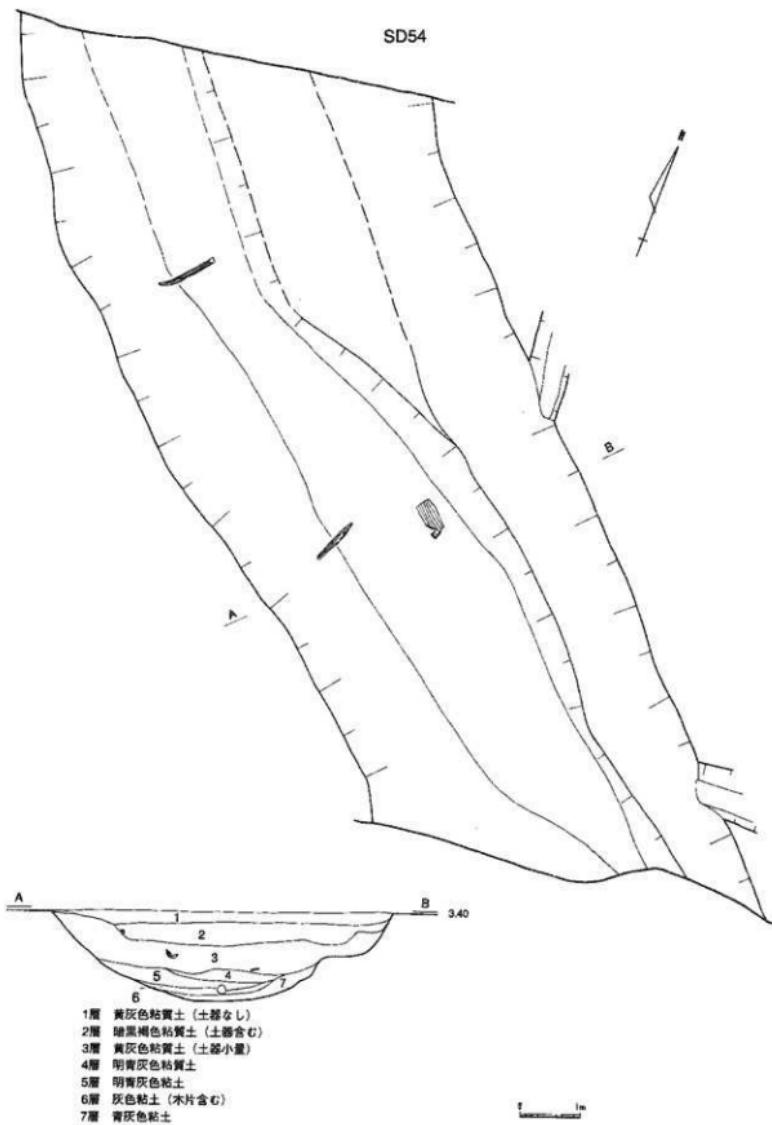
また、SD54の南端は、近代の溝SD33に切られており、土器が集中していたことから当初は上坑SF52として調査したが、覆土が2層と同じことから、SD54の一部と判明した。この部分の上層には、土器も混入していた。

（遺物の出土状況）

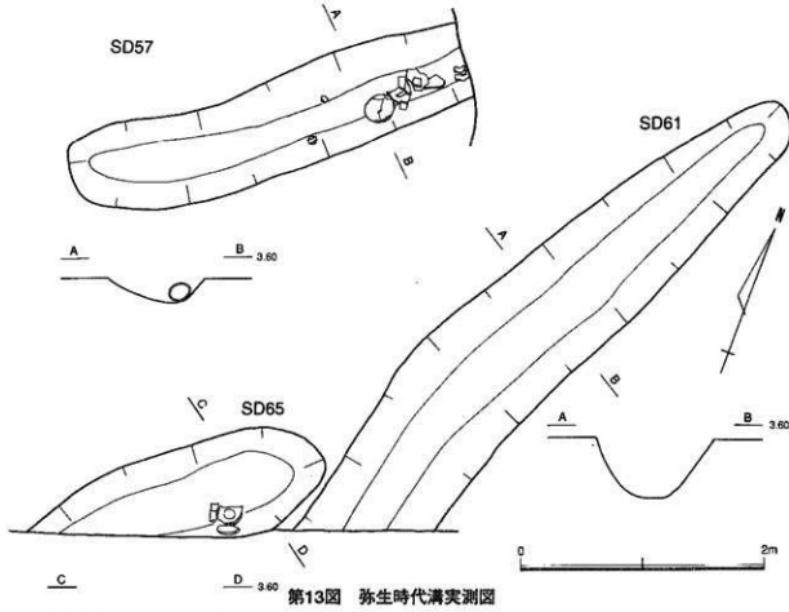
遺物は、主に2層からの出土が圧倒的であった。2層は、堆積の厚さが約30cm～50cmの幅を持つが遺物は、この層の全域にまんべんなく広がっており、完形品の多くはこの層から出土する。また、植物の種子なども多く含まれていた。この層は長期間の帶水により形成されたと考えられる。遺物は、流れ込みではなくこの地点に投棄されたものと思われる。



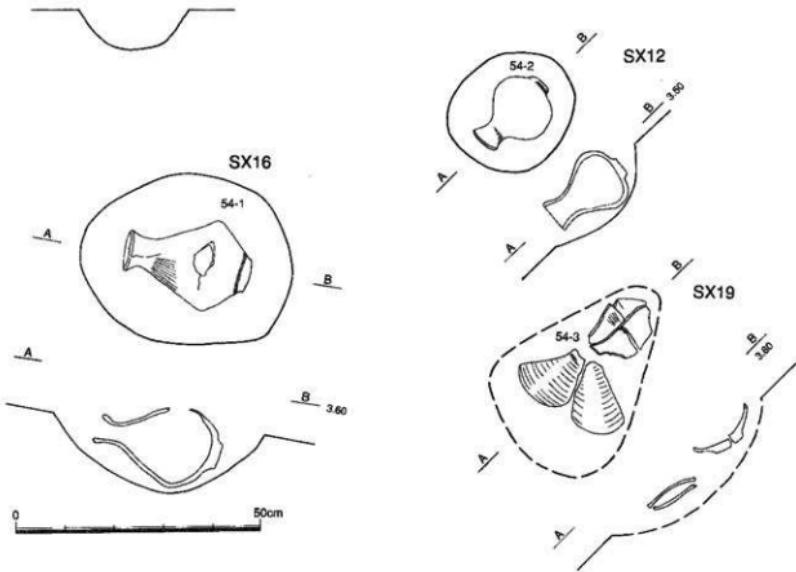
第11図 弥生時代溝（SD50）実測図



第12図 弥生時代溝（SD54）実測図



第13図 弥生時代溝実測図

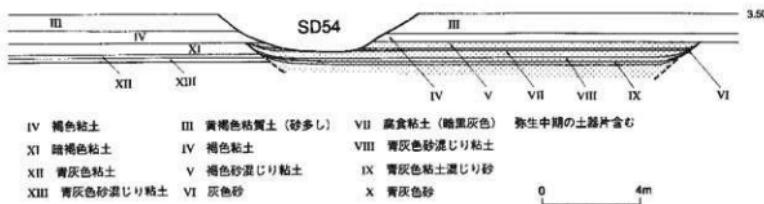


第14図 弥生時代土坑（埋設土器）実測図

土器は、壺、甕、高坏、鉢、壺など多種で多くは、伊場遺跡の新段階から欠山期の特徴を備えている。3層からも、完形品を含めて土器が多数出土している。2層と3層の出土遺物には、高坏の形態からやや時期差を感じられるが、それほど明確ではない。底部の6層7層からは条痕紋系の土器片が出土している。しかし、弥生中期から後期初頭の土器片も混じることからいずれもただちに遺構の年代を決定する資料とは言えない。

(SD54の下に見られる河川跡について)

SD54の土層確認のために入れたサブトレンチにSD54の6層のさらに下層に暗黒灰色の腐食粘土層が検出された。この層からは、流れ込みと考えられる弥生土器片2点が検出されたため、全調査終了後範囲確認のため、重機にてトレンチを入れた。その結果確認できたものが模式図（第15図）である。第Ⅶ層の下に第Ⅳ層とした褐色の粘土層があり、その下層に河川と思われる立ち上がりを持った遺構が確認できた。調査幅で約19mに及ぶ河川であるが、流路の方向を確認できなかったために正確な幅はつかめていない。西側立ち上がりがSD54の西法面とほぼ一致している。遺物が、見られたのは第Ⅷ層とした暗黒灰色の腐食粘土層であるが、トレンチ確認時には、他の土器片は発見できなかった。しかし、この層には植物遺存体や種子、甲虫類など昆虫遺存体が見られるため、サンプルを探集した。この河川跡は、第X層まで確認できたが、重機の能力の限界を越えているため、さらに下層までは確認することができなかった。下層はほとんどが砂の堆積である。なお、土器片が2点しか発見できなかつたが、弥生中期と思われるものがあり、一応第Ⅶ層の堆積は弥生時代中期と考えている。



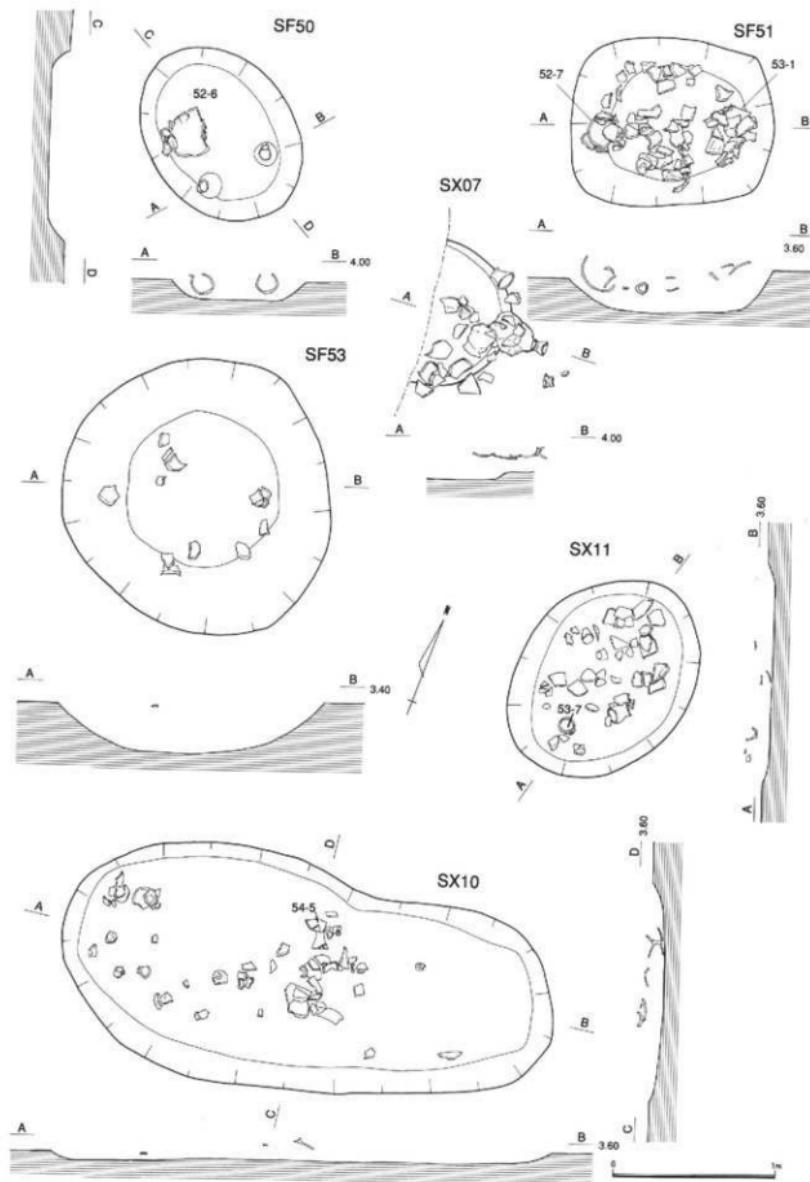
第15図 旧河川跡断面模式図

(3) 土坑状遺構

土坑状遺構は、検出段階の状況によりプランが確認できた遺構（SF50, SF51, SF53）と、上器が露出しているところを精査して土坑と確認されたもの（SX07, SX10, SX11）がある。また、この他に浅い掘り方で単体の完形の壺を出土する遺構3基も土坑状遺構に含めておく。これらの遺構はほとんど底の部分が検出されたもので、断面の形状は確認できない。

SF50

SF50は、E-12グリッドで検出された。楕円形をしており、長径が1.2mの小土坑である。上部はすでに消失しており、底のみ検出することができた。口縁部を欠損した鉢が2個体と、底部欠損の壺が出土した。性格は不明である。



第16図 弥生時代土坑実測図

SF51

SF51は、E-7グリッドで3号墓の南東に位置する。土器が集中している範囲を精査した結果、ほぼ長方形のプランを確認し、土坑と判断した。深さ、20cm、長径は約1.2mを計測する。覆土は、大量の炭化物が混じり、角礫も伴っていた。遺物は、いづれも底が10cmほど埋没した時点で投棄されたものである。高坏の形態から欠山期の遺構と考えられる。

SX07

D-11グリッドにあり、後世の搅乱東縁に土器が、認められたことから検出されたが、搅乱の影響で周辺が還元状態で、平面検出は容易ではなかった。1号墓内に位置しているが、出土した高坏の脚の形態から古墳時代の遺構と考えられる。

SX10

E-5～E-6グリッドにかけて土器が広がっている範囲を精査して楕円形の広がりを確認できたため、遺構と認定した。深さは、3cm以下で、遺物は、小破片のみであり遺構の時期を決定できる資料はない。

SX11

E-5～E-6にかけて土器の広がりにより確認した遺構で、長径が約1.2m、深さが3cmほどしか確認されなかつたが、土坑状の遺構である。遺物は、いづれも投棄されたと思われる破片が中心で、粘土による凸帯がある壺の台部が出土している。また、角礫も数個伴出した。

埋設土器

前回調査でも弥生中期後半（長床式期）～後期の上器棺と考えられる埋設土器6基が報告されているが、今回も弥生中期の壺3個体が埋設されていた。

SX12

E-9グリッド東側に器高約17cmの長頸壺が口縁部を南西方向に向けて埋設されていた。掘り方は、土器の最大径に近く、この壺を埋めるために掘削されたと考えられる。土器は、弥生中期の土器で長床式期のものと考えられる。

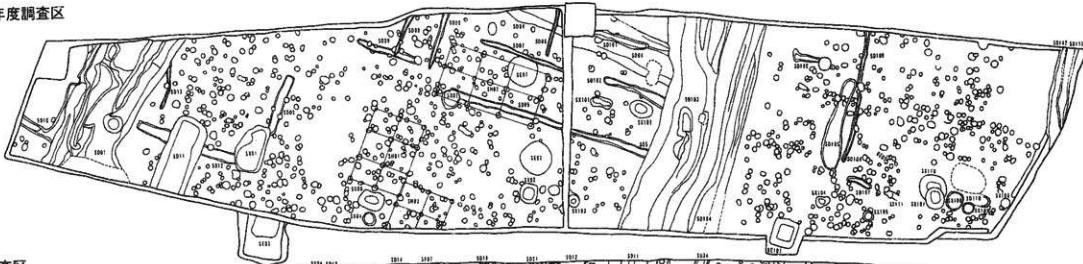
SX16

E-7グリッドの3号墓東溝のすぐ外側に器高約25cmの長頸壺が口縁部をやや上向きにして、西方に向かって埋設されていた。外面を板状工具でみがかれた長頸壺で胴部に欠損部があったが、故意に穿孔されたものではない。掘り方は、SX12と同じように土器を埋設するために掘り込まれたと考えられ、長径43cm、深さ14cmほどの土坑状の遺構である。

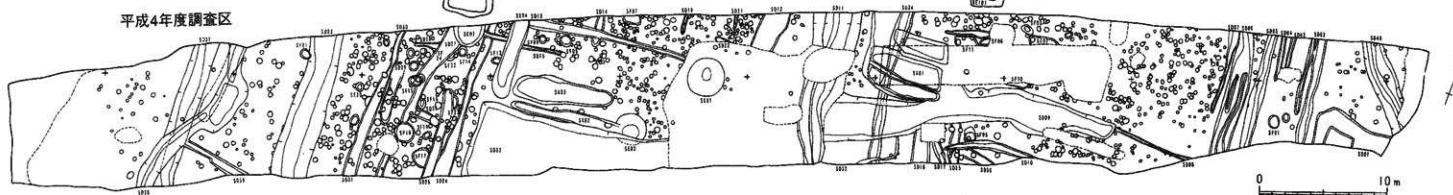
SX19

D-10グリッドの2号墓の北東の隅に近いところで検出されたもので、壺の胴部を縦に3分割したものを重ね、底部は、正位置に置かれた状態で検出された。掘り方が明確に確認できなかつたが、他の埋設土器と同様の遺構と考えられる。口縁部は、底の中心に向けられ、SX12とは逆に北東方向を向いている。口縁部は欠損しており、破片も見つかっていない。また、体部と底部も意図的に欠いたと考えられる。

昭和57・58年度調査区



平成4年度調査区



第17図 奈良時代から中世の遺構全体図

第2節 奈良時代から中世の遺構

この時代の遺構は、第Ⅲ層から掘り込まれ覆土は、黒褐色粘質土が多い。第Ⅱ層は、中世の遺物は含まれておらず、遺物包含層が消失した後に堆積した層で、前回調査区のIV層とは違って、中世遺物はほとんど出土していない。第Ⅲ層が相当削平された後にⅡ層が堆積したと考えられ、中世の遺構もほとんど底のみの検出となり、遺構掘削時の姿をつかめる遺構はない。この時期の遺構は、溝32条、井戸跡2基、土坑20基確認されている。掘立柱建物跡については、1140を数えるピットが検出されているが、調査区には大きな擾乱が散在すること、調査区が幅12mと狭いことなどから前回調査で報告されているような建物跡は認定できなかった。なお、土坑SF23は、出土遺物より古墳時代後期のものと考えられるが、この面で検出したため、便宜上ここで報告する。

(1) 溝状遺構

溝状遺構は、調査区東端からD・E-3グリッド東側までは調査区全域に広がる。溝は、東西に細長い調査区を横断する南北方向の溝と、幅が狭く南北方向に走る溝に直交する東西方向の溝とに分けられる。SD34、SD23、SD37、38は、前回調査区から連続し、それぞれ出土遺物もほぼ同じ時期のものである。数多く検出されているピットの並びも溝の方向に沿っている。近世以降と考えられる溝状の遺構にもこの方向性が当てはまるところから、ある時期に一定の方向性を考え配置された溝が、長い間その方向性を保っていたことが考えられる。この地域に残っている条理地割との関わりが注目される。

SD02～SD07

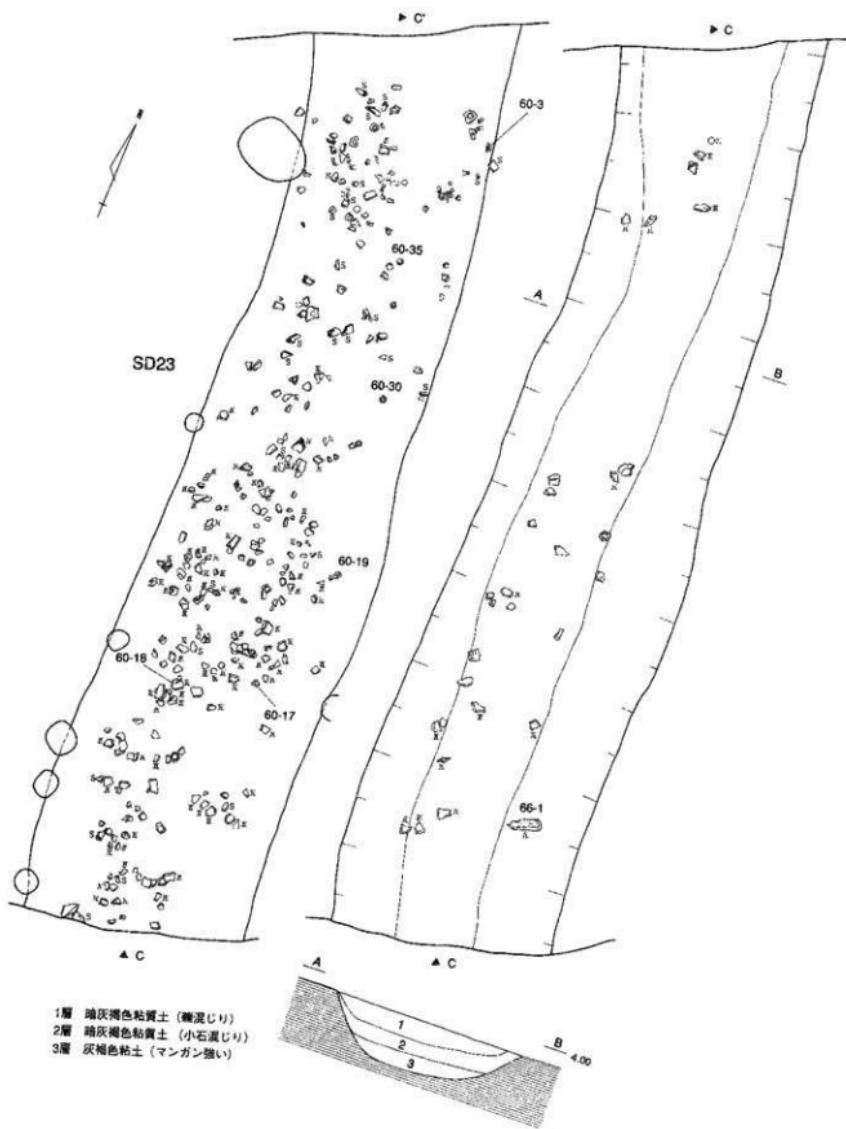
調査区の東側12～13グリッドにかけて検出された溝で、どれもN-5°～9°-Wの範囲で調査区を南北方向に横断する。SD02は、弥生時代の溝SD50を切って掘り込まれ、検出された長さ約8m、深さ15cmほどの溝である。途中2方向に分岐しているが、プランや土層から溝同士の切り合いでなく同時期に機能していた同じ溝と考えた。SD03、04は、底だけがからうじて検出されたものでは調査区中央で止まる。覆土は、SD02と同じ暗黒褐色粘質土で炭化物も見られる。北側排水溝で断面を確認したところ、溝の南端よりレベルがかなり下がっており、これらの溝は南側から北側に流れていることが考えられる。SD05は、深さが38cmとやや深く溝幅も一定で、覆土は黒色が他の溝より強く粘性の強い黒褐色粘質土で、炭化物を多く含んでいる。東壁は、西壁に比べかなり傾斜が急である。SD06、07は、SD02と同じ一本の溝になる。SD06の南側も更に2方向に分かれる。これらの形状から流水のあったことは明かである。

(遺物の出土状況)

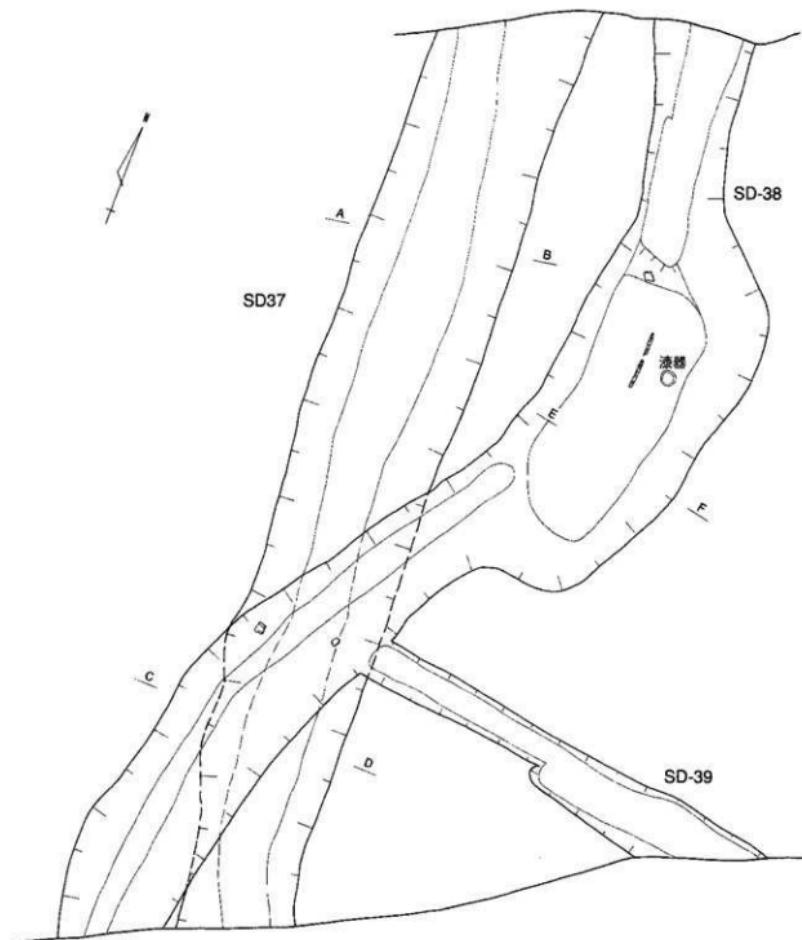
SD02とSD06の出土遺物はバラエティーに富み、生活中に使用されていたと思われる土器、陶器類の破片が数多く出土している。底部には、山茶碗片が数点見られるが、主要遺物は、内耳鍋、羽釜類、古瀬戸などの陶器片、更にSD02、03からは、初山焼きの皿片が出土している。SD02、03、04、06、07については近世初頭の遺構ということができよう。SD05は、山茶碗主体の溝で、溝の底部だけではなく上層部からも山茶碗の出土している。小皿には、墨書のあるものも見られ、また、白磁も出土している。

SD12

D-9グリッドで検出された黒褐色粘質土を覆土に持つ溝である。南端部は、擾乱により切られているため検出された長さが3.0mほどしか検出できなかつた。幅が約2.1mあるが深さは10cm程度で、遺構の底のみの検出となった。検出長が短いため詳細は不明であるが、幅から推定すると今回検出された溝の中でも大型の都類に含まれ、方向もほぼ一致している。大量瓦を出土した、SD23と同じ形態・胎土を持つ山茶碗を含んでいることからSD23などと同様の方向性を持って、一つの区画を形成した溝の一つと考えてもよいように思われる。



第18図 中世溝（SD23）実測図



A	B	C	D
	3.70		4.00
1	1層 暗(黒)灰褐色粘質土(糠混じり)	1	1層 地灰褐色粘質土
2	2層 緑灰色粘土(小石混じる)	2	2層 青緑灰色粘土
3	3層 茶灰色粘質土	3	3層 暗(黒)灰褐色粘質土
4	4層 黄褐色粘質土(砂混じり)	4	4層 緑灰色粘土
E	F		
	3.70		
1	1層 暗灰褐色粘質土	1	(マンガンの集積・小石混じり)
2	2層 青灰粘土(木片等含む)	2	5層 茶灰色粘土質土
3	3層 緑灰色粘土	3	(マンガンの集積)
		4	6層 黄褐色粘質土 (砂混じり・マンガンの集積)

第19図 中世溝 (SD37-38-39) 実測図

(遺物の出土状況)

遺構の残存が少ないため、遺物のほとんどは失われており、遺構の底に接した状態で山茶碗の底部、青磁、土師質小皿、土鉢などが出土している。底部のみであるが、K-90並行期の灰釉陶器も含まれる。SD23出土の山茶碗と同じ形態・胎土のものが出土しているが、この溝からは瓦の出土はみられない。

SD23

D-5～E-5グリッドにかけて検出された溝で、瓦が大量に出土している。前回調査のSD11に連続する溝である。方向は、N-8°～Wで検出した長さが約12m、幅3.0m、深さが0.5cmの規模を有す。底面は丸みを帯び、法面は、緩やかである。覆土は、灰褐色粘質土で、底部には青灰色の粘土が堆積しており帶水していたと考えられる。溝幅は、ほとんど一定を保っている。この時期のものとしては、最大の溝幅をもっている。

(遺物の出土状況)

覆土は、3層に分かれたが遺物的をみると、ほとんど時期差をもたない。出土遺物量は、上層の明灰褐色粘質土からのものが多く、山茶碗、小椀、小皿の他灰釉陶器、青白磁、甕、土鉢、瓦など大量の遺物が出土している。下層の粘土中にも少量の瓦が伴っているが、遺物のほとんどは、この溝が20cmほど埋没した後に大量に投棄されたものと考えられる。

SD24

D-7～D-6、E-6グリッドにかけて検出された。方向が、SD23よりやや北にずれているがSD27、SD31と共になんらかの区画を形成していた溝と考えられる。検出した長さは、約12m、幅0.9m、深さは10cmと浅く溝の底部のみの検出となった。北側に向かって深くなるが、覆土が基盤層に類似する。南側は、SD25に切られ、また、レベルも上昇し、ほとんど深さのない溝となる。覆土は、灰褐色粘質土でSD25、26、27、30、31などこのグリッド付近で検出された遺構の覆土と同じである。

(遺物の出土状況)

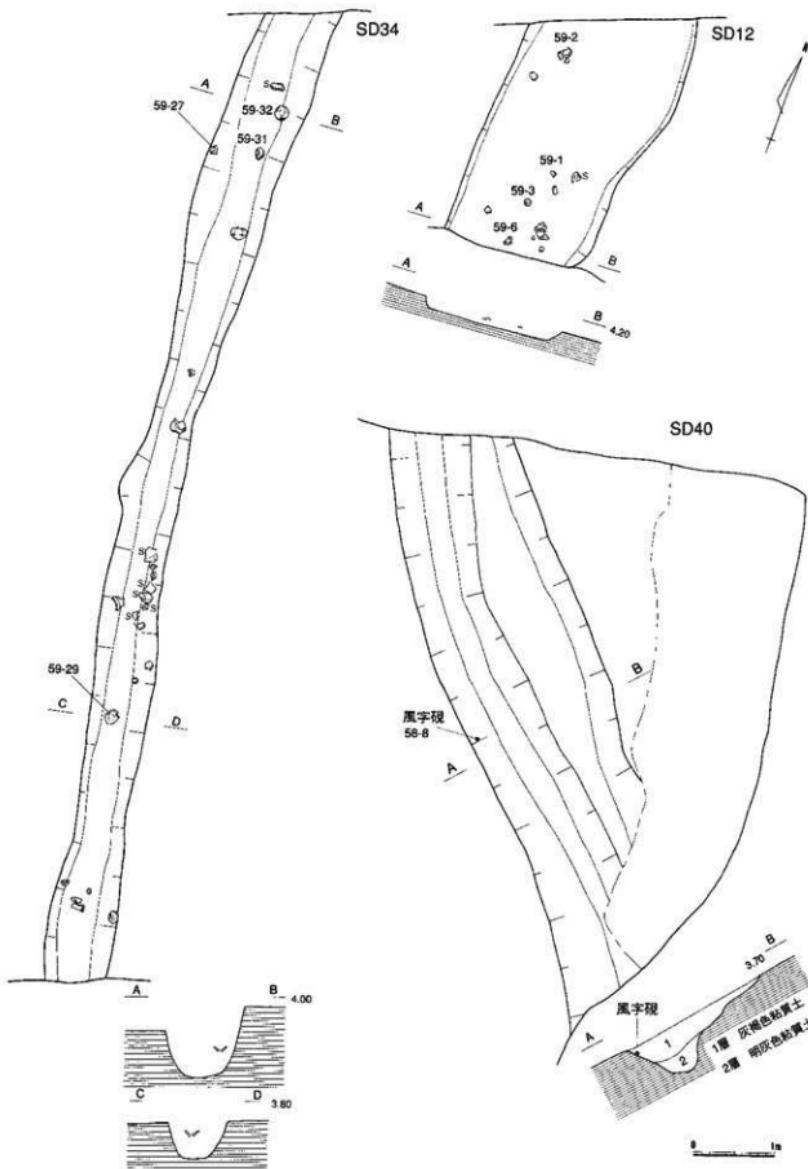
溝の南北部に遺物の出土量が多く、逆に北半分にはほとんど遺物が出土していない。出土遺物は、灰釉陶器の底部が多く、ほとんどが三角高台を呈するものである。SD27からも灰釉陶器が出土しているが、山茶碗を伴っており、灰釉陶器のみを出土している溝は、SD24のみである。なお、5～7グリッドにかけては、遺構にともなわぬが灰釉陶器片が数多く出土している。この時期の遺構がすでに消失していると考えられるが、遺物の中には綠釉陶器も含まれており、注目できる。

SD34

D-10～E-10グリッドで検出された前回調査のSD104から連続する溝である。後世の溝SD09、SX01や搅乱に上層部を切られているが、掘り方が深かったために検出することができた。検出した長さが約13mで幅1.2m、深さ0.6mで、底部はやや逆台形に近いU字形をしており、法面の立ち上がりは急である。覆土は、酸化が及んで黄色を帯びた黒褐色の粘質土であり、遺物はこの層から出土している。底部は、青緑灰色の粘土が認められるが、部分的であり帶水の影響と考えられる。方向は、N-7°～Wで区画性のある溝の一つと考えられる。

(遺物の出土状況)

遺物は、山茶碗が中心で溝が20cmほど埋まった段階で投棄されたものである。山茶碗は、高台がしっかりとしたもので、完形品が多い。その他、深鉢、灰釉陶器、白磁などの破片も出土している。また、上層から「打開」と判読が可能な墨書き器が1点出土し、高台が潰れた形状のもので、前回の報告書でもこの溝の上層部にこの時期の遺物が伴出するとされていることから、この溝は12世紀代に掘削され、13世紀にも活用されていた可能性が考えられる。



第20図 中世溝実測図

SD37, 38

D-4～E-4 グリッドにかけて検出された溝で、前回調査のSD01から連続する溝である。SD37とSD38では、遺物にやや時期差がみられることがからSD38は、SD37の埋没後、最掘削し使用されていた可能性が高い。SD37は、検出した長さ約11mで、幅1.9m、深さが0.9mの掘り方が深い遺構で、これより西側には、遺構が広がらないことがからSD23が形成する区画の最も外側の堀の役目を果たしていたと考えられる。覆土は、小礫が混じる灰褐色粘質土を1層としてその下に灰色粘土層が入り込む。この層の時に帶水していた可能性があり、小礫、炭化物が見られる。下層は、粘質土で遺物は含まれていない。SD38は、調査長13.0m、幅約2.0m、深さが0.8mで、両半分はSD37と重複するような形で検出された。中央部に底部が方形を呈する落ち込みがあり、流木や漆器碗などの遺物や植物遺存体などが検出されている。北半分は、攪乱で上面を削られているが、覆土は、3層に分けることができた。なお、SD38の東壁から延びるSD39は、SD38の1層と同じ灰褐色粘質土が入り込み、同時期に使用されていたものと思われる。

(遺物の出土状況)

SD37からは、ほとんど遺物の出土はなかったが、2層目から瓦、山茶碗、灰釉陶器、土壺、白磁などが出土している。また、土師皿に「常誦」と判読可能な墨書きも見られる。SD38からは、山茶碗片と漆器等が出土している。

SD40

調査区東土層確認地点でピット状に断面がみられたが、平面プランが確認できなかった遺構である。10月の集中雨後、十分地面に水がしみ込んだ状態でようやく溝と確認することができた。D-13～E-14に向かって走る溝で他の遺構とは明らかに方向が異なる。検出した長さは9.9mで、幅1.8m、深さ0.2mで底面はV字状を成し、東側法面途中にフラットな面があり、階段状に落ち込む。西側法面は急な傾斜で立ち上がり、東側を礫の入った攪乱に切られる。覆土は、灰褐色粘質土で、やや砂が混じる。2層は、酸化が進んだ灰色粘質土で底部にマンガンの集積とみられる茶色の帯が溝の底を縁どるような形で広がっていた。

この溝が奈良時代終わりの遺物を出土している唯一の遺構である。

(遺物の出土状況)

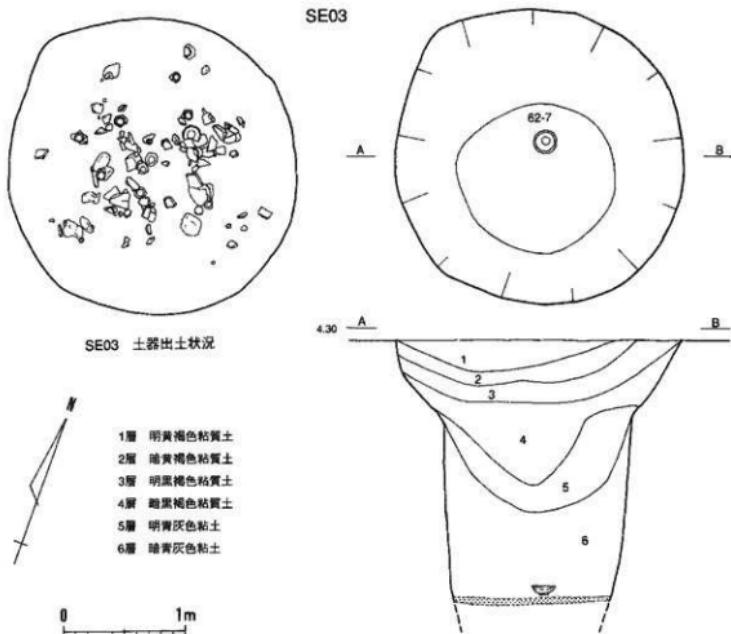
遺構の平面検出段階でこのグリッドから須恵器の摺鉢や壺の破片が出土していたため、出土地点をマークして取り上げたが、SD40の上層の遺物と判明した。遺物は、須恵器壺、壺蓋、長頸瓶、甕、丹彩壺などが出土している。いずれも1層からの出土で2層が堆積した段階で投棄されたものと考える。また、西壁に接した状態で、風字硯が出上している。8世紀末～9世紀初めにかけての遺構と考えられる。

(2) 井戸

井戸跡は、2基確認された。前回調査では、板材を使用した継板組隅横材どめタイプの構造を持った遺構が報告されているが、今回検出の2基は、いずれも素掘りの井戸である。SE03からは、多くの山茶碗、瓦が出土している。

SE01

D-8とE-8 グリッドの境部に位置する。攪乱部分を除去したところ直径約2.9mほどの円形のプランが確認された。北半分に径20～30cm程の礫が積み重なるようにして検出されたが、この井戸の施設ではなく井戸廃棄後に投棄されたものである。東側にややフラットな段を有し、そこから緩斜状に落ち込んでいく。覆土は、上より暗黄褐色砂質土、暗青灰色粘土と続き1層と2層の間に青灰色粘土のブロックが入り込む。約1.5mほど調査したが、湧水により上層が崩壊したため、調査不能となった。遺物は、少量の山茶碗片、青磁、土師皿が出土したのみであった。



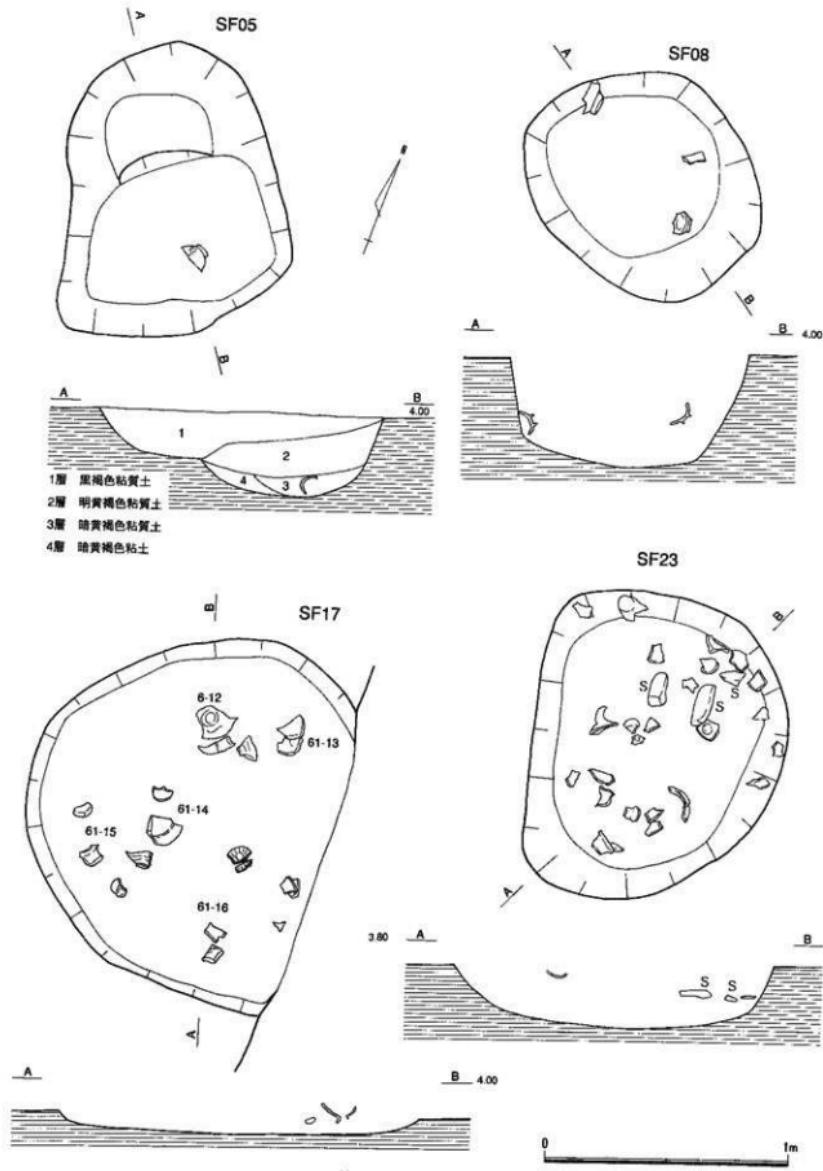
第21図 中世井戸（SE03）実測図

SE03

E-8グリッドに位置し、後世の溝SD33に南半分をSX02に遺構上面を切られる。平面形態は、2.4m × 2.3mのはば円形を呈しており、底には曲物を設置し周囲に砂利を敷きつめた素掘りの井戸である。断面をみると上面部は緩いカーブを描いて落ち込み、中段から垂直に掘り込まれている。覆土は、中段までは、黄褐色の粘質土がレンズ状に堆積しており、垂直に落ち込む部分からは、青灰色の粘土が堆積している。底部付近で出土した曲物片は、すでに形状も分からぬほど断片化しているが、側板で幅8.6cm、厚さ0.35cmの全体にケビキ線を入れた板を使用していた。この曲物の周囲は幅2.75cmで厚さ0.4cmの孔をうがったケビキ線が入った板で補強していたと考えられる。深さ1.8mのところに小砂利をひきつめてあり、その上に完形の山茶碗が正位置で置かれていた。小砂利を取り除いて砂層まで掘り進めようとしたが湧水のため、調査を断念した。

（遺物の出土状況）

遺物のほとんどは、4層までのレンズ状堆積した部分から出土しており、5, 6層の堆積後、その上層は疊んでおりその部分に遺物が投棄されたと考えられる。特に瓦、山茶碗の出土が多く、拳大の甕も入り込んでいた。底部では、曲物片の他に木札が一枚出土しているが、文字は削られており、判読できない。また、山茶碗が底部に置かれていたが、12世紀末～13世紀初めの渥美湖西窯のものである。遺物の中には、墨書き土器も數点含まれるが、その中に「僧器」または、「僧參」と判読できそうなものが含まれており、遺構との関係が注目される。



第22図 中世土坑実測図

(3) 土坑状遺構

土坑状遺構は、4グリッドから13グリッドまで調査区のほぼ全面で検出されているが、特に6グリッドに集中しており、形状はほとんどが円形である。その中には、根石の名残りと思われる礫を含むものもあり、本来は柱穴としての機能を持っていたと考えられるものも含まれる。いずれにしても、掘り方が10cm～20cmほどのものがほとんどで詳細は不明である。また、他のグリッドでも多くの遺構が検出されたが、搅乱を受けておりほとんど原形をとどめるものはない。なお、SF23は古墳時代後期の遺構で、この付近からこの時期のものと考えられる土器が出土している。なんらかの遺構の存在が考えられるがすでに消失しているので遺物の出土点を記録して取り上げた。とりあえずこの遺構もこの項に含めて報告する。

土坑は、23基検出されたが、SF14、SF19、SF24は、遺物の時期、出土状況や覆土からみて新しい時期の遺構と判断した。よって、土坑状遺構20基（SF23も含め）をこの時期の遺構とした。

SF05

SF05は、E-10グリッドで検出された。長径1.17m、幅0.95m、深さ0.27mで、平面プランがほぼ方形であったが、掘り進めたところ北側にフラットな面を持ち、南側がピット状に落ち込む。覆土は、ピット状の底には炭化物が混じった黄褐色粘質土があり込み、その上面は黒褐色粘質土に覆われていた。ピット状の落ち込みの底に山茶碗、土師質土器片が出土した。

SF08

D-7グリッドで検出された。平面形は、直径0.95mのほぼ円形で、深さが約0.5mを計る。遺構の断面は、U字状で覆土は、黒褐色粘質土であり、遺物は、灰釉陶器と須恵器の壺、土師器の壺の口縁が出上している。時期は、平安時代と考えられる。

SF17

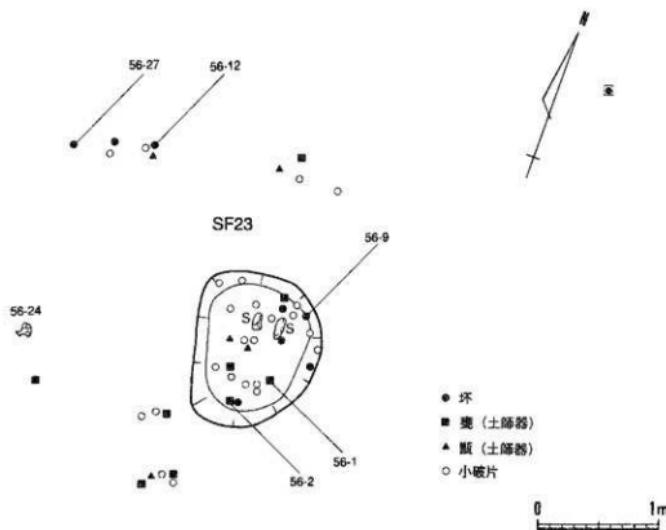
E-6グリッドで検出され、溝SD25に東半分を切られる遺構である。残存長は、約1.6mで、深さ0.2mほどでほとんど底のみの検出である。山茶碗が、多數出土しており、復元できたものも数点ある。全てが底に接した状態で出土しているため、この遺構の時期決定には良好な資料となる。

SF23（第23図）

E-6グリッドで検出された遺構で、溝SD25の底の部分に遺物が検出されたことから精査した結果発見された。したがって、上面部の西半分は溝SD25に切られているが、SD25の掘り方がSF23より浅いため底の部分は、ほぼ完全な形で検出することができた。長さは、約1.4m×1.1mで、深さが0.2mのほぼ円形を呈し、断面は半円形のため、掘削時にはU字状に掘られたものと考えられる。覆土は暗褐色粘質土で、やや黒味が強い。6から7グリッドでは、7世紀台の須恵器の壺などが出土しているが、遺構に伴ったのは、SF23のみである。このSF23のすぐ西側にも完形品の壺が出土している。出土遺物は、ほとんど破片であるが、須恵器の壺、土師器の壺の口縁部、瓶片などで、底より少し浮いた状態で出土しているが、遺構の年代には伴うものと考えられる。

第3節 近世以降の遺構

近世の遺構と考えられるものには、溝SD01、SD09、SD10、SD11、SD32、SD33、があるが、SD01、SD11、を除いて他の遺構は、洪水などにより黄色の土が一度に堆積したもので遺物もほとんど伴わない。また、これらの溝状遺構は、形も不整形であり、明確な掘り方を持つものは、SD10のみである。そのため、ここでは、SD01、SD11について報告する。



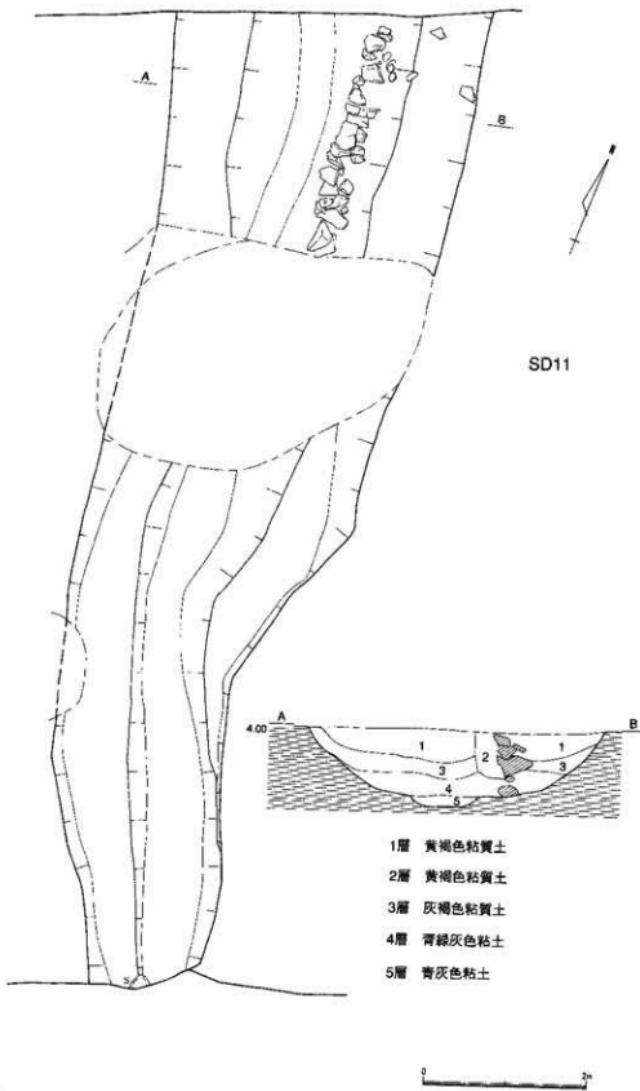
第23図 古墳時代遺物出土状況

SD01

E-13グリッドで検出された溝で、調査区東端の土層確認地点に浅い皿状の断面が露出していたため発見された。コの字状に屈し、調査区外に延びるため、性格等は不明である。深さが9cmとほとんど底のみの検出である。遺物は、香炉の底部と陶器片など数点が出土している程度である。

SD11

SD11は、D-9～E-9グリッドにまたがって調査区を南北に走る溝である。前回調査区のSD103から続くもので、溝全体を石組みで区切っている。中央部分は後世の擾乱を受けるが、長さ12m、幅3.7m、深さ0.95mを測る。底部は、青灰色の粘土が入り込み溝として機能していたことを伺わせる。遺物は、石組の下から染め付けの茶碗片が出土しているが、遺構掘削時に入り込んだものと考えられる。この石組が何の役割をしていたかは不明である。その他、混入品と考えられる山茶碗、灰釉陶器片、青磁、瓦なども出土している。



第24図 近世溝（SD11）実測図

第1表 弥生時代方形周溝墓一覧表

番号	掲図 写真	検出時の規模	形態		溝覆土	出土遺物	備考
			全体	溝断面			
1号	第9図	最大幅 東西 12.20 周溝幅 深さ 南 0.70 0.45 (0.90) 東 1.10 0.48 (1.01) 西 0.84 0.33 (0.82)	北側は調査区外に 延びるため、溝が 四辺に検出 四隅 はつながる 主体部は消失	U字状	暗黄褐色粘 質土 炭化物混じ る	弥生土器	南の溝は途中複 雑に切られる 西側の溝は2号墓 と共有する
2号	第10図	最大幅 南北 9.90 東西 (10.90) 周溝幅 深さ 北 0.96 0.36 (0.81) 南 0.90 0.34 (0.84) 東 1.08 0.41 (0.86)	西側の溝はSD34に 切られたため「コ」 の字形に残る 四 隅はつながる 主体部は消失	U字状	暗黄褐色粘 質土	弥生土器	東側の溝は1号墓 と共有す
3号	第9図	最大幅 南北 9.04 東西 8.14 周溝幅 深さ 北 0.76 0.43 (0.99) 南 0.78 0.28 (1.00) 東 0.92 0.35 (0.94) 西 0.72 0.47 (1.07)	西側の溝の一部が SD54と重なる (切 り合い関係不明) 四隅はつながる 主体部は消失	U字状	暗黄褐色粘 質土	弥生土器	
4号	第10図	最大幅 東西 9.04 周溝幅 深さ 南 0.62 0.43 (0.91) 東 0.70 0.39 (0.96)	北側は調査区外の ため南北の規模は 確認できない 主体部は消失	丸み をお びたV 字状	暗黄褐色粘 質土	弥生土器 鉄製品 打製石斧	西側は、1号墓の溝 とぶつかるが前 後関係は不明

第2表 弥生時代溝一覧表

番号	掲図	グリッド	検出時の規模		形態	方向	覆土	出土遺物	備考
			幅	深さ					
50	第11図	D-13 E-13	0.60	0.36 (0.87)	U字状	N-10° - E	黄灰褐色粘質土	弥生土器	
54	第12図	E-6 D-6	5.60	1.43 (2.05)	ゆるい V字状	N-61° - W	黄灰色粘質土 黒褐色土	弥生土器 木製品 鉄製品	
57	第13図	D-9	0.80	0.20 (0.75)	U字状		暗褐色粘質土	弥生土器 土解器	
61	第13図	E-6 E-6	1.00	0.51 (1.01)	U字状	N-18° - E	暗褐色粘質土	弥生土器	
65	第13図	E-5	1.05	0.20 (1.00)	U字状		暗褐色粘質土	弥生土器	

SD51, 52, 53, 55, 56, 58, 59, 60, 62, 63, 64は、方形周溝墓の周溝

第3表 弥生時代土坑一覧表

数字の単位はm（）は残存長 深さの（）内は、基準4mから

番号	揮図 写真	グリッド	検出時の規模			形態		覆土	出土遺物	備考
			最大長	幅	深さ	平面	断面			
50	第16図	E-12	1.20	0.90	0.16 (0.24)	楕円形	ゆるい U字状	暗黄褐色粘質土	弥生土器	
51	第16図	E-7	1.26	1.03	0.20 (0.75)	楕円形	ゆるい U字状	暗褐色粘質土	弥生土器	
53	第16図	E-7	1.70	1.70	0.30 (1.04)	円形	ゆるい U字状	暗褐色粘質土	弥生土器	SX10に 切られる

SF52はSD54の一部。

第4表 その他の遺構(SX)一覧表

数字の単位はm（）は残存長 深さの（）内は、基準4mから

番号	揮図 写真	グリッド	検出時の規模			形態		覆土	出土遺物	備考	
			最大長	幅	深さ	平面	断面				
05		E-11	遺物が固まって出土 掘り方は確認できず						弥生土器	弥生	
06		E-12	壺1個体完形で出土 掘り方は確認できず						土師器壺	古墳	
07		D-11	0.93	0.55	0.37 (0.26)	円形	底のみ	暗黄褐色粘質土	弥生土器	弥生	
10	第16図	E-5 E-6	3.06	1.42	0.03 (0.55)	楕円形	底のみ	暗黄褐色粘質土	弥生土器	弥生	
11	第16図	E-5 E-6	1.20	1.17	0.03 (0.48)	楕円形	底のみ	暗黄褐色粘質土	弥生土器	弥生	
12	第14図	E-9	0.25	0.23	0.07 (0.60)	楕円形	底のみ	暗黄褐色シルト	弥生土器	弥生 壺單体	
16	第14図	E-7	0.43	0.35	0.14 (0.62)	楕円形	U字状	暗黄褐色粘質土	弥生土器	弥生 壺單体	
19	第14図	D-10	0.43	0.30	0.09 (0.54)	不定形		暗褐色粘質土	弥生土器	弥生 壺單体	

SX08, 09, 13, 14, 15, 17, 18は他の遺構名に変更 SX01～SX04までは近代以前のため割愛

第5表 中世溝一覧表

数字の単位はm ()は残存長 深さの ()内は、基準4mから

番号	持団	グリッド	検出時の規模		形態 断面	方向	覆土	出土遺物	備考
			幅	深さ					
01		E-13	1.53	0.09 (0.50)	皿状		灰色粘土	近世陶器(香炉) 土師皿	近世
02		D, E-13	0.93	0.15 (0.59)	U字状	N-8° - W	黒褐色粘質土	壺 土師壺 内外耳鍋 初山皿	近世初頭
03		D-13	0.40	0.07 (0.38)	底のみ	N-8° - W	黒褐色粘質土 炭化物混じり	初山皿 丹彩坏 土師鍋	近世初頭
04		D-13	0.38	0.05 (0.27)	底のみ	N-9° - W	黒褐色粘質土	山碗 土師質土器	近世初頭
05		D, E-12 D, E-13	0.95	0.38 (0.48)	U字状	N-5° - W	黒褐色粘質土	山碗 小碗 土師鍋 白磁	
06		D, E-12	1.58	0.33 (0.52)	U字状 起伏有	N-7° - W	黒褐色粘質土	山碗 須志器 陶器 土師鍋 青磁 土鍋	陶器は美濃、古瀬 戸
07		D, E-12	0.40	0.07 (0.22)	底のみ	N-3° - W	黒褐色粘質土	山碗 中世陶器 土師壺	
08		E-11, 12	0.30	0.07 (0.31)	底のみ	W-6° - S	黒褐色粘質土	山碗 壺 羽釜 土鍋	SD09に切 られる
09		E-9, 10, 11	2.63	0.38 (0.38)	U字状		明黄褐色土 黄褐色シルト	染め付け茶碗 灰釉窓 摺り鉢	近世
10		E-10, 11	0.75	0.27 (0.39)	U字状		暗黄褐色シルト	なし	近世
11	第24回	D, E-9	3.66	0.94 (0.94)	U字状 石組み	N-11° - W	黒褐色土 青灰色粘土	山碗 新瓦 土鍋 染め付け茶碗	近世 剪SD103
12	第20回	D-9	2.09	0.10 (0.20)	皿状	N	黒褐色粘質土	山碗 小皿 灰釉窓 青磁 土師皿 土鍋	複乱に切 られる
13		D-7, 8	0.85	0.25 (0.19)	U字状	W-5° - S	黒褐色粘質土	山碗 土師皿 土鍋	複乱、 SX04切ら れる
14		D-7	0.65	0.06 (0.20)	底のみ	N-8° - W	黒褐色粘質土	なし	SD13に切 られる
15		D-6, 7	0.42	0.07 (0.19)	底のみ	W-15° - S	黒褐色粘質土	なし	SE02, SX04切ら れる
17		E-10	0.60	0.12 (0.25)	U字状	N-40° - W	黒褐色粘質土	山碗	複乱に切 られる
18		E-10	1.44	0.16 (0.27)	逆台形	N-14° - W	灰褐色粘質土	山碗 小皿 常滑窓	複乱、 SD09切ら れる
19		D-8	0.25	0.04 (0.14)	底のみ		青緑灰色砂質土	なし	近世以降

20		D-10	0.60	0.08 (0.09)	底のみ	E-18° - S	黒褐色粘質土	山範	擾乱に切られる
21		D-8	0.23	0.11 (0.12)	U字状		黒褐色粘質土	山範	
22		D-8	0.50	0.09 (0.10)	底のみ		青緑灰色粘質土	山範	擾乱に切られる
23	第18回	D, E-5	3.00	0.52 (0.79)	U字状	N-8° - W	灰褐色粘質土 灰褐色粘土	山範 小皿 青磁 十種 瓦 壺 白磁	前調査区 SD11接続
24		D, E-6 D-7	0.90	0.13 (0.29)	底のみ	N-3° - W	暗灰褐色粘質土	灰釉碗	SD25に切られる
25		E-6	1.04	0.11 (0.26)	底のみ	N-4° - W	暗灰褐色粘質土	山範 小碗 氷釉碗 土師皿 土師鍋	
26		E-6	0.72	0.08 (0.27)	底のみ		暗灰褐色粘質土	灰釉碗 上部碗	
27		D, E-6	1.40	0.05 (0.26)	皿状	N-6° - E	暗灰褐色粘質土	灰釉碗 上部碗	
28		D-6	0.53	0.10 (0.30)	底のみ		暗灰褐色粘質土	須恵器	SD27に切られる
29		E-6	0.88	0.04 (0.26)	底のみ	N-4° - W	暗灰褐色粘質土	小碗 土師壺 壺	
30		D-6	0.48	0.06 (0.26)	底のみ	N	暗灰褐色粘質土	大平鉢 壺 須恵器 土師皿 青磁 山範	SD31に接続
31		E-5, 6	0.50	0.10 (0.23)	底のみ	N	暗灰褐色粘質土	山範 土師皿	SD30に接続
32		E-9, 10	2.13	0.07 (0.21)	底のみ		暗黄褐色粘質土	染め付け茶碗 擦り鉢	近世
33		E-6, 7	3.00	0.42 (0.62)	逆台形		暗黄灰色粘質土	近世陶器	近世
34	第20回	D, E-10	1.20	0.57 (0.70)	U字状	N-7° - W	黒褐色粘質土 青緑灰色粘土	山範 小碗 灰釉碗 白磁 上部碗	前調査区 SD104接続
35		E-10	0.90	0.14 (0.04)	底のみ	N-14° - W	黒褐色粘質土	山範 須恵器 土師壺	擾乱に切られる
36		E-10	0.85	0.11 (0.56)	底のみ	E-10° - S	暗黄褐色土 炭化物混じり	山範 須恵器 十種	SD35に切られる
37	第19回	D, E-4	1.88	0.93 (1.38)	U字状	N-4° - W	灰褐色粘質土 黄褐色粘質土	山範 灰釉碗 壺 擦り鉢 白磁 尾	前調査 SD01接続
38	第19回	D, E-4, 5	1.95	0.83 (1.03)	U字状		灰褐色粘質土 綠灰色粘土	山範 小皿 土師鍋 漆器 十師皿 壺	前調査 SD01接続
39	第19回	E-4, 5	0.75	0.22 (0.48)	U字状	N-59° - W	灰褐色粘質土	山範 土師壺	
40	第20回	D-13, 14 E-13, 14	1.80	0.20 (1.13)	V字状	N-39° - W	灰褐色粘質土	須恵器 壺 長颈瓶 風字瓶 上師壺	奈良後半 から平安

SD16は、SX02に変更

第6表 中世井戸一覧表

数字の単位はm ()は残存長 深さの () 内は、基準4mから

番号	構図写真	グリッド	検出時の規模			形態		覆土	出土遺物	備考
			最大長	幅	深さ	平面	断面			
01		D-8 E-8	3.10	2.90	1.50 (1.95)	円形 素掘り	U字状	青灰色粘土	山碗 青磁	擾乱に切られる
02		D-6		(2.50)	0.18 (0.40)	円形	皿状	灰褐色粘土	土師皿 新瓦	近代以降
03	第18図	E-7	2.40	2.30	1.77 (1.93)	円形 素掘り	円筒状 底不明	明黄褐色粘土	山碗 小皿 青磁 灰釉碗 瓦 荷札	擾乱に切られる

第7表 中世土坑一覧表

数字の単位はm ()は残存長 深さの () 内は、基準4mから

番号	構図写真	グリッド	検出時の規模			形態		覆土	出土遺物	備考
			最大長	幅	深さ	平面	断面			
01		E-13	1.07	0.91	0.17 (0.52)	楕円形	ゆるいU字状	黒褐色粘土	土師器	
02		D-11	(2.20)	(0.60)	0.14 (0.16)	不整形	底のみ	黒褐色粘土	山碗 小碗 土師器	擾乱に切られる
03		E-11	1.03	0.50	0.43 (0.17)	楕円形	半円形	黒褐色粘土	山碗	
05	第22図	E-10	1.17	0.95	0.27 (0.32)	隅丸方形	U字状	黒褐色粘土上	山碗 小碗 上師壺	
06		D-10	(0.44)	(0.50)	0.27 (0.24)	不整形	U字状	黒褐色粘土	山碗	擾乱に切られる
07		D-8	(1.36)	(0.60)	0.10 (0.23)	隅丸方形	底のみ	黒褐色粘土	山碗 中世 陶器	調査区外
08	第22図	D-7	0.95	0.95	0.47 (0.56)	円形	U字状	黒褐色粘土上	灰釉碗 土師壺 須恵器壺	
09		D-7	0.65	0.55	0.20 (0.19)	楕円形	ゆるいU字状	黒褐色粘土	山碗 土師皿 壺	
10		E-11	(1.64)	(0.56)	0.05 (0.07)	不整形	底のみ	黒褐色粘土	山碗	擾乱に切られる
11		D-10	1.72	(0.78)	0.14 (0.13)	隅丸方形	ゆるいU字状	黒褐色粘土	山碗	擾乱に切られる
13		D-7	(0.70)	(0.56)	0.13 (0.24)	楕円形	ゆるいU字状	黒褐色粘土	山碗 須恵器	SX04に切られる

14		D - 6	0.75	0.75	0.27 (0.43)	円形	U字状	黄灰褐色粘質土	土師壺 丹彩碗?	時期不明
15		E - 6	0.80	1.05	0.14 (0.23)	楕円形	皿状	黄灰褐色粘質土	山碗	
16		E - 6	0.75	0.59	0.36 (0.54)	楕円形	U字状	黄灰褐色粘質土	灰釉碗 山碗	角禮
17	第22回	E - 6	(1.60)	1.36	0.20 (0.23)	不整形	皿状	黄灰褐色粘質土	山碗 小皿	SD25に切 られる
18		E - 6	1.60	1.54	0.03 (0.23)	円形	底平坦	黄灰褐色粘質土	山碗 灰釉碗	
19		E - 6	0.66	0.60	0.09 (0.29)	楕円形	逆台形	黄灰褐色粘質土		時期不明
20		E - 5	0.64	0.66	0.10 (0.31)	円形	半円形	黄灰褐色粘質土	山碗	
21		D - 5	0.80	0.77	0.10 (0.48)	楕円形	U字状	黄灰褐色粘質土	山碗 灰釉碗 瓦 須恵器	
22		D - 6	1.00	0.85	0.07 (0.51)	円形	底のみ	黑褐色粘質土	灰釉碗 丹彩坏?	SD27の下か ら検出
23	第22回	E - 6	1.36	1.05	0.20 (0.45)	円形	底のみ	暗褐色粘質土	須恵器 土師壺 瓢	古墳
24		D - 6	0.63	0.60	0.46 (0.92)	円形	U字状	黄灰褐色粘質土	なし	時期不明

SF12は擾乱として処理

第4章 遺物

第1節 弥生時代後期の遺物

弥生時代後期の遺物は、土器がほとんどで他の遺物の出土量は少ない。遺構としては、溝からの出土が圧倒的で、後の時期の混入品も多い。また遺構も上層部が消失しており、はっきりと分層できなかつたため、一括資料として扱うことはできない。しかし、土器には遺構によって大きな時期差がなく比較的まとまった状態で出土しているものもある。そこで、形態・技法を検討することにより、ある程度出土土器の傾向をつかむことができるよう思われる。土器の器種を壺・甕・高坏・鉢に分け、土器の出土量が多い、1・2号方形周溝墓の溝・SD50・SD54の順に出土土器の概要をみていくこととする。

1・2号方形周溝墓

ほとんどが破片資料で図示できたものは少ないが、壺類の出土が圧倒的で甕・高坏の出土個体数が少ない。壺は、口縁部の形態によって単純口縁・折り返し口縁・複合口縁に分けることができる。単純口縁の壺は、口縁部が外反するもの（27-4, 5, 8）、口縁部が直線的に立ち上がるものの（27-1, 3, 6, 7, 28-1, 9）、口縁部が内湾するもの（27-2, 10）がある。特に頸部から直線的に立ち上がる直口壺は、2点（27-3, 28-9）出土している。（28-9）は、口唇端部が尖り、体部も球形を呈することから土師器とみることができる。口縁部が内湾するものは、口唇部が外斜面または水平面を有するものである。体部は、下膨れ型が主であるが、丸みを帯びた球形胴化したものもみられる。折り返し口縁の壺は、端部を鋭角に折り返すもの（27-9）と口唇部を外側に引き出して断面方形に折り返すもの（28-4, 6）がみられる。この形態のものは、折り返した外側に施文する傾向がある。（28-4）は、頸が細く体部が細長く伸びるもので、天竜川流域の土器に似た形態をしている。複合口縁の壺は、図示してあるものは4点（28-3, 5, 29-2, 3）であるが、口縁部の破片の観察でも総体数は少ない。口縁部が内湾して立ち上がるものの、外反するものがみられるが、特に（29-2）は、精選された胎土と二重口縁を持ち、古式土師器として扱う。その他、（29-3）も古式土師器である。

甕は「く」の字状に屈曲する口縁部に刻み目を施すものがほとんどであるが、胴部が長形胴になるものと体部の中位から下半に最大径がきて、やや丸みを帯びた、球形胴状になるものがある。台部と胴部の接合点に粘土帶を巻いた個体は、今回検出された数はそう多くない。口縁部に刻み目を施さないもののうち大きく外反する口縁を持つ（30-5）は、口唇端部が尖り、古式土師器と考えられる。

その他、小型の壺類は、壺を小型化した形態のもの（27-14）と、丸みを帯びた球形に近い体部に大きく外反（または内湾）しながら開口口縁部を持ち、口縁部径が胴部径より大きくなるもの（27-11, 13, 28-7, 8）が出土している。ここでは、一応堆と呼ぶ。また、2号墓の南周溝からは、手こね土器（27-12）と図示できなかったが、極小高坏の脚が出土している。

SD50

溝SD50からは、比較的まとまりのよい上器群が出土している。確認できた個体数を器種ごとにおまかに比率を示したのが第25図である。壺は、底部を確認し、甕・高坏は台脚部と胴部との接合部を確認することで個体数を数えた。いずれも3分の1以上残っている個体を対象にしている。なお、壺と鉢は底部形状では区別ができないため、鉢は、壺に加えて数えている。

壺は、単純口縁の壺がほとんどで、折り返し口縁の壺（31-7）が1点確認できただけで、複合口縁の壺は出土していない。単純口縁の壺は、外反する口縁のもの（31-4, 5, 6, 32-4, 33-3）と直

線的に立ち上がる口縁のもの (31-3, 32-3, 33-2, 4, 5) が圧倒的で、やや内湾する口縁のもの (31-1, 2, 32-1) は、数例に少ない。直線的に立ち上がるものの中には、体部が丸みを帯びており、肩部がかなり張った形態で壺の口縁部が短く直立して立ち上がる直口壺形態のもの (33-2, 5) もみられる。また、口唇部にはナデを施し、口唇端部が外斜面または水平面を持つものと、端部を丸く収めるものが多く、内斜面を有するものは (32-1) 1点のみである。体部の形態は、下半部が屈曲するいわゆる下彫れ型を呈するものと彫曲部が明確ではなく縦に長い楕円形状になるものがある。いずれも丸みを帯びる点では共通している。衛により施文されるものは、肩部が張って丸みを帯びるもので、胴部下半が屈曲する形態のものが多い。文様は、衛描横線文、衛描波状文、衛刺突羽状文、衛描扇形文の組み合わせが多く、縄文が施されているもの (32-5) も出土している。また、壺柄を思わせる大型の壺 (37-1) もあり、この壺には3段の羽状縄文が施され、その上に2個一単位で7ヶ所に円形浮文が張り付けられている。小型の壺は、6点図示したが、壺を小型化した形状のもので、衛で施文されるもの (33-6) もみられる。なお、弓状の本体に把手をつける形態の壺蓋も出土している。鉢は、いわゆる菱鉢 (34-2) がみられる。まだ、口縁部に内湾化傾向はみられない。

壺は、口縁部が「く」の字状に屈曲して刻み目を施すものが多く出土している。いずれも破片が多く台部まで接合できた資料は少ない。小型の壺が4点 (34-8~11) 出土しているが、体部上半に最大径がきて体部の最大径が口縁部の径より小さくなるものである。

高坏は、一度立ち上がり後をもってさらに外反する形態の坏部のものが多く、脚部下半が内湾しながら聞く形態の脚がつく。椭型の坏部の先端がさらに外反するもの (36-2)、坏部底部に稜をもちやや内湾しながら立ち上り、口唇部は水平面をもつ坏部に脚部下半が内湾しながら聞く形態のもの (36-1) もみられる。胸部の破片は、下半が直線的に聞くもの、下半が内湾して聞くものと、上部から内湾しながら聞く形態のものも出土している。また、坏部が深いグラス型 (35-7) を呈し、口唇部に内斜面を有するものがあるが、調整方法から一応高坏としておく。

全体：119個

壺 55個体 46.2%	壺 35個体 29.4%	高坏 29個体 24.4%
-----------------	-----------------	------------------

第25図 SD50出土土器構成比率

SD54

SD54は、環濠と考えている溝で土器は、上層の第2層と中層の第3層と下層のものと分けて取り上げた。しかし、幅の大きい溝であったため取り上げ方に精度を欠き、上層と中層の土器の混入もある。…応SD50と同様に器種別の構成比率を出してみた。(第26図) 壺には、鉢類も含まれるためかなりの点数になる。

最初に上層(第2層)より出土した遺物をみていくことにする。壺は、単純口縁の壺、折り返し口縁の壺、複合口縁の壺が出土している。単純口縁の壺のなかで、外反する形態のもの (38-4, 5, 40-1, 41-2, 6, 9) は、あまり多くはない。むしろやや内湾する形態のものが多くみられる。内湾する形態のもので、口唇端部が内斜するもの (41-1) は1点のみで、外斜面をつくるか丸く収めるものが多い。また、頸部が長く内湾しながら立ち上るもの (38-1) もみられ、堆形態のものの大型化したような形態である。折り返し口縁の壺の内、図示したものは8点である。口縁部を外に引き出してかなり外反させる形態のもの (41-5, 8, 42-1) がある。また、顯著に折り返すのではなく口唇部をやや肥厚させた程度のもの (41-3, 5) もみられる。(42-3, 4) は、古式土器とも思えるが、

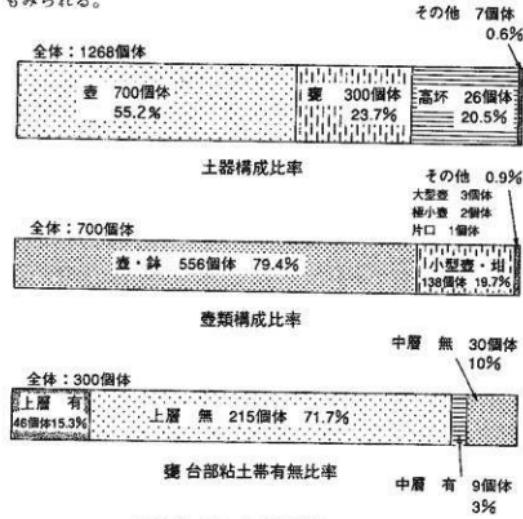
ここでは弥生土器と扱う。複合口縁の壺は、大型の壺(43-1, 2)もこの範疇に含めた。(44-1)は、菊川式の影響を受けているものと考えられるが、肩部に断面三角形の突帯を設け、なで肩になるなど在地性も強い。(39-4, 43-4)は、口縁部が欠損しているため明確ではないが、長頸壺と思われる。小型の土器は、小型壺・培・それに鉢と一応分類をしてみた。(観察表参照)ここでいう鉢は、偏平な胴部が横長のもので、器高が低く、口縁部が聞くものを指す。培も鉢も口縁部が長くやや内湾して立ち上がるものが多いため、口唇部は外斜面をつくるか丸く収めるものが多い。口唇部が内斜するものは、(43-6)1点のみである。また、無頸の鉢は、片口鉢(44-5)と小型鉢(44-3, 6)が出土している。

壺は、口縁部が「く」の字状に外反するものと外反度が弱いもののがみられる。口唇端部を面取りして外面に刻み目を施すものや口縁部をナデにより丸く収めるものがある。(45-2)は、愛知県内にみられるものと似た短い台部がつく形態のものである。

高坏は、坏底部口縁部を外反させたものに脚の下半が内湾しながら開くもの(46-8, 47-1)もみられるが、坏底部が狭くなり口縁部が稜を持ってやや内湾気味に立ち上がり、内湾する脚部がつく高坏が目立っている。しかし、口唇部を横ナデして、端部に内傾面をつくるなど欠山期の高坏の典型的な特徴を備えたものは少なく、在地性を強く表しているように思われる。また、2段つくりの脚部が2点出土している。

中層(第3層)の土器は、個体数はあまり多くないが、壺には、単純口縁で外反する形状のもの(48-1)、直線的に立ち上がる口縁部を有するもの(48-4)、口縁端部に水平面をつくるわざかに折り返すもの(48-6)、複合口縁で屈折してやや内湾しながら外側に伸びるもの(48-5, 49-1)がみられる。(49-4)は、長頸壺で丸みを帯びた胴部にあまり長くならない口縁部がついたものである。いずれも体部は、丸みを帯びた下膨れ形態のものが多い。

壺は、「く」の字状に外反する口縁部に比較的整った刻み目をつけるもので、口縁部にナデを施したもの(50-1)もみられる。



第26図 SD54出土土器構成比率

高坏は、一度立ち上がり、稜を持ってさらに上方で外反する形態の坏部に、脚部の下半が内湾しながら聞く形態のものが多い。また、椀状の坏部に脚部の下半が内湾した形態のもの（50-3）や椀状の坏部に注ぎ口がついた片口形態のものも出土している。（50-8）は、筒状の脚部の下半部がかなり広く聞く形態のもので、櫛描横線文と櫛刺空羽状文が施文されている。

下層（第4～7層）から出土した土器はいずれも破片で、形態が分かることはない。（52-3, 4）は、弥生時代中期前半の条痕文系上器である。また、中期後半のもの（51-5, 6）、後期前半のもの（52-7～11）が出土している。いずれも造構の掘削時期を決定する資料とはならない。また、SD54の下層の河川跡の第Ⅷ層から出土した土器片で、（51-1）は縄文晩期から弥生前期の土器と考えられ、（51-2）は、弥生中期のものと思われる。

埋設土器

単体で出土している3個体は、いずれも体部下半部に最大径を持つ下彫れ形状のもので、短い口縁部がつく。（54-1）は、板ナデ調整が顕著に施され、（54-2）は、磨き調整。（54-3）は、幅の広いハケで施文してあるなど3者3様であるが、黒っぽい胎土などから、いずれも弥生時代中期後半の長床期の古い時期に比定できると思われる。

以上、主な遺構について出土土器を概観してきたが、古式土器を数点出土している方形周溝墓や混入が多いSD54上層の土器では、積極的な時期認定は難しい。しかし、SD50とSD54中層出土の上器については、やや時期的に限定された様相を感じさせる要素がみられる。そこで、SD50とSD54中層出土の上器にSD54上層出土のものから明らかに古墳時代のものと判断されるものを除き、時期を考えるために多少の補足をしたい。

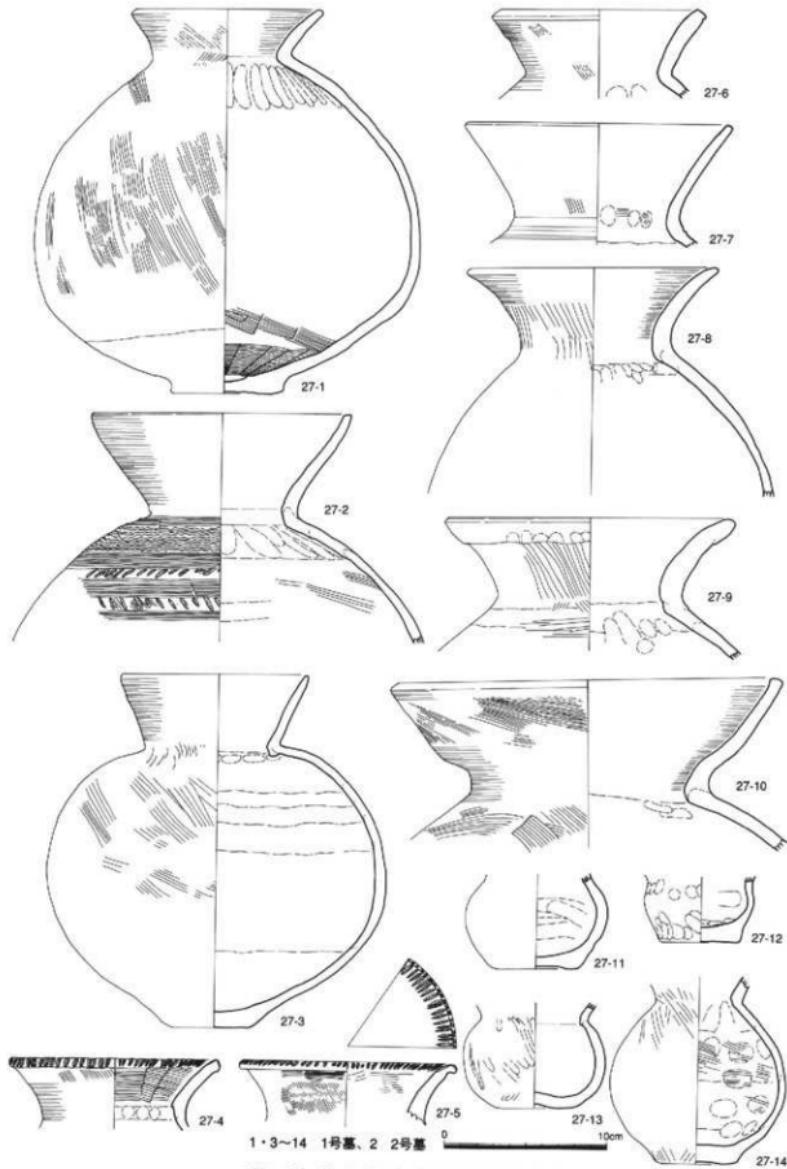
梶子謹の報告書（鈴木1991）では、伊場様式を古と新の二つの段階に分け、新様式を欠山様式の前段階に位置づけている。この報告書では、伊場様式から欠山様式に至る両期を内湾口縁高坏（欠山様式の高坏）や瓢壺や長頸瓢壺の出現と、いろいろな形式のものに認められる内湾化傾向、そしてII唇部の横ナデと内傾面処理の成立に求めている。この欠山様式も3つの小様式に分けられている。

壺の口縁部の形態を見ていくと、SD50では、内湾II縁部を持つものが11%、SD54上層で37.5%、中層では0%となっている。また、II唇部端部に明確な内斜面（内傾）をつくるものは、3つともそれぞれ1、2、1個体となっているが、口唇部に横ナデを施すものは多く端部を水平面にするか丸く取めるものを考慮するとそれぞれ50%、60%、50%と比率が増えてくる。折り返し口縁の壺と複合口縁の壺では、はっきりとした形式の認定ができないため、これらが多いSD54中層でははっきりとしないが、体部の形態などからも欠山様式への移行を伺うことができよう。

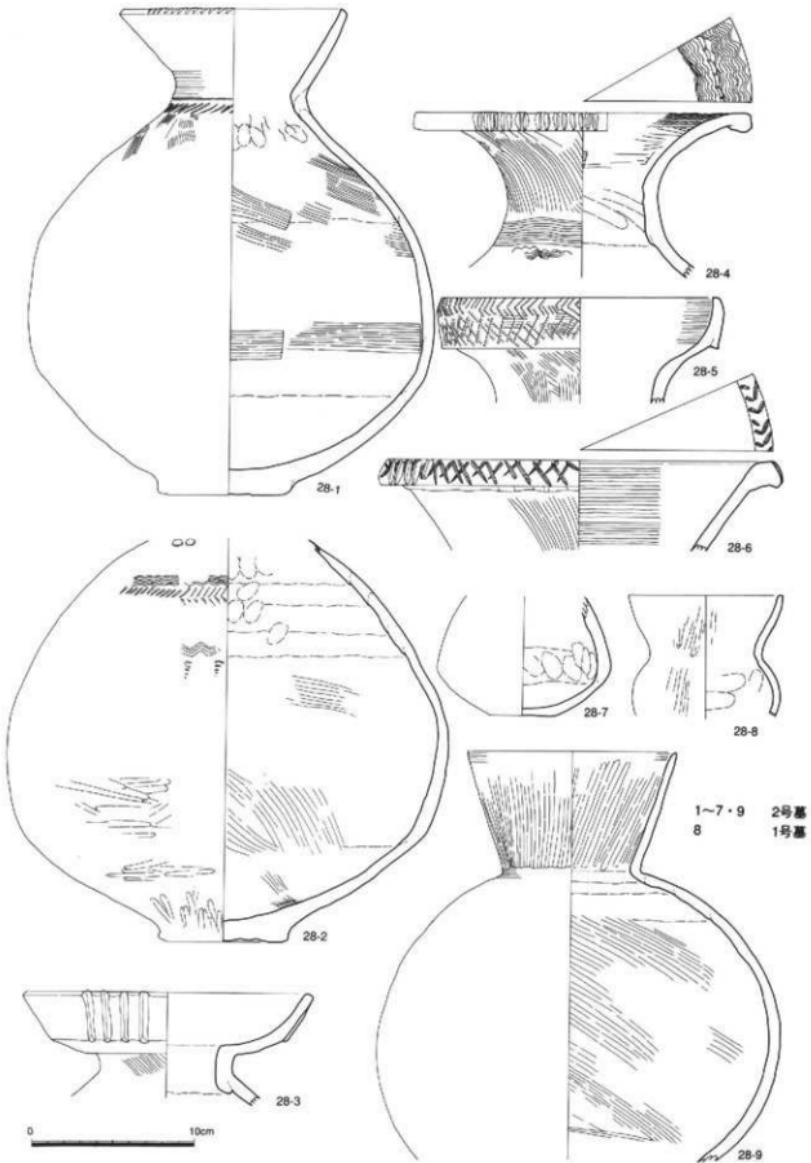
次に高坏であるが、坏部と脚部の内湾傾向=欠山様式と捉えるのならば、SD50、SD54上・中層全てが欠山期に含めることができる。しかし、欠山様式の高坏を多く出土しているSD54上層の高坏も典型的な特徴を兼ね備えているわけではなく、口唇部の処理、坏部の内湾度等に前段階の名残がみられる。SD50、SD54中層出土のものでは、特に脚部の内湾化が進むが坏部が外反するなどアンバランスな構成が目立つ。

また、前段階の型式である長頸壺、装飾鉢、片口鉢が残存しており、欠山様式のメルクマールである瓢壺がまだ出現しておらず、口縁部が長く伸びだし、内湾化傾向が始まった段階の壺・鉢がみられる。

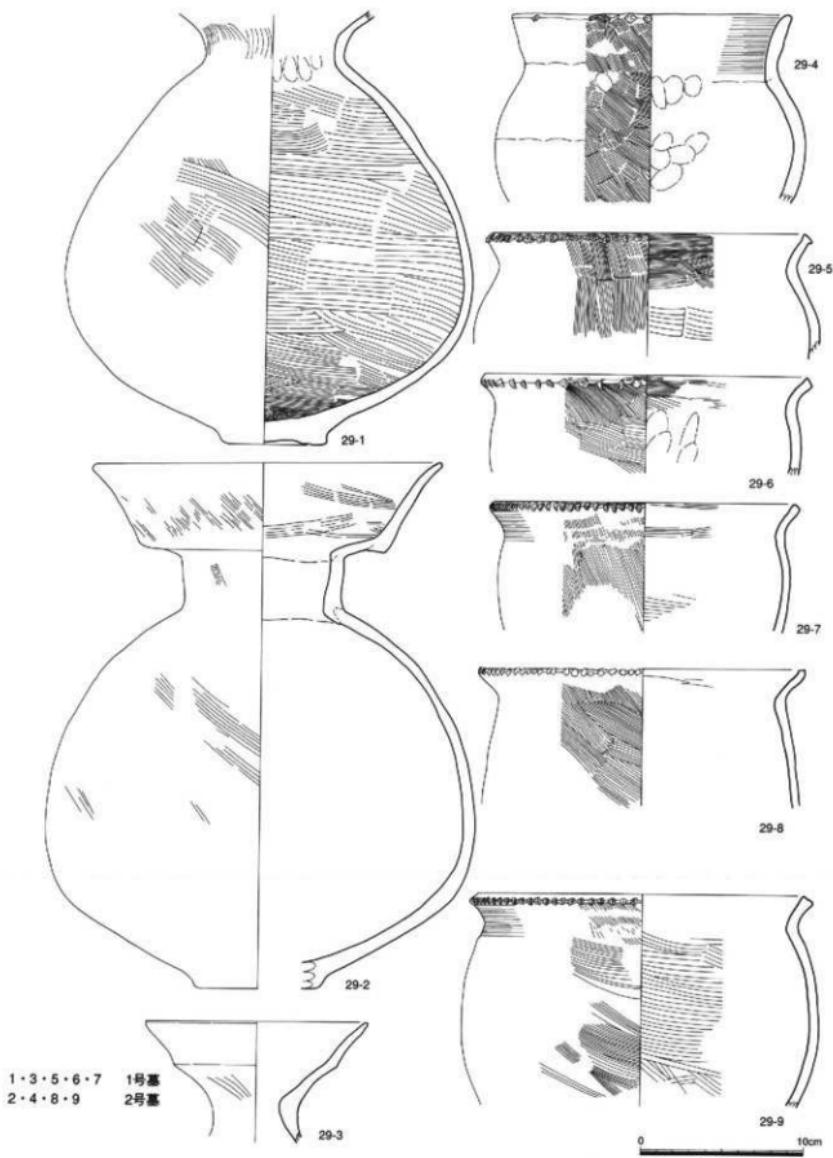
先にも触れたようにSD54上層の上器は、混入も多くよい資料とは言えないが、前段階の残存形態が多くみられる点と手法にも古い要素が残っている点ではSD50、SD54中層と共通している。また、一応統計値を出したSD50とSD54の器種別構成比率も、高坏の比率が少ないものはすでに知られている浜松市椿野遺跡1982溝・三和町遺跡の統計値と似ている。これらの点からも祝田遺跡の一つの盛期を伊場新様式から欠山様式への移行段階、強いて言えば欠山様式の占い段階に位置づけることができると思われる。



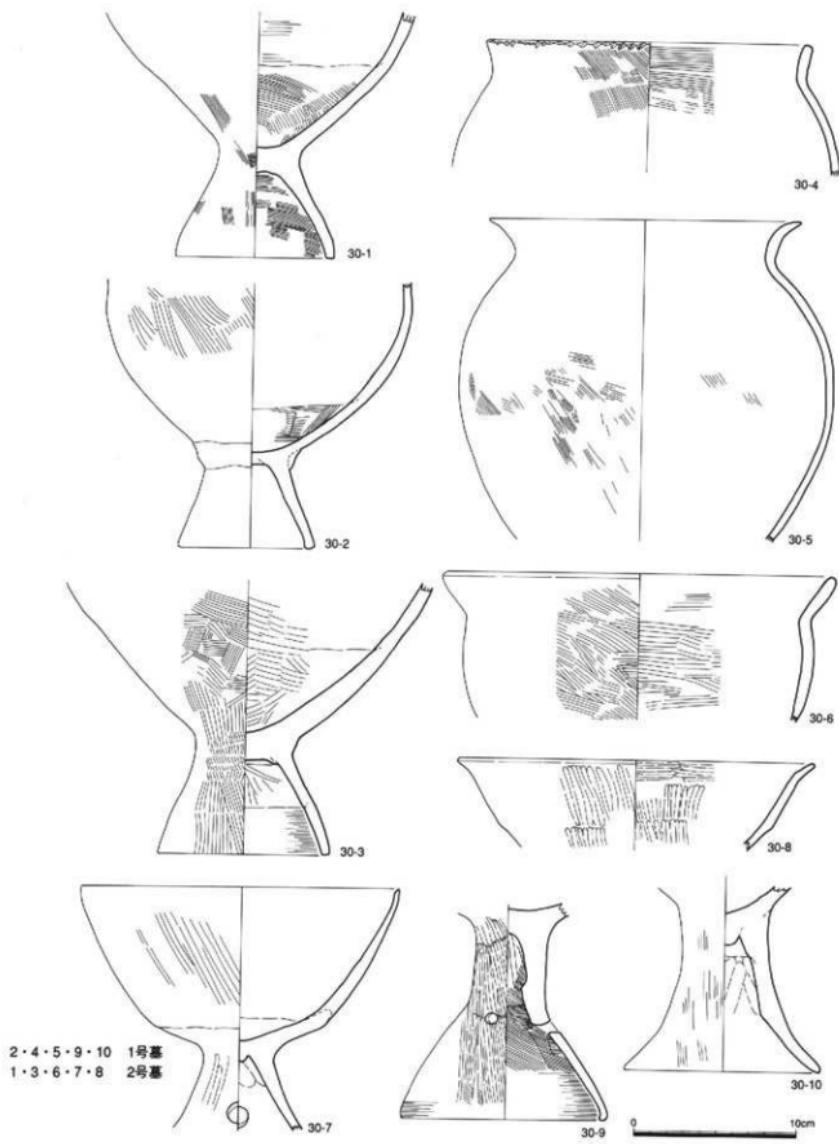
第27図 弥生時代方形周溝基出土土器実測図1



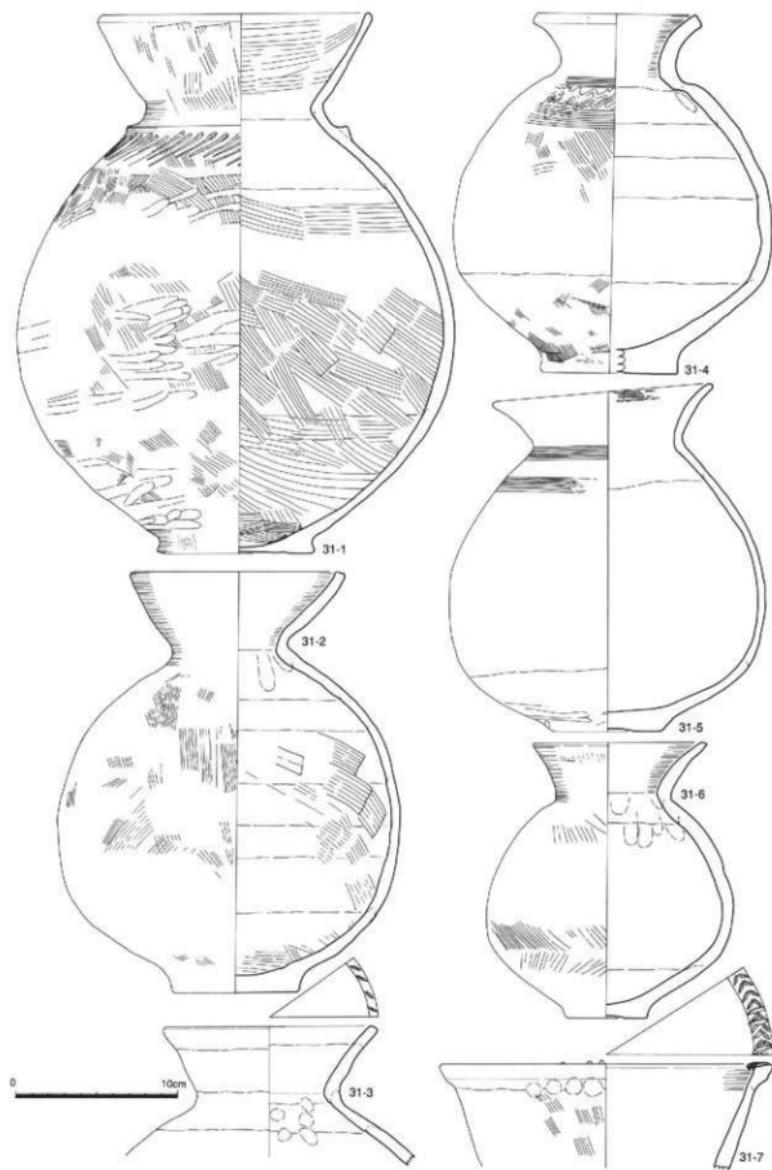
第28図 弥生時代方形周溝墓出土土器実測図2



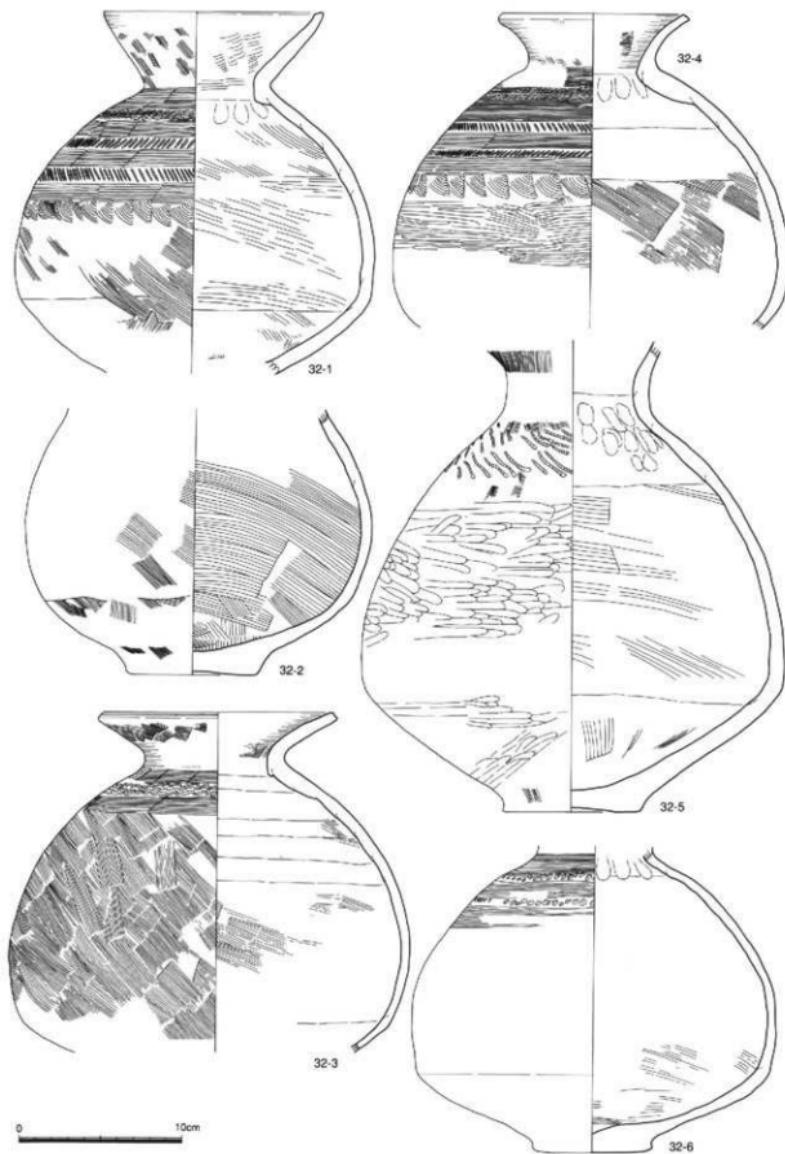
第29図 弥生時代方形周溝墓出土土器実測図3



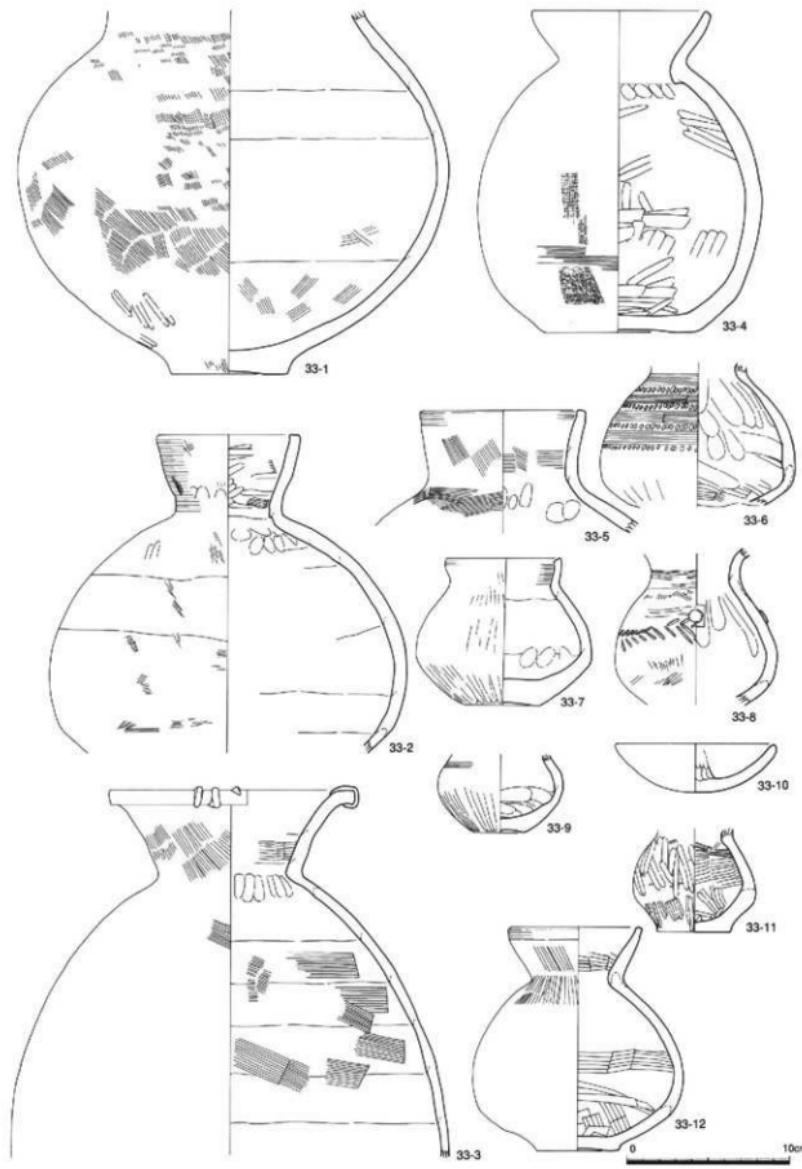
第30図 弥生時代方形周溝墓出土土器実測図4



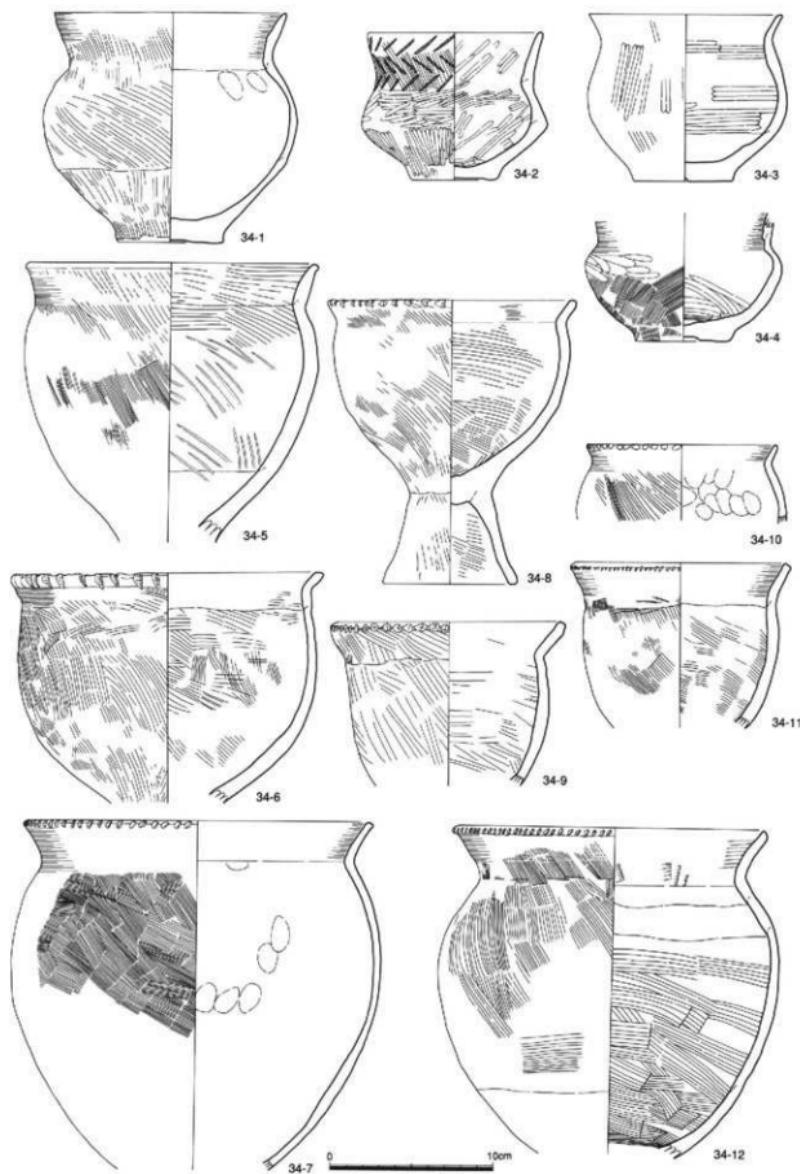
第31図 弥生時代溝（SD50）出土土器実測図1



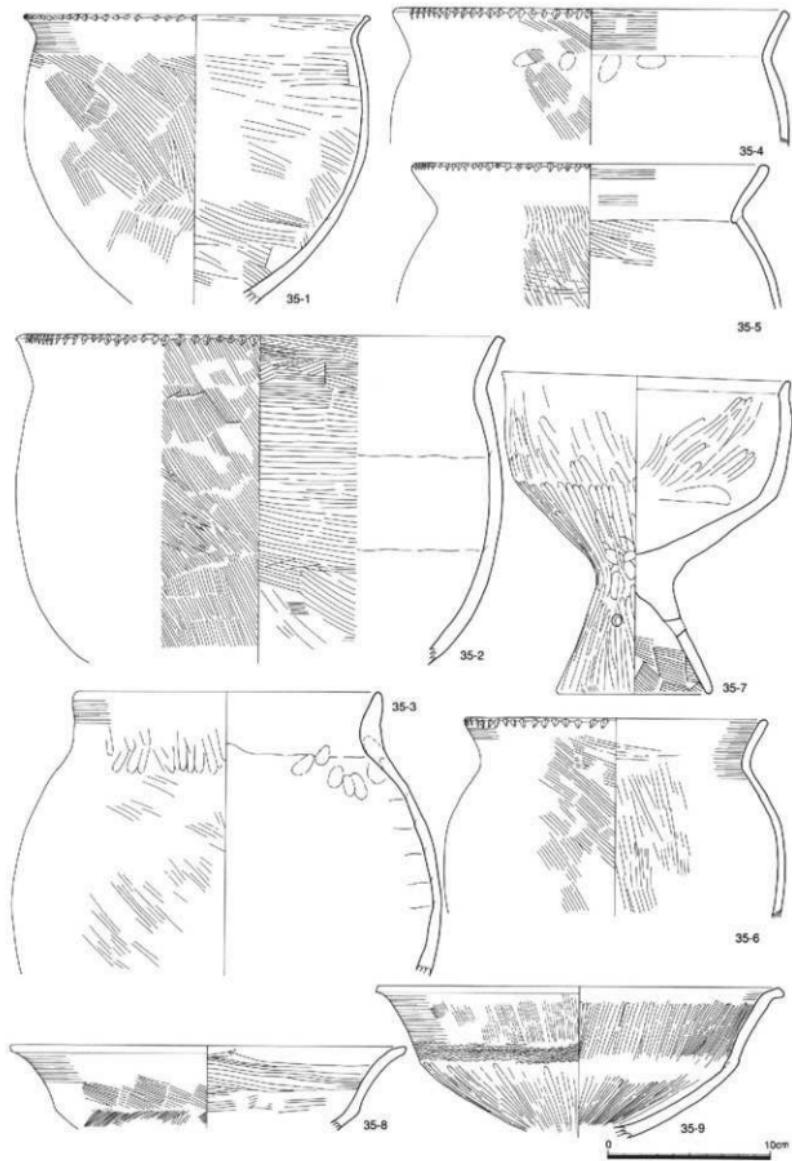
第32図 弥生時代溝（SD50）出土土器実測図2



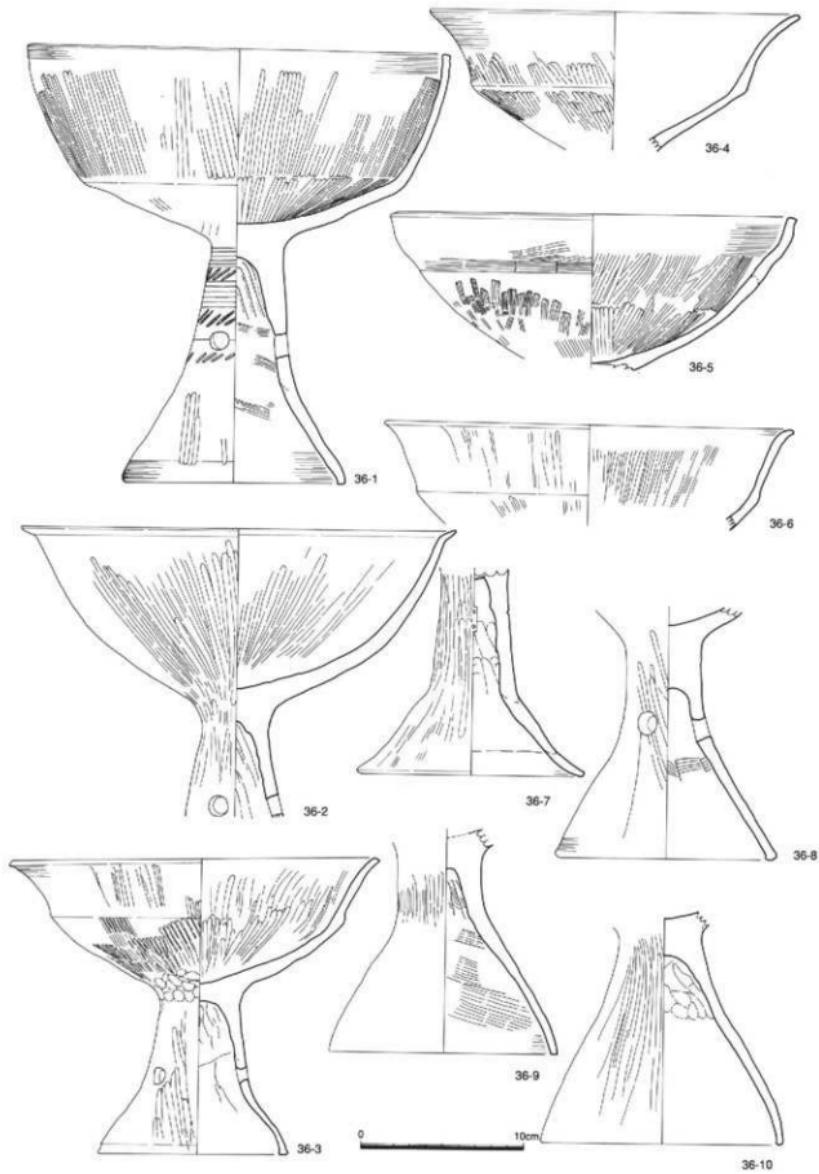
第33図 弥生時代溝（SD50）出土土器実測図3



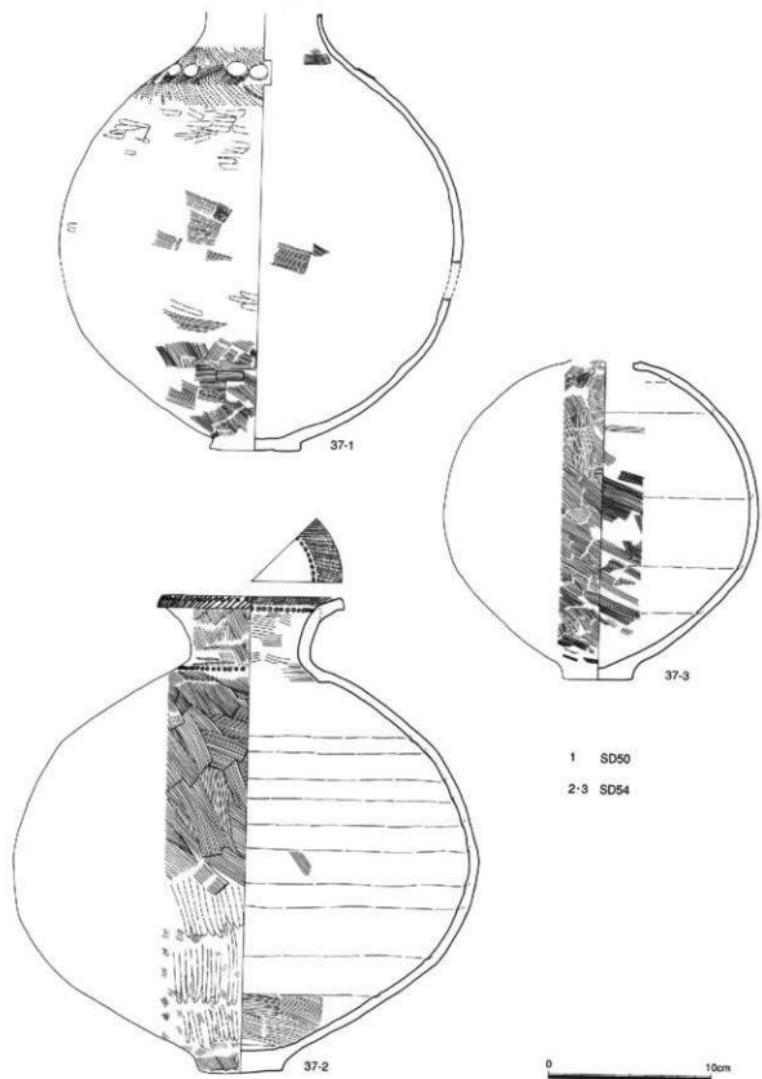
第34図 弥生時代溝（SD50）出土土器実測図4



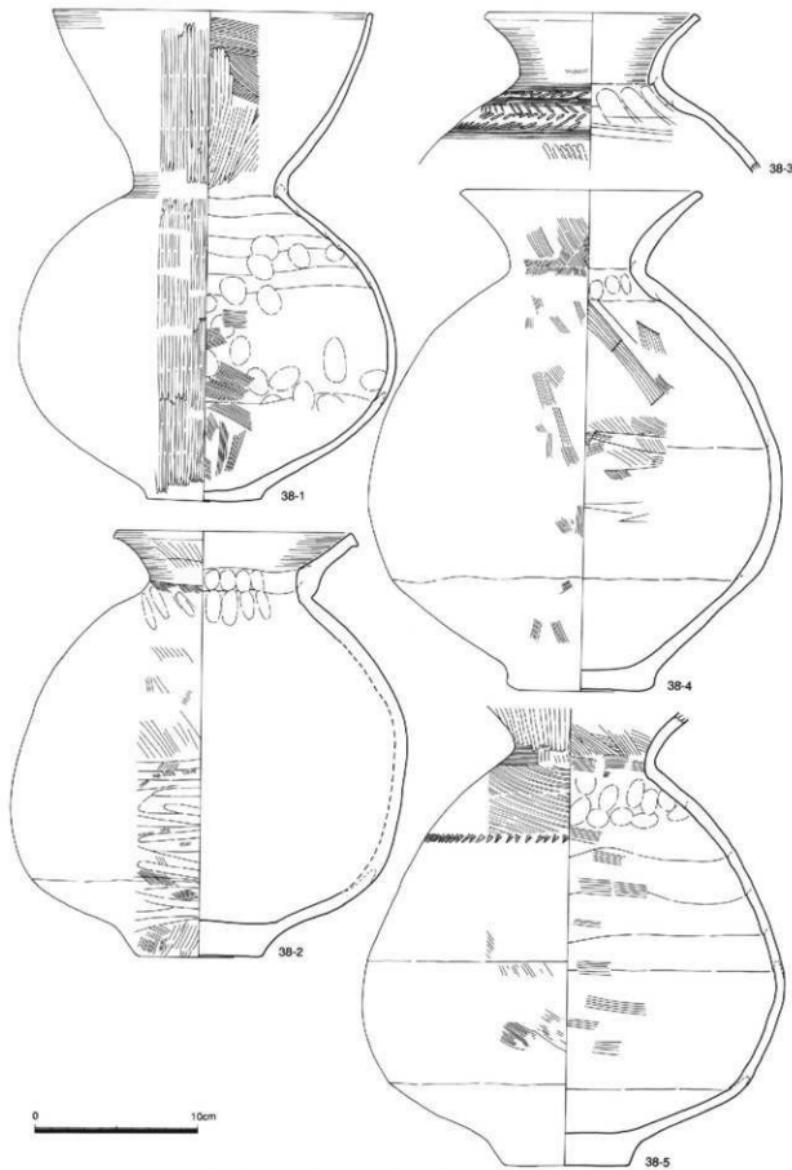
第35図 弥生時代溝（SD50）出土土器実測図5



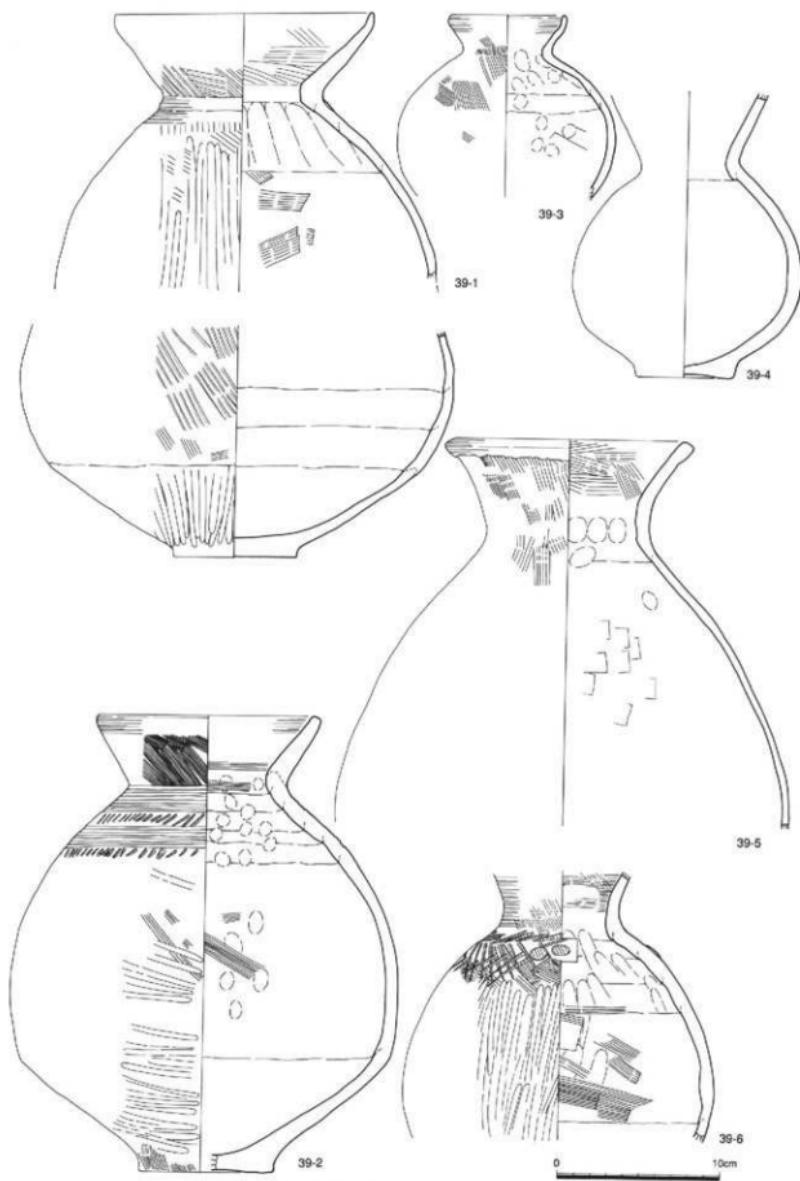
第36図 弥生時代溝（SD50）出土土器実測図6



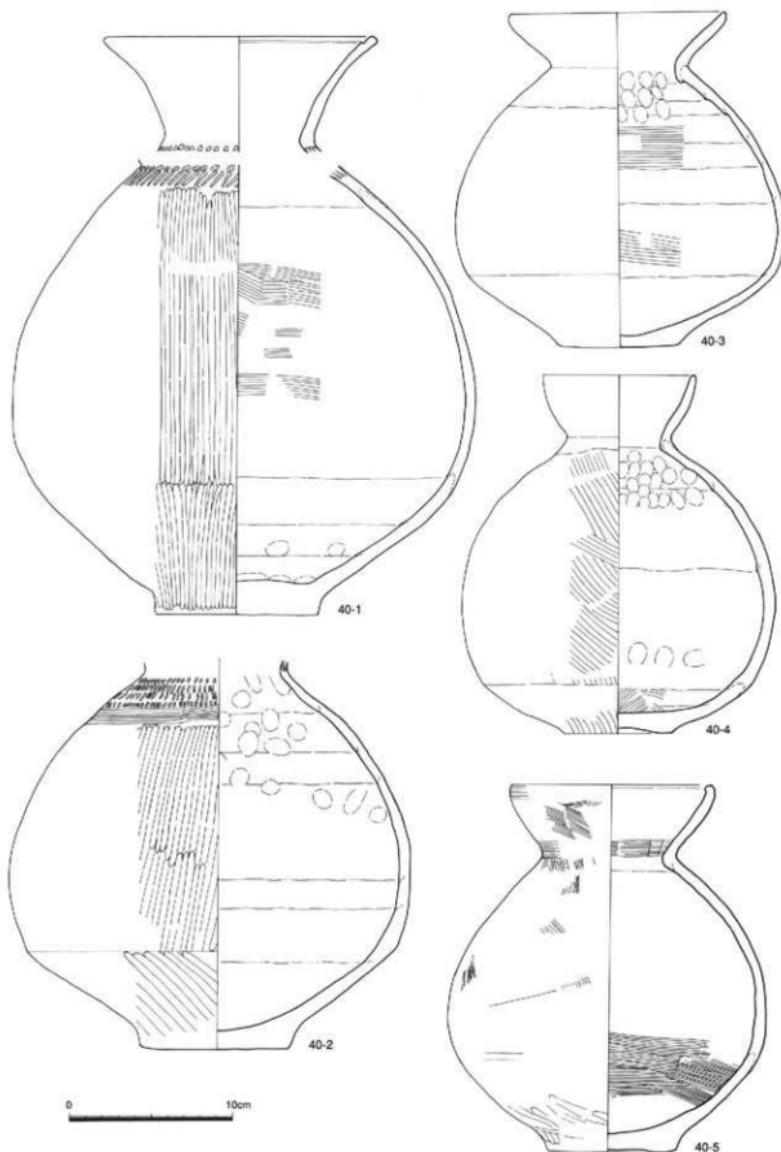
第37図 弥生時代溝（SD50・SD54）出土土器実測図



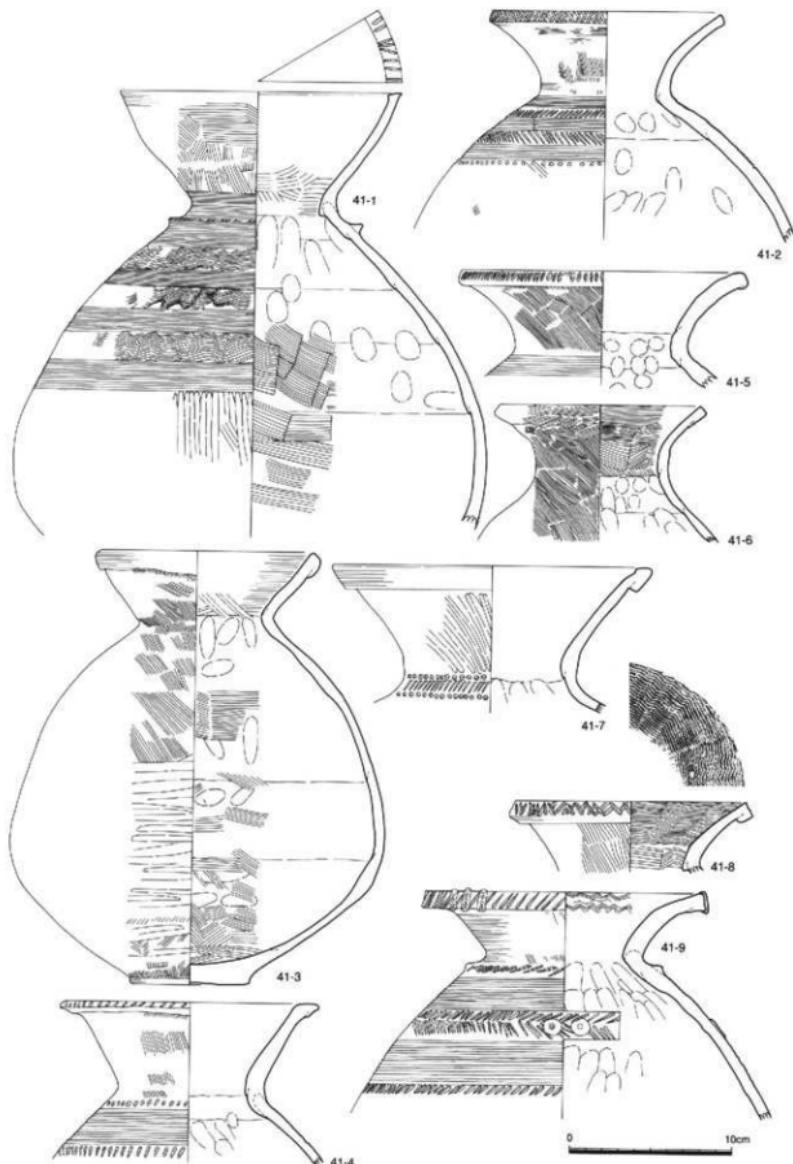
第38図 弥生時代溝（SD54上層）出土土器実測図1



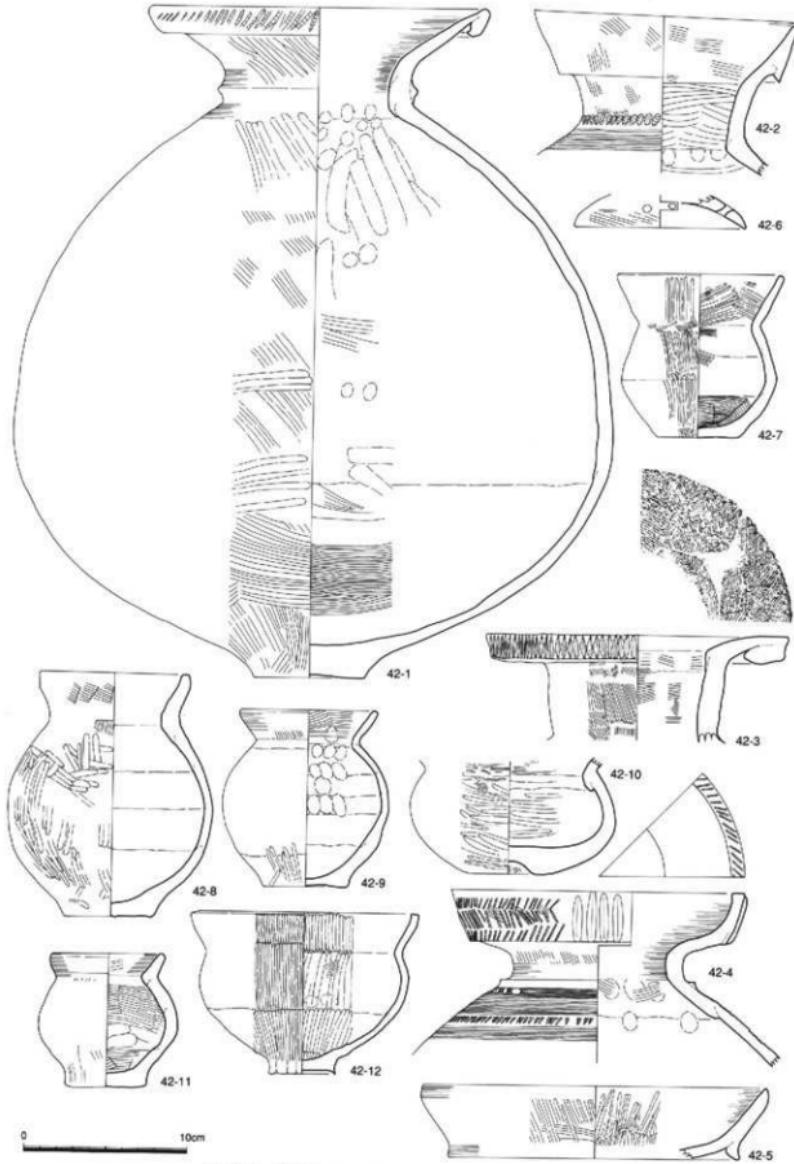
第39図 弥生時代溝（SD54上層）出土土器実測図2



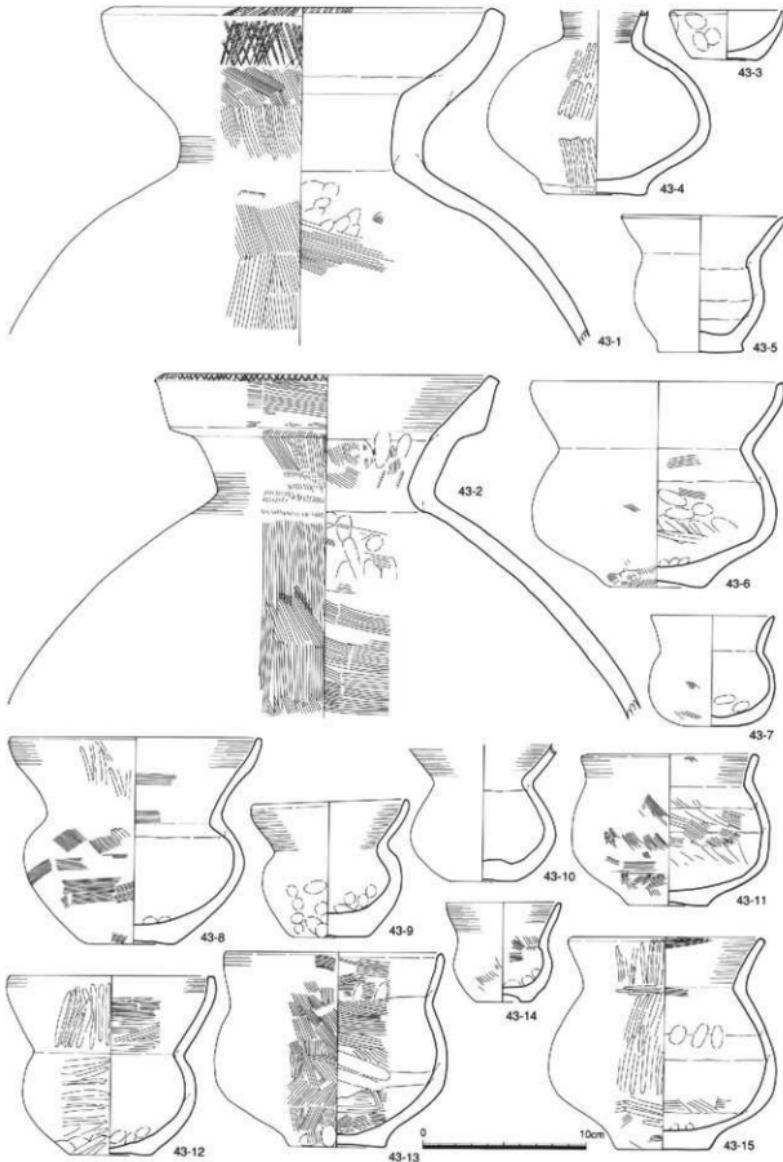
第40図 弥生時代溝（SD54上層）出土土器実測図3



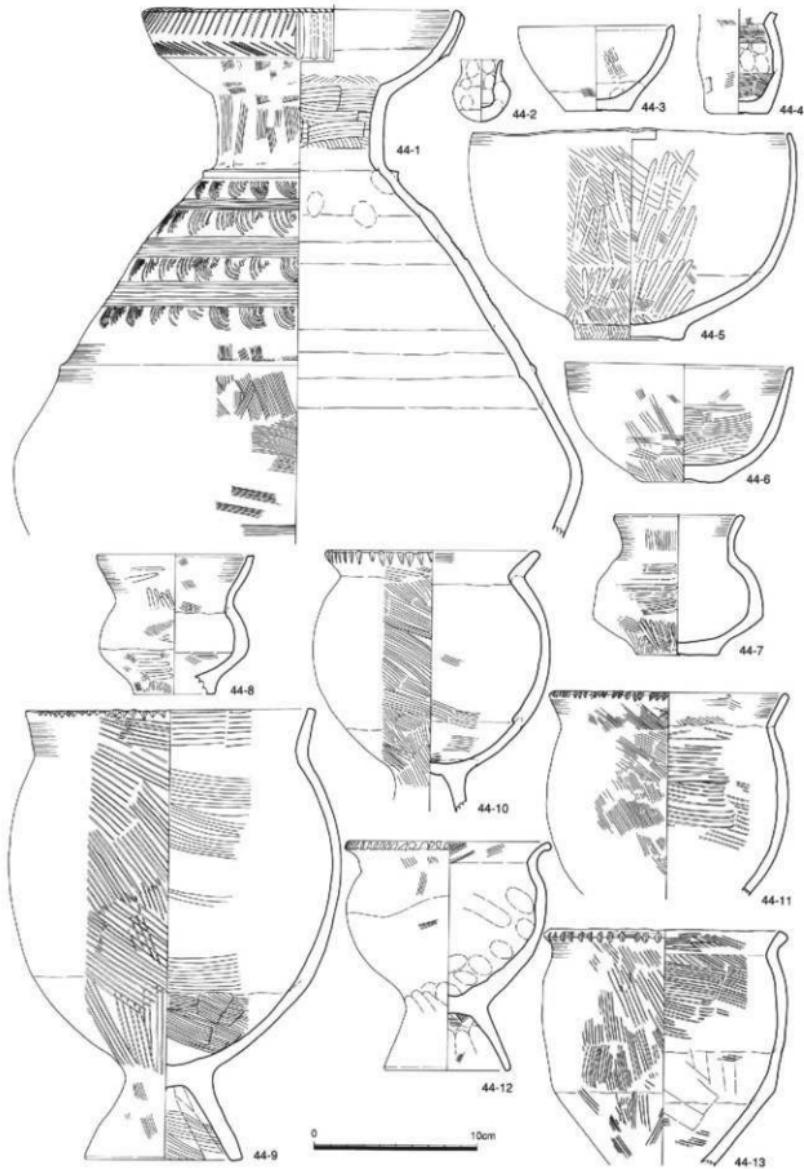
第41図 弥生時代溝（SD54上層）出土土器実測図4



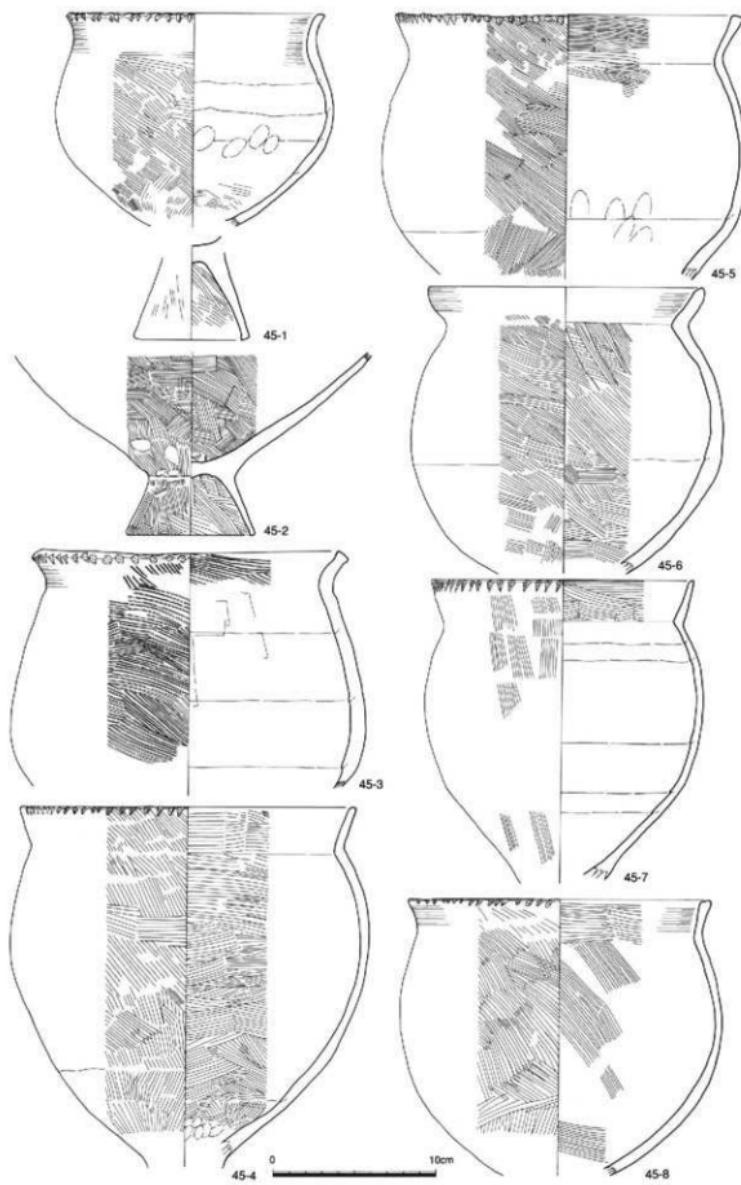
第42図 弥生時代溝（SD54上層）出土土器実測図5



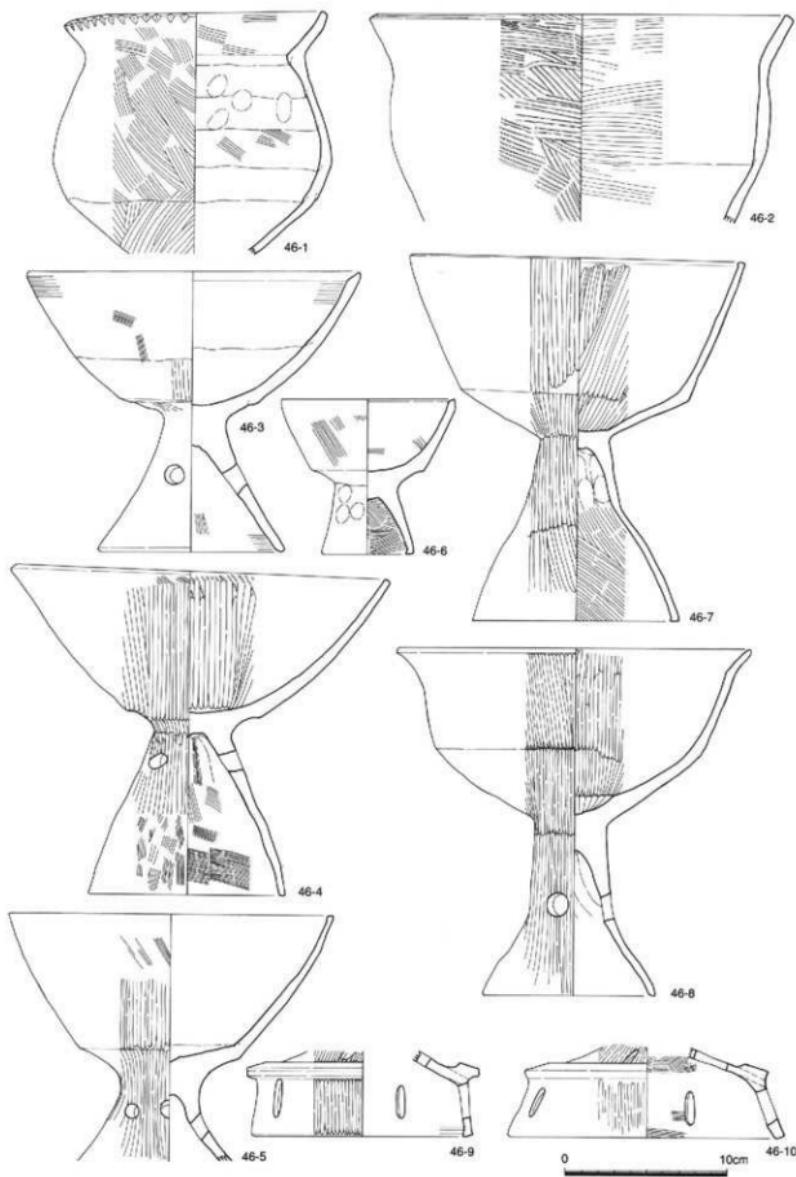
第43図 弥生時代溝（SD54上層）出土土器実測図6



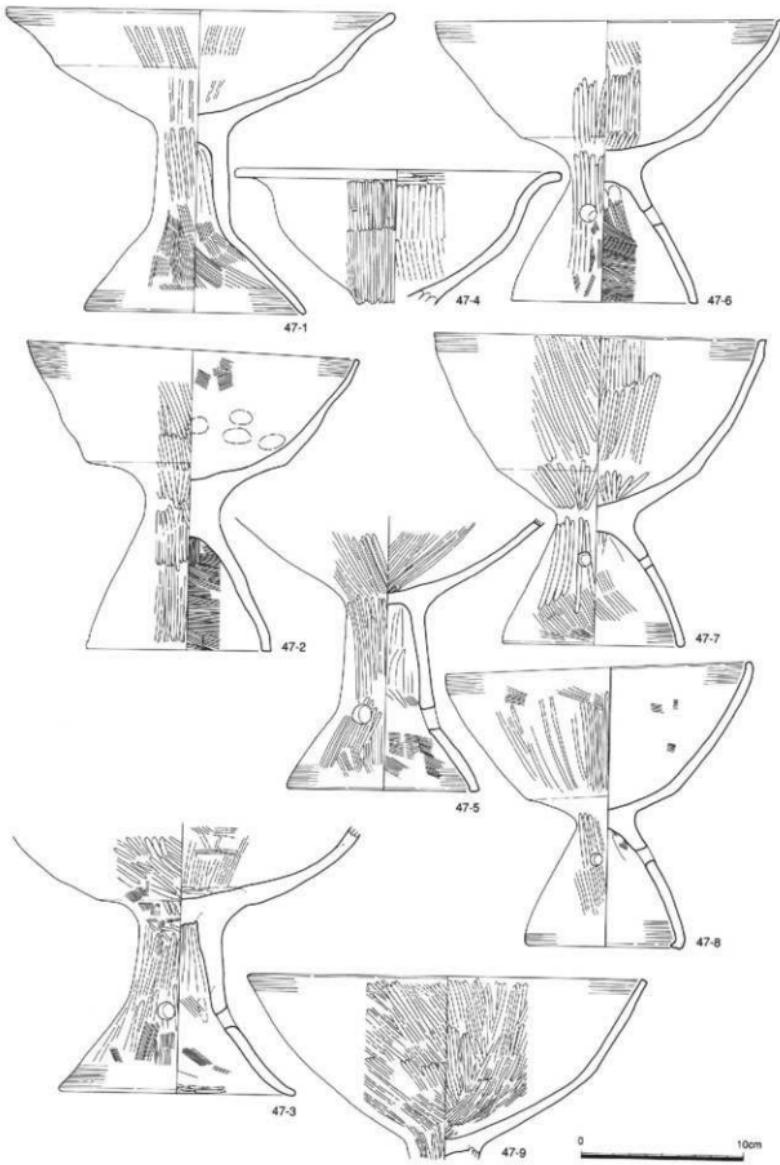
第44図 弥生時代溝（SD54上層）出土土器実測図7



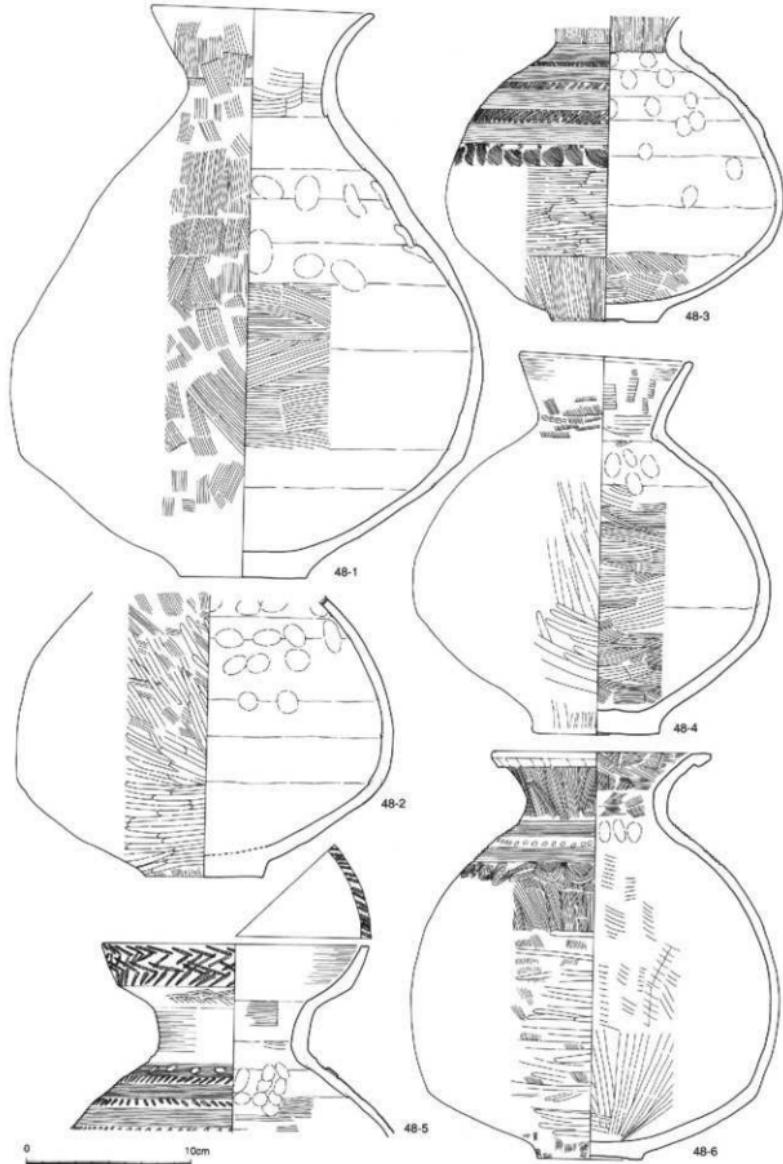
第45図 弥生時代溝（SD54上層）出土土器実測図8



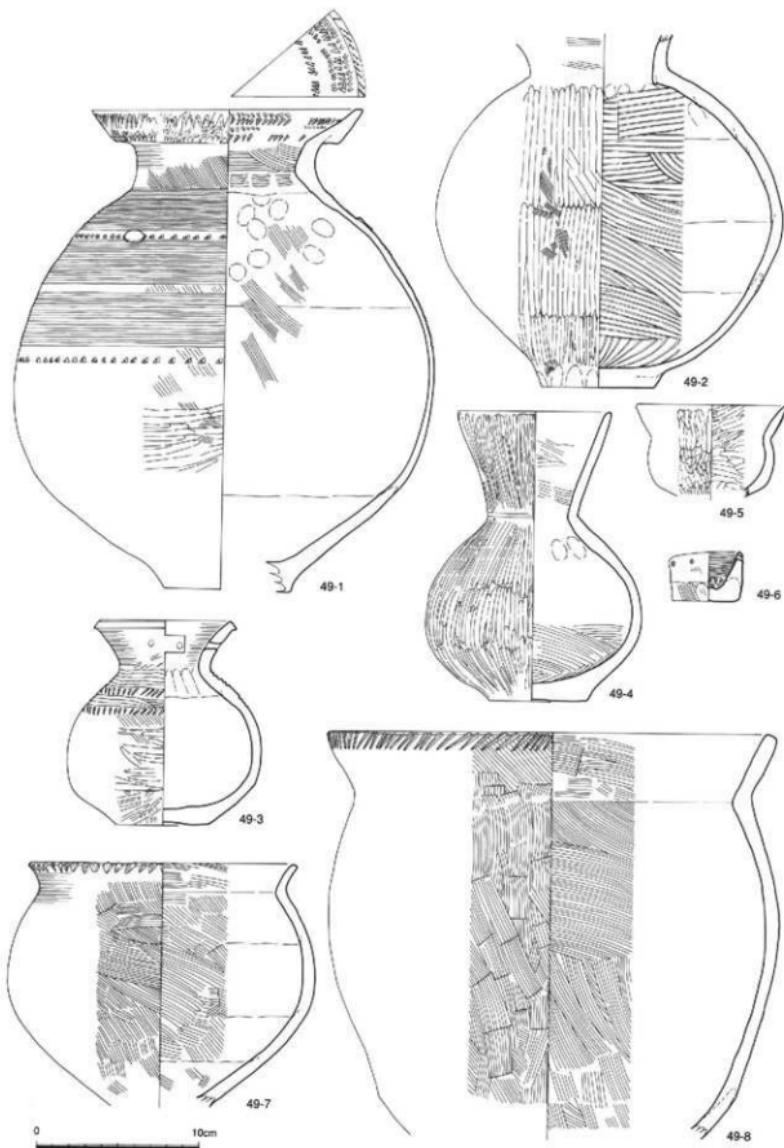
第46図 弥生時代溝（SD54上層）出土土器実測図9



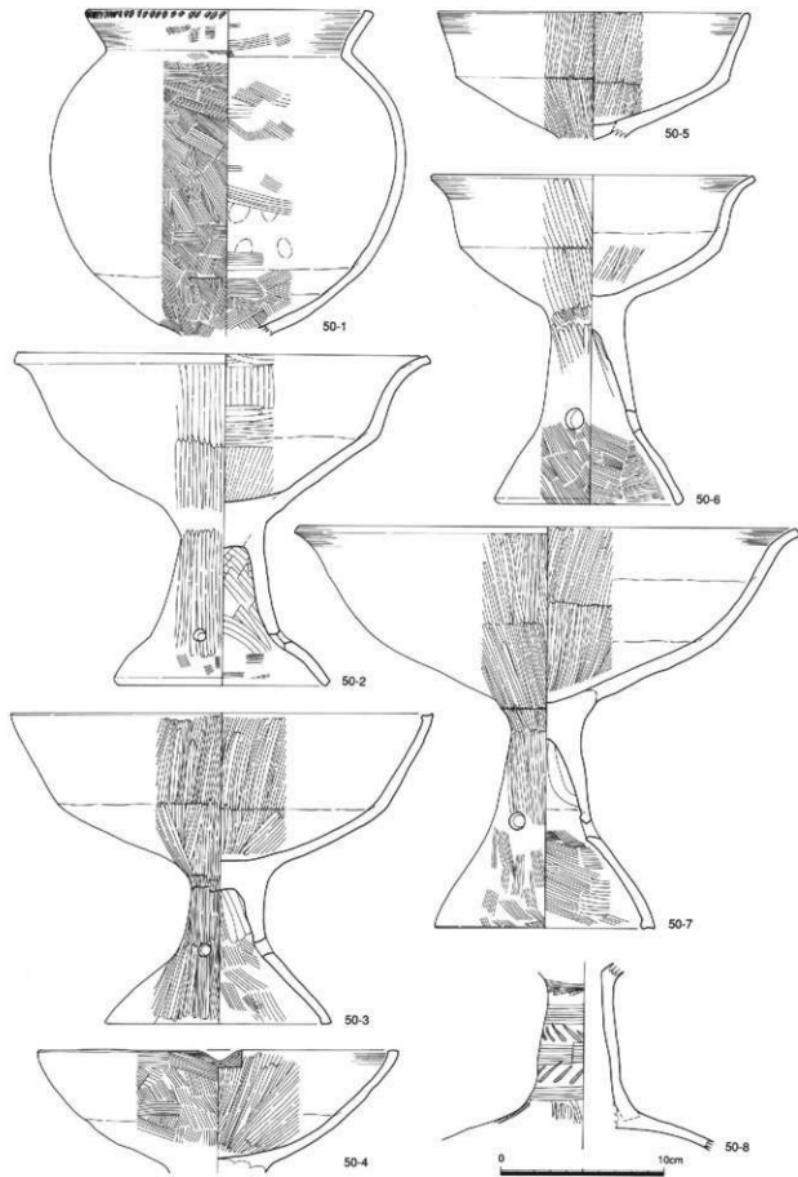
第47図 弥生時代溝（SD54上層）出土土器実測図10



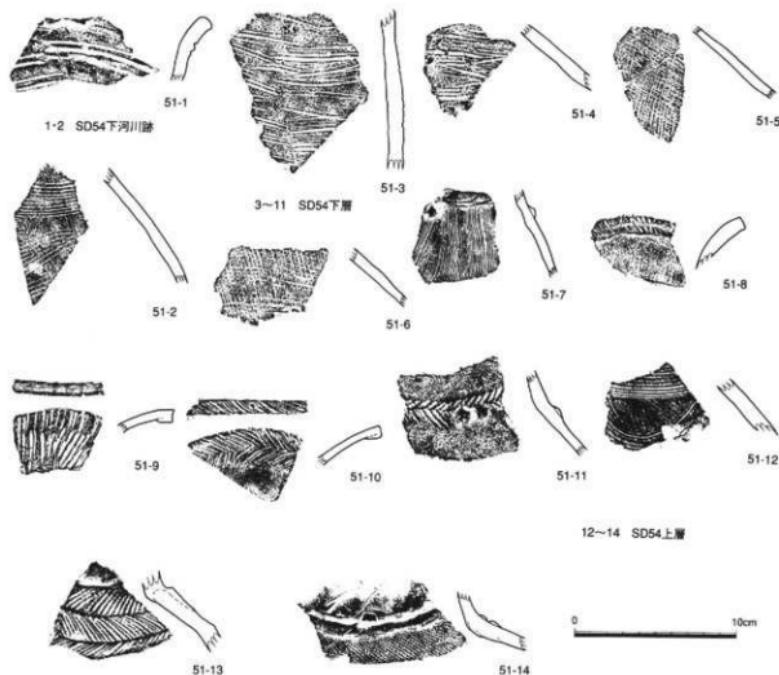
第48図 弥生時代溝（SD54中層）出土土器実測図1



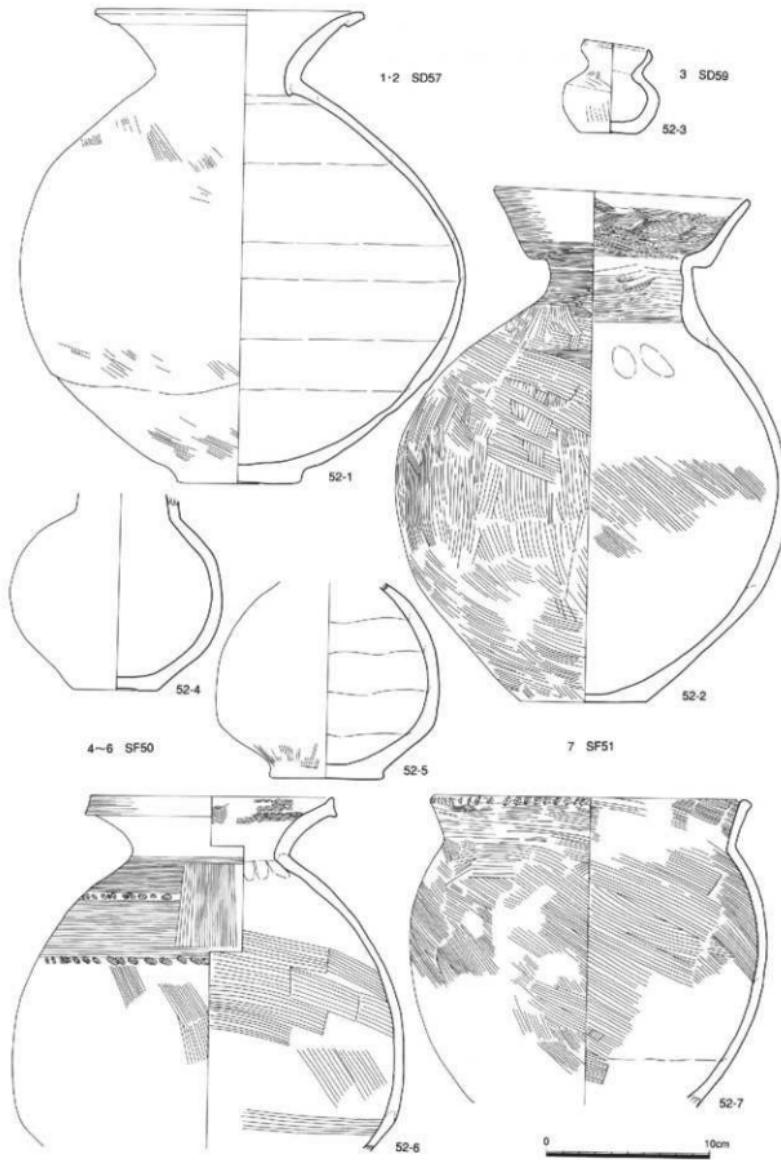
第49図 弥生時代溝（SD54中層）出土土器実測図2



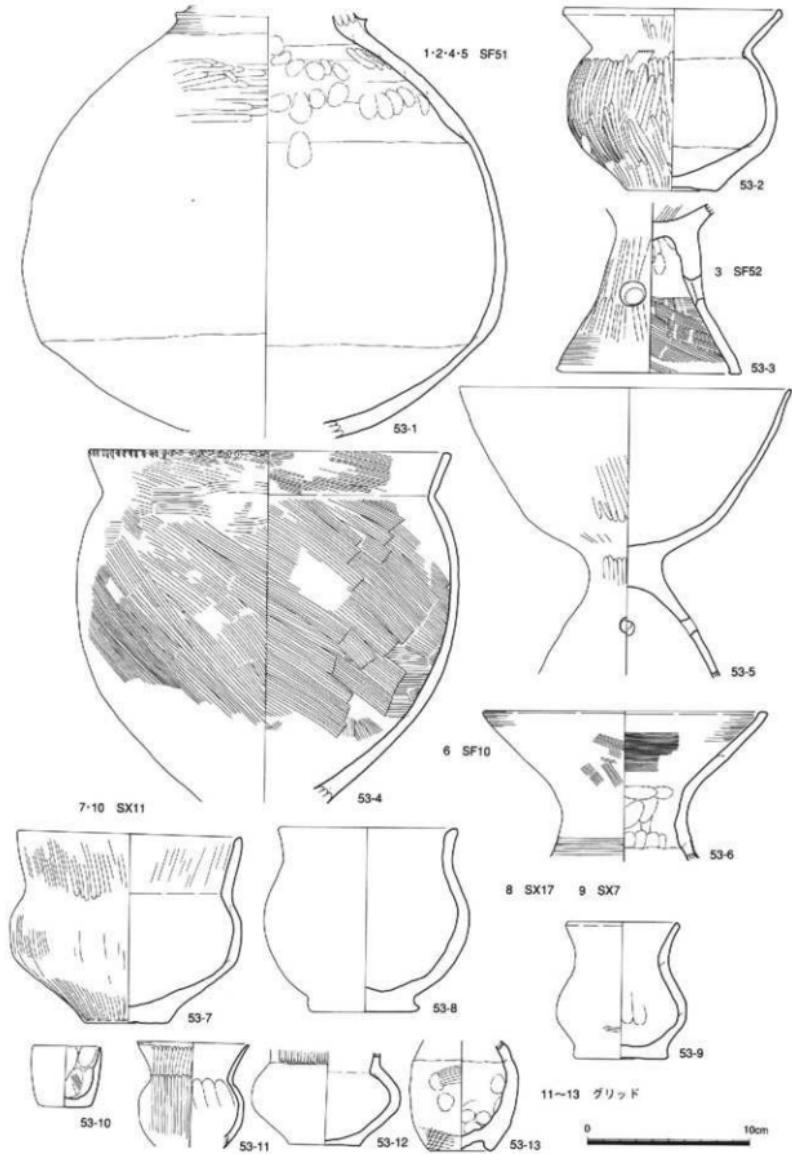
第50図 弥生時代溝（SD54中層）出土土器実測図3



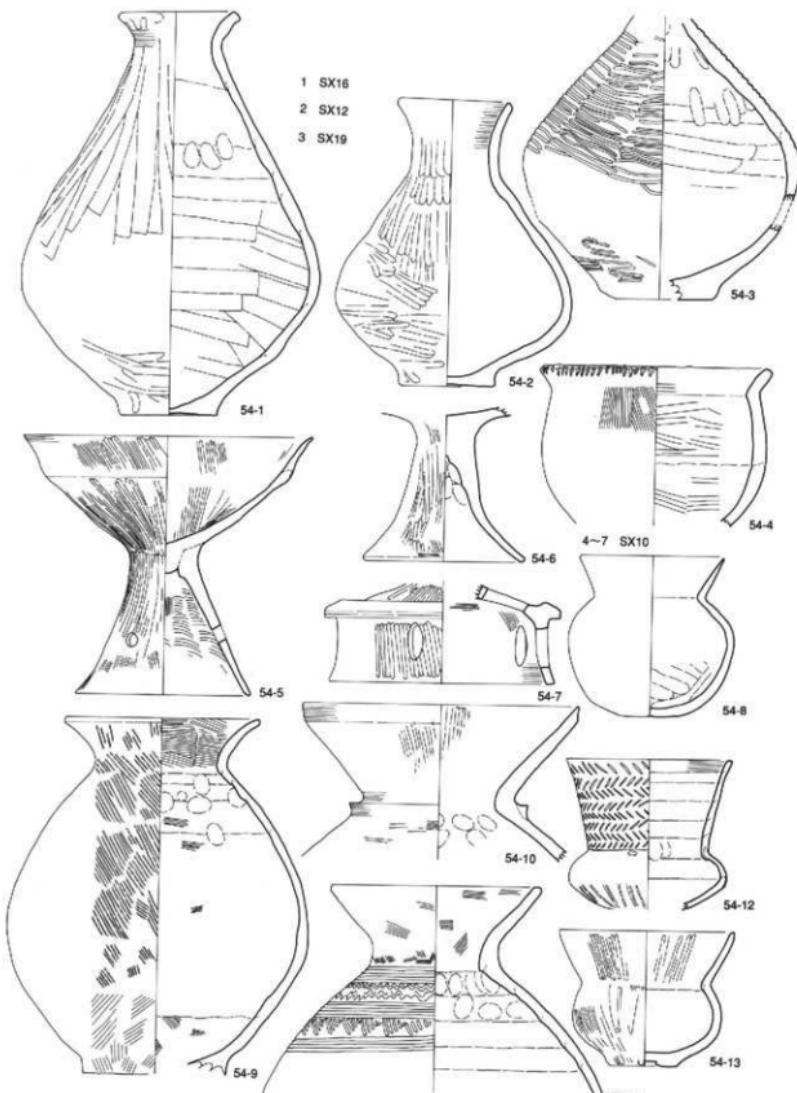
第51図 弥生時代溝（SD54）出土土器拓影



第52図 弥生時代溝・土坑出土土器実測図



第53図 弥生時代土坑・グリッド出土土器実測図1



8~13 グリッド

0 10cm

第54図 弥生時代土坑・グリッド出土土器実測図2

第8表 弥生土器観察表①

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	神田図版 写真図版 出土位置 (グリッド)	口径 高 底 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎 色 調	備考
弥生土器 壺	27-1 21-27-1 2号墓	11.2 23.6 23.7 6.9	口縁部はくの字に外反し、腹部を丸く收める。縁部を呈し、底内径は、腹部中央よりやや下にくる。	口縁部は、内外面ともハケの後模ナデ。腹部は、ハケ溝型後選きか？底部に本業留有り。	良／黒褐色あり 帯、白、灰色、系の 小煙合む／ 明茶色	
弥生土器 壺	27-2 (14.1) 1号墓	15.6	口縁部は、内湾しながら立ち上がり、腹部に平坦面をつくる。	口縁部は、内外面ともハケの後模ナデ。腹部に、縁により施文、施縫文、後状文、羽状文の組み合わせ。	良／黒褐色あり 帯、長石、白雲母、 灰白色子含む／ 褐色	
弥生土器 壺	27-3 21-27-03 2号墓	11.3 21.7 20.8 5.7	口縁部は、ハの字型に直線的に開き、直面を尖らせる。脣部がやや張り、最大径は腹部中央よりやや上にくる。	口縁部内外面とも横ナデ。腹部は、無いハケの後模ナデ。腹部尚端に施文あり。	良／黒褐色あり 帯、長石、白雲母、 灰白色子含む／ 明茶色	
弥生土器 壺	27-4 2号墓 (4.1)	12.5	口縁部は、やや外反しながら立ち上がり、縁部は外腹面をつくる。	口縁部外腹面は、ハケ後ナデ横巻内面は、施縫状にハケを施し、口昇部にハケ工具により、跡目をつける。	良／ 帶、長石、白雲母、 灰白色子含む／ 浅黄褐色	口縁部残存
弥生土器 壺	27-5 (13.3) (3.7) 2号墓	13.3	口縁部は、外反しながら立ち上がり、腹部をやや外側に引き出し、折り返し面をつくる。	口縁部底部の折り返し面に凹により羽状に施文を施す。口縁部は、内面と外腹とも無いハケの後ナデ調整。	良／ 帯、長石、白色粒子 含む／ 褐色	口縁部1/2 残存
弥生土器 壺	27-6 (12.1) (5.4) 2号墓	12.1 5.4	口縁部はくの字に外反しながら立ち上がり、腹部は外側する半圓面をつくる。厚底が激しい。	口縁部外腹面は、斜めのハケの後模ナデ。内面は、厚底が激しく板照不能。	良／ 帯、赤色、白色粒子 含む／ 褐色	口縁部1/2 残存
弥生土器 壺	27-7 2号墓 (15.9) 7.3	15.9	口縁部は、外反しながら立ち上がり、縁部はナデによりやや丸い半圓面をつくる。	縁部に施縫横巻文を施す。縁部の摩耗が激しく、顯著小孔。	良／ 帯、長石、灰白色小煙 合む／ 浅黄褐色	口縁部1/4 残存
弥生土器 壺	27-8 21-27-8 2号墓	15.0 14.0	口縁部は、やや開き気味に外反し、縁部を丸く收める。縁部はあまり強らずに緩やかに腹部に移行する。	口縁部は、無いハケの後、ナデ調整。	良／ 帶、長石、赤チャート、 灰白色子含む／ 浅黄褐色	口縁部1/3 残存
弥生土器 壺	27-9 2号墓 (17.3) (8.6)	17.3 8.6	口縁部は、外反しながら立ち上がり、腹部をやや尖らせながら折り返す。	口縁部外腹面は、粗いハケが残り折り返し部は、赤で押されて変形した後、ナデ。	良／ 帶、長石、灰白色小煙 合む／ 浅黄褐色	口縁部1/2 残存
弥生土器 壺	27-10 22-27-10 1号墓 (10.6)	23.0	口縁部は、腹部で複合口縁気味に外側に振り出し、内湾しながら立ち上がり、縁部は、外腹面をつくる。	口縁部は、強いナデにより平面化を施す。口縁部内外面とも斜めのハケの後、堆ナデ調整。	良／ 帶、長石、赤チャート、 灰白色小煙合む／ 明褐色	口縁部～縫 縫残存
弥生土器 小壺	27-11 2号墓 (5.8) 8.8 5.4	5.8	口縁部は、欠損しているが、腹部は、球側を呈し、底部は、輪底底で、中火薙がくぼむ。	縫面の摩耗が激しいため、済帶不規則。	良／ 帯、白、灰白色小煙合 む／ 後褐色	
弥生土器 小壺	27-12 22-27-12 2号墓 (4.1) 6.8 4.9	4.1	口縁部は、欠損しているが、腹部が鉢状をしている。最大径は、やや上位にくる。底部は、中央部に凹みを持つ。	手縫ね底型。内外面ともに指痕压痕が残る。	良／黒褐色あり 帯、灰石小煙、白雲母、 赤チャート、灰白色子含む／ 暗褐色	腹部～底部 残存
弥生土器 小壺	27-13 22-27-13 2号墓 (6.4)	6.4	口縁部は欠損しているが、底部は球形を呈し、底部は、中央部を押さえて輪底底になる。	底部外腹面は、擦きを施す。内面は、ナデ調整。	良／ 帶、長石、白雲母、 赤チャート、灰白色子含む／ 深褐色	
弥生土器 小壺	27-14 2号墓 (11.5) 10.8 (5.0)	11.5 10.8 5.0	腹部は、球形を呈し、最大径は、中位にくる。底部中央はやや凹む。	縫面の摩耗が激しく済帶不規則。底部内面はナデ。	良／ 帶、当、淡赤、褐色 子含む／ 浅黄褐色	

第8表 弥生土器観察表②

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	口径 底径 (グリッド)	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎土 色調	備考	
弥生土器 壺	28-1 21-28-1 2号基	13.4 29.8 24.9 8.1	口縁部は、くの字状に外反して直線的に立ち上がり、腹部は、外輪面をつくる。最大径は、肩部の下半にくる。	口唇部は、丁寧なナデにより面取りして、棒状工具により施文する。肩部に棒で道軌跡突文を施す。	良／ 青、長石、石英、赤 チヤート、灰色小穢合む／明粒白色	口縁部、肩部 1/2、底部 残存
弥生土器 壺	28-2 2号基	24.6 6.8	口縁部は欠損しているが、胴部は、やや錐状であるが下半部に最大径がくるいちちく型を呈する。	表面に2個一單位の円形浮文がつく。 摩滅が激しいが、薄により波状文、羽状文、崩形文を施す。	良／ やや密、白、灰色、 茶色小穢合む／ 淡茶白色	肩部3/4 残存
弥生土器 壺	28-3 2号基	(17.7) 6.9	複合口縁で、端部は丸く收める。	器面は底部のため詳細不明。 口縁部に、4本または5本の棒状浮文を張り付ける。	良／ やや密、長石、灰色 褐色粒子、小穢合む／ 黄褐色	口縁部1/3 残存
弥生土器 壺	28-4 21-28-4 2号基	20.4 10.3	細長く立ち上がる頭部から大きくなっただけに開く口縁部を持ち、腹部は直正方形に折り返す。	折り返し面には、棒状工具により、肩 み付をつけ口縁部内面には波状文を施す。底部には、9本の棒状文を施す。	良／ やや密、長石、灰色 茶小穢、青緑合む／ 暗赤褐色	口縁部3/4 残存
弥生土器 壺	28-5 2号基	(17.0) 6.5	複合口縁で唇折部を下に延ばす口縁部は、受け口状に内溝しながら立ち上がる。	複合部外面は、ハケ工具により2段に羽状文を施文するが、下段は波状文が重なる。口縁部内面は、ナデ。	良／ 密、長石、黒色、赤 色小穢合む／ 褐色	口縁部1/6 残存
弥生土器 壺	28-6 2号基	(23.5) 5.5	口縁部は、直線的に立ち上がり錐形を方形に折り返す。口径が頗るに比べかなり広がる。	折り返し部内外面にハケ状工具による刺突羽状文を施す。外延には、5個一單位の棒状浮文を張り付ける。	良／ 密、長石、灰色粒子 含む／ 黄褐色	口縁部1/4 残存
弥生土器 壺	28-7 2号基	(7.3) 2.1	口縁部は、欠損しているが、胴部下半に最大径がきて、いちちく型に相應する。底部は、平底。	肩部外側は、ナデにより調整? 内面は、指押さえ痕明顯。	良／ 密、長石、赤チヤート、 灰色粒子含む／ 赤褐色	1/2 残存
弥生土器 壺	28-8 1号基	(9.6) 7.4	口縁部は、やや内溝しながらハハの字型に開く。端部は、平切面をつくる。肩部は、球形を示す。	口縁部胴部とも外側は、ヘラ磨き。 胴部内面は、指ナデ。	良／ 密、長石、黒色粒子 含む／ にぶい褐色	口縁部～ 颈部1/7 残存
弥生土器 壺	28-9 22-28-9 2号基	12.8 25.0 24.5	口縁部は、あまり開かず直線的に立ち上がる。腹部は、傾ナデによりやや尖らせる。肩部は、球形で黒曲面がみられない。	口唇部は、強い指ナデ。外延は泡き 調整。頭部に横ナデ。黒墨1ヶ所 あり。	良／ 密、白、褐色粒子含む／ 明粒褐色	口縁部、肩部 1/2 残存
弥生土器 壺	29-1 21-29-1 1号基	26.6 25.2 6.5	口縁部は、欠損しているが、胴部下半に最大径がくるいちちく型を呈する。底部は、輪形状。	肩部外側は、粗いハケ状横位の磨き が、器面の摩滅が激しく観察不能。 内面は、粗いハケ調整。	良／ やや密、長石、赤チ ヤート、灰色小穢合む／ 暗赤褐色	頭部1/2、 肩部2/3 残存
弥生土器 壺	29-2 22-29-2 2号基	21.2 32.4 (26.4) (7.7)	複合口縁で、口唇部を外反させる。 肩部は、丸く收める。胴部は、下半に最大径がくるいちちく形を呈す。	器面の摩滅が激しく観察不能。 ハケ後密さか？底部に木本痕あり。	良／ 密、長石、石英、 赤チヤート小穢、白 雲母合む／ にぶい黃褐色	1/3 残存
弥生土器 壺	29-3 1号基	(13.5) 7.5	口縁部は、ハハの字型に開くが、中位で 横曲し、口唇部は外反する。底部は、 ナデにより丸く收める。	器面の摩滅が激しく観察不能。 外側にハケ痕がわざかに残る。	良／ 粗、長石、灰色、 褐色小穢、粒子含む／ 褐色	口縁部1/2 残存
弥生土器 壺	29-4 2号基	(16.4) 11.5	口縁部は、やや肥厚させながら外反する。胴部は、上半部に最大径がくる。	棒状工具により不規則な削み目を施す。 底部外側に接合部の粗面感が残る。 肩部は、斜位のハケ調整。	良／ やや粗、長石、灰色 褐色小穢、笠母合む／ にぶい黃褐色	口縁部1/2、 胴部わざかに 残存
弥生土器 壺	29-5 1号基	(19.0) 6.8	口縁部は、鏡やかに外反する。	口唇部は、棒状工具により削み目を施す。 外側は、継位のハケ調整。口 縁部は、粗面感のハケを温らせる。 肩部は、粗いハケ。	良／ 粗、小穢、長石、灰 色小穢合む／ 浅黃褐色	1/4 残存

第8表 弥生土器観察表③

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	掉片図版 写真図版 出土位置 (グリッド)	口径 高径 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎土 色調	備考
弥生土器 甕	29-6 1号墓	(19.8)	口縁部は緩やかに外反し、端部は、外傾面をつくり、内側を尖らせる。削部は、あまり膨らまず口径より腹径の方が小さい。	口縁部は、細かいハケ溝を複数箇所工具により刻み目を施す。外側は、緩い斜位のハケ。胴部内面は、ナデ。	良/ 帶、小便、長石粒子 含む/ 浅黄色	口縁部1/8 残存 スス付着
弥生土器 甕	29-7 1号墓	(18.5) 7.9	口縁部は緩やかに外反し、端部は、丸く収める。 削部は、あまり膨らまず口径より腹径の方が小さい。	口縁部外側は、ハケ後横ナデ調整。 口縁部は、横状工具により刻み目を施す。胴部は、2種類のハケを施す。	良/ 密、長石、黒粒子含 む/ にぶい橙色	口縁部1/3 残存
弥生土器 甕	29-8 2号墓	(20.0) 8.1	くの字状に外反する口縁を持ち端部は、上に引き上げる。	口縁部は、横状工具による小刻みな刻み目を施す。胴部外側に粗いハケ。内面は、季成により観察不能。	良/ 密、長石、黒粒子、 砂粒含む/ にぶい橙色	口縁部1/4 残存
弥生土器 甕	29-9 2号墓	(20.0) 13.0	口縁部は短く、直線的に外反し、端部に平坦面をつくる。	口縁部は、横状工具による刻み目を施す。口縁部外側は、横ナデ。胴部内外面とも粗いハケ調整。	良/ 密、長石、黒粒子、 砂粒含む/ 浅黄褐色	口縁部1/4 残存
弥生土器 甕	30-1 2号墓	14.9 9.8	長頸狭肩の台部がつく。台部の接地面は、平坦。内面にすす付着。	胴部外側は、密なハケ調整。内面は、螺旋状のハケ。	良/ やや粗、白、褐色、 灰色小颗粒含む/ 淡褐色	副部1/3、 脚部残存
弥生土器 甕	30-2 1号墓	16.4 (8.4)	肩部と台部接地面に軽く削を省く。 肩部は琢刷。台形は、端部をやや内側に折り曲げる。	全体的に摩滅が著しいが、胴部外側に所々ハゲ目が残る。	良/やや粗、長石、 赤チャート、 灰色小颗粒含む/ 淡赤褐色	肩部、脚台部 1/3残存
弥生土器 甕	30-3 2号墓	(16.7) 10.6	肩部下半は、直線的に台面に移行する。短い台がつく。	胴部は、内外面ともハケ調整。 台部内面端部は、横ナデ。	良/ 密、灰色、長石、褐 色、石灰小顆、粒子 含む/ 橙色	肩部、脚台部 わずかに 残存
弥生土器 甕	30-4 1号墓	(20.0) 8.0	口縁部は、緩やかに外反するが、ほとんど直線的に立ち上がる。	器面の摩滅が激しく観察不能。口縁部に横状工具による刻み目を施す。	良/ 粗、長石、灰色砂粒 含む/ 橙色	口縁部1/4 残存
弥生土器 甕	30-5 22-30-5 1号墓	19.2 19.6 23.0	口縁部は、大きく外反し、口縁部をさらに外側に引き出す。肩部は、上位に最大径がくる。	器面の摩滅が激しく観察不能。口縁部は、ナデ調整。	良/ 粗、白、灰色、褐色 小颗粒含む/ 淡赤褐色	口縁部、肩部 1/2残存
弥生土器 甕	30-6 2号墓	(24.0) 9.0	口縁部は短く、直線的に外反し、端部は丸く収める。肩部は、あまり膨らまず口径より腹径の方が小さい。	口縁部ナデ、刻み目をつない。外 面は、斜位のハケ溝。	良/ 密、長石、赤、黒色 小颗粒含む/ 褐色	口縁部わす かに残存
弥生土器 高坏	30-7 22-30-7 2号墓	(19.4) (14.8)	端部の底部で屈曲し、口縁部は、内湾しながら立ち上がる。端部は、内傾面を持つ。	端部内外面とも腹位の磨きを施すが、 器面の摩滅が激しく観察不能。造形は 1ヶ所残る。	良/ やや粗、長石、石灰 灰色小颗粒含む/ 淡赤褐色	口縁部1/3、 脚部2/3残存
弥生土器 高坏	30-8 2号墓	(21.6) 5.3	端部は、中位で内側に屈曲し、口縁部を外側に引き出す。	端部内外面とも腹位の磨き調整。口 縁部内面は、横位の磨きを施す。	良/ 密、長石、青母、灰 色粒子含む/ 褐色	口縁部1/8 残存
弥生土器 高坏	30-9 1号墓	13.3 12.5	肩部上部は、円筒状に成型し、中位で屈曲して下部は内湾気味に屈く。	外面は、横位の磨きで端部は、横ナデ 調整。内面は、端部を横ナデ。三方 連かし。	良/黒斑あり 密、長石小颗粒、 長石褐色、青母粒子 含む/ 淡黄褐色	脚部残存
弥生土器 高坏	30-10 1号墓	11.4 12.0	調部は、よく先端部で大きく外反する。端部は、ナデにより丸くする。	脚部外側は、磨きを施し、内面上部は 指でナデで成型する。	良/黒斑あり 密、長石、赤色、赤 チャート、青母粒子 含む/ 淡褐色	

第8表 弥生土器観察表④

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	神面圖版 写真図版 出土位置 (グリッド)	口径 高 度 深 度 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎 土 色 調	備考
弥生土器 壺	31-1 23-31-1 SD50	16.2 28.1 9.7	口縁部は、張部から直線的に立ち上がり、底部丸く收める。腹部やや膨らむ三角の突きを設け、肩部は、球削である。	口縁部外面は、ハケ後ナデ。内面は、模様のハケ調整。肩部に削で刺突文を施す。腹部は、ハケ後焼き。	良/ やや粗、白、灰色、 茶小繩合む/ 淡茶白色	口縁部1/2、 肩部4/5、 底部残存
弥生土器 壺	31-2 23-31-2 SD50	12.2 (25.8) 7.6	口縁部は、くの字状に折り曲がり、内湾しながら立ち上がり、端部に外輪面をつくる。胸部は球削で、底部は平底。	口縁部は内外面とも強い横ナデ。肩部外面は、ハケ後焼きか?	良/ やや粗、白、灰色、 褐色小繩合む/ 淡茶白色	口縁部4/5、 肩部1/2、 底部残存
弥生土器 壺	31-3 SD50	13.2 (8.5)	口縁部は、直線的に外反し、腹部は、平底をつくる。	背面の摩滅が激しく觀察不能。縫合痕明瞭。口部は柳枝工具により刺突文を施す。	良/ 審、灰石、灰褐色砂 粒合む/ 褐色	口縁部無 かに残存
弥生土器 壺	31-4 23-31-4 SD50	9.8 22.0 19.6 8.4	口縁部は、大きく外反し、端部は、外輪面をつくる。胸部は、ゆるいいちぢく型になり、底部は平底となる。	口縁部は、ナデ調整。肩部は、模様による模様文、波状文を施す。胸部外面に薄くハケ日が残る。	良/ 審、白色、灰色、淡 褐色小繩合む/ 淡茶白色	口縁部、肩部 2/3、底部 1/2残存
弥生土器 壺	31-5 23-31-5 SD50	13.2 21.3 6.5	口縁部は、外反しながら大きいくぼみ部は、ナデにより丸く收める。底部は、輪底状。胸部は、ゆるいいちぢく型。	口縁部内部に波状文を施す。颈部と肩部に柳枝で横擦文を施す。	良/ 審、白、黒粒子含む/ 淡茶白色	口縁部2/3、 肩部3/4、 底部残存
弥生土器 小型壺	31-6 23-31-6 SD50	10.7 11.9 15.2 5.0	口縁部は、くの字状に屈曲し、大きく外反しながら開口。腹部は、やや内輪面をつくる。胸部は、いちぢく型を呈し、輪底状。	口縁部内外面とも横ナデ調整。肩部は、器面の摩滅が激しく觀察不能。底部に横状疵痕がみられる。底部あり。	良/厚度あり 審、白、灰色、褐色 小繩合む/ 淡茶褐色	口縁部、肩 部2/3、底部 3/4残存
弥生土器 壺	31-7 SD50	(20.5) (6.3)	口縁部は、直線的に立ち上がり口縁部を直面方形に折り返す。腹部は、内輪面をつくる。	口縁部上面に柳枝刺突状文を施し、その上に模様序文を張り付ける。口縁部は、ナゲ調整。	良/ やや粗、長石小繩、 灰色粒子含む/ 黄褐色	口縁部残存
弥生土器 壺	32-1 23-32-1 SD50	13.4 22.2 22.2	口縁部は、内湾しながら受け口状にたらがりがあり、腹部は、内輪面をつくる。胸部は、下干部に最大径がくるいちぢく型を呈す。	口縁部は、横ナデ。腹部から肩部中位にかけ帶で模様文、波状文、刺突状文、扇形文を施す。下干部は、人字型。	良/ 密、白、褐色、灰色 小繩合む/ 淡茶白色	口縁部1/6、 肩部6/7残存
弥生土器 壺	32-2 SD50	16.3 21.2 8.0	下平部のみであるが、いちぢく型を呈し、輪底状である。	背面の摩滅が激しく觀察不能。わずかにハケ日が残る。内面は、人字型のハケ調整。	良/ 審、長石、褐色、灰 色小繩合む/ 赤褐色	肩部1/2、 底部残存
弥生土器 壺	32-3 24-32-3 SD50	14.0 20.8	口縁部は、対角に屈曲し直線的に大きく外反する。腹部は、平底をつくる。胸部は、下干部に最大径がくる。	口縁部は、内外面とも横ナデ。肩部に柳枝で模様文波状文、刺突文、羽伏文、扇形文を施す。下干部は、球削。	良/ 密、小繩、白、灰色 粒子含む/ 茶白色	口縁部3/4 残存
弥生土器 壺	32-4 24-32-4 SD50	11.2 19.3 24.4	口縁部は、大きく外反し、端部に外輪面をつくる。胸部は、球削。	口縁部は内外面とも横ナデ。腹部から肩部中位にかけ帶で模様文、波状文、羽伏文、扇形文を施す。下干部は、磨き。	良/ 密、灰石小繩、金色 褐色粒子含む/ 茶白色	口縁部、肩部 2/3残存
弥生土器 壺	32-5 24-32-5 SD50	28.7 8.2	胸部は、下干部に最大径がくるいちぢく型を呈す。底部は、輪底状。	肩部は、ハケを施した後、2段の敷文。胸部は、横状の磨き調査。底部に本業状がみられる。	良/ 密、白、茶、灰色小 繩合む/ 褐褐色	颈部4/5残存
弥生土器 壺	32-6 SD50	18.8 22.4 7.4	胸部は、下干部に最大径がくるいちぢく型を呈す。底部は、平底。	肩部に柳枝模様文、刺突文を施す。器面の摩滅が激しく観察不能。	良/厚度あり やや粗、長石、灰色、 赤チャート小繩合む/ 褐褐色	肩部1/2、 底部残存
弥生土器 壺	33-1 SD50	22.3 26.6 (7.2)	口縁部は欠損しているが、胸部は、球削型。底部は、輪底状を呈す。	胸部外縁は、唇部の摩擦が激しく観察不能であるが、ハケ目がやや残る。下干部に刷きがみられる。	良/厚度あり 密、白、灰色、黑褐色、 褐色粒子含む/ 赤褐色	肩部1/2、 底部2/3残存

第8表 弥生土器観察表⑤

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	神岡図版 写真図版 出土位置 (グリッド)	口 径 高 度 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎土 色調	備考
弥生土器 壺	33-2 24-33-2 SD50	8.4 19.5 (22.0)	口縁部は、あまり開かず直立して立ち上がる。腹部は、平底面をつくる。肩部は、横に広がる球頭型。	外表面は全体に摩滅が激しく観察不能。口縁部は、横ナデ。口縁部内面に泡きが残る。	良／ やや密、白、灰色小 粒含む／ 明茶褐色	肩部1/4残 存
弥生土器 壺	33-3 24-33-3 SD50	15.0 22.5	口縁部は、外反して開き腹部は断面方形に折り返す。肩部は、下半部に最大径がくわいちぢく型を呈する。	口唇部の折り返し間に棒状文が残る。唇面の摩滅が激しく観察不能。	良／ 密、密、白、灰色 粒子含む／ 茶褐色	肩部1/3残 存
弥生土器 壺	33-4 24-33-4 SD50	10.8 19.8 17.5 10.1	口縁部は、漏斗部をやや内凹させ受け口状に開く。肩部下部は、底曲面のすぐ下で切りとられた形になる。	器面の摩滅が激しく観察不能。肩部下部に布压痕?がみられる。	良／ 黒斑あり やや粗、灰石、褐色 小粒含む／ 淡赤褐色	口縁部5/6、 腹部、底部 残存
弥生土器 壺	33-5 SD50	9.2 7.5	口縁部は、直立て立ち上がり腹部をナデにより丸く收める。	口唇部は、内外面とも強い横ナデ。腹部にハケ目が残る。	良／ やや粗、白、灰色小 粒、褐色粒子含む／ 茶褐色	口縁部～頸 部残存
弥生土器 小豆壺	33-6 SD50	(8.9) (12.0)	口縁部と底部が欠損しているが下半部に最大径がくわいちぢく型を呈する。	唇により横線文と剥文を繰り返し施文する。内面は、指押さえ痕が明瞭。	良／ 密、灰石小粒、灰石、 玄母粒子含む／ 淡黄褐色	肩部～肩部 1/3残存
弥生土器 小型壺	33-7 25-33-7 SD50	6.8 9.0 10.8 4.6	口縁部が短く内湾する短縁壺。肩部は丸みを持ち中位よりやや下で縫やかに窪曲する。底は、レンズ状底。	口縁部は、内外面とも横ナデを施す。器面の摩滅が激しいが、ハケ後剥き。	良／ 黒斑あり 密、灰石、赤チャート、 灰色粒子含む／ 淡黄褐色	
弥生土器 小型壺	33-8 25-33-8 SD50	10.0	口縁部底辺とも欠損であるが、肩部は、下半に最大径がくわいちぢく型を呈する。	肩部に5本の横線文が残る。肩部から側部にかけ横線文、剥文を施し、1ヶ所円形の浮文を張り付ける。	良／ 黒斑あり 密、白、灰色、褐色 小粒含む／ 淡黄褐色	肩部4/5、 肩部3/4残 存
弥生土器 小型壺	33-9 SD50	(4.8) (7.7) 3.3	肩部は、球型。底部は、輪状底。口縁部欠損のため、全体的な形状は不明。	肩部に指で横ナデ。肩部は、へらによる剥き溝。底部は、削りにより輪状に成形。黒斑あり。	良／ 黒斑あり 密、灰石、赤チャート、 灰色粒子含む／ 淡黄褐色	肩部、底部 1/2残存
弥生土器 上器 壺	33-10 25-33-10 SD50	(10.0) 3.0	半球形形状を呈し、つまみ部は欠損。端面は、ナデにより丸く收める。	つまみ部は、指で成型され、剥き溝が残る。器面の摩滅が激しく観察不能。黒斑があり。	良／ 黒斑あり 粗、灰石小粒、 砂粒含む／ にい黄褐色	つまみ上器 を除き残存
弥生土器 小型壺	33-11 25-33-11 SD50	6.3 7.6 4.6	側部下部が緩やかに屈曲し、いちぢく型を呈する。底部は、平底。	外表面は、多方向の磨き。内面は横位のハケ、底部は泡き。底はナデ調整。	良／ 密、灰石、灰色、褐 色小粒含む／ 淡赤褐色	側部～底部 残存
弥生土器 壺	33-12 25-33-12 SD50	7.9 13.7 12.9 5.1	口縁部は、くの字状に外反し、肩部は、ナデにより二角状に尖らせる。肩部下部に最大径がある。底部は、輪状底。	口唇部は、強いナデ調整。器面の摩滅が激しく観察不能。ハケ調整後泡きか？内面は、横方向のハケ。	良／ 黒斑あり 密、白、褐色、黒小 粒含む／ 淡赤褐色	
弥生土器 鉢	34-1 25-34-1 SD5	14.2 14.1 15.6 6.5	口縁部は、直線的に立ち上がり溝部を尖らせる。肩部上位に最大径があり、底部に向かってつばむ。底部は、輪状底。	口縁部内外面とも横ナデ。肩部外側は、斜位のハケ調整。内面は、板ナデ。	良／ やや粗、長石、ホチ チャート小粒含む／ 淡赤褐色	
弥生土器 笠鉢	34-2 25-34-2 SD50	10.8 11.4 5.4	口縁部は、直線的に立ち上がり溝部は、ナデにより丸く收める。肩部は、中位で大きめ屈曲し、底部は輪状底となる。	口縁部に獨創突起状文を施し、肩部上半分は横位の擦き。下半分は、斜位の泡き。内面は、下から上へ斜位の磨きを施す。	良／ 黒斑あり 密、灰石、灰色、褐 色小粒含む／ 淡赤褐色	口縁部1/5、 肩部、底部残 存
弥生土器 小型壺	34-3 25-34-3 SD50	11.8 10.2 12.3 6.0	口縁部はやや外反し、端部は、外側を尖らせる。肩部は、中位よりやや下に最大径がある。底部は、平底。	外表面は、瓶位の岩きを施し、内面は、横位の磨き調整。	良／ 黒斑あり やや粗、白、灰色、 褐色小粒含む／ 淡赤褐色	口縁部1/3、 肩部、底部残 存

第8表 弥生土器観察表④

法量値の()残存値 単位はcm

種別 器種	神宮版 写眞版 出土位置 (グリッド)	口 器 高 度 径 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎 土 色 調	備考
弥生土器 片形鉢	34-4 SD50	(7.9) 12.1 5.8	口縁部は直立して伸びる。最大径は上部にある。輪底状。	側部内外面に刃形。口縁部内外面横ナゲ。副上部横ぎ、以下ハケ残る。内面横位、斜位著き。	良／黒斑1ヶ所 密、白、褐色、灰色 小隈含む／ 淡褐色	口縁部1／6、 肩部1／2、 底部残存
弥生土器 盤	34-5 26-34-5 SD50	17.4 (17.2) 18.0	口縁部は直線形陣に開き、口周部で外反する。端部は外彫して平底面をもつ。最大径は上位にあり、細長い球形を呈する。	口縁部外周斜位のハケ後接ナゴ斜位のハケ。内面は口縁部横位、副部斜位のハケ。口唇部部由取り。	良／黒斑1ヶ所 やや粗、長石、灰色、 赤チャート小隈含む／ 黒褐色	口縁部～副 中位、肩下位 2／3残存
弥生土器 甕	34-6 26-34-6 SD50	18.5 9.1 18.4	口縁部は直線形に外反する。肩部最 大径は中位にあり、球形を呈する。	口縁部に輪状工具による刻み、横ナ ゲ。外周斜位のハケ。内面削位、横 位、窓位の不規則なハケ。	良／ やや粗、長石、灰色、 赤チャート小隈含む／ 黒褐色	口縁部～副 中位1／2残存
弥生土器 甕	34-7 SD50	21.0 (21.4)	口縁部は「く」の字に外反し、端部は外彫して平底面をもつ。最大径は中位にあり、細長い球形を呈する。	口縁部にヘラ状工具による刻み。内 外面とも横ナゲ。肩部外面は斜位の 細かいハケ。内面中位横削痕。	良／ やや粗、良石、赤チ ャート、灰色小隈含 む／暗茶褐色	口縁部～肩 部1／4残存
弥生土器 甕	34-8 26-34-8 SD50	(11.6) 17.4 (14.4) (8.2)	口縁部は「く」の字に外反し、端部は外彫して、平底面をもつ。肩部最大径は上位にある。輪底部内面に粘土 突出。	口縁部にヘラ状工具による刻み。外 周口縁部～肩部斜位のハケ、脚部 腹位ハケ。内面斜位のハケ。	良／ やや粗、長石、灰色、 赤チャート小隈含む／ 淡赤褐色	口縁部1／4、 肩部1／2、 脚部1／3残存
弥生土器 甕	34-9 26-34-9 SD50	13.7 (10.0) 11.8	口縁部は「く」の字に外反し、端部は外彫して、平底面をもつ。肩部は細 長い球形を呈する。	口縁部に輪状工具による刻み。外 面は口縁部～脚部斜位のハケ。内面は 横位、斜位のハケ。	良／ 密、白、灰色、褐色 小隈含む／ 淡茶褐色	口縁部1／2、 肩部1／3残存
弥生土器 甕	34-10 SD50	(11.6) (4.8)	口縁部は「く」の字に外反し、端部を丸く收める。	口縁部にヘラ状工具による刻み。内 外面とも横ナゲ。肩部外面斜位のハ ケ、内面削痕斑。	良／ 密、長石、石英、赤チ ャート、灰色小隈、 雲母含む／暗褐色	口縁部1／8 残存
弥生土器 甕	34-11 SD50	12.8 (6.1) (12.0)	口縁部は直線的に開き、端部は外彫して、平底面をもつ。肩部は細長い 球形を呈する。	口縁部にヘラ状工具による細かい刻 み、内外面とも横ナゲ。肩部内外面 とも斜位のハケ。	良／黒斑2ヶ所 やや密、長石小隈、 灰色、雲母含む／ 淡茶褐色	口縁部1／3、 肩部1／2残存
弥生土器 甕	34-12 26-34-12 SD50	18.8 (20.0) 20.9	口縁部は「く」の字に外反し、端部は外彫して、平底面をもつ。最大径は上位にあり、球形を呈する。	口縁部にヘラ状工具による刻み。内 外面とも横ナゲ。肩部外面斜位、斜 位のハケ。内面横位、斜位のハケ。	良／ やや粗、白、灰色小 隈含む／ 淡褐色	口縁部～肩 部残存
弥生土器 甕	35-1 SD50	20.1 17.7	口縁部は細やかに外反し、端部は外彫して、丸みをもつ。最大径は肩部中位にあり、球形を呈する。	口縁部にヘラ状工具による刻み。外 周口縁部横ナゲ。肩部斜位のハケ。 内面横位、斜位の細いハケ。	良／ 黒斑あり やや粗、長石、水チ ャート、灰色小隈、白 雲母含む／淡茶褐色	口縁部～肩 部1／4残存
弥生土器 甕	35-2 SD50	(29.2) 20.1	口縁部は細やかに外反し、端部は外彫して、平底面をもつ。肩部は中位に最大径をもち、細やかな球形を呈する。	口縁部に棒状工具による刻み。外周 斜位のハケ。内面横位ハケ。	良／ 密、長石、灰色、褐 色小隈、石灰、雲母 含む／淡黃褐色	口縁部～肩 部1／4残存
弥生土器 甕	35-3 SD50	18.4 17.4	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は外彫して、平底面をもつ。	外周口縁部横ナゲ、頸部横ぎ、副部斜位のハケ。内面葉部指痕斑残る。	良／ やや粗、長石、石灰、 赤チャート、灰色小 隈含む／淡褐色	口縁部1／2 残存
弥生土器 甕	35-4 SD50	(23.8) 8.3	口縁部は「く」の字に外反し、端部は外彫して、平底面をもつ。	口縁部に棒状工具による刻み。外周 横ナゲ～副部斜位のハケ。内面口縁 部6条/cm横ハケ。頭部内外面横 斑あり。	良／ 密、長石、灰色、褐 色小隈、雲母含む/ 褐色	口縁部～肩 部1／4残存
弥生土器 甕	35-5 SD50	(22.0) 8.8	口縁部は「く」の字に外反し、端部はやや丸みをもつ。	口縁部に棒状工具による刻み。外周 頭部斜位ハケ、副部斜位のハケ。内 面口縁部横ナゲ、副部斜位のハケ。	良／ 密、長石、石灰、灰 色褐色小隈、雲母含 む／淡黃褐色	口縁部1／4 残存

第8表 弥生土器観察表②

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	桙頭因襲 等裏因縫 出土位置 (グリッド)	口径 器高 底径 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎土 色調	備考
弥生土器 甕	35-6 SD50	(18.5) 12.0	口縁部は「く」の字に外反し、端部は丸く收める。腹部は綺やかな球形をなす。	口縁部にヘラ状工具による刻み。内面外曲とも横ナガ。外面腹部～脚部斜位のハケ。内面口縁部横位、脚部斜位ハケ。	良／ 密、長石、石英、赤、 黒小穢、雲母含む／ 橙色	口縁部1/4 残存
弥生土器 高坏	35-7 27-35-7 SD50	17.5 19.8 9.3	环部は綺やかに内済して立ち上がり、肩由りして垂直に伸びる。口容部は内面傾面をもち、端部を尖らせる。脚部直錐の3孔円窓。	外曲2条／8mmの製作磨き。内面环部斜位磨き、脚部斜位ハケ。	良／ やや粗、白、灰色小 穢含む／ 橙白色	环部1/2残 存
弥生土器 高坏	35-8 SD50	24.1 5.2	口縁部は綺やかに外傾し、口容部で外反して、端部を丸く收める。	外面1J脚部横ナデ、环部斜位ハケ。内面板磨き、横位ハケ。	良／ 密、長石、赤チャ ート、白雲母、灰色粒 子含む／暗茶色	口縁部1/4 残存
弥生土器 高坏	35-9 27-35-9 SD50	24.8 9.2	环底部は広く、口縁部は直錐的に外傾する。口容部は外反し、端部は平坦面をもつ。	口縁部外側ハケ6条／cm後横ナデ。握彌波状波紋5本単位？环底部底面さき5本／cm。内面報磨き。	良／風漬あり 密、長石小穢、長石、 雲母、灰色粒子含む ／淡赤褐色	口縁部7/8 残存
弥生土器 高坏	36-1 27-36-1 SD50	24.9 26.6 13.6	环部は下位で扁曲し、綺やかに外傾して、口縫部で直立する。端部は、平坦面をもつ。脚部は横部でやや内済する。3孔円窓。	环部内外面報磨き。口縫部よこナデ。脚部横横絞り、利突文絞り返し。下位磨き。脚部横ナデ。内面ハケ。	良／ やや粗、白、灰色小 穢、褐色粒子含む／ 淡赤褐色	口縫部2/3、 环部3/4残 存
弥生土器 高坏	36-2 27-36-2 SD50	26.8 (17.7)	口縁部は綺やかに内済して立ち上がり、口容部を外反させ、端部を尖らせる。3孔円窓。	全体に報磨き。脚部内面に絞り痕 あり。	良／ 密、長石、灰色、赤 チャート小穢含む／ 淡赤褐色	环部3/4、 脚部1/3残 存
弥生土器 高坏	36-3 27-36-3 SD50	22.1 18.3 11.4	环部は中位で扁曲し、外反して端部は平面面をもつ。脚部は横部を内済させる。3孔円窓。	内外面とも磨き。口縫部横ナデ。环部と脚部の境に指頭圧痕多数。脚部内面板磨き。	良／ やや粗、白、灰色小 穢含む／ 明赤褐色	环部2/3、 脚部1/2残 存
弥生土器 高坏	36-4 SD50	22.5 (8.5)	环部は中位で加曲し、外反して端部を丸く收める。	环部外側磨き。口縫部横ナデ内面 摩滅の為觀察不能。	良／ 黒度2ヶ所 やや粗、白、赤チ ャート、灰小穢、 雲母含む／淡青白色	口縫部1/2、 环部3/4 残存
弥生土器 高坏	36-5 SD50	24.0 (9.5)	环部は綺やかに内済して開き、端部は平坦面をもつ。	环部外面上位横位横ナデ。下位原位 ハケ。内面磨き。口縫部横ナデ。丹微り。	良／ やや粗、白小穢、 雲母、褐色粒子含む／ 淡茶白色	口縫部1/5、 环部2/3残 存
弥生土器 高坏	36-6 SD50	(24.8) (6.3)	环部は扁曲し、外傾して口縫部を外反させ、端部は平坦面をもつ。	环部内外面とも横位磨き。摩滅の為 小明瞭。	良／ 密、白、灰色、褐色 小穢含む／ 淡褐色	口縫部1/4 残存
弥生土器 高坏	36-7 SD50	(12.7) 13.4	脚部は直錐的に伸び、中位よりやや下でラッパ状に開き、端部は丸みをもつ。上部に径2mmの穴が2ヶ所あり。	外側横位磨き。内面指頭圧痕。	良／風漬あり 密、長石、灰色、褐 色小穢含む／ 淡褐色	脚部残存
弥生土器 高坏	36-8 SD50	(15.5) 13.0	脚部は中位からやや内済しつつ開く。端部は丸みを寄せる。3孔円窓。	外面報磨き。内面ハケ。	良／ やや粗、白、灰色小 穢含む／ 橙白色	脚部残存
弥生土器 高坏	36-9 SD50	(13.7) 14.0	脚部は直錐的に立ち、中位よりやや内済気味に崩く。端部は平坦。	外側斜位磨き不明瞭。内面斜位ハケ。	良／ 黒度1ヶ所 密、長石、灰色、褐 色小穢含む／ 淡赤褐色	脚部残存
弥生土器 高坏	36-10 SD50	(14.4) 14.7	脚部は綺やかに開き、下方は内済気味に開く。端部は平坦。	外側報磨き不明瞭。内面斜位ハケ。	良／ やや密、白、灰色小 穢含む／ 明棕褐色	脚部残存

第6表 弥生土器観察表④

法量値の() 残存 単位はcm

種別 器種	博圓原版 写真図版 出土位置 (グリッド)	口径 器高 底 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎土 色調	備考
弥生土器 大型壺	37-1 27-37-1 SD50	(53.8) (49.6) 11.2	脇部は球形を成す。	肩部に2ヶ1單位の円形浮支7ヶ所、斜部純文交在に3ヶ所斜上部斜位磨き、中位→下位斜位ハケ。内面斜位ハケ。	良/黒斑あり やや粗、白小粒含む/ 赤褐色	脇部、底部残存
弥生土器 人型壺	37-2 28-37-2 SD54	(22.0) 57.2 10.3	口縁部を折り返し、外斜した端面を作る。脇部は球形を成す。	口縁部内外面とも櫛による割突文、竹管文。外面白縁部~肩下半羽庭ハケ。底底部底位磨き。内面白縁部、脇底部斜位ハケ。	良/ 粗、多量の繊合む/ 赤灰色	
弥生土器 大型壺	37-3 28-37-3 SD54	(39.1) (8.8)	脇部は球形を成す。	脇部外側6条/cm斜位ハケ。内面8条/cm斜位ハケ。	良/黒斑あり 善、長石、黑白子含む/ 浅黃褐色	脇部、底部残存
弥生土器 壺	38-1 28-38-1 SD54	19.6 29.9 22.9 7.0	口縁部はやや内湾気味に大きく開き、水平な端面をもつ。脇部は球形を成す。	口縁部内外面直面ナダ。外面白縁部、脇部底位磨き。内面白縁部斜位ハケ後位磨き。脇底部~中位斜位ハケ。指痕斑状。	良/黒斑あり 善、小砾、白粒子含む/ にぶい褐色	
弥生土器 壺	38-2 28-38-2 SD54	15.3 26.1 24.0 8.0	口縁部は直線的に外反し、端面は外斜する。頸部を肥厚させる。脇部はいびつな球形を成す。	口縁部外面斜位ハケ後接ナダ。肩上部斜位ハケ。脇部斜位ハケ横構造。内面白縁部斜ナダ。脇部指痕斑状。	良/黒斑あり 善、長石、石英、褐色、灰色小粒含む/ 灰色	口縁部3/4、 脇部、底部残存
弥生土器 壺	38-3 SD54	(13.7) (9.1)	口縁部は穢やかに外反し、口唇部でやや内湾気味になる。端面は外斜する。	口縁部内外面とも横ナダ。肩部に6本の横線文、撻狀工具による割突文を織り込む。縫合跡頸部内面横頭斑状。	良/ 善、褐色砂粒、善 母含む/ 浅黃褐色	口縁部1/3、 肩面わずかに残存
弥生土器 壺	38-4 28-38-4 SD54	(14.2) 30.7 25.4 9.1	口縁部は穢やかに外反し、端部は外斜する。脇部は球形を成す。	外面白縁部、脇部斜位ハケ。内面脇部斜位ハケ。頸部指痕斑状。	良/ 善、長石、灰色、褐色小砾、砂粒含む/ 浅黃褐色	口縁部1/2、 脇部にはば残存
弥生土器 壺	38-5 28-38-5 SD54	(28.1) 7.4 25.9	口縁部は外反する。脇部は最大径が下位にある、いちじく形を成す。	口縁部底面、肩部斜位ハケ。横状工具による割突。脇部斜位ハケ。内面白縁部斜位、横位ハケ指頭斑状。脇部斜位ハケ。	良/黒斑あり 善、多量の塵、白粒子含む/ 灰色	口縁部1/4、 脇部3/4残存
弥生土器 壺	39-1 SD54	16.0 7.6	口縁部は直線的に開き、口唇部で垂直に立つ。端部はやや丸みを帯びる。	頸部斜位ハケ後接ナダ。脇部斜位ハケ、底位磨き。内面斜位ハケ。	良/黒斑あり 善、多量の塵、砂粒含む/ 灰色	脇部一部を除き残存
弥生土器 壺	39-2 29-39-2 SD54	(13.8) 28.0 8.3	口縁部はやや内湾気味に開き、端面は外斜する。脇部は最大径が下位にある、いちじく形を成す。底部中央やや凹む。	口唇部内外面直面ナダ。口縁部外面斜位ハケ。肩部に8本の横線文、斜状工具による割突。脇部斜位ハケ後接磨き。内面ハケ。	良/黒斑あり 善、長石小砾、灰色 褐色砂粒含む/ 浅黃褐色	1/2残存
弥生土器 壺	39-3 SD54	6.9 (11.3)	口縁部はやや内湾気味に開き、脇部は球形を成す。	口縁部内外面とも横ナダ。外面白縁部~脇部斜位ハケ。内面白縁部~脇部指頭斑状。	良/ 善、長石小砾、長石、褐色、雲母含む/ 浅黃褐色	口縁部、脇部 1/2残存
弥生土器 小型壺	39-4 29-39-4 SD54	(17.5) 6.1	口縁部は直線的に開く。脇部は球形を成し、下位に棱をもつ。底部中央に凹み。	唇面序減のため剥離不能。	良/ 粗、長石、灰色、褐色小砾、砂粒含む/ 褐色	口縁上部を除きはば残存
弥生土器 壺	39-5 SD54	14.0 (23.5)	口縁部は直線的に開き、端部を折り返し、口唇部外側に外斜した面をもつ。肩のはらはら長い縦長い球形を成す。	外面白縁部~脇部斜位ハケ。内面白縁部横位、斜位ハケ。頸部指頭斑状。脇部横位板ナダ?	良/黒斑あり 粗、長石、雲母、灰 色粒子含む/ 浅黃褐色	口縁部7/8、 肩上半部 1/2残存
弥生土器 壺	39-6 SD54	(16.2)	腹部は穢やかに外反する。脇部はやや下位に載入深をもつ球形を成す。	外面直面横位、斜位ハケ。肩部斜位ハケ後接による割突文、X字剥突文。底位磨き。内面脇部脇部斜位ハケ、脇部指頭斑状。	良/黒斑あり 善、長石砂粒含む/ 浅黃褐色	縫合3/4、 脇部1/4残存

第8表 弥生土器観察表④

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	押印箇所 写真図版 出土位置 (グリッド 最大径)	口径 高径 底径 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 施土 色調	備考
弥生土器 壺	40-1 SD54	16.2 (7.0) 28.4 10.0	口縁部は外反して大きく開き、端部を丸く收める。腹部はやや下に最大径をもつ球形を成す。	外面肩部による刺突文、縦磨き。内面斜位、横位ハケ。底部指頭圧痕。	良／黒灰あり 密、濃、白、赤色粒 子含む／ 明褐色	口縁部1/2、 腹部残存
弥生土器 壺	40-2 29-40-2 SD54	(23.7) 9.3 24.5	肩部は最大径を下にもつ、下部を成す。	肩部による刺突文、6本の横線文。肩部上位～下位斜め施さ、底部斜位磨き。内面側上部指頭圧痕。	良／ 密、小穂、赤色粒子 多量に含む／ 黄褐色	肩部、底部残 存
弥生土器 壺	40-3 29-40-3 SD54	(13.0) 20.6 19.8 7.5	口縁部は直線的に開き、前面は丸みを帯びて外斜する。腹部は下部の球形を成し、下位に優をもつ。	外面器座摩滅のため観察不能。内面肩部指頭圧痕。肩部横分ハケ。	良／ 密、長石、灰色、褐 色小穂、長石粒子含 む／橙色	口縁部1/4、 肩部5/6残存
弥生土器 壺	40-4 29-40-4 SD54	9.4 22.0 19.4 6.7	口縁部はやや内湾気味に開き、水平な球形をもつ。腹部はやや下部の球形を成す。底部は中央が凹む。	肩部外側斜位ハケ。内面肩部、底部指頭圧痕。底部斜位ハケ。底部木素質。	良／ 密、建、赤色粒子含 む／ 黄褐色	
弥生土器 壺	40-5 29-40-5 SD54	12.2 22.6 19.6 7.1	口縁部はやや内湾気味に開き、肩部は最大径をやや下にもつ球形を成す。底部は中央をやや凹ませる。	外面口縁部斜位ハケ、口台部、腹部横ナデ。肩部斜空ハケ、斜位磨きをわずかに残す。内面頸部底部横位ハケ。底部木素質。	良／ やや粗、白、灰色小 穂含む／ 淡黃褐色	
弥生土器 壺	41-1 30-41-1 SD54	17.4 (27.4) 29.1	口縁部は内湾気味に開き、背部交留をもつ。腹部は益大径をやや下にもつ球形を成す。	口縁部通面に横による刺突文、外側口縁部ハケ。横線文、突起の上から刺突文、横線文、被状文拂り返し。縦磨き。内面ハケ。	良／黒灰あり 密、濃、赤色粒子含 む／ 淡褐色	
弥生土器 壺	41-2 30-41-2 SD54	(14.0) (14.0)	口縁部は外反気味に開き、前面を大きく外斜させる。腹部は球形を成す。	口縁部通面に横によるX字刺突文頸部横位、斜位ハケ。肩部日本の横線文、梯による刺突文を拂り返し、列立刺突文。	良／ 密、長石、赤色、黑 色粒子含む／ 橙色	口縁部1/5、 肩部2/3残存
弥生土器 壺	41-3 30-41-3 SD54	13.8 26.6 23.1 7.5	口縁部は内湾気味に開き、端部を折り返して肥厚させる。腹部は最大径を下にもつ球形を成す。	口縫部外側面横ナデ。颈部～肩部斜位ハケ。肩部～下位斜位ハケ後横位磨き。内面指頭圧痕。横位斜位ハケ。	良／ 密、長石、石英、褐 色灰岩小穂、粒子含 む／橙色	肩部2/3残 存
弥生土器 壺	41-4 SD54	16.0 (9.7)	口縁部は直線的に開き、端部を幅広に折り返し、口唇部にやや広い水平面をもつ。	口唇部水平に脚による刺突文頸部斜位ハケ。肩部列立刺突文、12本の横線文、梯による刺突文、内面肩部指頭圧痕。	良／ 密、長石、灰化、褐 色小穂、雲母、石英含む／橙色	
弥生土器 壺	41-5 SD54	(17.2) (7.1)	口縁部は外反して開き、端部を幅広に折り返し、前面を外斜する。	口唇部に梯による刺突文、腹部斜位ハケ。肩部8本の横線文。内面腹部指頭圧痕。	良／ やや密、長石小穂、 粒含む／ 淡黃褐色	
弥生土器 壺	41-6 SD54	12.3 (8.3)	口縁部は外反して開き、端部を幅広に折り返し、三角形を成す。	口縫部の折り返し済壓痕。外面口唇部横位ハケ、梯踏9本/cm斜位ハケ。内面口縫部細かい横ハケ。底部斜位ハケ。指頭圧痕。	良／ 密、長石小穂、灰化、 褐色、雲母粒子含む／ 橙色	口縫部～腹 部残存
弥生土器 壺	41-7 SD54	19.3 (9.0)	口縁部は外反気味に開き、端部を折り返して、方形状を成す。	口縫部外側横ナデ、梯踏斜位磨き。竹葉文、梯による刺突文。口唇部内面強い押さえによる凹み。底部指頭圧痕。	良／ 粗、小穂、長石、灰 色粒子含む／ 橙色	口縫部2/3 残存
弥生土器 壺	41-8 SD54	14.2 (4.6)	口縫部は外反気味に開き、端部を折り返し、方形状を成す。	口縫部に梯による刺突文、腹部斜位ハケ。口縫部内面梯踏放状文。豊部横位ハケ。	良／ 密、長石、灰化、褐 色小穂、云母含む／ 灰白色	口縫部4/5 残存
弥生土器 壺	41-9 SD54	17.0 (13.7)	口縫部は外反して開き、端部を折り返して幅広の外斜面を作り、肩部に突帶をもつ。	外面口縫部に梯による刺突文、梯踏浮文。梯踏横ナデ。梯による刺突文、羽状文、上に円形浮文。内面口縫部波状文。	良／ 密、長石、云母、灰 色粒子含む 淡黃褐色	口縫部、肩部 わざかに残 存

第8表 弥生土器類表⑩

法量値の() 残存倉 単位はcm

種別 器種	神園版 写真回版 出土位置 (グリッド)	口径 高さ 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎土 色調	備考
弥生土器 壺	42-1 30-42-1 SD54	(20.4) 41.2 (6.7)	口縁部は外反して開き、端部を幅広に折り返して、三角形を成す。肩部に三角角の突起をもつ底部は小さく、中央に凹み。	口部外斜面に側による刺突文。外面頸部斜位ハケ。突宍上下横ナデ。肩部斜位ハケ後斜位。横位磨き。内面横位ハケ。指添E。	良/やや密、長石、灰色小穂、褐色粒子含む/黄褐色	1/2残存
弥生土器 壺	42-2 SD54	16.5 (9.9)	頸部は直線的に立ち上がり、内面に棱をもつて開き、口縁部は板状円錐状を成す。折り返し邊は断面二角形を成す。	外表面頸部斜位ハケ。肩部側による刺突文。10本の横線文。内面斜位ハケ。指添E。	良/密、白粒子含む/灰褐色	口縁部~肩部残存
弥生土器 壺	42-3 30-42-3 SD54	18.5 (6.5)	頸部は直線的に立ち上がり、内面に棱をもつて大きく外反する折り返し邊が広く、断面が長方形を成す。折り返し邊は断面二角形を成す。	口縁部に側による棒状沈線。内面口縁部に横線文。頭部外側ハケ後ナデ。	良/密、長石、灰褐色小穂、長石粒子含む/褐色	口縁部1/2残存
弥生土器 壺	42-4 30-42-4 SD54	18.0 (10.2) 22.6	頸部は直線的に、口縁部で大きく外反し、底面してやや直線的に伸び、底部は水平面をもつ複合円錐。	口縁部水平面に側による刺突文。外面に側による刺突文後3ヶ所に棒状浮文。肩部に8本の横線文後内斜文、刺突文、横線文。	良/密、白粒子、白色粒子、砂粒含む/淡褐色	口縁部1/2残存
弥生土器 壺	42-5 SD54	(21.1) (4.5)	口縁部は内側して立ち上がり、底部を尖らせる。折り返し部底面二角形を成す複合口縁。	口縁部外側とも斜位磨き後横ナデ。	良/密、長石、灰褐色小穂、空母粒子含む/淡黄色	口縁部1/5残存
弥生土器 壺	42-6 SD50	(10.4) (2.0)	円錐を成し、先みをもつ。上面は凹む。器面中位にすかし穴2ヶ所あり。	外面上位横位、斜位のハケ。	良/密、長石、黒雲母、灰褐色砂粒含む/淡褐色	1/4残存
弥生土器 小壺	42-7 SD54	(10.3) 10.0 5.0	口縁部は直線的に開き、端部を丸く収める。胴部は中位に棱をもつ。	口部端部に側による刺突、外側頸部ハケ。口縁部~胴部斜位磨き。内面斜位ハケ。口縁部斜位磨き。	良/密、小穂、長石、灰褐色砂粒含む/淡黄色	口縁部1/5、網目部1/2残存
弥生土器 小壺	42-8 31-42-8 SD54	9.0 15.0 12.4 5.3	口縁部は内側気味に立ち上がり端部は水平面をもつ。胴部は球形を成す。	口縁部斜位ハケ。頭部縫ハケ。胴部斜位、底位磨き。	良/密、白、灰褐色小穂含む/褐色	
弥生土器 小壺	42-9 31-42-9 SD54	(8.4) 10.8 5.0	口縁部は内側気味に立ち上がり端部は丸く收める。胴部は球形を成す。底部は中央を凹ませる。	外側は口縁部横ナデ。頭部斜位ハケ。胴部底位磨き。内面口縁部斜位、横位ハケ。肩部上部指添斑点。	良/密、長石、灰褐色砂粒含む/褐色	口縁部1/2、胴部、底部残存
弥生土器 鉢	42-10 31-42-10 SD54	(6.9) 5.0	胴部は僅かな球形を成す。底部は中央を凹ませる。	外側頸部横位ハケ。頸部横位磨き。内面頸部横位ハケ。頸部横位磨き。	良/密、長石、灰褐色砂粒含む/褐色	部頭部~底部残存
弥生土器 小壺	42-11 41-42-11 SD54	5.6 8.3 8.5 4.9	口縁部は直線的に開き、端部は丸く収める。胴部は中位に最大径をもつ球形を成す。	口縁部内外側とも横ナデ。頸部底位ハケ。内面横位ハケ。胴部中位指添ナデ。	良/密、白、灰褐色小穂含む/淡褐色	
弥生土器 鉢	42-12 SD54	14.0 9.9 4.0	口縁部は内側気味に立ち上がり端部はやや外斜する。胴部は上位に最大径をもつ半球形を成す。底部は凹みをもつ。	外側は口縁部~胴部横位磨き。底部指添ナデ。内面口縁部~胴部底位磨き。胴部横位磨き。肩部上部横位ハケ、指添E。	良/密、多量の砂粒含む/灰白色	
弥生土器 壺	43-1 30-43-1 SD54	(24.8) (20.1)	頸部は直線的に立ち、底面して内側しつけ聞く。端部はわずかな内側斜面、やや輪のある外斜面をもつ複合口縁。	口部外側に側による刺突文。口縫部外凸X字刺突文、頭部、胴部斜位ハケ。頭部横ナデ。内面斜位ハケ、指添斑点。	良/密、長石、灰褐色小穂、灰褐色砂粒、空母粒子含む/褐色	口縁部1/3、網目わざかに残存
弥生土器 壺	43-2 SD54	(23.0) (20.9)	頸部から外反して立ち上がり、端部を外斜させ、外側に底面をもつ複合円錐。	口縫部に側によるX字刺突文、頭部、胴部斜位ハケ。頭部横ナデ。内面口縫部横ナデ、頭部斜位ハケ。頭部斜位ハケ。	良/黒斑あり、長石、灰褐色砂粒、空母粒子含む/淡黄色	口縫部1/3、胴部わざかに残存

第8表 幼生土器觀察表⑪

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	持切回版 写真図版 出土位置 (グリット) 最大径	口 径 高 度 底 径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎 土 色 調	備考
幼生土器 手こね鉢	43-3 31-43-3 SD54	7.0 3.0 3.8	体部は、内湾して立ち上がり、端部を丸く収める。底部中央に凹みあり。	全体的にナデ調整を施す。内面に指痕板あり。	良／黒斑2ヶ所 やや粗、長石、石英 小穂、砂粒、雲母含む／橙色	
幼生土器 壺	43-4 31-43-4 SD54	11.5 6.5	胴部中央に最大径がくる様に立上がり、頭部はまっすぐに立ち上がる長颈壺か？	胴部上位に焼成後の背孔あり。胴部外側は、ハケ後磨き調整。頭部は、ナデ調整。	良／黒斑1ヶ所 粗、長石、石英、 雲母、灰色粒子含む／浅黄色	
幼生土器 壺	43-5 31-43-5 SD54	9.9 8.3 5.1	口縁部は、外反しながら立ち上がり、口縁部が制脚部を上回る。底部は、平底。	口縁部から胴部は、器面の摩滅が激しいため、調整不明。内面底部はナデ。	良／ 粗、長石、石英、 灰色粒子含む／ 浅黄色	
幼生土器 鉢	43-6 31-43-6 SD54	15.4 12.6 6.0	口縁部は、内湾して立ち上がり口唇部はやや内斜する。口縁部が制脚部をやや上回る。底部中央に凹みあり。	口縁部から胴部にかけ、器面の摩滅が激しいため、調整不明。 底部外側は、ハケ後ナデ調整。 底部に木素痕あり。	良／ 粗、 長石、石英、 灰色褐色小穂、粒子 含む／橙色	口縁部1/2、 胴部残存
幼生土器 壺	43-7 31-43-7 SD54	7.6 6.8 4.0	口縁部は、直線的に立ち上がり口唇部の外側を尖らせる。頭部は、やや偏平な球形壺を呈す。	口縁部から胴部にかけ、ハケ後ナデ調整。内面底部はナデ調整底部に木素痕あり。	良／ 密、 長石、灰褐色、 灰色小穂、粒子、 雲母含む／橙色	口縁部1/4、 胴部1/2 残存
幼生土器 壺	43-8 32-43-8 SD54	15.6 12.7 5.5	長い口縁部は、やや内湾しながら立ち上がり、口唇部を丸く収める。頭部は、偏平な球形頭部にやや凹みあり。	口縁部外側は、複数のヘラ磨きハケ後磨き。	良／ 粗、 長石、 灰色小穂 石英粒子含む／ 橙色	口縁部3/4 残存
幼生土器 壺	43-9 32-43-9 SD54	9.3 8.4 4.5	口縁部は、やや内湾しながら立ち上がり口唇部をさらに内側に折り曲げる。口縁部が制脚部を上回る。	内外面とも全体にナデ調整。胴部外側に指痕板あり。	良／ 密、 長石、 石英、 石英粒含む／ 橙色	
幼生土器 壺	43-10 32-43-10 SD54	8.5	口縁部は、くの字に外反しながら立ち上がり。頭部中央に最大径がくるやや偏平な球形壺。底部中央にやや凹みあり。	器の裏面は、直線的に立ち上がり、口唇部が制脚部を上回る。底部に木素痕あり。	良／ 黒斑1ヶ所 粗、 長石、 灰色、 褐色含む／ 橙色	口縁部1/4、 胴部残存
幼生土器 鉢	43-11 32-43-11 SD54	11.0 9.3 5.0	口縁部は、近く直線的に立ち上がり、口唇部を丸く収める。頭部は、下位に最大径がくるやや不規則な形態を呈する。	口縁部から胴部にかけハケ後ナデ調整。底部内面は、板ナデ調整。	良／ 密、 長石、 石英、 褐色小穂、 雲母粒子 含む／ 浅黄色	
幼生土器 壺	43-12 32-43-12 SD54	12.6 11.0 5.0	長い口縁部は、内湾して立ち上がり、頭部に水平面をつくる。 口縁部が制脚部を上回り、頭部は、偏平な球形。	口縁部から頭部にかけて、複数のヘラ磨きを施す。頭部外側は横位のヘラ磨き調節。底部に指痕板。	良／ 密、 長石、 石英、 褐色小穂、 粒子含む／ 浅黄色	口縁部3/4、 胴部残存
幼生土器 鉢	43-13 32-43-13 SD54	13.5 12.0 6.0	口縁部は、直立気味に立ち上がり、口唇部をやや内側に折り曲げる。頭部は、中位に最大径がくるやや偏平の球形。	全體にハケ調整を施す。底部に木素痕あり。	良／ やや密、 灰色、 褐色小穂、 長石、 雲母粒子 含む／ 橙色	口縁部1/2、 胴部3/4、 底部残存
幼生土器 壺	43-14 32-43-14 SD54	7.1 6.1 3.3	口縁部は、外反しながら圓く。 口唇部はやや内斜する。口縁部が制脚部が頭部より大きくなる。 底部は、輪状底。	口縁部は、ハケ後ナデ調整。 底部内面に指痕板顯著。	良／ 黒斑あり 密、 小穂、 長石、 石英、 褐色、 灰色粒子含む／ 浅黄色	頭部1/2、 底部残存
幼生土器 鉢	43-15 32-43-15 SD54	11.5 10.1 5.9	口縁部は、近くやや外反しながら直線的に立ち上がる。口唇部は、外斜させる。底部は、平底。	口縁部から頭部にかけ、外周底の磨きを施す。口縁部内面は横ナデ調整。	良／ 密、 長石、 石英、 褐色小穂、 雲母粒子 含む／ 浅黄色	口縁部～ 頭部3/4、 底部残存
幼生土器 壺	44-1 33-44-1 SD54	19.9 (32.3) 34.8	口縁部は、直角でからやや内湾気味に立ち上がる口唇部をもつ。 頭部は、なで肩状で下位に最大径がくる下部型。	口縁部4ヶ所に3本一單位の棒状浮文を張りつける。底部には、断面二角の文帯を設け、跡により扁形文・横楕文を継ぎ返す。	良／ 密、 粗、 白粒子含む ／ 浅黄色	

第8表 発生土器觀察表⑫

法量値の() 残存倉 単位はcm

種別 器種	神園図版 写真図版 出土位置 (グリット)	口 径 高 度 底 盤 長 度	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎 土 色 調	備考
発生土器 手こね型	44-2 39-44-2 SD54	(2.5) 3.8	体部を球形につけ底部も丸くする。口縁部は、わずかに指で引き出し、底部に内斜面をつくる。	指で押さえて成形した後、ハケで調整し、その後ナデ。接合部が頗る。	良/ 密、長石、雲母粒子 含む/ 褐色	1/2残存
発生土器 小型鉢	44-3 33-44-3 SD54	(9.5) 5.1 4.0	底部は平底で、内溝しながら立ち上がる。端部は、内斜面をつくる。	器底の慶度が激しいため、調整不明。内面は、ハケ後ナデ調整、底部に木葉痕あり。	良/ 粗、小穂、石英、長 石、灰色粒子含む/ 褐色	頭部1/3、 底部残存
発生土器 手こね型	44-4 33-44-4 SD54	(6.4) 3.6	口縁部は欠損しているが、円筒型に反い体部にやや開き気味の口縁がつくと思われる。底部は中央部をわずかに凹ます。	器底の慶度が激しいため、調整不明であるが、ハケ後ナデ調整か? 内面は、指成形後接合のハケ調整。	良/ やや密、長石小穂、 雲母、石英、灰色粒 子含む/ 褐色	頭部、底部残 存
発生土器 片口鉢	44-5 33-44-5 SD54	19.6 12.7 6.6	サラダボール状に内溝しながら立ち上がり、端部は、ナデにより丸く收める。底部は、中央部をやや凹ませる。	斜位のハケの後、縱方向の慶きを施す。口縁部は、強い横ナデ。底座あり。底部に木葉痕あり。	良/ 密、長石、灰色、褐 色小穂、粒子含む/ 浅黄褐色	
発生土器 鉢	44-6 33-44-6 SD54	(14.0) 7.2 5.0	輪状を呈し、端部は、やや内斜面をつくる。底部は、輪状底。	底部外側は、斜位のハケ後ナデ調整。内面は、椎位のハケ後ナデ調整。口縁部は、強い横ナデ。	良/ やや密、長石、褐色 灰白色小穂、雲母含む/ 褐色	1/2残存
発生土器 小盤蓋	44-7 33-44-7 SD54	(8.0) 8.6 5.0	やや外反しながら立ち上がる口縁部は、溝底を肥厚させ、丸く收める。体部は、上位に最大径があり、極端な屈曲面を呈す。	口縁部は、ハケ後ナデ調整。体部は、上半分は、横位の慶き、下半分は、縱位の慶き調整。	良/ 粗、長石、石英小穂、 褐色粒子含む/ 浅黄褐色	ほぼ完形
発生土器 小型鉢	44-8 33-44-8 SD54	(9.7) 8.5 (5.0)	口縁部は、やや内溝しながら立ち上がり、端部に内斜面をつくる。体部は、中位よりやや下に最大径がある偏心な形態を呈す。	口縁部は、椎ナデを施すが、全体的にハケ後削き調整。口縁部に工具により沈黙。	良/ やや密、長石小穂、 灰白色小穂含む/ 浅黄褐色	口縁部1/2、 脚部、底座わ ずかに残存
発生土器 台付型	44-9 33-44-9 SD54	17.8 27.5	やや外反しながら直線的に立ち上がる口縁部の溝底は水平面をつくる。体部は、脚部で、やや低いハの字型に開く舌部がつく。	口縁部をハケ後椎ナデ。削み目は、端部の水平面の外側に規則的に施す。体部外側は、Bハケ、内面は、普通のハケ工具。	良/ やや粗、長石小穂、 石英、灰色粒子含む/ 浅黄褐色	脚部、脚部 1/3残存
発生土器 台付型	44-10 34-44-10 SD54	(13.2) (15.8)	口縁部は、「く」の字状に外反せ端部を丸く收める。体部は、やや上方に最大径がある球形を呈す。	削み目は、大きく深く不規則に施す。体部外側は、斜位のハケ、内面は、脊面の慶度が激しいため、調整不明。	良/ 粗、長石、灰色、褐 色小穂、粒子含む/ 浅黄褐色	口縁部1/3、 脚部2/3残存
発生土器 台付型	44-11 SD54	14.3 (12.4)	口縁部は、程やかに外反し溝部を丸く收める。体部は、やや長い球形を呈す。	口縁部は、椎ナデ後、椎状工具により削み目を施す。器外側には、すすぐ付しており、京誠が著しい。	良/ 粗、赤色、白小穂、 粒子含む/ 褐色	口縁部2/3 残存
発生土器 小型鉢	44-12 34-44-12 SD54	12.6 14.0 8.3	口縁部は、大きく外反し口縁部を肥厚させ、端部を丸く收める。脚部は、上位に最大径がある扁平な形態を呈す。	削み目は、粗く不規則に施す。体部は、ハケ後やナデ調整を施す。すすぐ付しておる。	良/ 粗、多量の纏合む/ ぶい褐色	1/2残存
発生土器 台付型	44-13 34-44-13 SD54	(14.0) (14.4)	口縁部は、「く」の字状に外反し端部に内斜面をつくる。ほとんど丸みをもたない体部は、下手で削曲し、底部に凹む。	口縁部は、横ナデ。削み目は、外斜面の外側に不規則に削る。体部は、斜位のハケ工具により調整。	良/ 粗、白、赤、黑小穂、 粒子含む/ 灰褐色	
発生土器 小盤蓋	45-1 34-45-1 SD54	(15.4) (13.0) 6.4	口縁部は、程やかに外反し、溝部は、丸みをもつた外斜面をつくる。体部は、中位に最大径がある扁平な形態。	口縁部は横ナデを施し、ハケ工具により不規則な削み目を施す。体部は、斜位のハケ調整。	良/ 密、白、赤、黑小穂、 粒子含む/ ぶい褐色	スス付着
発生土器 台付型	45-2 33-45-2 SD54	8.0	「ハ」の字型に開く低い台部に直線的に立ち上がる脚部の下ががつくる。接合部分で欠損。	体部外側は、横位と椎位のハケ溝。台部は内側で丁寧なハケ。接合部に台部の内側から粘土を張りつけ補強する。	良/ 密、長石、灰色、褐 色小穂、粒子含む/ 褐色	不規1/2、 脚部残存

第8表 弥生土器調査表⑩

法量値の() 残存倉 單位はcm

種別 基種	神岡図版 写真図版 出土位置 (グリッド)	口 径 高 度 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎 土 色 調	備考
弥生土器 台付甕	45-3 34-45-3 SD54	(18.2) 14.5 (22.0)	口縁部は「く」の字状に外反し端部は向間にやや捉張しながら外筋面をつくる。体部の下位に最大径がくる下彫れ形態を示す。	口唇部外縁に不規則な刻み目を施し、体部は12本一単位のハケ工具により調整。内面は、板ナデ調整。	良／ 密、石粒、長石、灰 母粒子含む／ にぶい橙色	口縁部1/2、 肩部2/3残存
弥生土器 台付甕	45-4 SD54	(20.5) (22.2)	口縁部は、やや外反しながら立ち上がり、端部に水平面をつく。胴部は、中位上部に最大径がきて、やや丸みを帯びる。	外面は、5本/cmの斜位のハケ調査。 口唇部には、規則的に刻み目を施す。	良／ 密、長石、灰色小穢 料含む／ にぶい橙色	口縁部わずかに、肩部 1/2残存
弥生土器 台付甕	45-5 34-45-5 SD54	21.6 (16.2)	口縁部は、外反して開き端部はやや肥厚させ、平坦な外筋面を作る。体部は、やや扁平な球形。	口唇部平透瀬の外側に深い刻み目を施す。外縁は、斜位のハケ調査。内面は、15本単位の横位のハケ。	良／ 密、長石、黒色粒子 含む／ 浅黄褐色	口縁部4/5、 肩部残存
弥生土器 台付甕	45-6 SD54	17.0 (17.5)	口縁部は、「く」の字状に外反し口唇部をやや内側に傾け端部に無い斜面を作れる。体部は、球形を呈す。	口縁部内外面を頭著な横ナデ。外面は、斜位のハケ調査後、ナデ。	良／ 黒斑あり 密、長石、石英、褐 色、灰色小穢、粒子 含む／ 浅黄褐色	口縁部～肩 部残存
弥生土器 台付甕	45-7 34-45-7 SD54	16.0 (18.5) 17.2	口縁部は、直立て立ち上がり端部を丸く收める。体部は、丸みを帯びた長型胴。	口縁部内面は、6本/cmのハケ調査。 口唇部は、規則正しい刻み目を施す。 体部は、器底の磨滅が激しいため、調 整不明。	良／ 密、小穢、石英、白 粒子含む／ 淡橙色	口縁部1/2、 肩部残存
弥生土器 台付甕	45-8 34-45-8 SD54	18.5 (16.9)	口縁部は継やかに外反し、端部はやや肥厚させて水平面をつくる。体部は、丸みを帯びる。	口縁部ナデ調整。口唇部外縁にハケ 工具により刻み目を施す。5本/cm のハケを体部外縁に施す	良／ 粗、長石小穢、粒子 雲母、灰色粒子含む ／緑色	口縁部～肩 部2/3残存 スス付着
弥生土器 台付甕	46-1 SD54	15.5 14.7 17.1	口縁部は、「く」の字状に外反し口唇部をやや内側に折り曲げ、平坦面をつくる。体部は、下彫れ型を呈す。	口唇部端部に不規則な刻み目を施し、 口縁部内面に横ナデ。体部は、斜位 のハケ調査。ド手筋は粗いハケ工具 により調整。	良／ 密、小穢多量に含む ／淡橙色	1/2残存 スス付着
弥生土器 台付甕	46-2 SD54	(25.0) (12.7)	口唇部は、「ハ」の字状に外反し端部はより強張を作る。口縁部が胴部最大径より上彫る堆積の形態を示す。	口縁部には、刻み目がみられず端部 を鋭により曲面化する。体部は、4本 /cmの粗いハケで横位に調整。	良／ 密、小穢多量に含む ／にぶい橙色	口縁部2/3 残存
弥生土器 高坏	46-3 35-46-3 SD54	(20.3) 17.0 (11.5)	瓶状の坏部に「ハ」の字状に直線的に 内側に縦溝がつく。口唇部は内斜面 をつくり、坏部底にわざかに後を もつ。	口縁部は、横ナデが頭著で、体部は、 横位の磨き。表面に三方透かし有り。 脚部は、ナデにより、丸く收める。	良／ 密、長石、石英、灰 色小穢、粒子含む/ 淡黄色	
弥生土器 高坏	46-4 35-46-4 SD54	22.7 20.3 12.2	瓶状の坏部にやや内済しながら開く 脚部をもつ。口唇部は、丸く收め、 坏部底部に後をもつ。	口唇部はナデ調整。全体に縱位の磨 きを頭著に施し、脚部下半には黒斑 が見られる。三方透かしは、脚の上 位につく。	良／ 黒斑1ヶ所、 密、少量含む/ 橙色	坏部2/3残 存
弥生土器 高坏	46-5 35-46-5 SD54	20.0 (15.2)	やや内済しながら立ち上がる口縁部 端部は水平に削取られる。脚部は、 横位から開く。坏部底に後をもつ。	全体的に縦位の磨きを施すが、口縁 部は、内外面ともナデを施す。四方 透かし、位置は2個ずつ偏ってい る。	良／ 密、赤チャート多量 ／黄褐色	脚部1/2残 存
弥生土器 小型高坏	46-6 35-46-6 SD54	(10.6) 9.6 5.6	坏部底に後をもち、内済しながら上 がり、口唇部に内斜面をもつ。脚部は、 要の合部を思わせる形態。	全体にハケ後ナデ調整を施す。脚部 外縁には、指頭痕が頭著である。器 底の磨滅が激しいため調査不明。	良／ 粗、長石小穢、灰 色砂粒含む/ 褐色	1/2残存
弥生土器 高坏	46-7 35-46-7 SD54	20.7 22.6 12.7	坏部底に後をもち、直線的に立ち上 がり、端部は外斜面をつくる。脚部 は、下半内済しながら開く形態で ある。	坏部に黒斑がみられる。全体的に縦 位の磨きを施し、内面は、斜位の磨 き。脚部端部は、ナデ頭著。	良／ 黒斑1ヶ所、 密、小穢含む/ にぶい橙色	坏部3/4、 脚部 2/3残存
弥生土器 高坏	46-8 35-46-8 SD54	21.8 21.3 10.6	深い瓶状に口縁部を大きく外反さす る坏部に下部をやや内済させながら開く脚部がつく。口唇部は、丸 く收める。	口唇部は、ナデ。全体に縦位の磨き。 三方透かしがつく。	良／ 粗、小穢、白色粒子 含む/ 灰黄色	1/2残存

第8表 弥生土器観察表④

法量値の()残存倉 単位はcm

種別 器 種	博国圖版 写真図版 出土位置 (グリッド)	口径 高 底 径 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎 色 調	備考
弥生土器 高环	46・9 39・46・9 SD54	(5.2) (13.4)	腹部下平しか残らないが、唇部に突起を有する二重口縁状の形態で、突起の下には、長脚門の透かしを有する。	外面は、腹位の焼きを施し、突起には、ヘラ状工具で瘤面をつくり沈板を入れる。透かしは、5ヶ所に設ける。	良／ 青、白粒子含む／ にぶい褐色	脚の右部 1/2残存
弥生土器 高环	46・10 39・46・10 SD54	(5.5) (17.0)	脚部下平しか残らないが、唇部に突起を有する二重口縁状の形態で、突起の下には、長脚門の透かしを有する。	全体に腹位の焼きで測定し、突起は、丁寧にナヂて仕上げる。突起の下部に黒斑あり。透かしは、5ヶ所に設ける。	良／黒斑1ヶ所 青、白粒子、 砂粒含む／ 淡黄褐色	脚の右部 1/2残存
弥生土器 高环	47・01 36・47・1 SD54	(23.5) 18.5 (13.7)	环部は斜め方向に一重立ち上がり、腰をもってさらに大きくなり反する。 脚部は、下平をラッパ状に大きく開く。	口縁部は、内外面とも横ナデ。脚部端部も横ナダ。全体的に腹位の焼きを施す。	良／ 青、長石、灰青、 褐色小粒、青付含む／ 褐色	环部1/2、 腹部1/2 残存
弥生土器 高环	47・2 36・47・2 SD54	20.5 18.7 11.4	环底部にわざかに後をもじ直線的に立ち上がる。底部は、丸く收める。 脚部は、やや内消気味に「ハ」の字状に開く。	口縁部内外面とも磨きの上に横ナデを施し、焼きを消す。环部内部に折痕痕が難波にみられる。	良／ 青、多量の褐色含む／ にぶい褐色	
弥生土器 高环	47・3 SD54	(16.3) 14.5	山脚部は欠損しているが、环部は大きく横状に開く。脚部は、下平を外反させながら開く。脚底部は外側に向う接地面とならない。	环部は、前後方向の細かい焼きを施し、脚部は腹位の焼きで環部は横ナダ。三方透かし。	良／ 青、長石、石英、 灰青小粒、青付含む／ にぶい褐色	环部1/4、 脚部は 残存
弥生土器 高环	47・4 36・47・4 SD54	20.0 (8.3)	环部は、碗状で口縁部を水平になるまで大きく外反させる。中位にならかな腰をもつ。	内外面とも腹位の焼きであるが内面口部は横ナデの焼きを施す。	良／ 青、多量の褐色、 白粒子含む／ 明赤褐色	环部1/3 残存
弥生土器 高环	47・5 SD54	(16.9) 11.9	口縁部は欠損しているが、环部は大きく横状に開く。脚部は、下平を外や内消気味に開く。接地面は脚部となる。	全体に腹位の焼きを施し、脚部の脇曲面に三方透かしを設ける。脚部は、内外面とも横ナダ。	良／黒斑1ヶ所 青、石英、 灰色粒子含む／ 淡黄色	
弥生土器 高环	47・6 36・47・6 SD54	21.4 17.3 11.4	环底部に後をもち、そこから内消気味に立ち上がり、底部は内斜面をつくる。脚部は、内消しながら開く。	全体に腹位の焼きを施し、口縁部は、内外面とも横ナダ。三方透かしを設ける。	良／ 青、褐色、 黑粒子多量に含む／ 淡褐色	
弥生土器 高环	47・7 36・47・7 SD54	(20.5) 11.2	环底部に後をもち、そこから内消気味に立ち上がり、底部は内斜面をつくる。脚部は、内消しながら開く。	全体に腹位の焼きを施し、口縁部は、内外面とも横ナダ。三方透かしを設ける。	良／黒斑2ヶ所 やや青、灰石小粒、 褐色小粒、青付含む／ 淡褐色	口縁部～ 环部1/6、 脚部残存
弥生土器 高环	47・8 36・47・8 SD54	18.7 17.6 9.4	环底部に後をもち、そこから内消気味に立ち上がり、底部は内斜面をつくる。脚部は、内消しながら開く。脚部に凹凸が付いている。	全体に腹位の焼きを施し、口縁部は、内外面とも横ナダ。三方透かしを設ける。脚部は内外面とも横ナダ。	良／ 黒斑1ヶ所 青、石英、 褐色小粒、青付含む／ 黄褐色	
弥生土器 高环	47・9 SD54	(24.6) (11.2)	脚部は欠損しているが、环部中位にならかなる後をもつ、深い瓶状の大形の环部。	細かい瓶状位の焼きを施し、口縁部は内斜面とも横ナダ。内外面にススが付着している。	良／ 青、赤、白、 黑色粒子含む／ にぶい黄褐色	口縁部1/3 残存 スス付着
弥生土器 壺	48・1 37・48・1 SD54	13.9 34.8 28.9 8.0	口縁部は丸く大きく外反し、底部を丸く收める。体部は、下平に雙人足をもつて墨縁模様を有する。底部は、平底。	器底の焼成が徹しいため、調整不良であるが、瓶位のハケを巡らし、後焼きか？体部外面に黒斑有り。	良／ 黒板あり 青、白粒子含む／ 明褐色	
弥生土器 壺	48・2 SD54	(17.4) 23.1 7.4	口縁部は欠損しているが、体部は、中位に最大径をもち直線形態を呈する。底部は、平底。	体部上半は、ハケ後瓶位の焼きを施し、下半は、横位の焼き。内面は、横合跡の横擦痕が顯著である。	良／ 青、小粒多量に含む／ 淡褐色	脚部、 底部残存
弥生土器 壺	48・3 SD54	(17.9) 22.8 6.6	口縁部は、欠損しているが、やや脚部が取る跡痕を有する。底部は、一部點狀を垂りつけ、輪状底と成す。	脚部に細かい瓶位の焼きを施し、脚部位にかけ窓により、微裂縫、縦状、格子文、扇形文を施す。体部中位は瓶位の焼き。	良／ 青、褐色、 白粒子多量に含む／ 褐色	脚部、 底部残存

第8表 弥生土器観察表⑮

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	拂因國版 写真図版 出土位置 (グリット)	口 径 高 度 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎 土 色 調	備考
弥生土器 壺	48・4 37・48・4 SD54	(10.6) 23.4 7.9	口縁部はやや外反しながら直線的に立ち上がり、腹部を丸く取る。脚部は、球形脚を呈し、底部中央部に凹みをつくる。	口縁部は、内外面とも模ナデ。器面の剥落が激しいため、調査不明であるが、底部上半は、施釉の痕跡か?底筋に本墨痕有り。	良/ 密、良石、褐色、灰 色小織、粒子含む/ 橙色	1/2残存
弥生土器 壺	48・5 37・48・5 SD54	(16.4) (11.5)	口縁部は、縦やかに立ち上がり縂をもって、やや外反気味に聞く複合口縁、腹部は水平面をつくる。	口縁部に複判突で施紋。口縁外面は2段の羽状文を施し、腹部から横縞文、羽状文の繰り返し施紋。円形容文を強烈に付ける。	良/ 粗、長石、石英、 灰色小織、粒子、 雲母含む/浅黄色	口縁部、肩部 わずかに 残存
弥生土器 壺	48・6 37・48・6 SD54	13.5 25.0 22.7 6.5	口縁部は、外反して立ち上がり瓶面三角状に折り返す。腹部は水平面をつくと、脚部は、やや肩部が張るド脚型を呈す。	口縁部には、施釉のハケ。折り返し面は指で成形した後ナデ調整。間により、横縞文、羽状文、波状文を施紋する。	良/ 密、長石、褐色小織 粒子、石英含む/ 褐色	ほぼ完形
弥生土器 壺	49・1 37・49・1 SD54	16.7 29.4 25.7 (7.8)	口縁部を大きく折り返した複合口縁部をもち、腹部は水平面をもつ。底部は、丸みをもった長脚型を呈す。	口縁部は、外面を削れた波状文。内面に工具の角によりナビ段の羽状文を施す。底部は、横縞文刻突文を繰り返し、円形容文有り。	良/ 密、多量の雲母含む/ 淡黃褐色	
弥生土器 壺	49・2 SD54	16.7 21.4	口縁部は欠損しているが、ほぼ球形の体部。底部は平底。	測認を横ナデ。体部は、3段に継磨きを施し、底部外側に直彫形の痕が残る。内面には、細いハケ調整。	良/ 密、多量の雲母含む/ 明赤褐色	1/2残存
弥生土器 壺	49・3 37・49・3 SD54	(8.0) 12.5 12.0 6.0	口縁部は、大きく外反し、腹部は、円窓型にやや証記し半崩頂をつくる。体部は、D字に腰をもつややド脚型を呈す。	口縁部に2ヶ所証記穴を穿つ。口縁部は、T字により2ヶ所の沈線を施す。体部には、横縞文と羽状文を繰り返し施紋する。	良/ 密、長石、褐色、 灰色小織、石英、 雲母含む/浅黃褐色	口縁部1/2、 肩部、底部 残存
弥生土器 壺	49・4 38・49・4 SD54	(9.2) 17.7 13.3 6.1	口縁部がハの字型に長く直線的に開く長脚型。体部は、丸みをもった左ねぎ型を呈し、底部中央は凹ませる。	全体的に横位の磨きを施し、口唇部と頭部に一部横ナデを施す。口縁部内面には、指が入るところまで横ナデ。	良/ 密、長石、褐色小織 雲母含む/ 淡茶褐色	
弥生土器 壺	49・5 SD54	9.4 (5.6)	口縁部は縦やかに外反しながら開き、腹部を丸く取る。体部は、偏平。	全体に細かい横位の磨きを施し口唇部を横ナデ。体部に黒斑がみられる。	良/ 密、白粒子含む/ 淡赤褐色	口縁部～ 肩部1/3 残存
弥生土器 手こね壺	49・6 39・49・6 SD54	(4.1) 3.0 4.0	浅い筒型に指で成形し、口縁部腹部を丸く取る。底盤は、平底。	ハケを温らせた後、ナデ調整。3ヶ所絞消しの穴を穿つ。内面は、横位のハケ調整し、底部は鍾乳なつくり。	良/ 密、長石小織、雲母、 灰色粒子含む/ にぶい黄褐色	ほぼ完形
弥生土器 壺	49・7 SD54	(16.0) (15.0)	ややくの字型に外反して、腹部を丸く取る。体部中位に最大径があり、横方向に丸みを帯びた球形脚を呈す。	口縁部は、穠い横ナデを施し、口縁部外側に斜めに刮み目を施す。底部には、黒斑有り。	良/ 風致あり やや粗、長石、灰色、 褐色小織、粒子含む/ 淡黃褐色	肩部1/2 残存
弥生土器 壺	49・8 38・49・8 SD54	26.3 25.8 28.7 9.8	口縁部は、縦やかに外反し、腹部はやや外斜曲をつくる。体部は長脚型。	口縁部の崩みは、斜めに規則性高く施される。器底から体部にかけて、器底方向のハケ調整を施し、内面は横位のハケ調整。	良/ 密、多量の雲母、 白粒子含む/ 淡黃褐色	
弥生土器 壺	50・1 SD54	(17.0) (20.0)	口縁部は、縦やかに外反し、腹部に外斜曲をつくる。体部は球形脚を呈する。	口縁部は、内外面とも穠い横ナデを施し、後T字で刮み目をつける。底部は、ハケ調整。	良/ 密、良石、灰色小織、 雲母含む/ にぶい黄褐色	口縁部1/3、 肩部2/3 残存
弥生土器 高杯	50・2 38・50・2 SD54	25.6 20.4 12.6	杯部は、斜め方向に、腹立ち上がり、それをもってさらに大きくなりさせながら立ち上がる。脚部は、器底が内凹しながら開く。	口縁部は、強くナデで外斜曲をつくる。全体に横位の磨きを施し、脚部は、横ナデ。黒斑有り。	良/ 黒斑1ヶ所 密、雲母含む/ にぶい黄褐色	
弥生土器 高杯	50・3 38・50・3 SD54	26.0 19.1 14.0	深い碗状の杯部の縁部に水平面をつくる。脚部は中位からやや内凹しながら広がり、底部は錐地盤とする。	全体的に横位の磨きを施し、ところどころハケが残る。三方造りを設ける。	良/ 黒斑2ヶ所 密、良石、石英、 褐色、灰色小織、 雲母含む/浅黃褐色	杯部1/2、 肩部残存

第8表 弥生土器類表④

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	伴用器 写真版 出土位置 高さ 最大径 (グリッド)	口径 器高 最大径 (7.5)	形態の特徴	手法の特徴	後成 跡土 色調	備考
弥生土器 片口高环	50-4 SD54	22.1 (7.5)	浅い碗状の环部に指で注ぎ部を成形する。口唇部は、やや肥厚させ、水平面をつくる。	环部外面は、不定方向のハケを巡らし、口唇部内面は横ナナ。环部内面は、ハケ能数回の磨きを施す。	良／ 密、長石、石灰、雲母、灰色、褐色粒子含む／淡黄色	环部残存
弥生土器 高环	50-5 SD54	19.0 (7.9)	环底部は、やや斜めに開き、腰をもってやや外反しながら立ち上がる。端部は丸く收める。	口縁部は内外面とも横ナナを施す。全体的に縱位の磨き。黒斑有り。	良／黒斑1ヶ所 密、長石、褐色、灰色小織、雲母含む／青白色	环部3/4残存
弥生土器 高环	50-6 38-50-6 SD54	20.0 20.2 (11.7)	环底部は、やや斜めに開き、腰をもって大きめ外反しながら立ち上がる。端部は、外斜面をつくる。脚部は中央から開く。	口縁部内外面に横ナナを施す。二方通かしを設ける。脚部下半は、斜位のハケ調整が強調に残る。	良／ 密、長石、石灰、雲母粒子含む／浅黄色	
弥生土器 高环	50-7 38-50-7 SD54	(35.0) 24.6 13.6	深い碗状の环部の口縁部をさし外側に引き出し、浦部は外斜面をつくる。脚部は、下半が内湾しながら開く。	全体的に縱位の磨きを施し、口縁部は内外面とも横ナナ。脚部端部は、強いナナ調整で接地面をつくる。三方通かしを設ける。	良／ 密、長石、褐色、灰小織、雲母、石灰含む／淡黄色	1/2残存
弥生土器 高环	50-8 39-50-8 SD54	(11.4) 13.6	浦部だけであるが、上半分はやや開き気味の円筒形を呈し、下半部を大きく水平に開く。	口縁部には、横擦文、刺突羽状文を施り巡らし施す。浦部は、内外面とも下方上方向の磨きを施す。	良／ 密、灰色小織、長石、白、雲母粒子含む／黄白色	肩上部、裙部 わずかに残存
弥生土器 卷	52-1 40-52-1 SD57	16.4 29.4 27.3 7.6	口縁部は、外反しながら立ち上がり、断面長方形に折り返す。体部は、中位に最大径がある球形膨らみを呈す。	器面の摩耗が激しいため、調整不明。底部中央がわずかに凹み工具の痕を残す。	良／ 密、長石、褐色小織含む／黄褐色	口縫部5/8、 脚部2/3、底部残存
土師器 壺	52-2 40-52-2 SD57	(6.0) 5.2 5.9 3.6	口縁部は、二重口縁を呈し、体部は丸みを帯びた長楕型で、径が小さな平底の底部に生る。	口縁部外面は、丁寧な横ナナ、内面は、細かい磨き調整。体部は、斜位あるいは、縱位のハケが残る。底部は、薄い。	良／ 密、白、褐色、灰色小織含む／淡黄褐色	口縫部、脚部 3/4、底部残存
弥生土器 柳小壺	52-3 41-52-3 SD59	15.5 31.5 24.0 7.8	口縁部は大きめ内湾させ、垂轍に近い内斜面をつくる。体部はやや偏平な球形を呈し、底部中央がやや凹む。	口縁部外面に細かい工具で、刺突羽状文を施す。全体にハケ後磨き調整。	良／ 密、白、灰色、褐色小織含む／淡赤褐色	口縫部1/3、 脚部、底部残存
弥生土器 小型壺	52-4 40-52-4 SF50	12.0 13.1 5.2	口縁部が欠損しているが、ほぼ球形の体部。底部は輪状底を呈する。	器皿の摩耗が激しいため、調整不明。器皿内面は、ナナ溝。	良／ 密、長石含む／ 弱赤褐色	脚部、底部残存
弥生土器 小型壺	52-5 40-52-5 SF50	12.0 13.7 7.0	口縁部が欠損しているが、体部や下位に最大径がくるD型型を呈する。	器皿の摩耗が激しいため、調整不明。内面は、ナナ溝。	良／ やや密、白、灰色、褐色小織含む／淡赤褐色	脚部、底部残存
弥生土器 壺	52-6 40-52-6 SF50	14.8 21.5	口縁部は大きめ外反して開き、端部をヒドに抜張して外斜面をつくる。体部は、丸みを帯びて下半部に最大径がある。	口縁部を強く横ナナし、内面に波状文を施す。体部は、側により、横擦文、刺突羽状文が施され、その上を複数回施設する。	良／ 白、白小織、褐色粒子含む／淡赤褐色	口縫部2/3、 脚部1/2残存
弥生土器 壺	52-7 40-52-7 SF51	19.2 18.8 (22.0)	口縁部はやや外反して直線的に立ち上がり、浦部をやや肥厚させて丸く收める。体部は、上位に最大径がある。	口縁部は、内外面とも横位にハケ調整。刻み目は、丸く規則的に施される。内面は、粗い工具のハケ。	良／ 密、白、灰色、褐色小織含む／ 淡褐色	口縫部3/5、 脚部1/2残存
弥生土器 壺	53-1 43-53-1 SF51	29.9	腹部に腋窓三角形の突起をもつ。体部は、下半部に最大径がある。丸みを帯びたD型型を呈す。	突起の上下を強い横ナナ。腋窓の摩耗が激しいため、調整不明。体部は、横方向の磨きか？	やや不均／ 黒斑あり 密、長石、灰色小織、白チャート含む／ 明赤白色	脚部1/2残存
弥生土器 鉢	53-2 41-53-2 SF51	(13.0) 11.2 12.9	口縁部はくの字型に外反し、浦部をやや肥厚させて丸く收める。体部は、丸みを帯びたやや偏平型で、底部は輪状底。	口縁部は、横ナナによりやや外斜面をつくる。全体に縱位の磨きを留め施す。底部に小葉底有り。	良／ やや密、黒、灰色小織、白チャート、石灰含む／	口縫部わざ かに、断面、底部残存

第8表 弥生土器観察表①

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	神國出版 写真図版 出土位置 (グリッド)	口縁 器底 底径 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎上 色調	備考
弥生土器 高坏	53・3 SX7	11.4 10.4	脚部はやや開き、中位からさらに直線的に開く。端部接地面はややつぶれ、内側に粘土が飛び出す。	外面は、縦縫の焼き調整。裾部は、横ナデ。偏った三方透かしを設ける。	良／ 密、長石、灰色、褐色小礫、石英粒子含む／ 褐色	脚部残存
弥生土器 壺	53・4 43・53・4 SF51	22.0 21.6 23.5	口縁部はやや外反しながら直線的に立ち上がる。端部はやや外斜面をつくる。体部は上位に最大径がある。	口唇部外面に不規則な組み目を施す。外面上は、全体的にスジが付着する。	良／ 密、白、暗灰色小礫含む／ 暗褐色	口縁部1/4、 脚部3/4残存 スヌ付着
弥生土器 高坏	53・5 42・53・5 SF51	(20.5) 17.6	底部底部に滑らかな縦をもちやや内湾しながら立ち上がり、端部は丸く収まる。	器頭の摩滅が激しいため、調整不明。四方透かしを設ける。	良／ 密、白、灰色、褐色小礫含む／ 赤褐色	底部1/2、 脚部3/4残存
弥生土器 壺	53・6 SX10	(17.6) 9.2	口縁部は、ラッパ状に開き、端部を肥厚させて、やや外斜面をつくる。	口縁部は内外面とも横ナデ。腹部に7本一単位のやや深い横縞文を施す。腹部内面は、指添痕が顯著に残る。橙色	良／ 密、白、灰色、褐色小礫含む／ 橙色	口縁部2/5 残存
弥生土器 鉢	53・7 41・53・7 SX11	13.7 11.8 14.2 5.1	口縁部は垂直に立ち上がり、端部を丸く收める。体部は、偏平な梢円状で往々小さな底部がついため下半がしづむ。	口縁部は、縦縫の焼きを施し、口唇部は横ナデ。器頭の摩滅が激しいため、調整不明。	良／ 密、白、灰色、褐色小礫含む／ 淡褐色	口縁部～脚部1/2、底部残存
弥生土器 鉢	53・8 41・53・8 SX17	11.0 11.3 (12.6) 6.6	口縁部と体部の境が明瞭でなくやや外反気味に立ち上げ、端部に内斜面をつくる。底部は、平底。	器頭の摩滅が激しいため、調整不明。底部に薄く木炭痕が残る。	良／ やや粗、白、灰色、褐色小礫含む／ 淡褐色	口縁部1/4、 脚部1/2、底部残存
弥生土器 小型壺	53・9 41・53・9 SX7	6.6 8.4 5.8	口縁部は緩やかに外反し、端部に外斜面をつくる。体部は、中位が膨らんだ偏平型で、底部は中央をわずかに凹ませる。	器頭の摩滅が激しいため、調整不明。	良／ 密、白、灰色、褐色小礫含む／ 淡褐色	口縁部1/3、 脚部1/2、底部残存
弥生土器 手こね壺	53・10 SX11	(4.1) 3.8 (3.2)	おちょこ状の形態で、端部を尖らせる。内面に指成形のため縦を残す。	外面上は、指ナデ調整。内面は、わずかにハケが残るが、指頭圧痕が顯著である。	良／ 密、長石、赤黒色粒子含む／ 浅黄色	口縁部1/6 残存 スヌ付着
弥生土器 壺	53・11 D-5	(6.8) 6.4	口縁部は外反しながら直線的に立ち上がり、端部は外斜面を成す。体部は球形を呈す。	口唇部横ナデ。外面上は、縦縫の焼き。内面は、指で引き上げるようにナデ。	良／ 密、長石、雲母、灰色粒子含む／ 褐色	口縁部～脚部1/3残存
弥生土器 鉢	53・12 E-11	5.8 9.1 4.4	口縁部は欠損しているが、体部は中位がかなり張った偏平型で底部は平底。	腹部にわざかに横縫の焼きがみられるが、その他は器頭の摩滅が激しいため、調整不明。 黒斑有り。	良／ 黑斑あり 密、長石、雲母、赤チャート含む／ 褐色	脚部～底部 残存
弥生土器 手こね壺	53・13 E-5	6.8 3.9	口縁部は欠損しているが、ラグビーボール状の体部の一方を指で凹ませたような底部がある。	外面上は、ハケ後ナデ調整。指添痕が顯著に残る。黒斑有り。	良／ 密、灰色、褐色粒子含む／ 浅褐色	
弥生土器 壺	54・1 42・54・1 SX16	6.7 24.8 18.4 6.1	口縁部は、緩やかに外反させ、明確な外斜面をつくる。体部は下部に輪状底を成す。	口唇部と腹部を横ナデ。体部は幅1cmの板状工具により下から上方に向かってナデ調整。内面は、横縫に板ナデ調整。	良／ 密、長石小礫、灰色粒子含む／ 赤褐色	口縁部、脚部 残存
弥生土器 壺	54・2 42・54・2 SX12	6.6 17.6 14.6 5.6	体部下半がかなり張った下彫れ形状を成し、器頭の境が明瞭ではなく、やや外反気味に立ち上がる口縁部がつく。	外面上は、腹方向の焼き、中位から下は横縫の焼き。口縁部内面は、横ナデ。器頭の摩滅が激しいため、詳しい調整は不明。	良／ やや粗、白、灰色小礫含む／ 暗赤褐色	
弥生土器 壺	54・3 42・54・3 SX19	6.6 17.2 7.3	口縁部は欠損しているが、腹部は緩く底からだらかに下彫れ形状を成し体部に移行する。	体部外面上は、条状ハケ工具により、横縫に数単位で施錆する。下半部は、横縫の焼き。	良／ やや粗、長石、雲母、白、黒粒子含む／ 淡赤褐色	脚部3/4残存

第8表 弥生土器観察表⑤

法量値の() 残存倉 単位はcm

種別 器種	博物館版 考古学版 出土位置 (グリッド)	口径 器高 底径 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎土 色調	備考
弥生土器 甕	54-4 SX11	(13.6) (9.7)	口縁部は直線的に外反し、端部を丸く收める。胴部は細長い球形を成す。	口縁部に櫛による削み。胴上部斜削ハケ。内面横削、斜削ハケ。	良／密、褐色小繊、長石、石英、雲母、灰色粒子含む／淡黄橙色	口縁部～ 肩上部1／2 残存
弥生土器 高坏	54-5 42-54-5 SX10	17.6 15.8 10.8	坏部は内湾して立ち上がり、上部で屈曲して外反し、口容部を外反させ端部を丸く收める。脚部はラッパ状に開く。3孔窓。	外曲坏部斜位磨き。脚部斜位磨き。 裾部底位ハケ。内面縦位磨き。脚部横位ハケ。	良／ 密、灰色、褐色小繊含む／ 淡赤褐色	坏部1／3、 脚部残存
弥生土器 高坏	54-6 SX10	(9.5) 9.8	脚部はラッパ状に開き、端部は外側に縁をもつ。	脚部外面縦位磨き。裾部斜位、横位ハケ残る。内面指彫压痕。 器面磨滅。	良／ 密、赤、白、黒粒子含む／ 橙色	脚部残存
弥生土器 高坏	54-7 42-54-7 SX10	(6.0) (13.8)	脚部が二段作りになっており、屈折部には突帯をもつ。突帯の上下に交叉するように円窓あり。上部5ヶ所、下部4ヶ所。	突帯外面に沈窓あり。突帯の上下に縦位磨き。内面は横位、縦位ハケ。 裾部内面横ナデ。	良／ 黒運あり、 長石、石英、 赤黒色小繊含む／ 灰色	脚の台部 1／2残存
弥生土器 鋸	54-8 43-54-8 D-10	8.9 9.8 10.3 3.4	口縁部は直線的に開き、端部を細く尖らせる。胴部は最大径をやや上位にもつ球形を成す。底は丸みを帯びる。	内面は指ナデ。	良／ 密、白、灰色、褐色 小繊含む／ 淡褐色	口縁部1／2、 脚部5／6、 底部残存
弥生土器 壺	54-9 43-54-9 D-8	(11.8) 21.9 (18.4) (8.8)	口縁部は外反して開き、端部は丸みを帯びて外折する。胴部は最大径がやや下位にある球形を成す。	外曲口縁部～胴部斜位ハケ。内面口 縫部斜位、横位ハケ。胴部斜位ハケ、 指彫压痕。	良／ 密、長石小繊、 云母、灰色、 黒粒子含む／ 橙色	口縁部1／2、 肩部1／5、 底部わずかに残存
弥生土器 壺	54-10 表様	(17.0) (9.6)	口縁部は直線的に開き、端部を尖らせる。胴部に突帯をもつ。	口縁部内外縦位磨き。胴部突帯上 下横ナデ。肩部横位ハケ。 内面口縫部縦位磨き。肩部指彫压痕。 器面磨滅。	良／ 密、長石、石英、 黒粒子含む／ 橙色	口縁部1／6 残存
弥生土器 壺	54-11 D-11	(12.8) (13.1)	頸部は直立し、口縁部はやや内湾気味に開き、端部は水平面をもつ。縦やかな肩部を成す。	口縫部内外縦位ハケ。肩部5本の 縦横格子文、波状文、横格文、扇形 文、横線文。内外面腰部～胴部朱塗 り。内面指彫压痕。	良／ 密、長石、雲母、 灰色粒子含む／ 橙色	口縁部1／2、 脚部1／4残存
弥生土器 釜	54-12 41-54-12 E-11	(10.2) (9.2)	口縫部はほぼ直線的に長く開く縫部は水平面をもつ。胴部は偏平な球形を成す。	口縫部は横ナデ後工具による刺突羽 状文4段。胴部斜位ハケわずかに残 る。胴底部縱磨き。内面指彫压痕。 器面磨滅。	良／ 密、長石小繊、粒子 含む／ 橙色	口縫部～ 脚部1／3残存
弥生土器 鉢	54-13 41-54-13 D-5	10.7 8.3 4.0	口縫部は直線的に開き、端部を丸く收める。胴部は偏平な球形を成す。 輪状底。	外曲口縫部～胴部縦位磨き。内面口 縫部縦位磨き。底部ハケ。	良／ やや密、白、灰色、 褐色小繊含む／ 赤褐色	口縫部1／5、 脚部3／4、 底部残存

第2節 古墳時代の遺物

遺構についての説明では、SF23と6・7グリッド出土のこの時期のものを奈良時代～中世の遺構の項に含めて報告したが、ここでは独自の項を設けて報告する。

古墳時代の遺物は、6・7グリッドに集中してみられるが、ほとんどが古墳時代後期の7世紀前半の遺物である。10~12グリッドからも須恵器壺などが出土しているが、この時期より古いものである。

(1) 須恵器

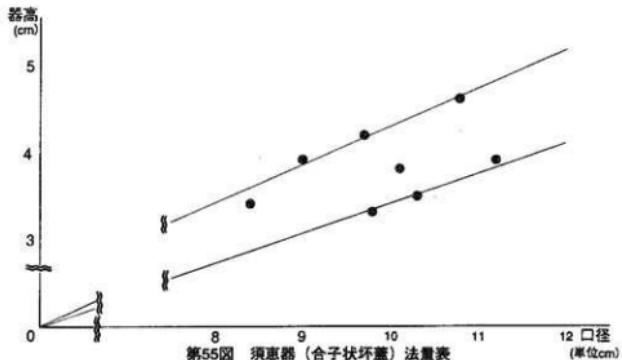
須恵器は、壺蓋・壺身・頸・高壺などが出土している。6・7グリッドから出土しているものはほとんど同時期のものである。胎土観察からほぼ全てが湖西産と考えられる。合子状壺蓋(56-6~14)は、天井部が半球形状で、口縁部を内湾気味に垂直に下ろす形態のものが多く、天井部中央に未調整部分を残し、回転ヘラ削り調整を施す。口縁部は、横ナデ調整を施すものが多い。法量的には、11cm前後と10cm前後、それに8~9cmの3つのグループに分類することができそうである。湖西編年の第III期第1小期にあたる遺物と考えられる。(後藤 1989)

合子状壺身は、3点(56-15~17)出土している。このうち6グリッド出土のものは、(56-15)のみで他は、中世の遺構からの出土である。口径が7~8cm前後と小さく、蓋受け部を内傾させ、端部を丸く収めた形態のものである。

頸(56-24)は、丸みを帯びた体部を持ち、頸部から大きく外反しながら口縁部に移行する形態のもので、注ぎ口は粘土を張り付けて成形する。体部には、列点文を施し、体部の下半に回転ヘラ削り調整をする。高壺は、9グリッドから出土した有蓋高壺(56-25)と6グリッドから2点(56-26, 27)出土している。(56-27)は、半球形の壺部を持ち、裾広がりの脚部を持つもので、これも7世紀代の遺物と考えられる。

(2) 土師器

土師器は、全て壺である。SF23出土のもの(56-1~3)、6グリッド出土のもの(56-4)、12グリッド出土のもの(56-5)がある。(56-1~4)は、口縁部が外反する形態のもので口縁部に強い横ナデを施す。(56-1, 2)は、紡錘形の体部を持つもので、肩があまり張らないものであるが、(56-3, 4)は、肩がかなり張り球胸形の体部のもので台がつく可能性もある。いずれも6世紀から7世紀の遺物と考えられる。また、(56-5)は紡錘形の体部に底は平底のもので、6世紀のものである。



第3節 奈良・平安時代の遺物

(1) 奈良時代の遺物

須恵器

坏蓋（57-1～7）は、いずれも小片で全体の形状が分かるものがないが、弓張り状の形態で天井部に同心円状のヘラ削りを施す。受け部を丸く収めるものとやや外反させ断面三角にするものがある。外径は12～16cmの間にほぼおさまる。坏身は平底無台のものである。（57-8, 9, 14）は、底部を糸切り離し後にヘラ削り調整がされているが、底部の中央部に削り残した糸切り痕を残す。また、（57-10）は箱型坏で、ヘラ削りを施した平底部から銳角に屈曲し、口縁部をやや肥厚させたものである。長頸瓶（57-16, 17）は、頸部が低くなった時期のもので口縁部をやや直立させている。壺（57-18～20）は、口縁部を折り返し凸帯をつくり、下部が断面三角形を呈するものである。その他、短頸壺、壢り鉢などが出土している。また、（57-15）はSD40の直上から出土しているが、灰釉陶器K-14期のものである。

風字硯（58-8）は、第2種傾斜硯第1類風字硯に属するもので、内面中央に縦に凸帯を設け、硯面を左右に二分した形態のもので、第3形式2面硯に分類されるものである。（柄崎1982）背後方部の破片であり、全体の形状がはっきりとしないが、二脚を設けて硯面が前方に傾斜するようにつくり、左右両側に縦帯を有している。しかし、縦帯と中央凸帯がほぼ平行に走ることから両側縁が硯尻に向かって八の字型に開く形態のものではなく、両側縁の開きが少ないとから、ほぼ平行になる形態のものと思われる。硯面は、よく研磨されて使用痕が著しい。墨痕は、不明瞭である。

土師器

上師器の坏は、平底の底部からやや外反しながら立ち上がる形態のもの（57-23～25）で、全体に丹が塗られている。（57-23）の墨書は、「圓川」と判読できそうであるがはっきりしない。また、（57-30, 31）は、高台がついており、碗形状に近い形態である。皿（57-26～29）は、指成型のものでやはり丹が塗られている。壺は、口縁部が外反して水平に開くものが多く、端部を上面にやや肥厚させるものと、口縁部がやや外反する程度で立ち上がるものがある。後者は、古墳時代のものに形状が似ている。

(2) 平安時代の遺物

この時期のものは、SD24とSF08出土の遺物に代表される。また、遺構に伴わないが6・7グリッドを中心に出土した土器にもこの時期のものが含まれる。

灰釉陶器

器灰釉陶器は、高台の形状、底部や体部の調整方法により次の3つに分類した。あくまで、底部の資料を中心であり、全体的な形状を考えたものではない。

I 三日月形の高台を持ち、底部から体部下半にかけてヘラ削り調整を施すもの。K-90にあたる。

II 高台のつくりが断面三角形になり、底部は糸切り後ナデ調整を施すもの。O-53にあたる。

III 高台が爪形状で高く、外側に開くものもある。底部は糸切り後ナデまたは未調整のもの。

SD24 出土の灰釉陶器

分類Iにあたるものは、（59-14）でやや鈍い三日月高台である。底径は8cmで胎上観察から浜北産と思われる。図示していないが同様の破片が3点出土している。分類IIにあたるものは（59-12, 13, 15, 17）で、残りの破片観察からも、SD24はこの時期のものが中心となる。底部は、糸切り後ナデ調整を施すが、底部中央に未調整部分を残し、糸切り痕が残る。灰釉は漬け掛けのものが多くなり、

内面底部に重ね焼き痕が明瞭である。体部は、やや内湾しながら立ち上がるものと直線的に立ち上がるものが見られる。

6・7 グリッド出土の灰釉陶器

分類Ⅱにあたるものとして(63-1~4, 6)がある。(63-1)は、やや鈍い三日月高台であるが、底部が糸切り後ナデ調整が施されており、また底部も厚いためこの時期とした。灰釉は、ハケ塗りが主である。高台が断面三角形を成すものは浜北産のものと思われる。分類Ⅲにあたるものは(63-8, 9)で、高い爪形状に聞く高台を持つ。器壁が薄く仕上げられている。(63-8)は、白色に発色した灰釉が明瞭で百大寺期のものと思われる。また(63-7)は、分類Ⅰにあたり、浜北産のものである。

SF08 出土の灰釉陶器

(61-9)は、やや外側に聞く高い高台を持ち、底部はナデ調整されている。輪花を施し、深くゆったりとしたつくりで、灰釉は漬け掛けする。また、(61-10)は、高い鋭い高台で、底部は中央に未調整部分を残すが、ナデ調整される。いずれも分類Ⅲに含めたい。また、この遺構からは土師器の甕(61-11)も出土している。口縁部を水平になるまで外反させ、端部をやや上向きに肥厚させる形態のものである。

綠釉陶器

綠釉陶器が6グリッドを中心に破片点数で18片出土している。形態が確認できたものは、段皿3点、碗4点のみである。(63-10)は段皿で、軽陶である。見込み部にトチンの跡が残る。釉の発色は良好で口縁部には帯状にたっぷりとつけられている。(63-11)は、碗で、やや外に聞く高い高台がつき、体部は内湾しながら立ち上がるものである。灰釉陶器のピークは、分類Ⅱの時期と考えられることからこの綠釉もこれらの遺物に伴うと考えられる。産地は、東濃あるいは近江であろう。

第4節 中世の遺物

図示した遺物については、遺構ごとに分けて、土器観察表に表したのでそちらにゆずるとして、ここではこの時期の主な遺物についてまとめてみたい。

(1) 山茶碗

この時期の遺物は、山茶碗の出土が圧倒的である。遺構ごとに形態・技法・胎土などに違いがみられ、消費地遺跡として多少の分類が可能と思われる。まず、山茶碗を出土した遺構ごとにその特徴をみていくこととする。

SD05

山茶碗は、底部の破片のみで形態の明確なものがないが、潰れかけているがナデにより調整されている高台で(58-22)には、初般痕が付着する。小皿は、体部が碗状にやや内湾して立ち上がり、口縁部をやや外反させるもの(58-20)とほぼ直線的に立ち上がり、端部を丸く收めるもの(58-19)がある。底部は、厚く糸切りされているため突出する。

SD12

山茶碗は、灰色の胎土で、体部が直線的に立ち上がり高台も粘土紐を張り付けただけのもので剥離が激しい。口縁端部は、内側をとがらせるもの(58-1, 2)である。小皿は、口径に比べて底径が大きい偏平なもので体部は、直線的に立ち上がる。また、胎土は山茶碗と同じ灰色できめが粗い。

SD23

瓦を伴った溝である。図示できたものは、SD12にみられた灰色できめの粗い胎土を持ち、内面は底部と体部の境がはっきりとしていて直線的に立ち上がり、口縁端部はやや肥厚させ、内側に銳角がくる端面となるもの(60-2, 3, 5, 6, 7, 10, 14)がほとんどである。高台は、粘土紐を押さえる

だけの粗末なものではほとんど剥落して無高台に近く、全体に調整が難である。口径が15cm前後のものが多いが、口径が12cm前後と小型化したもの（60-8）もみられる。その他、この遺構では輪花があり、体部が内湾しながら立ち上がり口縁部を外反させるもの（60-1）や同じ形態で輪花がないもの（60-4）、灰白色の胎土で、体部は直線的で立ち上がるが、口径が大きく高台も比較的しかりとした形態のもの（60-11）がみられる。また、須恵器に類似した胎土で、器高は低くやや内湾して立ち上がり、口縁端部を丁寧なナデで丸くつくるもの（60-13）がみられるが、榛原郡金谷町周辺の窯に同形態のものがみられるようである。

小皿は、体部の丸みが弱くやや外反して立ち上がるが、碗形状が残るもの（60-16）、器高が2cm以下になり、体部から口縁部にかけての外反が大きくなるもの（60-18, 19）、器高がさらに低くなり、口径に比べ底径が大きくなり、内面は、底部と体部の境が明瞭であるもの（60-20～35）がみられる。なお、この形態のものは、灰色あるいは青灰色の粗い胎土を持つ。

SD29

小碗のみであるが、口径が9～10cmで、低く丁寧なナデ調整した高台を持ち、体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部をやや外反させるもの（59-20, 21）。口径は、8cm前後と小型であるが、高台の成形調整が丁寧なもの（59-22）がみられ、高台には初殻痕が付着している。

SD34

山茶碗は、口径17cm前後で腰が張り内面はゆるやかな曲線を呈する。体部は、内湾しながら丸みを持って立ち上がり、口縁部をやや外反させる。ヘラ、または指で押された輪花を施し、漬け掛け施釉している。高台径が9cm前後のもの（59-27, 29, 32）とやや狭く8cm前後のもの（59-28, 33）がみられる。高台に初殻痕や砂が付着するものもある。小碗は、口径10cm前後で高い三角形状の高台がつき、体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部をやや外反させる（59-34, 35）。なお（59-36）には、墨書がみられるが、上層の遺物で他の遺物とは明らかに時期差がある。

SD37

SD23と同じく瓦が出土した遺構であるが、山茶碗は、底部の破片のみで形態が明確なものはない。しかし、時期を考える上であえて図示した。山茶碗は、比較的丁寧なナデを施した三角状の高台を持つもので、体部は内湾しながら立ち上がる（61-1, 3）形態を示す。なお、（61-2）は、灰釉陶器で前掲の分類Ⅱにあたる。小碗も丁寧なナデで成形・調整された高台を持つもの（61-4, 5）である。

SE03

山茶碗は、輪花、漬け掛けがなくなり、低く潰れた高台がつく。口径が16cm前後で、体部が丸みを帯びて内湾しながら立ち上がり口縁部はやや外反するもの（62-1, 2）と口径が15cm前後で、内面の体部と底部の境は明瞭ではないが、体部が直線的に立ち上がり口縁部をやや外反させるもの（62-5, 6, 7, 8）がある。小皿は、碗形態であるが、底部を厚く糸切りするためややとび出しているものの（62-9, 10, 12, 13, 15）、まだ碗の形態を残すが、器高が低くなり体部の直線化が進んだもの（62-11, 14, 19, 21, 22）。体部から口縁部にかけての外反度が増し、底部も口径に比べて大きくなり、皿形態を示すものの（62-17, 18, 24）。更に偏平小型化が進んだもの（62-16, 23）がみられる。また、SD23にみられるものと類似した灰色で粗い胎土の小皿が1点（62-20）出土している。

SF17

山茶碗の体部は、内湾しつつ丸みを持って立ち上がり、口縁部を外反させ、端部を丸く收める。高台は低くなるが、ナデにより比較的丁寧に調整するもの（61-12, 13, 14）で、輪花と漬け掛けがみられる。小碗は、口径9cm前後で口縁部が外反する碗形態のもので、やや粗雑なつくりの低い高台がつくもの（61-15, 16）と、小型であるが、丁寧に成形・調整された高台を持つもの（61-17）もみられる。口縁部が外反する碗形態であるが、無高台のもの（61-20）がある。

(2) 墨書き土器

墨書き土器とみられるものは、SD40の丹彩の坏とSD37の土師質皿を除いて、他は山茶碗、小碗・小皿に書かれたものである。SE03出土のものが8点で、他にまとまって出土した遺構はない。風字碗が出土したSD40からは墨書きが1点のみであったが、祝田の識字層の存在を類推させる。したがって、遺構と墨書き土器は、密接な関わりを持っていると考えられるが、遺構の性格がはっきりとつかめないため、これから調査結果に期待したい。

墨書きは、底部や高台の内側に施したもので、体部に認められるものはない。墨書きの内容は、文字か花押または記号のようなものと推定されるが、確実に判読できそうな資料は少ない。(観察表参照)

特に注目されるものは、SE03から出土した「僧器」及び「僧參」と読みそうなもの(62-33)で、瓦が伴う遺構として寺の存在を推定しているが、その根拠となる可能性を含む遺物である。

(3) 磁器

青磁・白磁は、破片資料のみであるが35点出土している。特にSD23、SE03から特に多く出土している。図示したものは、3点であるが、SD12出土の青磁(59-6)は、螺旋状に花弁を巡らせており、龍泉窯系のもので12世紀後半から13世紀のものと考えられる。また、SD23(60-46)とSE03(62-26)から出土したものは、ともに底部内面を同心円状に輪をぬぐい取った蛇の目の文様を持っています。緑色に発色しているが、底部高台部に釉をつけることなく白磁と考えられる。これらは、華南系の12世紀前半のものと考えられる。その他、SD23の青磁は、四耳壺の破片、龍泉窯系の蓮弁文がみられるものなど7点が出土し、白磁は2点出土している。また、青磁には、SE01から出土した描繪がみられる同安窯系のものも出土している。その他、SD34、SD37から出土した白磁は、平縁式の口縁を持つもので12世紀前半に比定される。前回の調査でも白磁の四耳壺が出土しており、これらの磁器は、遺跡の性格を表すものとして注目してよいだろう。いずれも出土した山茶碗の年代と一致する。

(4) 土師質小皿

山茶碗と共に土師質皿・小皿が出土している。これらは、大きく指成形でつくられたものとロクロによる成形のものとに分けることができる。

指成形のもの

(59-25, 60-41~45, 64-5, 6)は、ある程度指で押さえながら成形し、さらに細かく押さえ、最後にナデ調整するもので、体部が内湾し、体部と底部の境がはっきりしない。外面体部はナデが認められるが、底部はほとんど調整されていない。内面は、比較的丁寧に範調整される。浅い偏平なつくりのものが多い。

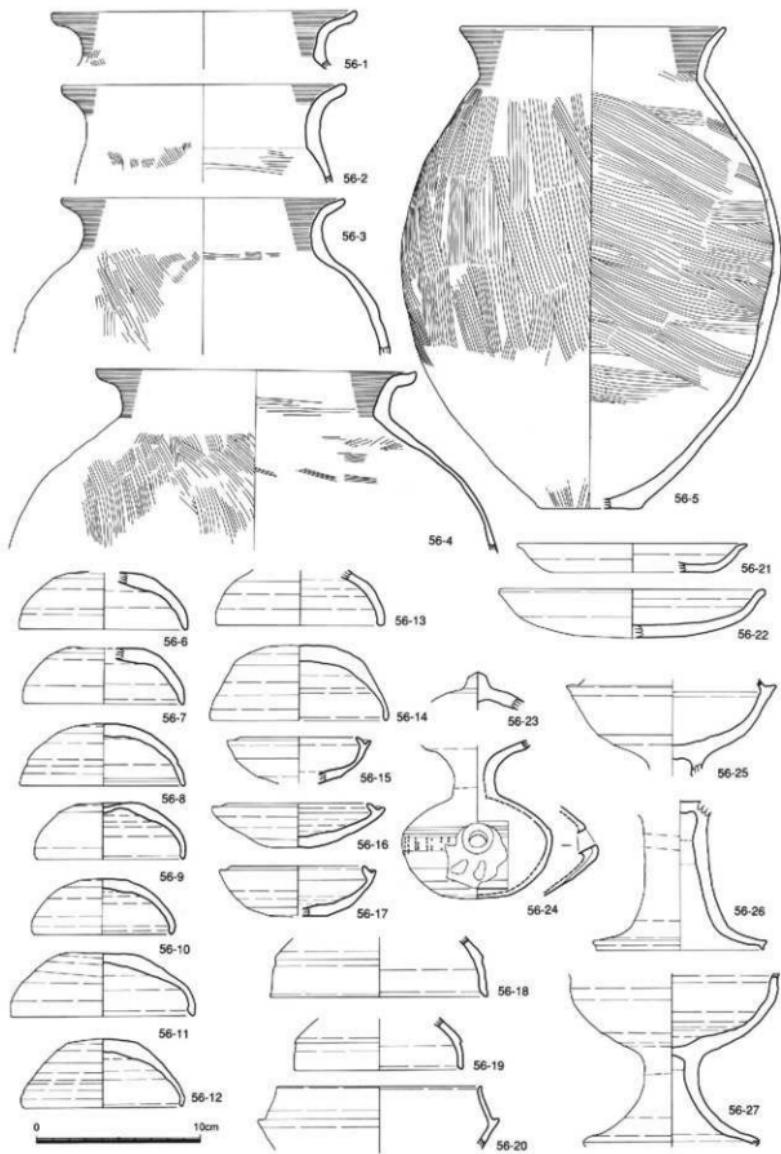
(60-36, 61-7, 64-1~3)は、皿形態のもので、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部を外側に引き出すために陵が認められる。全体をナデにより調整するが、難につくられる。

ロクロ成形のもの

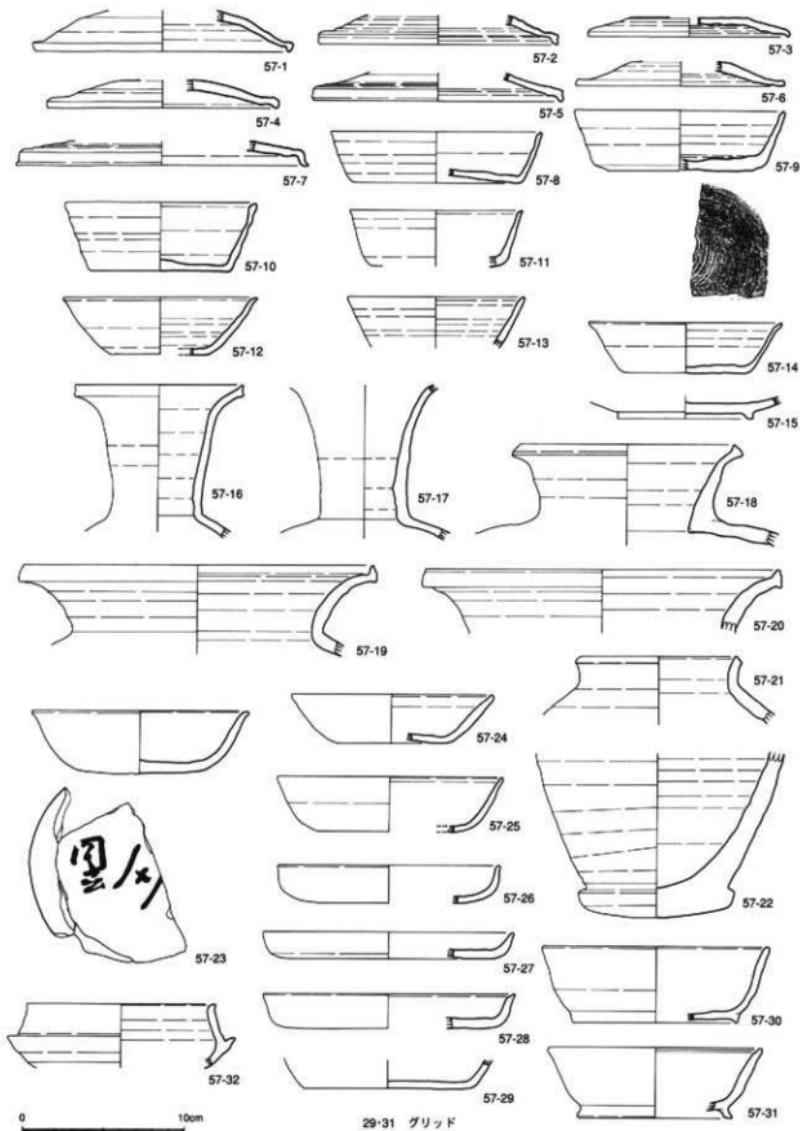
(59-4, 60-39, 40, 62-25, 64-4)は、体部は、外反しながら直線的に立ち上がり、口縁部は、やや尖らせながらも丸く取める。底部は、回転糸切り後未調整で、全体にナデ良好である。山茶碗小皿の底径が口径に比べ大きくなり扁平化したものと同じ形態である。

SD12、SD23、SE03など、山茶碗がほとんど無高台になり、小皿の偏平化がみられるようになつた段階の土器が出土する遺構から土師質小皿が出土している。また、大型の皿形態のものは、指成形のもののみであり、ロクロ成形のものは発見されていない。

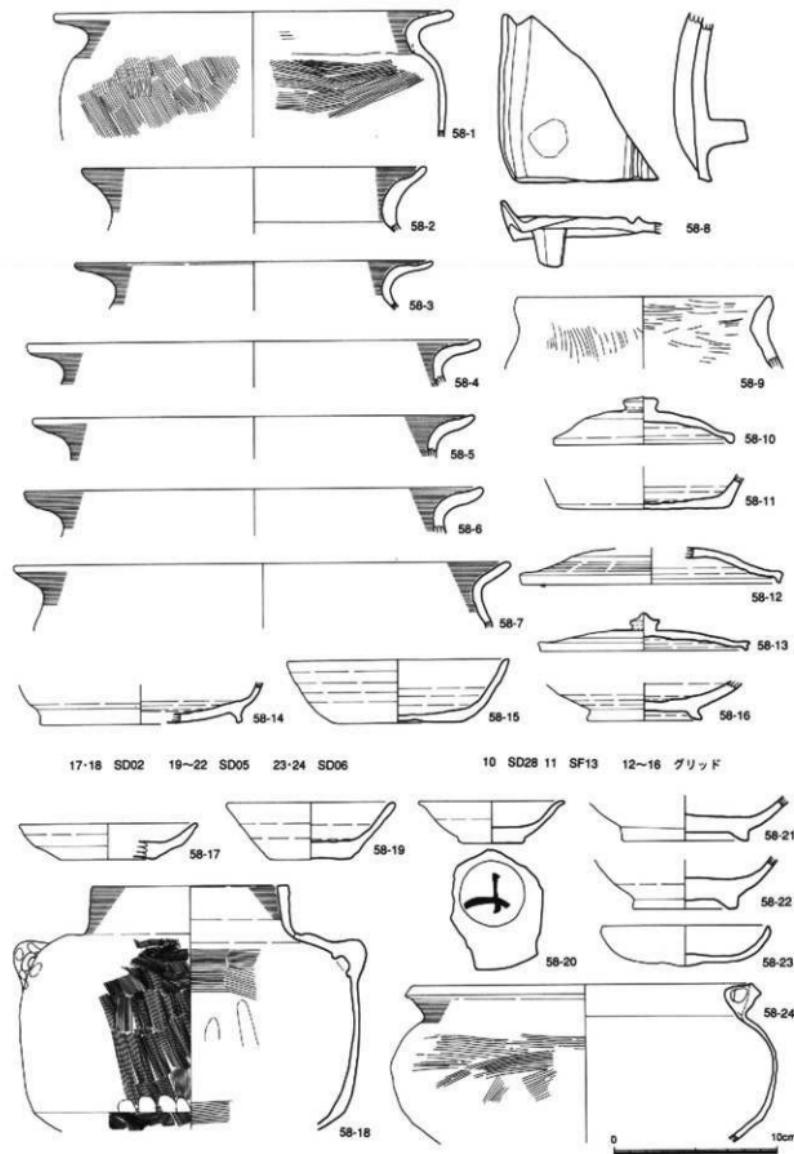
その他、遺構には伴わないが、グリッド出土としてかなりの量の土器、陶器、土師器類が出土している。これらは、初山窯の天目茶碗、古瀬戸の陶器片、瀬戸美濃系の陶器類、常滑窯の壺類、清郷型壺などで、この微高地上で人々の生活が中世以降近代まで絶え間なく続けられていたことの証明ともいえよう。



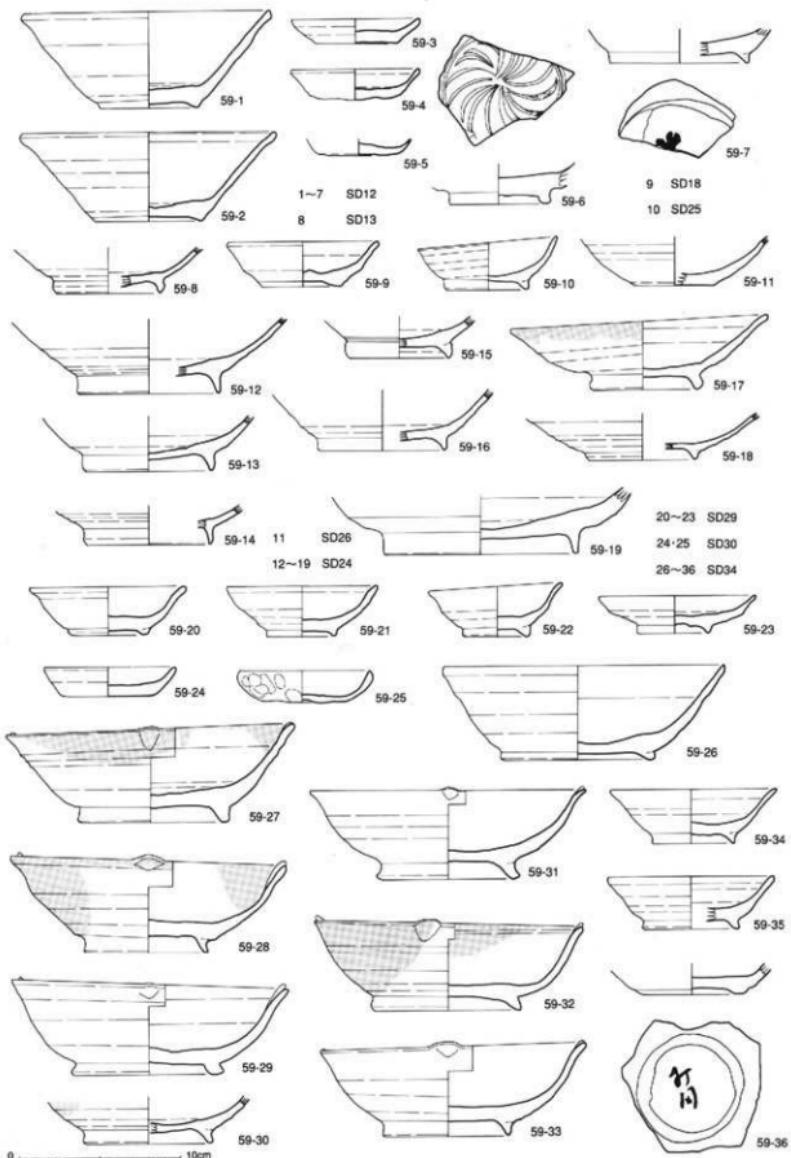
第56図 古墳時代土坑・グリッド出土土器実測図



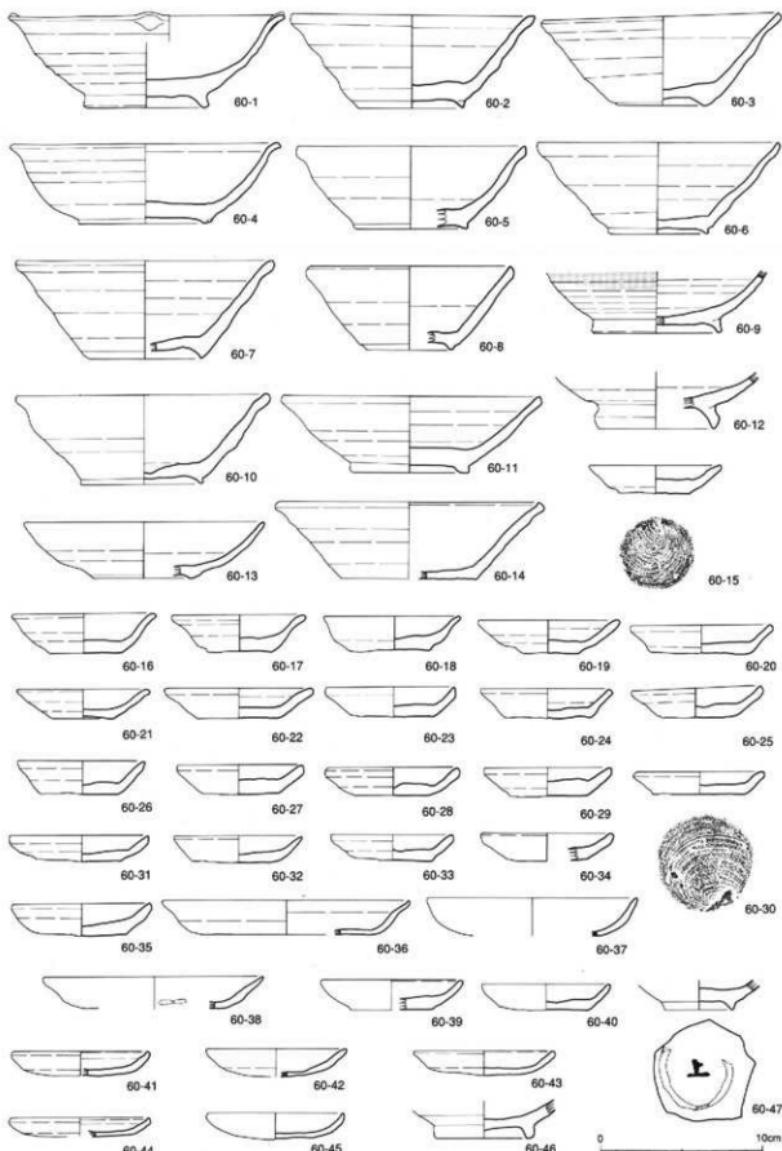
第57図 奈良時代溝（SD40）出土土器実測図



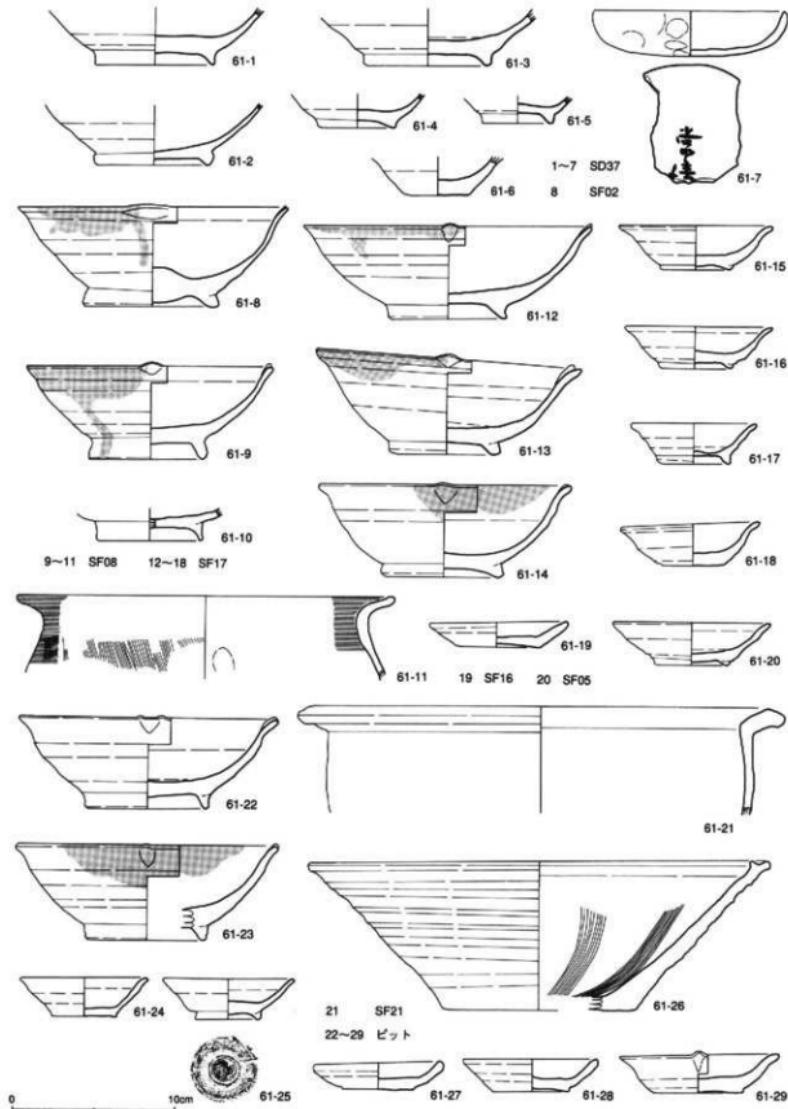
第58図 奈良時代溝（SD40）グリッド・中世溝出土土器実測図



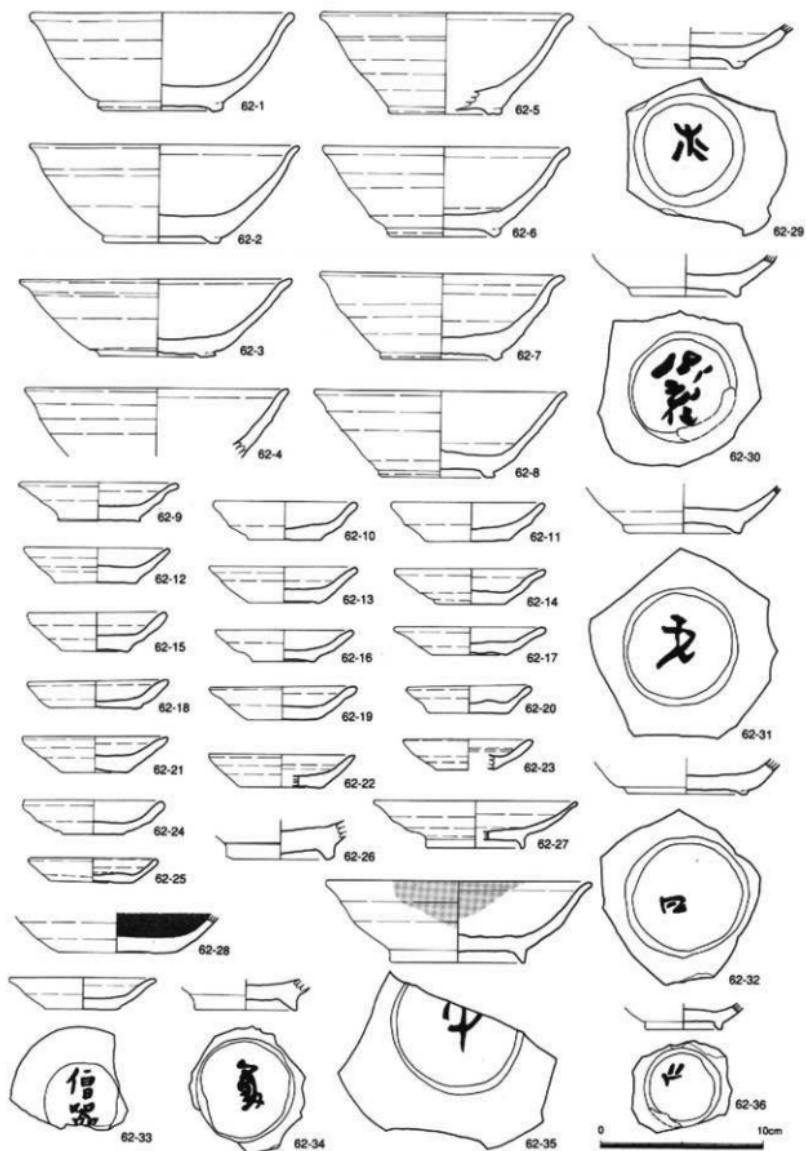
第59図 中世満出土土器実測図



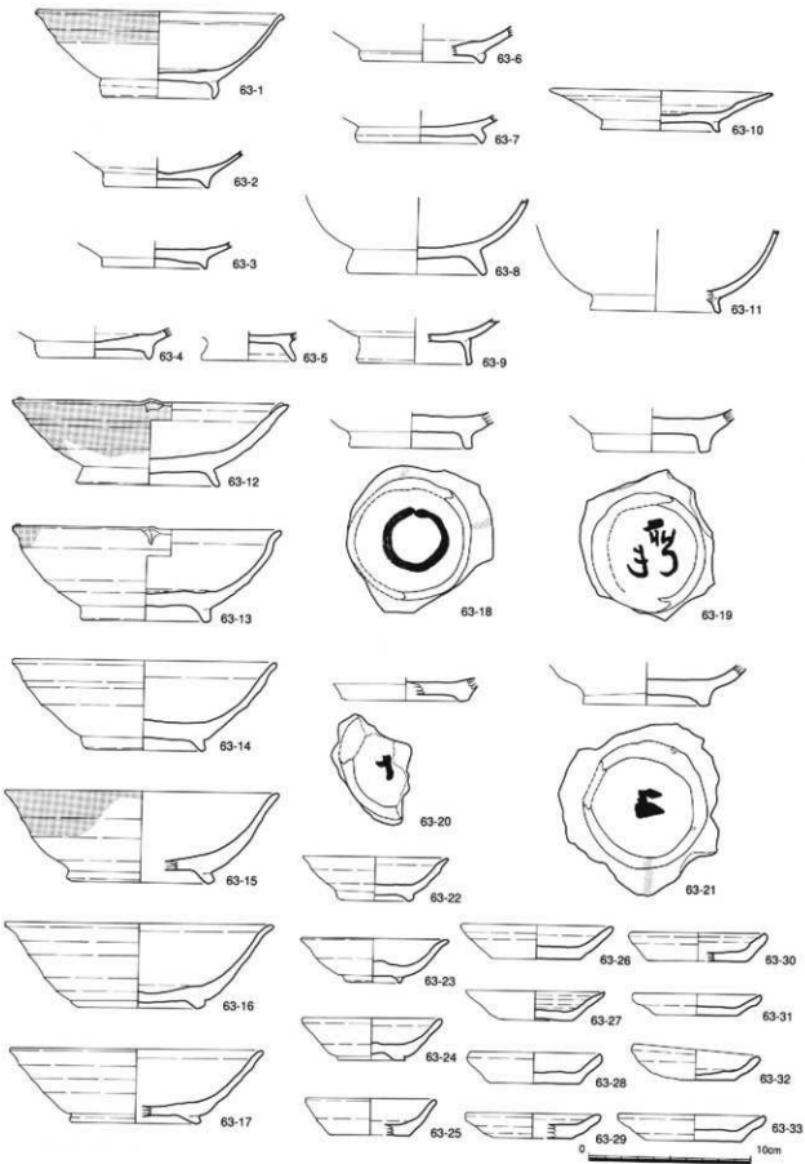
第60図 中世溝（SD23）出土土器実測図



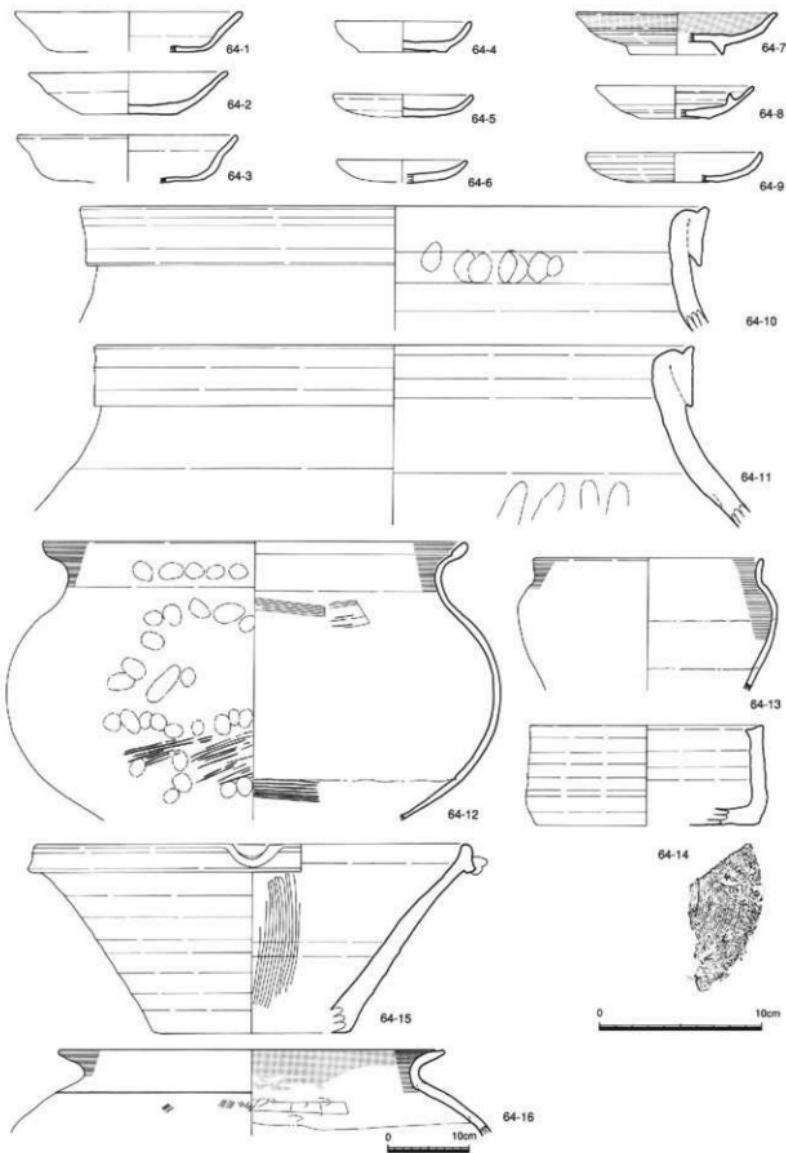
第61図 中世溝・土坑・ピット出土土器実測図



第62図 中世井戸（SE03）出土土器実測図



第63図 グリッド出土土器実測図1



第64図 グリッド出土土器実測図2

第9表 奈良～中世須物検索表①

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	補闕国版 写真国版 出土位置 (グリッド)	口径 高 度 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎 色 調	備考
上部器 蓋	56-1 SF23	(18.6) (3.6)	口縁部は緩やかに外反し、縁部は今や内側して丸く收める。	口縁部は、内外面とも横ナゲ。外面の一部に複数のハケが薄く見える。	良/ やや粗、チャート、 砂粒含む/ に赤い褐色	口縁部1/3 残存
主附器 蓋	56-2 SF23	(17.4) (6.0)	口縁部は緩やかに外反して開き縁部を丸く收める。体部は、あまりふくらまない。	口縁部は、内外面とも横ナゲ。別面に斜位のハケ。肩部の内面には複数の低いハケ。	良/ やや粗、灰石、雲母、 チャート、砂粒含む/ 淡本色	口縁部1/4 残存
上部器 蓋	56-3 SF23	(13.2) (9.6)	口縁部は緩やかに外反し、口沿部でさらに開き、縁部を丸く收める。直筋は比較的厚みがある。	口縁部外側とも横ナゲ。肩部外側は斜位のハケ。口縁部と肩部に横ナゲあり。	良/ 密、灰石、白石母、 チャート、砂粒含む/ に赤い褐色	口縁部1/5 残存
上部器 蓋	56-4 46-56-4 E-6	(18.6) (11.0)	口縁部は緩やかにカーブで外反し、口沿部で開き、縁部を丸く收める。直筋は比較的厚みがある。	外側は1基位6本程のハケ。口縁部内外面とも横ナゲ。肩部内面に横ナゲハケ後ナゲ。	良/ 密、長石、白石母、 チャート、砂粒含む/ 暗褐色	口縁部1/2 残存
土器器 蓋	56-5 47-56-5 E-12	16.1 29.5 23.4	口縁部は緩やかに外反し、口沿部で開き、縁部を丸く收める。直筋は幅広い蝶形を呈し、最大径は中位にある。	口縁部外側は横ナゲ。肩部外側は直位ハケ、内面は横ナゲハケ。	良/ やや密、灰石、白石母、 砂粒含む/暗褐色	口縁部1/3 残存、肩部1/ 2残存
須物器 环蓋	56-6 46-56-6 D-6	(10.3) (3.5)	天井部は平らでやや盤平な半球形状である。縁部は丸く收める。	天井部は直位へラブリ後ナゲ。内面全体と外周縁部～中位にナゲ。	良/ 密、白砂合む/ 暗灰色	天井部1/4 残存
須物器 环蓋	56-7 E-6	(9.8) (3.4)	天井部は平らでやや偏平な半球形状である。口縁部は、やや内凹位に垂下する。	天井部は同様へラブリ後ナゲ。内面全体と外周縁部～中位にナゲ。	良/ 密、白の砂合む/ 暗灰色	1/4残存
須物器 环蓋	56-8 46-56-8 D-7	(10.1) 3.8	半球形状の形態をなし、口縁部は、内凹する。深く沈鉢を施すことにより天井部と口縁部の境をなしている。	天井部は直位へラブリ後ナゲ。内面全体と外周縁部～中位にナゲ。	良/ 密、白、灰色砂合む/ 暗灰色	口縁部1/4 残存
須物器 环蓋	56-9 46-56-9 E-6	(9.0) 3.9	天井部は平らでやや偏平な半球形状をなす。口縁部はやや内凹し、縁部を丸く收める。ヘラ状貝抜孔がある。	天井部中央、未調査部分残す。天井部内側削え。上部～天井部丁字なナゲ。天井部中央にやや凹み。	良/ 密、黑砂含む/ 暗灰色	2/3残存
須物器 环蓋	56-10 46-56-10 E-6	(8.4) 3.4	天井部は平らで、やや偏平な半球形状。口縁部は内凹し、縁部を丸く收める。	天井部は直位へラブリ。内面全体と外周縁部～中位にナゲ。	良/缺欠吹き出し 密、白、灰色砂合む/ 暗灰色	2/3残存
須物器 环蓋	56-11 46-56-11 E-7	11.2 3.9	天井部は平らで、やや偏平な半球形状とする。口縁部は内凹し、縁部を丸く收める。ヘラ状貝抜孔がある。	天井部下位は横筋へラブリ。その下にヘラ切り。中位～縁部は内外面ともナゲ。	良/ 密、灰石微量含む/ 暗灰色	口縁部は変形
須物器 环蓋	56-12 45-56-12 E-6	(9.7) 4.2	天井部は平らで、やや偏平的な形をなしている。口縁部は内凹し、縁部を丸く收める。	天井部はヘラ切り後ナゲ？上位～中位はヘラ切り後ナゲ。内面全体と外周縁部～中位にナゲ。	良/缺欠吹き出し 密、灰石微量含む/ 暗灰色	2/3残存
須物器 环蓋	56-13 D-16	(10.2) (3.4)	上位～縁部は、緩やかに内凹する。口縁部はほぼ直角に下りし縁部を丸く收める。	上位口縁へラブリ。内面と縁部～中位にナゲ。	良/ 密、灰石微量含む/ 暗灰色	1/5残存
須物器 环蓋	56-14 46-56-14 E-7	(10.8) 4.6	天井部はほぼ平らで、半球形状とする。口縁部は内凹位に盛り下し、縁部を丸く收める。天井部にヘラによる傷あり。	天井部へラブリ。内面全体と外周縁部～中位にナゲ。	良/ 密、砂粒合む/ 暗灰色	2/3残存

第9表 泰良～中世遺物觀察表②

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	神國版 写真版 出土位置 (グリッド)	口径 底径 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎土 色調	備考
船形器 环身	56-15 E-6	(7.0) (2.5)	口縁部は、内側させながら立ち上がり、受部は内面に近く立っている形状。外側全体に胎の剥離痕がある。	内面溝巻状のナデ。口縁部は丁寧なナデ。底部外側は、回転ヘラ削り。	良／ 青、白、墨細砂含む/ 暗灰色	口縁部、体部 1/4残存
船形器 环身	56-16 SD06	(8.5) 2.7	口縁部は、内側させながら立ち上がり、受部は内面に近く立っている形状をなす。	底部中央には未測量を残すが、回転ヘラ削り並び。口縁部は丁寧なナデ。内面溝巻状のナデ。底部に植物の茎のような仕様。	良／ 青、白、灰色の砂粒 含む/ 暗灰色	1/3残存
舟形器 环身	56-17 SE03	(8.0) (3.0)	口縁部は、内側させながら立ち上がり、受部は内側に近く立っている形状をなす。	底部中央に未測量を残すが、回転ヘラ削り並び。口縁部は丁寧なナデ。内面は溝巻状のナデ。	良／ 青、白、灰色砂粒子 含む/ 灰色	1/4残存
須恵器 环身	56-18 E-12	(13.3) (3.7)	天井部はやや高嶺的で、口縁部はほぼ直筋に下ろす形状をなし、底部は内傾する。深い沈鉛を施し天井部と口縁部の境をなす。	内外面ともナデ。	良／ 青、長石粒子含む/ 灰色	口縁部1/4 残存
須恵器 环身	56-19 E-6	(10.3) (3.2)	天井部やや高嶺的で、口縁部はほぼ直筋に下ろす形状をなし、底部は内傾する。深い沈鉛を施し天井部と口縁部の境をなす。	内外面ともナデ。	やや不良／ 青、長石粒子含む/ 灰色	口縁部1/5 残存
須恵器 环身	56-20 E-10	(12.4) (3.9)	口縁部やや高嶺的に内傾し、受部は直く立ち上がっている形状である。口縁部外側に施鉛されている。	口縁部～体部内外面ともナデ。底部は丁寧なナデ。	良／ 銀分吹き出し 青、長石、灰色砂粒 含む/ 灰色	口縁部わざ かに残存
須恵器 皿	56-21 E-12	(14.2) 1.8	底部は平底とし、深やかな溝をもつち口縁部に平行し、底部は外側に突出する。	底部はヘラ削り。口縁部から内面にかけてナデ。	良／ 青、長石砂粒含む/ 暗灰色	口縁部～体 部1/8残存 底部わざか に残存
須恵器 皿	56-22 47-56-22 SF23	(15.8) 3.0	底部は丸みを持ち、緩やかな済曲をもつち口縁部に平行し、口縁部端をよく反らせる。	口縁部から内面にかけてナデ。底部は同心円形のヘラ削り。	良／ 青、白の砂粒含む/ 淡灰色	口縁部1/3 残存、底部1/ 4残存
須恵器 皿	56-23 D-5	(2.3)	つまみは乳頭状の形状をなす。	天井部は丸りで同心円形の笠割り。内面は溝巻状のヘラ削り。	良／ 青、長石粒子含む/ 灰白色	つまみ1/1 残存、天井部 わざかに残 存
須恵器 皿	56-24 47-56-24 E-6	9.4 9.4 13.2 9.4	丸みを帯びた体部を持ち、須部は外反しながら立ち上がる形状をなす。	須部はナデ。汁口は粘土を貼り付け成形。(指捺仕模様) 体部に列文を施す。体部下半～底部は回転ヘラ削り。	良／ 銀分吹き出し 青、長石、白、黑 砂粒子含む/ 淡灰色	体部～底部 のみ残存
須恵器 高环	56-25 D-9	(5.1)	环部を半球形とし、口縁部端をやや尖らせ、受部は直く立ち上がっている形状をなす。	环部下半はヘラ削り。环部上半・内面はナデ。口縁部は丁寧なナデ。	良／ 青、長石、灰色砂粒 含む/ オリーブ灰色	环部1/4残 存
須恵器 高环	56-26 D-6	(9.1) (10.2)	底部は、輪広がりで端部を折曲がる形状をなす。胎の剥離痕あり。	底部は内外面とも横ナデ調整。	良／ 青、白、墨細砂含む/ 暗灰色	脚部～脚部1/ 4残存
須恵器 高环	56-27 47-56-27 E-6	(10.6)	环部は輪広半球形とし、口縁部はやや外傾させる形態。脚部は輪広がりで端部を折曲げる。	环部下半削り後ナデ。环部上半・脚部横ナデ。环部内面溝巻状のナデ。ヘラ削工具による傷有り。	良／ 青、白、墨細砂含む/ 暗灰色	环部1/3、 脚部1/3残 存
須恵器 环身	57-1 SI40	(13.7) (2.5)	全体に弓張り状をなし、受部をやや断面三角形とする。	天井部外側は同心円形のヘラ削り。受部～内面ナデ。	良／ 青、白、黒、褐色 砂粒含む/ 灰白色	1/10残存

第9表 奈良～中世遺物観察表③

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	押抜模版 写真模版 出土位置 (グリッド)	口様 高さ 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎土 色調	備考
須恵器 环蓋	57・2 SD40	(14.8) (1.8)	弓張り状の天井部からやや外反気味に受部に移行し、受部を一角とする。	天井部下半・受部・内面ナデ。	良／密、反らし、細砂含む／明灰色	
須恵器 环蓋	57・3 SD40	(12.4) (2.2)	天井部は平らとし、直線気味に受部に至る。端部は無い。器壁は非常に薄い。内面天井部～体部は黒く滑らか灰用規か？	天井部上部同心円形のヘラ削り天井部下半・受部・内面ナデ。	良／密、長石微粒含む／明灰色	1/4残存
須恵器 环蓋	57・4 SD40	(14.2) (1.7)	弓張り状の天井部からやや外反気味に受部に移行し、受部を三角とする。	天井部上部まみ貼り付けのナデ。天井部中央ヘラ削り。受部ナデ。内面ナデ。	良／密、長石砂粒含む／灰白色	1/5残存
須恵器 环蓋	57・5 SD40	(15.6) (1.7)	端部を下方に引き出し、さらに外側きし四角状とする。	天井部上部回転ヘラ削り。天井部内面、外面中位～受部ナデ。	良／密、灰色、黒、白砂粒含む／灰色	1/8残存
須恵器 环蓋	57・6 SD40	(12.9) (1.5)	弓張り状の天井部からやや外反気味に端部に移行する。受部はなく、端部を四角状とする。	天井部上部回転ヘラ削り。天井部下半・内面ナデ。端部強い模ナデ調整。	良／密、長石砂粒含む／明灰色	
須恵器 环蓋	57・7 SD40	(18.1) (1.5)	天井部から直線的に受部に移行する。端部を下方に引き出し、さらに外側きとする。	受部横ナデ。内外面ともナデ。	良／鉄分吹き出し 密、白、灰色砂粒含む／ 灰白色	1/8残存
須恵器 环身	57・8 SD40	(13.0) 3.2 (10.4)	中央にかけて凹んだ底部から、外傾する口縁部に移行する。底面部は、やや丸みを帯びる。	口縁部内外面ともナデ。底部中央に糸切り痕を残し、回転ヘラ削りを施す。さらに、外側へ回転ヘラ削り。底面部ヘラ削り後ナデ。	良／鉄分吹き出し 密、長石砂粒含む／ 暗灰色	1/4残存
須恵器 环身	57・9 SD40	(12.8) 3.7 (8.6)	平底の底部からやや丸みを帯びて周面し、外傾する口縁部に移行する。	内面、口縁部外側ナデ。底部中央に糸切り痕を残し、回転ヘラ削りを施す。さらに、外側へ回転ヘラ削り。底面部ヘラ削り後ナデ。	良／鉄分吹き出し 密、黑砂粒含む／ 暗灰色	1/3残存
須恵器 环身	57・10 48・57・10 SD40	(11.8) 4.2 (8.6)	箱型で、平底の底部から鋭角に折曲し、外傾する口縁部に移行する。内面底部中央に凸がみられる。	底部回転へり切り後ナデ。内外面ともナデ。口縁部内面強いナデ。底部内面指押さえ。内面底部中央に凸みがみられる。	良／ 密、赤褐色粒子、黑 砂粒含む／ 乳白色	1/2残存
須恵器 环身	57・11 SD40	(10.6) (3.4) (8.4)	底部からやや丸みを持って周曲し、口縁部に移行する。端部をやや外反させる。	内外面ともナデ。	良／ 密、白、灰色砂粒含 む／ 灰色	1/8残存
須恵器 环身	57・12 SD40	(12.0) 3.5 (6.0)	平底の底部から鋭角に屈曲し、外傾する口縁部に移行する。端部を外側に引き出し、やや外反する。鉄分の吹き出しあり。	底部ヘラ切り後ナデ。内外面ともナデ。	良／ 密、灰石、黑砂粒含 む／ 灰色	口縁部～体部 1/3残存
須恵器 环身	57・13 SD40	(10.3) (3.1)	口縁部は外傾する。端部を丸く收める。	内外面ともナデ。	良／ 密、白、暗灰色砂粒 含む／ 灰白色	口縁部～体部 1/8残存
須恵器 环身	57・14 48・57・14 SD40	(12.0) 3.1 (7.6)	平底の底部から鋭角に屈曲し、外傾する口縁部に移行する。端部をやや外反させ丸く収める。	底部内面渦巻状のナデ。口縁部内外面ともナデ。底部は中央に切り痕強し、回転ヘラ削りを施す。	良／ 密、灰石、石英、黑 砂粒含む／ 孔灰色	底筋3/4、 口縁部～体部 1/6残存
灰釉陶器	57・15 E-14	(1.4) 8.4	高台は短臺で小さいつくりとしやや外に開く。	外面部底部から体部中ほどにかけて回転ヘラ削り。高台部ナデ。内面ナデ。	良／鉄分吹き出し 密、白、灰色砂粒含 む／ 淡灰色	底筋1/2残存

第9表 奈良～中世遺物観察表④

法量値の() 残存倉 単位はcm

種別 器種	博図版 写真版 出土位置 (グリッド)	口徑 器高 底径 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎土 色調	備考
須恵器 長頸瓶	57-16 48-57-16 SD40	(10.4) (9.0)	頸部は体部からやや直線的に外傾し、低い形態とする。口縁部は内底気味に直立し、頸部腹面を三角形状となる。	頸部～口縁部内外面ともオリーブ色の釉が掛かり、ナゲ調整用縫部の上下端に強い横ナデ。縫部は工具による調整。	良／ 密、具石粒子含む／ 灰黄色	縫部1/2 残存
須恵器 長頸瓶	57-17 SD40	(9.4)	頸部は体部より直線的に外傾し低い形態とする。	頸部～肩部内外面ともナデ。脚底釉付着。	良／ 铁分吹き出し 密、白砂粒子含む／ 灰白色	颈部4/5 残存
須恵器 甕	57-18 SD40	(13.2) (6.2)	口縁部に折り返し凸唇をつくり下部を断面三角形とする。頸部は継やかに外反する。	肩部にタキ目。内面と口縁部～頸部ナデ。	良／ 密、長石、灰色粒子含む／ 灰色	颈部1/3、 1縫部 わずかに 残存
須恵器 甕	57-19 SD40	(21.5) (4.9)	口縁部に折り返し凸唇をつくり下部を断面三角形とし、上部に引き延ばす形状。頸部は外反する。	口縁部～肩部内外面ともナデ。	良／ 铁分吹き出し 密、長石、灰色砂粒子含む／ 青灰色	口縁部～ 颈部 1/10残存
須恵器 甕	57-20 SD40	(21.7) (3.9)	頸部は外反し口縁部に移行する部位は上部に引き延ばされた形状。	内外面ともナデ。口縁部上部と下部に強い横ナデ。	良／ 铁分吹き出し 密、長石、灰色砂粒子含む／ 青灰色	口縁部1/8 残存
須恵器 短頸甕	57-21 E-13	(9.7) (4.1)	口縁部は外反しつつ立ち上がり縫部に平凹面をつくる。肩部内面焼きあぐれあり。	内外面ともナデ。口縁部から肩部に自然転折部。	やや不良／ 密、長石、白、黒砂粒子含む／ 明灰色	口縁部1/6 残存
須恵器 短頸甕	57-22 48-57-22 D-13	10.1 9.6	底部から体部は非常に厚みがある。底部と体部の尾を明顯にし体部は直線的に立ち上がる。底部は丸みをもち、不安定。	内外面とも強いナデ。底部と体部の境に削り。	良／ 铁分吹き出し 密、長石粒子含む／ 灰色	底部1/1 残存 体部1/2 残存
土師器 甕 (墨書き)	57-23 48-57-23 SD40	13.2 3.8	半底気味の底脇から直立して立ち上がり、口縁部を外反させる。	丹彩。体部外面ナデ。体部内面に工具の痕あり？	良／ 密、長石、白雲母粒子含む／ にぼい褐色	底部墨書き 「内川」 1/2残存
土師器 甕	57-24 SD40	(12.2) 3.0 (7.5)	平底の底脇から外傾しつつ立ち上がり口縁部を先鋒にし端部を丸く收める。	丹彩。嘴部上面に強い横ナデ。内外面ともナデ。	良／ 密、長石、白チャート、白、 灰色砂粒子含む／ 浅黄褐色	1/6残存
土師器 甕	57-25 SD40	(13.8) (3.4) (9.5)	平底の底脇から外傾し立ち上がり、口縁部を丸く收める。体部をやや薄い作り。	丹彩。内外面ともナデ。	やや不良／ 密、長石粒子含む／ 赤褐色	1/8残存
土師器 甕	57-26 SD40	(13.6) (2.3)	底部からやや直立気味に立ち上がり、口縁部を直立させて端部を丸く收める。	丹彩。内外面ともナデ。	良／ 密、雲母、 赤チャート、 長石、石英粒子含む／ 赤褐色	1/8残存
土師器 甕	57-27 SD40	(15.2) (1.7)	底部からやや外傾し立ち上がり口縁部を丸く收める。	丹彩。内外面ともナデ。	良／ 密、長石、 赤チャート、 白雲母粒子含む／ 赤褐色	1/10残存
土師器 甕	57-28 SD40	(15.4) (2.1)	底部から直立気味に立ち上がり口縁部を尖り気味に收める。	丹彩。内外面ともナデ。	良／ 密、赤チャート粒子含む／ にぼい褐色	1/10残存
土師器 甕	57-29 E-13	(1.8) (10.2)	平底の底脇から外傾して立ち上がる。	丹彩。底部内面指ナデ。全体にナデ。	良／ 密、反石、石英、 白雲母粒子含む／ 黒褐色	底部1/2 残存

第9表 奈良～中世遺物観察表⑤

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	持国國版 写真國版 出土位置 (グリッド)	口 様 器 高 度 登 録 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎土 色調	備考
上部器 身	57-30 SD40	(13.8) 4.7 (10.0)	平底の底部から丸みを帯びて屈曲し、ほぼ直立する口縁部に移行する。端部は丸く收める。高台は断面を二角形状とする。	打彩。底部系切り後ナダ。内外面ともナダ。	良／ 密、白、灰色含む／ 水滑色	1/5残存
土師器 环	57-31 E-13	(12.9) 4.4 (9.4)	底部から丸みを帯びて屈曲し、外傾する口縁部に移行する。端部丸く收める。高台は断面方形状の高い高台を焼き氣味とする。	刀彩わずかに残る。口縁部内面洗鍊あり。高台と体部の境に強いナダあり。体部内外面ナダ。	良／ 密、白滑性、赤チャート 灰含む／浅黃褐色	1/5残存
頸器 环身	57-32 SD40	(11.6) (3.9)	口縁部を内傾させ、口縁部上半を垂直に立ち上がらせる。端部は丸く收める。	口縁部ナダ調整。立ち上がり部つけ根はT具による彫刻。体部外側面軽く削り。	良／ 疏、吹き出し、灰、黄、褐色の妙合む／ 灰色	1/10残存
上部器 臺	58-1 SD40	(24.1) (7.7)	口縁部は「く」の字に外反し、大きく開いて、端部を丸く收める。	口縁部内外面後ナダ。胴部内曲木口筋、細かく溝横棒ハケ後ナダ。胴部外側斜削ハケ。	良／ 密、長石、チャート 密、雲母、長石粒子 含む／にいき褐色	口縁部1/7 残存
土師器 臺	58-2 SD40	(21.0) (4.1)	口縁部は緩やかに外反し、口唇部で薄くなり、端部を丸く收める。	口縁部外側斜削ハケ。口縁部内面にわずかに窪底ハケ。口縁部内面にわずかに横棒ハケ。	良／ 密、長石、チャート 粒子含む／ にいき褐色	口縁部 わずかに 残存
上部器 臺	58-3 SD40	(21.8) (3.0)	口縁部は「く」の字に外反し、口唇部で薄くなり、端部をわずかに内湾させて引き出している。	外側面部つけ根削壁ハケ。口縁部内外面とも横棒ナダ。	良／ 密、白雲母、チャート 粒子含む／ にいき褐色	口縁部 わずかに 残存
上部器 臺	58-4 SD40	(27.8) (2.8)	口縁部は大きく外反し、端部を丸く收める。	口縁部内外面とも横棒ナダ。	良／ 密、長石、密母、本 チャート修復含む／ にいき褐色	口縁部 わずかに 残存
土師器 臺	58-5 SD40	(27.2) (2.6)	口縁部は大きく外反し、端部を丸く收める。	口縁部内外面とも横棒ナダ。	良／ 密、チャート纏、白 雲母、チャート粒子 含む／にいき褐色	口縁部 わずかに 残存
上部器 臺	58-6 SD40	(27.9) (2.8)	口縁部は大きく外反し、端部を丸く收める。	口縁部内外面とも横棒ナダ。胴部つけ根削壁ハケ。	良／ 密、長石、雲母、チ ャート修復含む／ にいき褐色	口縁部 わずかに 残存
土師器 臺	58-7 SD40	(30.4) (4.0)	口縁部は「く」の字に外反し、端部を丸く收める。	口縁部内外面とも横棒ナダ。	良／ 密、長石の繩、チ ャート、雲母の粒子 含む／浅黃褐色	口縁部 わずかに 残存
灰釉 風字硯	58-8 SD40		第3形式・面視。前頭部はU形を成し、内面中央に縦に突起を設け、左右両側に縦帶を有す。二脚をつけて鏡面が前方に傾斜。	裏面と軸部はヘラ削り。側面はナダ。	良／ 密、長石含む／ 灰色	背面部1/3 残存
土師器 臺	58-9 SD40	(15.6) (4.4)	口縁部はやや開き氣味に立ち上り、端部を丸く收める。	頭部内曲横ハケ後ナダ。胴部内外面とも斜削ハケ。口縁部端部ナダ。	良／ 密、削タ、雲母、チ ャート粒子含む／ にいき褐色	口縁部1/5 残存
頸器 环臺	58-10 SD28	11.0 2.9	天井部は扁平な半球形状で、つまみは僅かな宝珠状をなす。受部は溝徑をおり曲げ下方に引き出し丸く收める。	天井部上面同心円形の回転ヘラ削り。受部は強い横ナダ。内面ナダ。	良／ 密、白、灰色含む／ 銀灰色	口縁部1/3 残存、天井部 1/8残存
頸器 环身	58-11 SF13	(2.1) (10.8)	半球の底部から丸みを帯びて屈曲し、外傾する口縁部に移行する。	天井部削ヘラ削り。天井部削後ナダ。内面と口縁部外面ナダ。	良／ 疏、吹き出し、 長石、灰色含 む／ 銀灰色	口縁部1/8 残存

第9表 斎良～中世遺物観察表④

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器 種	棒圓版 写真版 器 高 度 出上位置 (グリッド)	口 径 高 度 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼 成 胎 土 色 調	備 考
須恵器 环身	58-12 E-11	(15.0) (2.2)	天井部は端半を平底形状で外反気味に端部に移行する。受部は端部を若干折り曲げ断面三角形状とする。	天井部上部へラ削り。内面と外面上位ナデ。受部強い擦ナデ。	良／ 密、長石粒子含む／ 灰色	
須恵器 环身 衣鉢	58-13 衣鉢	(12.8) (2.3)	全体に偏平な学び形状をなし、つまみは先端部を尖らせた宝珠状とする。受部は端部を折り曲げ断面一角形状とする。	つまみの作りが精巧である。天井部回転へラ削り。受部・内面ナデ。	良／ 鐵分吹き出し 密、白、灰色砂合 む／ 暗青灰色	つまみレ1、 天井部1/3 残存
須恵器 环身	58-14 D-9	(2.5) (12.4)	平底形状の环部に方形形状の高台をなし。体部から外輪部にかけての屈曲は、やや緩やかである	武部回転へラ削り後ナデ。内面と高台部ナデ。	良／ 密、長石、白雲母、 灰色砂合む／ 灰白色	底部1/4 残存
須恵器 环身	58-15 D-6	(13.6) 3.9 (8.2)	体部はやや内湾して立ち上がり端部を丸く收める。	全体にナデ。器面やや風化。	良／ 密、白細砂合む／ 淡灰色	1/3残存
須恵器 环身	58-16 D-5	(2.4) (7.1)	体部は僅やかに内湾して立ち上がる。高台は円形を呈する。	底部へラ削り。底部外周、開口後ナデ。	良／ 密、灰色細砂含む／ 灰白色	底部1/2 残存
初山範 鏡	58-17 SD02	(10.8) (2.2) (5.8)	体部はやや内湾して立ち上がり端部を丸く收める。	底部に糸切り痕。底部下位回転へラ削り。	良／ やや粗、長石、砂粒 含む／ 茶灰色	1/3残存
上飾器 羽蓋	58-18 SD02	(12.0) 15.0	底部は球形を呈する。山縁部は副部から直線的に立ち上がり、端部を半円に收める。	副部外周14木/cmのハケ。内面8本/cmのハケ。口縁部内外面とも横ナデ。	良／ 密、長石、雲母含む／ 黄褐色	
山茶碗 小皿	58-19 SD05	(10.0) 3.5 (5.0)	体部はほぼ直線的に立ち上がり端部を丸く收める。底部は、突出する。	内外面ともナデ。底部回転糸切り痕。	良／ 密、長石粒子含む／ 灰白色	1/3残存
山茶碗 小皿 (墨書き)	58-20 48-58-20 SD05	(9.0) 2.6 (4.1)	体部が碗状にやや内湾して立ち上がり、口縁部をやや外反させる。端部を丸く收める。	底部回転糸切り後ナデ。内外面ともナデ。口縁部強いナデ。	良／ 鐵分吹き出し 密、長石、灰色粒子 含む／ 淡灰色	底部墨書き 「十」か? 底 部1/1、口縁 部1/6残存
山茶碗 碗	58-21 SD05	(2.7)	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。高台は方形状とする。	底部糸切り後ナデ。内外面ともナデ。	良／ 密、長石、灰色粒子 含む／ 淡灰色	底ののみ 残存
山茶碗 碗	58-22 SD05	(3.0) 6.4	体部は碗状に内湾して立ち上がる。高台は方形状とする。	底部糸切り痕。内外面ともナデ。高台地盤にのみ痕あり。	良／ 鐵分吹き出し 密、白、 暗青色小澤含む／ 灰白色	底ののみ 残存
土師器 皿	58-23 SD06	(10.0) 2.5	体部は碗状に内湾し立ち上がり端部を半円に收める。外縁全体凸凹あり。	下こね收形。内外面ともナデ。 三次的加熱を受けているか、全体にススキれている。	良／ 密、白細粒含む／ 茶灰色	1/3残存
土師器 内耳皿	58-24 48-58-24 SD06	20.8 (9.7)	頬部は波形を呈し、薄い作り。 口縁部は「く」の字に外反し滑溜を押厚させ、内耳がみられる。	頬部は左から右へ11木単位のハケ。 頬部へラハケ後ヘラ削り？ 滑溜を押厚ナデ。口縁部外側強い 擦ナデ。	良／ 密、長石、白雲母、 灰色微粒含む／ 灰褐色	1/3残存
山茶碗 碗	59-1 SIJ12	(14.8) 5.9 6.0	体部は直線的に立ち上がり、端部は外縁に發をもつ。高台は低一肩高台とする。	底部回転糸切り痕。内面当ともナデ。 端部糸取り後ナデ。高台部調整鉗。	良／ 鐵分吹き出し 密、長石、灰色粒子 含む／ 灰色	1/3残存

第9表 奈良～中世遺物観察表⑦

法量値の() 残存値 単位はcm

種別器種	伴國圖版 写真図版 出土位置 (グリッド)	口徑 底径 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎土 色調	備考
山茶碗 墨碗	59-2 SD12	(15.5) 5.4 6.6	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は、内側を尖らせる。高台は低くつぶれ高台。	高台ににも痕、回転糸切り痕。口縁部外側強いナデ。体部外側・内面ナデ。	良／鉄分吹き出し 密、長石、灰色小塊 含む／ 灰褐色	1/2残存
山茶碗 小皿	59-3 49-59-3 SD12	7.9 1.5 5.1	全体に偏平で、体部は直線的に立ち上がる。端部を丸く收める。	底部回転糸切り痕。内外面ともナデ。	良／ 密、長石、黑色小塊 含む／ 淡灰色	
土器 かわらけ	59-4 SD12	(7.8) 1.9 (4.2)	体部は外反しながら直線的に立ち上がる。口縁部は肥厚させ、やや尖らせながらも大きく收める。	底部回転糸切り痕。内外面ともナデ。	良／ 密、長石、白雲母、 灰色微粒を含む 淡赤褐色	1/3残存
土器 かわらけ	59-5 SD12	(1.0) (3.8)	底部内面中央やや凸む。	底部クロロ回転糸切り痕。内外面ともナデ。	良／ 密、長石、赤チャート 含む／ 明赤褐色	底部1/2 残存
青磁 皿	59-6 SD12	(2.5) (6.2)	高台はやや丸みを帯びた台形を呈する。	内面底部全面に工具で文様。内面底部と体部の間に沈線。高台削り出しのため、底部を回転に削り。	良／ 密、石英、赤チャート 微粒を含む／ オリーブ灰色	高台部2/3 残存
山茶碗 (墨碗)	59-7 SD08	(2.1) (8.6)	高台は丁寧なつくりの三角高台。	全体にナデ。	良／ 密、反石粒を含む／ 灰白色	底部墨書 記号か？ 底部1/4 残存
灰釉陶器 碗	59-8 SD13	(2.7) (6.9)	高台は断面三角形とし、やや内縮する。	内面底部墨ね旋き痕。底部糸切り後ナデ。	良／ 密、白、黑砂粒含む ／淡茶灰色	底部1/2、 体部わずか に残存
山茶碗 小碗	59-9 49-59-9 SD18	(9.2) 2.8 (4.9)	体部はやや内済して立ち上がり口縁部を外側させ、口縁端部は内側を尖らせる。高台は低く潰れ高台となる。	底部回転糸切り痕。高台もみ痕あり。内外面ともナデ。	良／ 密、長石、黒粒子含む／ 灰白色	1/2残存
山茶碗 小碗	59-10 49-59-10 SD25	8.5 3.2 5.2	体部は内済して立ち上がり、口縁部を外側に尖らせる。高台は方形状。重みが大きい。	底部回転糸切り痕。内面中央押さえ。内外面ともナデ。	良／ 密、黑細砂含む／ 淡灰色	
土器 皿	59-11 SD26	(3.0) (4.8)	体部はやや直線気味に内済して立ち上がる。底部は僅かに突出する。口縁端部は先端となり外反する。	底部回転糸切り痕。内外面ともナデ。	やや不良／ やや粗、白、灰色小 塊含む／ 暗褐色	1/3残存
灰釉陶器 碗	59-12 SD24	(4.5) (8.8)	体部はやや緩やかに内済して立ち上がる。高台は高く、断面三角形とする。	内面底部墨ね旋き痕。内面ナデ底部糸切り後ナデ。体部に施釉あり。	良／鉄分吹き出し 密、黑砂粒含む／ 灰白色	1/6残存
灰釉陶器 碗	59-13 SD24	(3.3) (8.2)	体部はやや内済して立ち上がる。高台は断面三角形とする。	底部外側から腰部にへラ削り。底部糸切り後ナデ。内面にハケによる施釉あり。墨ね焼き痕。 内面底部ナデによる深い溝あり。	良／鉄分吹き出し 密、白、黑砂粒、礫 含む／ 灰黄色	底部1/2、 体部わずか に残存
灰釉陶器 碗	59-14 SD24	(2.1) (8.0)	高台はやや浅い三日月高台とする。	底部内面重ね焼き痕あり。	良／鉄分吹き出し 密、長石、黒砂粒含 む／ 黄灰色	高台1/4、 体部わずか に残存
灰釉陶器 碗	59-15 SD24	(2.3) (6.6)	高台は断面三角形とする。	底部糸切り後ナデ。底部内面重ね燒き痕。	良／鉄分吹き出し 密、白、黑砂粒含 む／ 灰黄色	底部1/3、 体部わずか に残存

第9表 奈良～中世遺物観察表⑧

法量値の() 残存倉 単位はcm

種別 器種	持国園版 写真図版 出土位置 (グリッド)	口径 高さ 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎土 色調	備考
灰釉陶器 碗	59-16 SI24	(3.5) (8.0)	体部はやや直線的に立ち上がる高台 はハ形状とする。	底部糸切り後ナデ。底部内面に重ね 焼き痕。	良／鉛分吹き出し 有、長石、石英、黑 砂粒含む／ 黄灰色	
灰釉陶器 碗	59-17 49-59-17 SD24	15.7 4.6 6.9	体部は内凹しながら立ち上がり端部 を丸く收める。高台はハの型に開く 方形状とする。全体に塗んでいる。	高台陥地間に横柱押2ヶ所あり底 部内面重ね焼き痕。高台は粘土壁を 張りつけた高台。	良／ 有、長石、黑砂粒含 む／ 灰黄色	2/3残存
灰釉陶器 碗	59-18 SD24	(2.6) (6.8)	体部はやや内凹して大きく聞く高台 は断面ハ形状とする。	外外面ともナデ。体部外面灰白色の 施釉。	良／ 有、長石、石英、黑 砂粒含む	口縁部1/5、 体部わずかに残存
灰釉陶器 碗	59-19 SD24	(3.6) (12.0)	高台は高い方形状とする。	底部内面重ね焼き痕。内面ナデ底部 外面のみヘラ削りし、糸切り後ナデ。	良／鉛分吹き出し 有、白、黑砂粒、煙 含む／ 灰黄色	底部1/4、 体部わずかに残存
山茶碗 小碗	59-20 49-59-20 SD29	9.5 3.0 4.1	体部は緩やかに内凹して立ち上がり、 口縁部を外反させて、端部を丸く收 める。高台はやや低い。	底部糸切り瓶。外外面ともナデ。	良／ 有、長石、黑砂粒含 む／ 灰白色	
山茶碗 小碗	59-21 49-59-21 SD29	(9.3) 3.1 4.4	体部は緩やかに内凹して立ち上がり、 口縁部をやや外反させる窪部を尖り 気味に收める。高台は低い。	外外面ともナデ。高台は工具による 貼り付け？	良／鉛分吹き出し 有、長石、黑砂粒含 む／ 灰黄色	口縁部、体部 1/2残存
山茶碗 小碗	59-22 49-59-22 SD29	8.2 3.3 4.0	体部は内凹して立ち上がり、口縁部 で外反し、端部を丸く收める。高台 は断面三角形とする。	高台もみ痕あり。全体にナデ溝性。	良／ 有、黒細砂含む／ 淡灰色	
山茶碗 小碗	59-23 49-59-23 SD29	(9.5) 2.3 4.5	体部はやや直線的に立ち上がり端部 を丸く收める。	底部圓板糸切り後未調整。重ね焼き 痕あり。押さえさしにより中心部凹む。 高台の形成調整丁寧。	良／ 有、長石、石英、黑 砂粒含む／ 灰白色	底部、体部 1/2残存
上脚器 かわらけ	59-24 49-59-24 SD30	7.9 1.8 5.8	体部はやや直線的に立ち上がり端部 を丸く收める。	底部糸切り後ナデ。内面丁寧な ナデ。	良／ 有、長石、白雲母、 小砂粒含む／ 褐色	
上脚器 かわらけ	59-25 49-59-25 SD30	(8.1) 2.0	体部は丸みをもって立ち上がり端部 を尖り気味に收める。全体に凸凹で、 いいびり。	手捏ね成形。底部中央に凹みあり、 裏面で押さえながら削った痕か？	良／ 有、長石、灰色微 青含む／ 灰黄色	2/3残存
山茶碗 碗	59-26 49-59-26 SD34	(17.2) 5.8 9.6	体部は緩やかに内凹して立ち上がり、 端部を先頭に收める。滑れ高台。	底部圓板糸切り後ナデ。外外面とも ナデ。高台もみ痕。	良／ 有、白、黒細砂含 む／ 灰白色	1/2残存
山茶碗 碗	59-27 49-59-27 SD34	17.7 6.0 9.3	体部は内凹しながら立ち上がり口縁 部は外反する。輪花4ヶ所。 高台は外側に聞く方形状。	口縁部灰黄褐色の釉剥け掛け。底部 内面重ね焼き痕。底部圓板糸切り瓶。 もみ痕あり。外外面ともナデ。	良／ 有、長石、黑砂粒含 む／ に赤い黄褐色	
山茶碗 碗	59-28 49-59-28 SD34	16.9 5.9 7.7	体部は緩やかに内凹して立ち上がり、 口縁部を外反させて、端部を丸く收 める。輪花4ヶ所。高台は高く外側 に聞く断面三角形。	口縁部～体部に釉剥け掛け4ヶ所発 生不規。重ね焼き痕。底部圓板糸切 り後ナデ。外外面ともナデ。	良／ 有、白、黒細砂含 む／ 灰白色	
山茶碗 碗	59-29 49-59-29 SD34	17.0 6.2 9.4	体部は内凹して立ち上がり、口縁部 を外反させて、端部は先頭に收める。 輪花2ヶ所認める。滑れ高台。もみ 痕あり。	底部内側滑らか、重ね焼き痕。底部 ナデ。高台裏面圓板糸切り瓶2ヶ所あ り、砂付付。外外面ともナデ。	良／ 有、白、黒細砂含 む／ 灰白色	

第9表 奈良・中世遺物館藏表⑤

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	標団面 写真図版 出土位置 (グリット) 遺大抵	口 径 高 度 底 径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 土 色 調	備考
山茶碗 瓶	59-30 SD34	(2.7) (8.0)	体部は内溝して立ち上がり、口縁部を外反させ、端部を外側に尖らせる。高台はハの字型に開く方形状とする。	底部糸切り後ナデ。受け掛け。内側底部ナデ。	良／鉄分吹き出し 窓、白砂粒含む／ 灰白色	
山茶碗 瓶	59-31 59-59-31 SD34	(16.8) 5.5 (8.9)	体部は内溝しながら丸みを持って立ち上がり、口縁部をやや外反させる。端部を丸く收める。高台はハの字型に開き、外反する。	底部糸切り後ナデ。底部内面重ね焼き窓、高台もみぼ。口縁部外側重いナデ。	良／ 白、黒砂粒含む／ 灰白色	
山茶碗 瓶	59-32 50-59-32 SD34	16.5 5.4 9.3	体部はやや内溝して立ち上がり口縁部をやや外反させて、端部を丸く收める。高花 ^{イケ} 所。立花 ^{アリ} 。高台は三角高台。	口縁部一部体部熱抜け掛け。底部内面重ね焼き窓。内面底部つけ根強いナデ。高台に移日付窓。	良／鉄分吹き出し 窓、白、黒砂粒含む／ 灰白色	
山茶碗 瓶	59-33 50-59-33 SD34	16.2 5.7 7.8	体部はやや内溝して立ち上がり口縁部をやや外反させる。端部を丸く收める。高台は三西洋高台とする。	底部糸切り後ナデ。口縁部熱抜け掛け、発色不良。口縁部に並いナデ。末ね焼き窓。	良／ 鉄分吹き出し 窓、白、黒砂粒含む／ 灰白色	
山茶碗 小瓶	59-34 50-59-34 SD34	(10.0) 5.6 5.0	体部はやや内溝して立ち上がり口縁部をやや外反させて、端部を丸く收める。高台は三角高台とする。	高台接地面もみ痕、棒状正直 ^{イケ} 所。口縁部外側ともナデ。	良／ 白、黒砂粒、 小穂含む／ 灰白色	
山茶碗 小瓶	59-35 50-59-35 SD34	(10.2) 3.0 (6.0)	体部はやや内溝して立ち上がり口縁部を丸く收める。高台は三角高台で外反する。	内外両面ともナデ。	良／ 白、黒砂粒、 長石小穂含む／ 灰白色	
山茶碗 瓶 (空)	59-36 50-59-36 SD34	(1.8) 6.0	流れ高台。	内側底部と体部の窓、口井によるものか強いナデ。底部ナデ。	良／ 白、長石小穂含む／ 灰白色	底部墨書き 【打開】 底足1/1 残存
山茶碗 瓶	60-1 50-60-1 SD23	16.8 5.7 7.9	体部は内溝しながら立ち上がり、端部を外反させ、端部を丸く收める。高台はハの字型に開く方形状とする。高花 ^{イケ} 所。	底部横の痕2本あり。もみ痕あり。内面に墨跡、底部青色、体部オーリープ灰色に免色。	良／鉄分吹き出し 窓、黒砂粒含む／ 灰白色	
山茶碗 瓶	60-2 50-60-2 SD23	5.7 6.8	体部は凹凸があり、内溝ながら立ち上がり、端部を尖らせて收める。体部内面の立ち上がりつきつい。高台は方形状をなす。	底部糸切り窓。高台の調整窓。高台もみ痕。立ち上がり部分ナデ押さえ強さ。口縁部側強いナデ。	良／鉄分吹き出し 窓、長い窓、 黒砂粒含む／ 灰青灰色	
山茶碗 瓶	60-3 50-60-3 SD23	14.4 5.7 5.6	体部は直線的に立ち上がり、口縁部をやや外反させて、端部を内側に規角がくる端部をなす。流れ高台。	内外両面ともナデ。底部内面ね焼き痕、中央に凹みあり。底部青色。高台取り窓。もみ痕。	良／鉄分吹き出し 窓、黒砂粒、 長石小穂含む／ 灰白色	
山茶碗 瓶	60-4 50-60-4 SD23	(16.2) 4.9 8.2	体部は丸みをもって立ち上がり口縁部をやや外反させ、端部を丸く收める。高台は低い高台とする。	底部糸切り痕。高台移日付窓。内外両面ともナデ。口縁部皿取り。	良／鉄分吹き出し 窓、小穂含む／ 灰白色	
山茶碗 瓶	60-5 SD23	(15.4) 3.1 (7.0)	体部はやや内溝的に立ち上がり、口縁部をやや内溝させて、端部を内側に規角がくる端部をなす。流れ高台。	内面立ち上がり部分ナデ押さえ強し。内外両面ともナデ。口縁部皿取り。	良／ 白、長石小穂、 黒砂粒含む／ 灰白色	1/4残存
山茶碗 瓶	60-6 SD23	(15.0) 3.7 5.2	体部は直線的に立ち上がり、口縁部をやや内溝させて、端部を内側に規角がくる端部をなす。流れ高台。	底部糸切り痕。内面底部中央に凹み、内面立ち上がり部分ナデ押さえ強し。高台断り付け窓。ナデ強し。口縁部端面取り。	良／鉄分吹き出し 窓、長石小穂、 黒砂粒含む／ 灰白色	1/3残存
山茶碗 瓶	60-7 50-60-7 SD23	(15.6) 6.0 (7.7)	体部は直線的に立ち上がり、口縁部を肥厚させて、端部を内側に規角を持つ端部をなす。流れ高台。	底部糸切り痕、もみ痕あり。高台側に付い窓。底部内面強い凹みあり。口縁部端面取り。	良／ 白、長い窓、 黒砂粒含む／ 灰白色	

第9表 奈良～中世物観察表④

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	持闇団版 写真団版 出土位置 (グリット)	口 径 高 度 直 径 底 大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎 土 色 調	備考
山茶碗 瓶	60-8 SD23	(12.2) 5.2	体部は直線的に立ち上がり、端部は内側に弧度を持つ。流れ高台。	内外面ともナダ。	良／鉄分吹き出し 素、長石小塊、砂粒 含む／ 灰白	1/5残存
山茶碗 瓶	60-9 SD23	(3.7) (8.0)	体部は縦やかに内湾して立ち上がる。 高台はハの字型に開く方形状を呈する。	内面底部含ねえき痕。底部糸切り痕 ナダ。口縁部等感溝取り。	不良／ 素、長石小塊、白、 黒斑子含む／ 淡青褐色	1/6残存
山茶碗 瓶	60-10 SD23	(15.1) 5.5 (7.6)	体部は直線的に立ち上がり、中段で 凸みをもたせ、口縁部を外反させて、 端部は内側に弧度を持つ端面となる。 (流れ高台)。	底部開底糸切り痕。内面底部中央強 い押さえ。	良／ やや粗、長石小塊、白 砂粒含む／ 灰白	1/2残存
山茶碗 瓶	60-11 SD23	(15.8) 4.7 7.2	体部は直線的に立ち上がり、端部は内側に弧度を持つ端面となる。 流れ高台だが比較的のしっかりとしている。	底部糸切り痕。底部外側ナダ。	良／ 素、灰褐色、白、 灰斑子含む／ 灰白色	底部1/5、 体部 わずかに残 存
灰釉陶器 瓶	60-12 SD23	(3.2) (7.2)	体部は縦やかに内湾して立ち上がる。 高台は外側に後を付けた三角高台。	底部糸切り痕ナダ。流れ添き底内面 ともナダ。底部外側へ凹り。高 台は丁寧なつくり。	良／ 鉄分吹き出し 素、白砂粒含む／ 灰褐色	底部1/3、 体部 わずかに残 存
山茶碗 瓶	60-13 SD23	(14.2) 3.5 (6.8)	体部はやや内湾して立ち上がり高 台は多く、端部は多く取るが高台は低 い三脚高台。	内外面ともナダ。口縁部丁寧なナ ダ。	良／ 素、長石小塊、白砂 粒含む／ 緑灰色	1/3残存
山茶碗 瓶	60-14 SD23	(15.9) 4.7 (8.3)	体部は直線的に立ち上がり、端部は内側に弧度があるとす。底部 に高台の痕あり。	内面底部強いナダ。底部糸切り痕、 内外面ともナダ。口縁部等取り。	良／ 鉄分吹き出し 素、長石、砂粒含む ／灰白	1/8残存
山茶碗 小皿	60-15 50-60-15 SD23	8.0 1.8 4.4	体部は直線的に立ち上がり、端部を 丸く取める。	底部開底糸切り痕。内面立ち上がり部 部分、口縁部等取り。内外面とも ナダ。	良／ 素、長石候子、白 砂粒含む／ 灰白色	
山茶碗 小皿	60-16 50-60-16 SD23	8.6 2.4 4.5	体部の丸みがなくやや外反して立ち 上がるが無状である。端部は丸く取 める。	底部丁寧なナダ。内面立ち上がり部 部分、口縁部等取り。内外面ともナダ。	良／ 素、長石微粒子、砂 粒含む／ 灰白色	
山茶碗 小皿	60-17 51-60-17 SD23	8.1 2.3 4.1	体部はやや内湾して立ち上がり口縁 部を引き出し、高台を丸く取る。	内面立ち上がり部、強いナダ。口縁 部外側強いナダ。	良／ 素、長石、黒斑子含 む／ 灰白色	
山茶碗 小皿	60-18 51-60-18 SD23	8.5 2.0 5.1	体部は内湾して立ち上がり、口 縁部を大きく外反させて、端部 を丸く取める。	内面中央と立ち上がり部分、強 いナダ押さえ。	良／ 素、長石小塊、黑斑 子含む／ 灰白色	
山茶碗 小皿	60-19 51-60-19 SD23	8.6 2.0 3.7	体部は内湾して立ち上がり、口縁部 を外反させ通脹を丸く取める。	底部開底糸切り痕。内面立ち上がり 部、強いナダ。内外面ともナダ。	良／ 素、長石、黑斑子含 む／ 灰白色	
山茶碗 小皿	60-20 51-60-20 SD23	8.5 1.7 6.2	体部は直線的に開いて立ち上がり、 端部を丸く取る外側に縁を持つ。	内面立ち上がり部分、強いナダによ り、底部と体部の境明瞭。	良／ 素、長石、黑斑子含 む／ 灰白色	
山茶碗 小皿	60-21 SD23	(7.6) 1.8 (3.8)	体部はほぼ直線的に立ち上がり口縁 部をわずかに外反させて、端部を丸 く取める。	底部糸切り痕。口縁部外沿強いナダ。 体部外沿ナダ。内面自然拍付者のため 調整不明。	良／ 素、白、黑斑子含む ／灰白色	

第9表 奈良～中世通物観察表⑪

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	持闇図版 写真図版 出土地位置 (グリッド)	口徑 高さ 底径 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 跡 土 色	備考
山茶碗 小皿	60-22 51-60-22 SD23	(7.8) 1.8 (3.8)	体部は直線的に立ち上がり、口縁部を外側に引き出して、端部を丸く收める。	内面立ち上がり部分、強いナデにより、底部と体部の境明瞭。	良／ 密、白、黒細砂含む／ 灰白色	底部、口縁部 1/4残存
山茶碗 小皿	60-23 51-60-23 SD23	7.8 1.9 5.3	体部は直線的に立ち上がり、端部を尖らせ外間に棱を持つ。	底部回転糸切り痕。内面中央指押さえ。口縁部内面に重ね施した粘土付着。内面強いナデにより、底部と体部の境明瞭。	良／ 密、黒細砂含む／ 灰白色	
山茶碗 小皿	60-24 51-60-24 SD23	7.9 1.9 5.3	体部は直線的に立ち上がり、口縁部を外反させ、端部は尖り気味にし外間に棱を持つ。	底部回転糸切り痕。内面中央指押さえ。底部と体部の境明瞭。	良／ 密、長石、黒細砂含む／ 灰白色	
山茶碗 小皿	60-25 51-60-25 SD23	8.1 2.0 5.0	体部は直線的に立ち上がり、口縁部を肥厚させ、端部を尖らせ外間に棱を持つ。	底部系切り後未調整？内面中央強い指押さえ。内面、強いナデにより底部と体部の境明瞭。	良／ 密、長石粒子、黑砂含む／ 灰白色	
山茶碗 小皿	60-26 51-60-26 SD23	7.7 2.1 5.1	体部は直線的に立ち上がり、口縁部を肥厚させ、端部を尖らせ外間に棱を持つ。	底部回転糸切り痕。内面中央強い指押さえ。内面、強いナデにより底部と体部の境明瞭。	良／ 鐵分吹き出し や粗、長石、黒細 砂含む／ 灰白色	
山茶碗 小皿	60-27 51-60-27 SD23	7.6 1.8 4.9	体部は直線的に立ち上がり、端部をやや尖り気味にし外間に棱を持つ。	底部回転糸切り痕。内面中央指押さえ。内面、強いナデにより底部と体部の境明瞭。	良／ 鐵分吹き出し や粗、長石小粒、黒細 砂含む／ 灰白色	
山茶碗 小皿	60-28 SD23	(8.0) 1.7 4.5	体部はやや内済して立ち上がり口縁部を肥厚させて、端部をやや尖らせ外間に棱を持つ。	底部回転糸切り痕。内面中央指押さえ。内面、強いナデにより底部と体部の境明瞭。	良／ 密、長石、石英小粒 黒細砂含む／ 淡灰色	底部、口縁部 わずかに残存
山茶碗 小皿	60-29 51-60-29 SD23	7.8 1.8 4.7	体部は直線的に立ち上がり、端部を尖らせ外間に棱を持つ。	底部回転糸切り痕。内面中央指押さえ。内面、強いナデにより底部と体部の境明瞭。	良／ 密、長石、黒細砂含む／ 灰白色	
山茶碗 小皿	60-30 51-60-30 SD23	7.8 1.5 5.8	体部は直線的に立ち上がり、口縁部をわざかに外反させ、外間に棱を持つ。	底部回転糸切り後未調整。内外面ともナデ。内面、強いナデにより底部と体部の境明瞭。	良／ 密、長石小粒、黒細 砂含む／ 淡灰色	
山茶碗 小皿	60-31 51-60-31 SD23	8.4 1.6 5.2	体部はやや内済して立ち上がり口縁部外間に棱を持つ。全体に歪みあり。	底部系切り後ナデ、調整跡。内面、強 いナデにより底部と体部の境明瞭。	良／ 密、長石砂粒、黒細 砂含む／ 灰白色	
山茶碗 小皿	60-32 51-60-32 SD23	7.8 1.7 5.5	体部は直線的に立ち上がり、端部を先端に收める。	底部回転糸切り板。内面にもナデ。内面中央指押さえ。内面強いナデにより底部と体部の境明瞭。	良／ 密、長石砂粒、黒細 砂含む／ 淡灰色	
山茶碗 小皿	60-33 51-60-33 SD23	7.4 1.7 5.2	体部は直線的に立ち上がり、口縁部外間に棱を持つ。	底部回転糸切り痕。内面にもナデ。内面中央指押さえ。内面強いナデにより底部と体部の境明瞭。	良／ 密、長石、赤チャート粒子、黒細砂含む／ 淡灰色	
山茶碗 小皿	60-34 SD23	(8.0) (1.7) (5.0)	体部は直線的に立ち上がり、口縁部をやや内済させ、端部は尖らせ外間に棱を持つ。	体部強いナデ。底部外縁丁寧なナデ。内面強いナデにより底部と体部の境明瞭。	良／ 密、長石粒子、黒細 砂含む／ 灰色	
山茶碗 小皿	60-35 51-60-35 SD23	8.4 2.0 5.7	体部はやや内済して立ち上がり端部はやや尖らせ外間に棱を持つ。	底部回転糸切り痕。内面は滑らかなナデ。外周ナデ。	良／ 密、小粒、黒細砂含 む／ 灰白色	

第9表 奈良～中世土器観察表⑫

法量値の() 残存倉 単位はcm

種別 器種	神園閣版 写真図版 出土位置 (グリット)	口径 基底 高さ 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎土 色調	備考
土師器 皿	60・36 SD23	(15.0) 2.1	体部は内湾して立ち上がり、口縁部上半を外反させる。端部はやや内湾して、丸く収める。	内外面ともナデ。口縁部内外面横ナデ。手捏ね成形。	やや不良/ 密、長石小粒、石英 白雲母、ホーネート 含む/茶白色	
土師器 皿	60・37 SD23	(13.0) (2.3)	体部は丸みをもって立ち上がり端部を丸く収める。口縁部はいびつである。	口縁部内外面とも横ナデ。体部内外面ともナデ。体部内面指痕圧痕あり。 手捏ね成形。	良/ 密、白粒子含む/ 茶白色	口縁部1/4 残存
土師器 皿	60・38 SD23	(13.4) (2.0)	体部は丸みをもって立ち上がり体部上半から口縁部をやや外反させ、端部を先端に収める。	口縁部内外面とも横ナデ。体部内外面ともナデ。体部内面指痕圧痕あり。 手捏ね成形。	良/ 密、長石、白雲母、 赤チャート粒子含む/ 茶白色	1/8残存
土師器 かわらけ	60・39 SD23	(8.5) 1.9 (5.2)	体部は丸みをもって立ち上がり端部を丸く収める。	炭鉱板系切り痕明瞭。内外面ともナデ。端部棒状圧痕2ヶ所あり。	良/ 密、白雲母含む/ 淡黄褐色	
土師器 かわらけ	60・40 SD23	(7.8) 1.6 5.1	体部はやや直線的に立ち上がり端部を丸く収める。	底部も回転系切り痕。内外面ともナデ。内面中央指押さえ。	良/ 密、白雲母含む/	底部1/1、 口縁部1/3 残存
土師器 かわらけ	60・41 SD23	(8.2) 1.5	体部は丸みをもって立ち上がり端部を丸く収める。	体部外面横ナデ。内外面ともナデ。 手捏ね成形。	良/ 密、白雲母、灰色微 粒子含む/ 灰白色	1/2残存
土師器 皿	60・42 SD23	(8.5) (1.7)	体部は丸みをもって立ち上がり端部を丸く収める。	口縁部内外面とも横ナデ。内外面ともナデ。手捏ね成形。	良/ 密、雲母、白粒子含 む/ 暗茶白色	1/7残存
土師器 かわらけ	60・43 SD23	8.5 1.5	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、端部をやや肥厚させて丸く収める。	口縁部外面横ナデ。内外面ともナデ。 手捏ね成形。	良/ 密、白雲母、灰色微 粒子含む/ 黄赤褐色	2/3残存
土師器 かわらけ	60・44 SD23	(8.4) (1.2)	体部は丸みをもって立ち上がり端部は断面三角形に収める。	口縁部外面横ナデ。内外面ともナデ。 手捏ね成形。	良/ 密、白雲母、灰色微 粒子含む/ 淡茶灰色	1/4残存
土師器 かわらけ	60・45 SD23	8.3 1.6	体部は丸みをもって立ち上がり端部は先端に収める。	内外面ともナデ。底部～体部外面指 痕圧痕数あり。	良/ 密、白、灰色粒子含 む/ 赤白色、淡黄褐色	
青磁 碗	60・46 SD23	(2.3) (6.2)	高台は凸形を呈する。	内部は厚く刷毛され、一部絞り(左脇板)がみられる。底部左脇板の削り出し高台。	良/鉄分吹き出し 密、長石、灰色微粒 子含む/ 灰白色	底部1/2残 存
山茶碗 小碗 (器蓋)	60・47 SD23	(1.8) (4.2)	高台は三角高台とする。	底部赤り底、重ね焼き痕あり内外面ともナデ。	良/ 密、長石、灰色粒子 含む/ 灰白色	底部墨青 「上」 底部完形
山茶碗 碗	61・1 SD37	(3.5) (7.4)	高台は低い三角形状とする。体部は緩やかに内湾して立ち上がる。	重ね焼き底。底部中央糸切り後本調 整。	良/鉄分吹き出し 密、長石、灰色微粒 子含む/ 青灰色	底部1/2、 体部 わずかに残 存
灰釉陶器 碗	61・2 SD37	(3.7) 7.1	高台は丸みを帯びた三角形状とする。体部は緩やかに内湾して立ち上がる。	内外面とも丁寧なナデ。内面底部に重ね焼き底。	良/ 密、長石、灰色微粒 子含む/ 灰白色	底部完形

第9表 奈良～中世遺物観察表②

法量値の（ ）括弧値 単位はcm

種別 器種	仲間図版 写真図版 出土位置 (グリッド)	口 径 高 底 最 大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎土 色	備考
山茶碗 碗	61-3 SD37	(3.5) (7.9)	高台はやや八の字形に開く方形状とする。立ち上がり部を肥厚させ、縁やかに内側して立ち上がる。	内外面とも丁寧なナデ。底部中央部止糸切り後本調整。	瓦／ 密、灰石、灰色微粒 子含む／ 淡黄色	底部2/3 残存
山茶碗 小碗	61-4 SD37	(2.1) 4.8	高台は丸みを帯びた方形状とする。体部は擦やかに内湾して立ち上がる。	内外面ともナデ。高台は丁寧なナデで成形。	瓦／ 密、長石、灰色粒子 ／淡灰色	底部完形
山茶碗 小碗	61-5 SD37	(1.7) 4.4	高台は三角高台とする。	内外面ともナデ。内面底足部ね焼き痕、底足部並り後ナデ。高台は、丁寧なナデで成形。	瓦／ 鉛分吹き出し 密、灰石、灰褐色微 子含む／ 暗灰色	底部1/2 残存
山茶碗 小皿	61-6 SD37	(2.4) 4.2	底盤内面は丸みを帯びる。体部は、直線的に立ち上がり口縁部は外反する。	底部回転系切り削。体部ナデ。	瓦／ 鉛分吹き出し 密、長石、灰色微粒 子含む／ 灰色	底部完形
土器容器 (窓)	61-7 52-81-7 SD37	(11.6) (2.8)	体部は内湾して立ち上がり、縁部を丸く收める。	内面は丁寧なナデ。外側は擦ナデで明瞭。	瓦／ 密、長石、赤チャート 下小窓、粒子、灰色 粒子含む／ 淡青褐色	底部腰帶 「深瀬」? 1/4残存
山茶碗 碗	61-8 52-61-8 SP02	16.5 6.1 8.0	体部は内湾して立ち上がり、口縁部を外反させて、端部を丸く收める。輪郭はやや低い三角高台とする。	中央焼きぶくれ。高台焼き痕。高台筋付け時ナデ多い。高台外側工具使用? 磨擦け掛け。	瓦／ 鉛分吹き出し 密、長石小塊、黑褐色 粒子含む／ 灰色	5/6残存
灰陶陶器 碗	61-9 52-61-9 SP08	(14.4) 5.7 7.4	体部は擦やかに内湾して立ち上がり、口縁部をやや外反させて端部を丸く收める。高台は灰形成とし、やや外側に高く輪化。	外面全体造りナデ。底部内面重ね焼き痕。輪郭清け掛け。高台底部横状底足1ヶ所。底部回転系切り後ナデ。	瓦／ 密、長石小塊、黑褐色 粒子含む／ 黄褐色	2/3残存
灰陶陶器 碗	61-10 SP08	(2.0) (6.0)	高台は爪形狀でやや外側に高く。	内面中央に窓み、高台筋付清け痕。底部外血ナデ。	瓦／ 鉛分吹き出し 密、長石、砂粒含む ／灰色	
土器容器 (窓)	61-11 SP08	(23.2) (5.1)	口縁部は「く」の字に外反し、縁部を丸く收める。	口縁部内外面とも横ナデ。頭部外側 擬似ハサ。	瓦／ 密、長石、白雲母 粒子含む／ にぶい褐色	口縁部1/3 残存
山茶碗 碗	61-12 52-61-12 SF17	(17.5) 5.7 7.4	体部は内湾して立ち上がり、口縁部をやや外反させ、縁部を外側に延べて立てる。縁部2ヶ所。高台を余した三脚台とする。	内外面とも強いナデ。軽淡い清け掛け。底部内面重ね焼き痕。	瓦／ 密、白、黒褐色含む ／淡白色	口縁部1/3 残存
山茶碗 碗	61-13 52-61-13 SF17	16.2 6.5 6.9	体部は内湾して立ち上がり、口縁部を外反させ、縁部をやや外反させ、縁部を丸く收める。輪郭2ヶ所。高台は低く厚みのある方形状とする。	口縁部内外面とも強めの張模様。清け掛け。底部内面重ね焼き痕、高台筋付。底部外側重ね焼き痕。	瓦／ 鉛分吹き出し 密、黒褐色、長石 粒子含む／ 淡褐色	
山茶碗 碗	61-14 52-61-14 SF17	(15.4) 5.7 7.6	体部は内湾して立ち上がり、口縁部をやや外反させ、縁部をやや尖り気味に收める。高台は三角形状とする。	清け掛け。底部内面重ね焼き痕、高台もみ掛。	瓦／ 密、長石小塊、白、 黑褐色含む／ 灰色	3/4残存
山茶碗 小碗	61-15 52-61-15 SF17	(9.2) 2.7 4.5	体部は内湾して立ち上がり、口縁部を外反させ、縁部をやや尖り気味に收める。高台は低い方形状とする。	口縁部外側強めのナデ。内外面ともナデ。	瓦／ 鉛分吹き出し 密、灰石、白、黑褐色 粒子含む／ 灰白色	2/3残存
山茶碗 碗	61-16 52-61-16 SF17	(8.9) 2.6 4.6	体部は内湾して立ち上がり、口縁部を外反させ、縁部を丸く收める。高台は低い方形状とする。	口縁部外側強めのナデ。高台外側調整跡。	瓦／ 密、長石小塊、白、 黑褐色含む／ 灰白色	1/2残存

第19表 奈良～中世遺物観察表④

法量値の()残存値 単位はcm

種別 器種	説明図版 写真図版 出土位置 (グリット) 最大径	口 径 高 度 大 径	形態の特徴	手法の特徴	焼 成 胎 土 色 調	備考
山茶碗 小碗	61-17 52-61-17 SF17	(7.6) 2.5 (4.5)	体部は直線的に立ち上がり、口縁部を外反させ、端部を丸く收める。全体にゆがみがあり。高台は低い方形状とする。	口縁部外側強いナデ。内面底部煮い 指押さえのため穴あり。高台丁寧に 調整されているが、貼り付け脚面端。 全体に丁寧なナデで調整。	丸／鉛分吹き出し 密、黒褐色含む／ 灰白色	2/3残存
山茶碗 小皿	61-18 52-61-18 SF17	8.3 2.7 3.7	体部は内湾して立ち上がり、山縁部を大きめ外反させ、端部を丸く気味 に收める。底盤は無高台で小さく、 体感から突出する。	丸／鉛分吹き出し 密、長石小窓、白、 黒褐色含む／ 灰白色		
山茶碗 小皿	61-19 52-61-19 SF16	8.4 1.5 5.2	体部はやや直線的に立ち上がり端部を丸く收める。底部中央を四ませる。	体部から口縁部に並みあり。内面底 部に段あり。(「其による?」底部同 軸に沿り後ナデ。	丸／ 密、小窓、黒褐色含 む／ 灰白色	
山茶碗 小碗	61-20 52-61-20 SF-5	(9.6) 2.6 4.7	体部はやや内湾して立ち上がり端部を丸く收める。高台は低く一角形状と する。	内面透らかに調整。高台もみ痕高台 内面の調整跡。底盤角切り後ナデ。	丸／ 密、長石、黒褐色含 む／ 灰白色	2/3残存
土師器 青磁型焼	61-21 SF21	(28.0) (5.5)	口縁部は「く」の字に外反し、口縁部を肥厚させ、端部を丸く收める。	口縁部外側に強い擦ナデ。内面丁寧 なナデ、棒状工具による圧痕。	丸／ 密、長石小窓、長石 石英、白雲母含む にぶい褐色	口縁部1/5 残存
山茶碗 碗	61-22 53-61-22 P851	(15.6) 5.7 (7.6)	体部は内湾して立ち上がり、口縁部を薄らとして、やや外反させる。高台 は方形状でやや内湾する。輪花。	高台もみ痕があり、外側調整跡、底部 底盤角切り後ナデ、内面ヒモナデ。	丸／鉛分吹き出し 密、長石小窓、白、 黒褐色含む／ 灰白色	1/4残存
山茶碗 碗	61-23 53-61-23 P853	(15.6) 6.0 (7.4)	体部は内湾して立ち上がり、口縁部をやや外反させ、端部を丸く收める。 高台は方形状とする輪花。	新横行掛け2ヶ所弱痕。全体に丁寧 なナデ。	丸／ 密、黒褐色含む／ 灰白色	2/3残存
山茶碗 小皿	61-24 52-61-24 P853	(7.6) 5.0 2.4	体部は直線的に立ち上がり、口縁部をやや外反させ、端部を肥厚させて收める。 底盤は低い無高台とする。	底盤圓軸角切り後ナデ、棒状工具2ヶ 所、口縁部強いナデ、	丸／ 鉛分吹き出し 密、長石、黒褐色含 む／ 灰白色	1/2残存
山茶碗 小皿	61-25 53-61-25 P854	(7.3) 2.5 4.0	体部は直線的に立ち上がり、端部を丸く收める。高台は丸みを帯びた二 角形状とする。	内面ヒモナデ。	丸／鉛分吹き出し 密、長石、石英含む ／灰白色	1/2残存
振り鉢 直口尖底	61-26 52-61-26 D-11	28.1 9.3 (11.9)	体部は直線的に立ち上がり、中位を 凹させ、端部を肥厚させて收める。 平底。	外面全体ノタ目明瞭。底盤圓軸を切 り落す。内面2本半径の抜り口9ヶ所残 る。全体では11ヶ所と推定。	丸／ 密、白小窓、白粒子 含む／ にぶい褐色	
山茶碗 小皿	61-27 53-61-27 P389	7.7 1.6 4.4	体部は直線的に立ち上がり、口縁部 を肥厚させ端部をやや尖らせる外側 に接を持つ。	全体にナデ。底盤圓軸角切り後ナデ、 等な作り。内面、強いナデにより裏 部と体部の境明瞭。	丸／鉛分吹き出し 密、小窓含む／ 灰白色	
山茶碗 小皿	61-28 53-61-28 P521	8.3 2.0 4.7	体部は直線的に立ち上がり、端部を 丸く收め、外側に緩やかな棱をもつ。 底は四角形。	底盤中央に周辺の強いナデによる凸 みあり。立ち上がり部分凹みあり。 底盤角切り後ナデ。	丸／鉛分吹き出し 密、黒褐色含む／ 灰白色	
山茶碗 小皿	61-29 53-61-29 P531-521	9.7 2.4 5.6	体部は緩やかに内湾し、口縁部を外 に引き出し、端部を丸く收める。	口縁部外側工具による凹み、内面中 央指押さえによる凹み。底盤圓軸角 切り後丁寧なナデ。口縁部強いナデ。	丸／ 密、長石小窓、黑褐色 含む／ 灰白色	
山茶碗 碗	62-1 53-62-1 SE03	15.8 6.0 7.8	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、 口縁部を外反させ、端部を丸く收め る。流れ高台。	全体に丁寧なナデ。底盤圓軸角切り 後未調整。	丸／ 密、白、黒褐色含む ／灰白色	2/3残存

第9表 奈良～中世遺物観察表④

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	神宮国版 写真国版 出土位置 (クリップ)	口径 底径 高さ 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎色 調	備考
山茶碗 碗	62・2 53・62・2 SE03	15.8 6.0 7.8	体部は丸みを帯びて内側して立ち上がり、口縁部を外反させ、端部を丸く収める。高台は低い方形状とする。	高台底部棒状压痕1ヶ所。内外面ともナゲ。	良／密、白小穢、白黒細砂含む／灰色	2/3残存 内面全体にスス
山茶碗 碗	62・3 53・62・3 SE03	16.5 4.8 7.1	体部は内側して立ち上がり、口縁部を外反させ、端部を丸く収める。高台は丸く収める。滑れ高台。	全体に丁寧なナデ。口縁部強いナデ。	良／鉄分吹き出し 密、白、黒細砂含む／灰白色	2/3残存
山茶碗 碗	62・4 SE03	15.9 (4.3)	体部は直線的に開き、口縁部をわずかに外反させ、端部を丸く収める。	口縁部外側強いナデ押さえ。	良／密、長石、石英粒子 黒細砂含む／淡灰色	3/4残存
山茶碗 碗	62・5 SE03	(15.1) 6.2 (7.0)	体部はやや直線的に立ち上がり口縁部をやや外反させて、端部を丸く収める。滑れ高台。	内外面ともナゲ。	良／ 密、小穢、長石、黒 細砂含む／ 淡灰色	1/4残存
山茶碗 碗	62・6 53・62・6 SE03	15.0 5.5 7.0	体部は直線的に立ち上がり、口縁部をやや外反し、端部を丸く収める。滑れ高台。	内面底面に強い押さえによる模様あり。 底部赤切り後ナデ。内外面ともナゲ。	良／ 鉄分吹き出し 密、長石、石英、黒 細砂含む／ 灰白色	3/4残存
山茶碗 碗	62・7 53・62・7 SE03	14.9 2.0 7.5	体部は直線的に立ち上がり、口縁部を外反させ、端部を丸く収める。高台は丸く滑れ高台。	内面底面に重ね焼き痕。高台にもみ 痕。内外面ともナゲ。底部赤切り後 ナデ。	良／ 鉄分吹き出し 密、長石小穢、黒細 砂含む／ 灰色	
山茶碗 碗	62・8 SE03	(15.2) 5.3 7.2	体部は直線的に立ち上がり、端部を丸く収める。高台は方形状とする。 一部滑れ高台。全体に歪みあり。	内面中央に凸みあり。内外面とも ナゲ。	良／ 密、白、黒細砂含む／ 淡灰色	2/3残存
山茶碗 小皿	62・9 53・62・9 SE03	9.5 2.4 5.0	体部は直線的に立ち上がり、口縁部を外反させ、端部を丸く収める。	底部回転糸切り後本調整。厚く糸切 りするため底面やとび出す。	良／ 密、小穢、長石含む ／黄灰色	3/4残存
山茶碗 小皿	62・10 SE03	(8.6) (2.4) 4.4	体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、端部を丸く収める。底部調整時、体部外側に模様をつくる。	内面中央に渦巻状の凹み。底部回転 糸切り後本調整。厚く糸切りするた め底部やとび出す。	良／ 密、黒細砂含む／ 灰白色	1/2残存
山茶碗 小皿	62・11 SE03	(9.1) (2.4) 5.3	体部はやや直線的に立ち上がり、底 部外側調整時、体部外側に模様をつ くる。	底部回転糸切り痕。内外面ともナ ゲ。厚く糸切りするため底面やとび 出す。	良／ 密、小穢、黒細砂含 む／ 灰色	1/2残存
山茶碗 小皿	62・12 SE03	(9.0) 2.2 4.6	体部は直線的に立ち上がり、端部を やや尖らせて収める。	底部回転糸切り痕。内外面ともナ ゲ。厚く糸切りするため底面やとび 出す。	良／ 密、長石小穢、黒細 砂含む／ 灰色	2/3残存
山茶碗 小皿	62・13 53・62・13 SE03	8.9 2.2 4.5	体部は直線的に立ち上がり、端部を 丸く収める。	底部回転糸切り後ナデ。内外面とも ナゲ。厚く糸切りするためややとび 出す。	良／ 密、黒細砂含む／ 淡灰色	
山茶碗 小皿	62・14 53・62・14 SE03	9.0 2.2 4.3	体部は直線的に開き、口縁部は外反 して内側に模様をつくる。端部は丸く 収める。	底部回転糸切り後ナデ。内外面とも ナゲ。	良／ 密、小穢、長石含む ／灰色	
山茶碗 小皿	62・15 54・62・15 SE03	8.3 1.4 4.3	体部はやや直線的に立ち上がり、口 縁部を肥厚させ、端部を丸く収める。	内外面ともナゲ。厚く糸切りするた め、底部やとび出す。	良／ 密、白、黒細砂含む ／淡灰色	

第9表 奈良～中世遺物観察表⑤

法量値の() 残存倉 単位はcm

種別 器種	伸縮版 写真版 出土位置 (グリッド)	口径 高 底 径 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎土 色調	備考
山茶碗 小皿	62・16 SE03	(8.4) 2.0 4.0	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、端部を丸く収める。偏平な形状。内面中央に凸みあり。	内外面ともナデ。	良／ 密、黒細砂含む／ 灰白色	1/2残存
山茶碗 小皿	62・17 SE03	(9.2) 1.8 4.7	体部は直線的に大きく外反し、端部を丸く収める。底は中央が凹む。	内外面ともナデ。底部回転糸切り後 調整窓。	良／ 密、黒細砂、白粒子 含む／ 灰白色	2/3残存
山茶碗 小皿	62・18 54・62・18 SE03	8.6 1.8 5.6	体部は大きく外反し、口縁部を肥厚させ、端部を尖り気味に収める。底 形態とする。	内面中央に押さえによる凹みあり。 底部回転糸切り後未調整。内外面ともナデ。	良／ 密、黒細砂含む／ 淡灰色	
山茶碗 小皿	62・19 54・62・19 SE03	8.7 2.1 4.3	体部は直線的に立ち上がり、口縁部 を外反させ、端部を丸く収める。全 体に凹みあり。	内面中央に向てやや膨らみ、中心 を押さえ。底部外側の調整丁寧。 内外面ともナデ。	良／ 密、長石、石臼、 黒細砂含む／ 灰白色	
山茶碗 小皿	62・20 54・62・20 SE03	7.5 1.7 5.0	体部は直線的に立ち上がり、端部は 内側に丸角をもつ端面をもつ。全体 に少し痩みあり。	内面中央に強い押さえ。底部回転 糸切り後未調整。口縁部面取り後ナ デ。内面にナデにより底部と体部 の接觸痕。	良／ 粗、小穂、長石粒子 含む／ 灰白色	3/4残存
山茶碗 小皿	62・21 54・62・21 SE03	(8.9) 2.2 (4.2)	体部は直線的に立ち上がり、端部を 尖らせて収める。底は中央が凹む。	内外面ともナデ。	良／ 密、黒細砂、白粒子 含む／ 灰白色	1/2残存
山茶碗 小皿	62・22 SE03	(9.0) 2.0 (5.1)	体部はやや直線的に立ち上がり端部 を丸く収める。	底部回転糸切り後ナデ。内外面とも ナデ。	良／ 密、黒細砂含む／ 灰色	1/3残存
山茶碗 小皿	62・23 SE03	(5.9) 1.8 (3.9)	体部は内湾して立ち上がり、端部を 丸く収める。偏平な形状。	内外面ともナデ。	良／ 密、黒細砂含む／ 灰色	1/3残存
山茶碗 小皿	62・24 54・62・24 SE03	(8.4) 2.1 3.8	体部は大きく外反し、さらに口縁部 を外反させ、端部を丸く収める。底 形態とする。	内面中央に凸みあり。内外面とも ナデ。	良／ 鉄分吹き出し 密／ 灰白色	2/3残存
上加器 かわらけ	62・25 54・62・25 SE03	7.6 1.5 5.0	体部は直線的に立ち上がり、端部を 丸く収める。	内面中央やや凹む。底部ロクロ右回 転糸切り後ナデ。	良／ 密、白、灰、赤チ ヤート粒子含む／ 暗褐色	2/3残存
青磁 碗	62・26 SE03	(2.4)	高台は台原を平する。	底部内面に厚く施釉。立ち上がり部 分は、左端より他のもの剥離。左回 転の削りだし高台。	やや不規 密、白、灰色粒子含 む／ 灰色	底面1/1、 高台部1/3 残存
灰釉陶器 皿	62・27 54・62・27 SE03	(12.2) 2.9 (6.6)	器壁は薄く、体部を大きく外反し、口 縁部を引き出す形状とする。端部は 丸く収める。高台はやや爪形状をな す。全体に歪み。	底部糸切り痕。内外面ともナデ。	良／ 密、小穂、長石粒子 含む／ 灰白色	1/3残存
山茶碗 碗	62・28 SE03	(2.2)	高台の取れた底あり。	内面に擦摩が施される。内面中央 に凸みあり。体部外側1ヶ所に割れ 垂れている。底部糸切り痕。	良／ 鉄分吹き出し 密、長石粒子含む／ 灰白色	底部完形
山茶碗 碗 (墨)	62・29 54・62・29 SE03	(7.1) (2.8)	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。 高台は低い方形状とする。	体部外側中央に沈線あり。(工具の痕 か) 高台底部も複数。	良／ 鉄分吹き出し 密、長石、白雲母 粒子含む／ 茶灰色	底部無書 「米」か記号 底部完形

第9表 奈良～中世遺物観察表⑦

法量値の() 残存値 単位はcm

機別種	持国國版 写真圖版 出土位置 (グリッド)	口径 高 度 径 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎 土 色 調	備考
山茶碗 碗 (墨書き)	62・30 SE03	(2.5) 6.8	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。高台は低い三角形状。	底部糸切り後ナデ。内外面ともナデ。高台もみ痕。	良／密、長石小礫、長石、雲母、灰色粒子含む／灰白色	底部墨書き 花押？ 底部完形
山茶碗 碗 (墨書き)	62・31 SE03	3.0 7.2	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。底部は丸みを帯びた三角形状。	底部回転ヘラ削り痕、棒状圧痕あり。	良／鉄分吹き出し 密、長石、雲母含む／灰白色	底部墨書き (不明) 底部完形
山茶碗 碗 (墨書き)	62・32 SE03	(2.2) 6.3	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。高台は低い流れ高台。	高台にみ痕。	良／鉄分吹き出し 密、長石粒子含む／灰白色	底部墨書き 口口？ 底部完形
山茶碗 小皿 (墨書き)	62・33 54-62・33 SE03	(8.8) 1.9 4.5	体部はやや内湾して立ち上がり底部を丸く收める。	底部は糸切り後ナデ。内外面ともナデ。	良／鉄分吹き出し 密、長石、雲母、灰色粒子含む／灰白色	底部墨書き 「惜歌」 「惜歌」? 2/3残存
山茶碗 碗 (墨書き)	62・34 SE03	(1.9) 6.2	高台は三角高台。	底部糸切り痕。内外面ともナデ。	良／密、長石、灰色粒子含む／灰白色	底部墨書き 花押か？ 底部完形
山茶碗 碗 (墨書き)	62・35 54-62・35 SE03	(16.2) 5.0 (7.8)	体部は内湾して立ち上がり、口縁部を外反させ、底部を丸く收める。高い三角高台。	口縁部・体部に沿って前2ヶ所内面底部に指圧痕。内外面ともナデ。	良／鉄分吹き出し 密、長石小礫、砂粒含む／明青灰白色	底部墨書き 口口？ 底部完形
山茶碗 碗 (墨書き)	62・36 SE03	(5.6)	高台は緩やかに内湾して立ち上がる。高台は丸みを帯びた三角形。	内外面ともナデ。	良／鉄分吹き出し 密、長石粒子含む／灰白色	底部墨書き 底部完形
灰釉陶器 碗	63-1 54-63-1 E-6	(15.0) 5.3 6.8	体部は薄く、やや内湾して立ち上がり、口縁部を外反させ、底部を丸く收める。高台は低い三角高台。	底部内面重ね燒き痕。底部回転糸切り後ナデ。体部灰釉（範限不明顯）。内面に沈積。内外面ともナデ。丁寧な作り。	良／ 密、長石粒子、砂粒含む／ 灰白色	1/2残存
灰釉陶器 碗	63-2 E-6	(2.4) 6.5	器壁は薄く、体部は直線的に立ち上がり、深鉢形をなす。高台は高い爪状とし、やや外側に開く。	底部糸切り後ナデ。(一部未調整) 高台棒状圧痕6ヶ所。内外面ともナデ。	良／ 密、長石、赤チヤート、灰釉粒子含む／ 黄灰色	底部完形
灰釉陶器 碗	63-3 D-6	(1.7) (6.4)	体部は直線的に立ち上がる。高台は三角形状。	底部内面に重ね燒き痕。底部糸切り痕。内面中央に向かって開む。	良／鉄分吹き出し 密、長石含む／ 灰白色	底部完形
灰釉陶器 碗	63-4 E-5	(1.9) 7.1	高台は丸みを帯びた三角形状とする。	底部糸切り痕。内外面ともナデ。	良／鉄分吹き出し 密、長石、石英、灰色鉛粉含む／ 灰白色	底部1/2 残存
灰釉陶器 碗	63-5 E-6	(1.8) (5.8)	高台は長く外反する。	内外面ともナデ。	良／ 密、石英、灰色鉛粉含む／ 灰白色	底部1/2 残存
灰釉陶器 碗	63-6 D-7	(2.3) (7.5)	底部は体部との境を肥厚させ、薄くなつて、直線的に立ち上がる深鉢形とする。高い爪状の高台でやや外側に開く。	外部体部下位ヘラ削り後ナデ。内外面ともナデ。	良／鉄分吹き出し 密、長石、灰釉鉛粉含む／ 淡灰色	底部1/6 残存
灰釉陶器 碗	63-7 E-6	(1.8) (7.7)	体部は緩やかに立ち上がる。高台は中位に腰をもち、端部を細く尖らせる。	底部回転ヘラ削り。体部外側下位糸切り後ナデ。内面底部灰釉重ね燒き痕。	良／ 密、長石、灰色鉛粉含む／ 暗灰色	底部1/2 残存

第9表 奈良～中世遺物観察表④

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	押出模版 写真図版 出土位置 (グリッド) 最大径	口径 高さ 底径 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎土 色調	備考
灰釉陶器 碗	63・8 D・7	(4.7) 8.6	体部は内凹して縁やかに立ち上がる。 高い弧状の高台で外側に開く。	底部回転糸切り底。中央未測定もみ痕。底部内面重ね焼き痕。体部内外間に輪掛け掛け。	良／鉛分吹き出し 窓、長石、砂隠含む 灰白色	底部完形
灰釉陶器 碗	63・9 E・6	(2.8) (7.2)	高い弧状の高台でやや外側に開く。 器壁は薄い。	底部糸切り後ナデ。底部内面重ね焼き痕、沈れ窓あり。高台に船の走れた痕あり。底部外側から腰部へワ割り。 外側面ともナデ。	良／鉛分吹き出し 窓、長石合む 灰白色	底部3/4 残存
绿釉陶皿	63・10 54・63・10 E・5	(7.0) 2.5 (3.6)	体部は直線的に立ち上がり、諸部をやや尖らせる。高台は円形を呈する。 内面体部中央に段あり。	底部内面に二ツ口トチ痕。中央所押さえ。底部を除き緑釉発色。内外面ともナデ。	良／ 窓、土胎質、良石跡 含む 明赤褐色	1/3残存
绿釉碗	63・11 SD23	(5.0) (7.9)	体部は薄く、内凹して立ち上がる。 高台は低い、台形を呈する。	内外面に綠釉発色。	良／ 窓、長石含む 灰色	
山茶碗 碗	63・12 54・3・12 E・6	(16.6) 5.1 8.5	体部は内凹して立ち上がり、口縁部をやや外反させ、諸部を丸く収める。輪花2ヶ所。高台は丸みを帯びた三角形状。	底部静止糸切り底。高台内面を滑らかに削る。内面に工具痕あり。体部輪掛け掛け。	良／ 窓、良石砂粒、尾端 砂含む 灰白色	2/3残存
山茶碗 碗	63・13 55・63・13 D・11	(16.2) 5.7 (8.0)	体部は縁やかに内凹して立ち上がり、口縁部を外反させ、諸部を丸く収める。輪花2ヶ所。高台は丸みを帯びた三角形状とする。	内外面ともナデ。口縁部外周灰白色の輪付け掛け。	良／ 窓、長石小礫、黒砂 粒含む 灰黄色	1/2残存
山茶碗 碗	63・14 E・6	(16.1) 5.5 6.9	体部は縁やかに内凹して立ち上がり、口縁部を外反させ、諸部をやや尖り気味に収める。高台は三角形状とする。	底部回転糸切り底。底部に虎爪の痕あり。内面滑らかなナデ。高台もみ痕。	良／ 窓、長石粒子、砂粒 含む 灰白色	1/2残存
山茶碗 碗	63・15 35・63・15 SD09	(16.7) 5.6 (9.1)	体部は縁やかに内凹して立ち上がり、口縁部をやや外反させ、諸部を丸く収める。高台は方形状とする。	底部は糸切り後ナデ。底部内面重ね焼き痕。体部輪掛け掛け。内面自然釉の回まり付着。	良／ 窓、良石、系、白砂 粒含む 明麗灰色	1/2残存
山茶碗 碗	63・16 D・6	(16.3) 5.2 7.3	体部は縁やかに内凹して立ち上がり、口縁部をやや外反させ、諸部を丸く収める。輪花高台。	底部回転糸切り底。高台に棒状状痕3ヶ所。口縁部邊部外周旋いナデ。	良／ 窓、長石小礫、砂粒 含む 灰白色	1/2残存
山茶碗 碗	63・17 表記	(15.4) 4.6 (8.0)	体部は縁やかに内凹して立ち上がり、口縁部をやや外反させ、諸部を丸く収める。輪花高台。	底部回転糸切り底。高台に棒状状痕、もみ痕。高台貼り付け時の工具痕残る。(調整窓)	良／ 窓、白、黒砂粒含む 灰白色	1/2残存
山茶碗 碗(墨書)	63・18 D・7	(2.3) 7.6	高台はややハの字形に開く方形状とする。	底部静止糸切り底。体部に釉が垂れている。内外面ともナデ。窓ね焼き痕。	良／鉛分吹き出し 窓、長石小礫、長石 灰白色、褐色粒子含む 灰白色	底部墨書 「〇」記号? 底部完形
山茶碗 碗(墨書)	63・19 E・12	(2.7) (7.2)	高台は方形状とする。	底部糸切り底。内外面ともナデ。	良／ 窓、長石小礫、長石 黑色粒子含む 灰白色	底部墨書 (不明) 底部完形
山茶碗 碗(墨書)	63・20 D・9	(1.5) (7.8)	低い高台を有する。	内外面ともナデ。	良／ 窓、長石小礫、長石 砂隠含む 灰白色	底部墨書 「？」 底部1/4 残存
山茶碗 碗(墨書)	63・21 表記	(2.5) 7.8	体部は縁やかに内凹して立ち上がる。 高台は低い方形状とする	体部に釉が垂れている。高台もみ痕。底部ナデ後ござの痕?あり。	良／鉛分吹き出し 窓、長石、灰色粒子 含む 灰白色	底部墨書 「？」 底部完形

第9表 寺院～中世遺物観察表⑩

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	神岡園版 厚土園版 出土位置 (グリッド)	口径 高 底 径 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎 色 調	備考
山茶碗 小皿	63-22 E-5	(9.0) 2.7 4.7	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部をやや外反させて端部を先細とする。高台は丸みを帯びた方形状とする。	高台もみ痕。高台貼り付け時、工具使用後調整跡。	良／鉄分吹き出し 密、砂礫、長石砂粒含む／ 灰白色	1/2残存
山茶碗 小皿	63-23 E-6	8.8 (3.3)	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は外反させ、端部を丸く収める。流れ高台。	底部内面に焼きぶくれ、重ね焼き痕。底部と高台部の粘土異なる。内外面ともナデ。	良／ 密、長石砂粒含む／ 灰白色	3/4残存
山茶碗 小皿	63-24 D-4	(8.3) 2.6 4.2	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、端部を丸く収める。流れ高台。	高台にもみ痕。底部の調整跡。内外面ともナデ。	良／鉄分吹き出し 密／ 灰白色	1/2残存
山茶碗 小皿	63-25 D-9	(7.8) 2.3 (4.9)	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部をやや外反させ、端部を丸く収める。	底部は糸切り痕。内外面ともナデ。	良／鉄分吹き出し 密、砂粒含む／ 灰白色	1/4残存
山茶碗 小皿	63-26 E-6	(9.0) (5.4)	体部は直線的に立ち上がり、端部を丸く収める。	底部糸切り痕。内面丁寧なナデ。	良／ 密、長石含む／ 灰白色	1/2残存
山茶碗 小皿	63-27 E-5・表抜	(8.7) 1.8 4.7	体部は直線的に立ち上がり、端部を尖らせる。	底部回転糸切り後ナデ。粘土処理跡。内外面ともナデ。	良／鉄分吹き出し 密、長石、黒砂粒含む／ 青灰色	3/4残存
山茶碗 小皿	63-28 D-5	(8.0) (5.6)	体部は直線的に立ち上がり、端部は内側を尖らせ外側に腹をもつ。	底部回転糸切り痕。端部面取り後ナデ。内面強いナデにより底部と体部の境明確。	良／ 密、長石、長石小砂粒含む／ 灰白色	1/2残存
山茶碗 小皿	63-29 D-10	(8.0) 1.5 (5.0)	体部は直線的に立ち上がり、端部は丸く収める。	内外面ともナデ。	良／ 密、長石、石英含む／ 灰白色	1/3残存
山茶碗 小皿	63-30 D-5	(8.2) 1.8	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は内側を尖らせ外側に腹をもつ。	底部回転糸切り後未調査。端部面取り後ナデ？口縁部内面に沈線あり。	良／鉄分吹き出し 密、長石、砂粒含む／ 灰白色	3/4残存
山茶碗 小皿	63-31 D-10	(7.8) 1.3 5.0	体部は直線的に立ち上がり、口縁部内側を尖らせ外側に丸みをもつ。	底部は回転糸切り痕。内面強いナデにより、底部と体部の境明瞭。自然釉の間合付着。	良／ 密、石英小砂、長石 砂粒含む／ 灰白色	3/4残存
山茶碗 小皿	63-32 E-5	7.7 1.9 5.2	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、端部は丸く収め外側に腹をもつ。裏面に凹みあり。	底部糸切り後ナデ。内面中央凹む。内面底部と体部の境明瞭。自然釉の間合付着。	良／ 密、長石小砂粒含む／ 灰白色	3/4残存
山茶碗 小皿	63-33 表抜	8.9 1.6 5.9	体部は直線的に立ち上がり、端部は内側に鋭角がくる塊面をもつ。内面は凹凸する。	底部は回転糸切り後未調査。端部は面取り後ナデ。内外面ともナデ。	良／鉄分吹き出し 密、石英、長石粒子 含む／ 灰白色	
土師器 皿	64-1 D-5	(13.8) (2.4)	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部を外反させ、端部を丸く収める。	全体に丁寧なナデ。	良／ 密、長石、石英、赤 チャート、灰白色粒子 含む／淡黄褐色	
土師器 皿	64-2 D-7	12.2 2.6 5.8	体部はやや直線的に立ち上がり口縁部を押さえ、端部を尖り気味に収める。	底部ロクロ右回転糸切り痕。内外面とも丁寧なナデ。	良／ 密、白、灰白色小砂、 白雲母含む／ 灰白色	

第9表 奈良～中世遺物観察表④

法量値の() 残存値 単位はcm

種別 器種	持蓋版 写真版 出土地位置 (グリッド)	口径 高 度 径 最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成 胎 土 色 調	備考
土師器 皿	64-3 55-64-3 D-5	(13.2) (2.9)	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部を外反させ、端部を丸く収める。底部はやや凸凹あり。	全体に丁寧なナデ。	良／ 密、長石、石英、 赤チャート、安鉛 含む／浅黄褐色	1/3残存
土師器 皿	64-4 55-64-4 E-6	(8.3) 1.9 (5.4)	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、端部を丸く収める。底部中央凹む。	底部回転糸切り後未調整。	良／ 密、白、褐色砂粒含 む／ にぶい黄褐色	1/2残存
土師器 小皿	64-5 55-64-5 D-5	(8.6) 1.4	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、端部を丸く収める。	体部外面横方向の強いナデ。内外面ともナデ。	良／ 密、赤チャート、 灰色砂粒含む／ 浅黄褐色	1/2残存
土師器 小皿	64-6 55-64-6 D-9	(7.8) (1.4)	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、端部を丸く収める。	内面へラ磨き。	良／ 密、赤チャート、 白雲母白粒子含む/ 浅黄褐色	1/2残存
陶器 皿 瀬戸美濃	64-7 55-64-7 E-7	(12.2) 2.6 (5.8)	体部は緩やかに内湾し、体部に棱をもうけ、口縁部を外に引き出す。高台は三角形を呈する。	内面全体と体部外面上半分に明オ リーブ灰色の刷毛。内面底部系ねじま せ。外面中位から底部にかけてヘラ 削り。	良／ 密、長石含む/ 灰白色	17C~18C
陶器 灯明皿 瀬戸美濃	64-8 D-11	(9.6) (2.0) (4.3)	体部は緩やかに内湾し、端部を丸く 収める。内面に高さ7mm程のかえり がつく。	内面にムラなく鉄釉。外面は鉄釉の ハケ塗り。底部回転ヘラ削り。	良／ 密、白微粒子含む/ 灰色	1/4残存
陶器 小皿 瀬戸美濃 表探	64-9 (7.3)	(10.7) (1.8)	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、 端部内側を尖り気味に収める。	内面にムラなく鉄釉。体部外面ヘラ によるノタ目明瞭。外面に薄く鉄釉。	良／ 鐵分吹き出し 密、白、灰色砂粒含 む/ 灰色	1/4残存 18C~19C
陶器 盤 常滑	64-10 55-64-10 E-9	(38.8) (7.0)	口縁部は直線的に開き、S字状に折り 返し、垂直に立つ。	頭部内面指痕片魚。	良／ 密、黃褐色小穂、 白黒砂粒含む/ 灰白色	口縁部 1/10、 体部わざか に残存 13C
陶器 盤 常滑	64-11 55-64-11 R-10	(36.4) (10.1)	肩部より内傾して立ち上がり、S字状 に折り返し、口縁部で垂直に立つ。	口縁部上部1片による調整。	良／ 密、長石小穂、 白砂粒含む/ 明赤褐色	口縁部1/8、 体部わざか に残存 15C
土師器 鍋	64-12 55-64-12 E-5	(25.8) 17.0	口縁部は緩やかに外反し、湯呑を肥 厚させて丸く収める。全体に薄い作り。	口縁部内外面とも横ナデ。腹部内外 面ともハケ後ナデ。副部外周指痕片 魚。	良／ 粗、長石、石英、 青母子等。灰色砂粒含 む/	口縁部~ 体部 1/4残存 13C~14C
陶器 盤	64-13 R-1	(14.0) (16.0)	肩部に丸みをもち、口縁部は直立し て、端部を丸く収める。	摩滅により器底の脚窓観察不能。	良／ 密、長石、青母、赤 黒色粒子含む/ にぶい褐色	口縁部5/3 残存
陶器 さや鉢 初山焼	64-14 表探	(14.4) 6.1 (13.9)	体部は底部より直立し、口縁部端部 を肥厚させ、平坦に収める。	外面全体褐色の施付器。外面体部粗 い作り。底部回転糸切り後未調整。	良／ 密、長石小穂、白、 灰色砂粒含む/ にぶい黄褐色	1/4残存
陶器 桶 初山焼	64-15 D-14	(26.3) (11.6)	体部は直線的に開き、口縁部を折り 返す。口口。	12本の摺り目2ヶ所残る。	良／ 密、黑小穂、白、 黑色砂粒含む/ 茶灰色	1/5残存
中世陶器 盤 深美	64-16 表探	46.8 10.1	口縁部は「く」の字に外反し、上部で 大きく開く。端部はやや薄くなり、 丸く収める。	口縁部内面に茶灰色の釉ハケ塗り。 肩部に工具による沈線、ハケあり。	良／ 密、長石、白小穂、 白砂粒含む/ 灰白色	口縁部1/6、 体部わざか に残存 12C中~後

第5節 その他の遺物

(1) 瓦

瓦は、鬼瓦、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、半瓦が出土しているが、破片資料がほとんどで、全体の形状・規格が判明するものはほとんどない。遺構としては、溝・井戸・ピットから出土しているが特にSD23からの出土量が多く接合後の個体数で、鬼瓦1、軒丸瓦7、軒平瓦7、丸瓦17、平瓦373個体の破片量を数える。また、SE03からも丸瓦9、平瓦81が確認でき、その他SD37、38からも丸瓦、平瓦が94個体確認できた。その他は、グリッド出土資料で今回の調査で確認された瓦片は670個体にものぼる。これらの瓦は、いずれも投棄されたと考えられる状態で出土していることから、建物解体等の要因により、溝などに一度に投棄した結果と推定される。

鬼瓦 (65-1)

SD23から1点出土している。鬼の顔の部分は、欠けているが左部分の牙の一部が残っている。厚さは、3.1cmで牙は長く6cmを測る。この部分は、削り出してつくり、牙の先端部分は断面三角形に尖らせている。胎土は、赤褐色で細かい長石を多く含む。底部や背面には、粗粒痕、薬痕が付着している。

軒丸瓦

軒丸瓦で瓦当面の形状が明確なものは1点しか出土していない。(65-4)は、直径14cm~15.5cmの長円形を呈し、瓦当部上面の厚さは2.7cmである。文様は巴文で右巻きで細長く延び、先は界線と重なる。外縁は高く狭くつくられており、幅約1cmの珠文帯に推定31個の珠文を持つが、間隔はふぞろいである。胎土は赤褐色で瓦当面に細縹を多く含む。なお、(65-2, 3)は瓦当面部が明灰色に焼けている。丸瓦部との接合面は、瓦当部上面より0.7cmほど下位に位置して、強くナデて接合されている。

軒平瓦

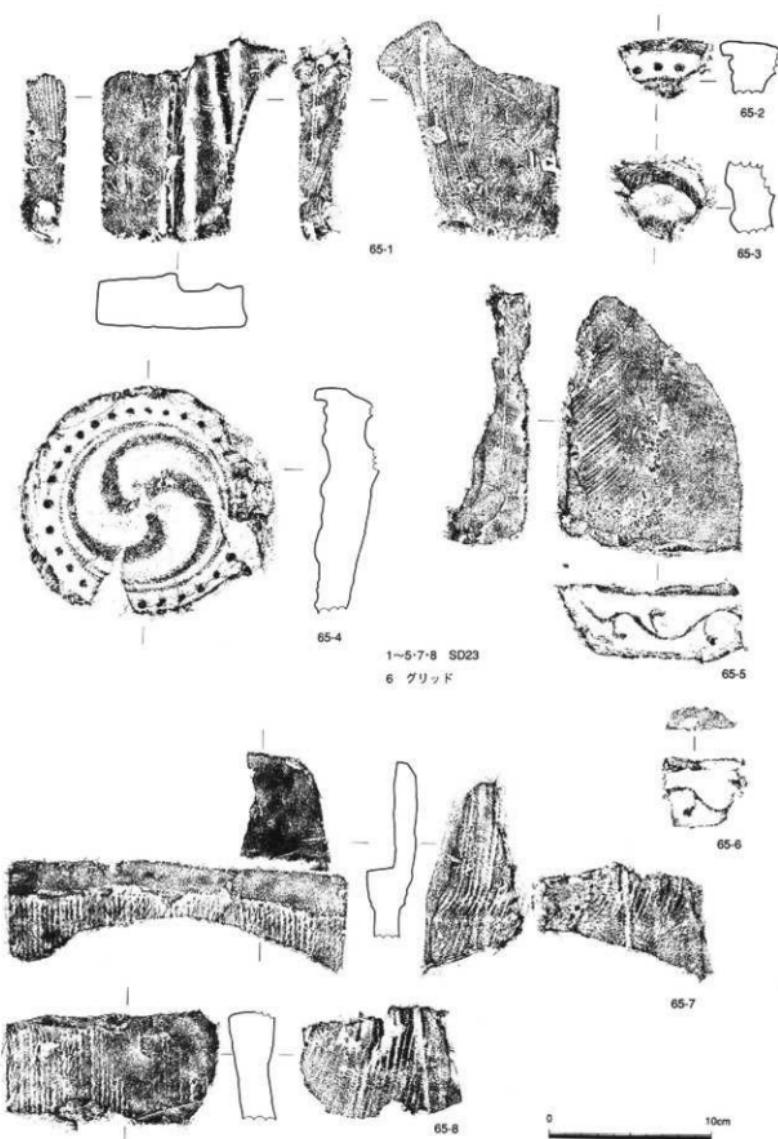
軒平瓦の瓦当文様は偏向唐草文?である。(65-5)は、瓦当部の幅4.2cm、平瓦部の厚さが2.9cmほどである。瓦当面には、本日が残り木製の范型を使用したことを伺わせる。外縁は高く、外区・脇区は設けていない。頭部は、平瓦部との境に段が付く段頭である。平瓦部凹面は、布目痕が明瞭で、両端には、斜めに糸切り痕が残る。凸部は、ヘラ削り成形され、その上を横ナデ調整する。胎土は、赤褐色を呈し、瓦当部が明灰色のもの(65-6)もみられる。軒丸瓦ほど細縹は含まないが、長石・雲母などが含まれる。

丸瓦

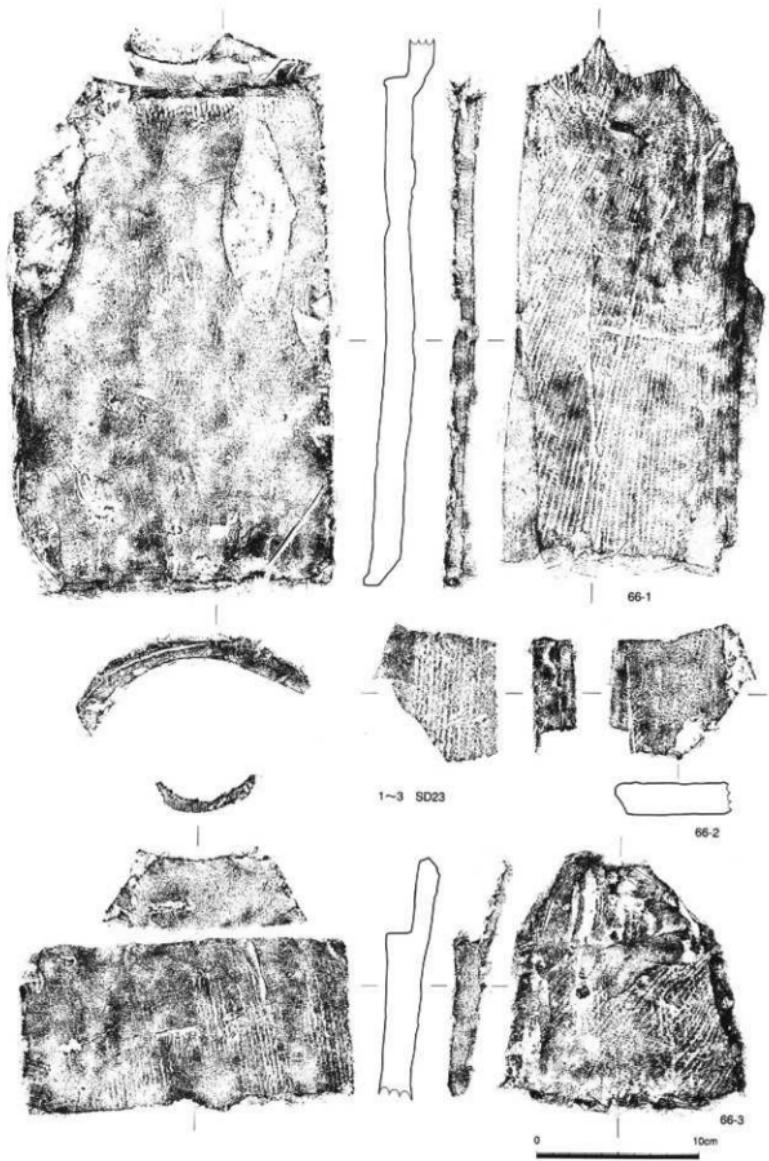
丸瓦は、有段の玉縁式のもので、暗灰色の硬質のものと赤褐色の軟質のものがある。凸面は、全体的に横ナデ調整を施すが、部分的に縄の叩き目を残す。凹面は、布目が鮮明に残るが、切り離しの糸切り痕が明瞭である。玉縁部は、粘土のたるみを寄せているため、しわが大きい。端部は、ヘラ削りで一面のものと二面のものがある。玉縁部は4.5~6.5cm程度で、丸瓦部の全長は、残りがよい(66-1)の計測値からみて30cm前後と思われる。

平瓦

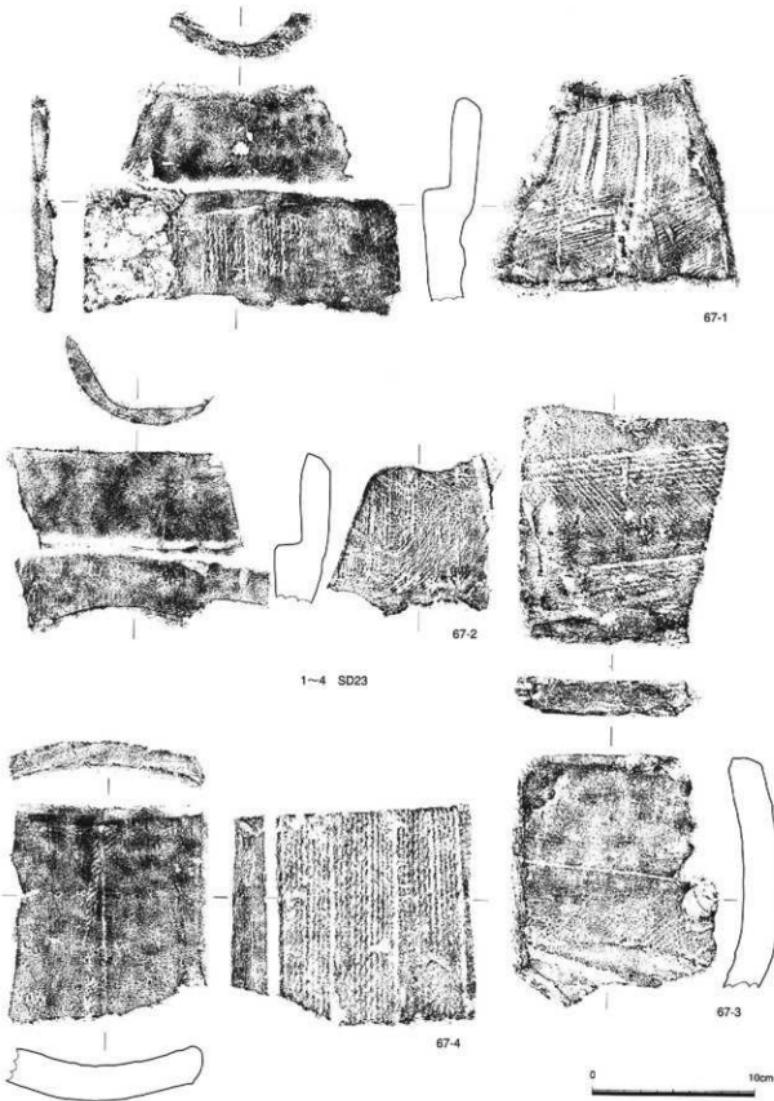
出土量の大部分は平瓦であるが、全体の形態を残している資料はない。丸瓦と同じく硬質のものと軟質のものとが見られるが、両者の間に調整等の差はみられず、基本的には、どの瓦も同じ手法を用いてつくられている。凸面は、縄の叩き目を全面に残すものと、縄の叩き目の間にヘラ削りを入れるもののがみられる。また、一部に糸切り痕が見られるものがある。凹面は、布目を残すものとヘラ削りされているものがあり、それらの両端に斜めの糸切り痕が残る。側端部は、ヘラにより一面取りと二面取りするものがある。SD23・SE03・出土のものとSD37・SD38出土のものでは、上器にやや時期差が見られることから、瓦にも時期差が確認される可能性も検討したが、両者の間での相違は認められなかった。



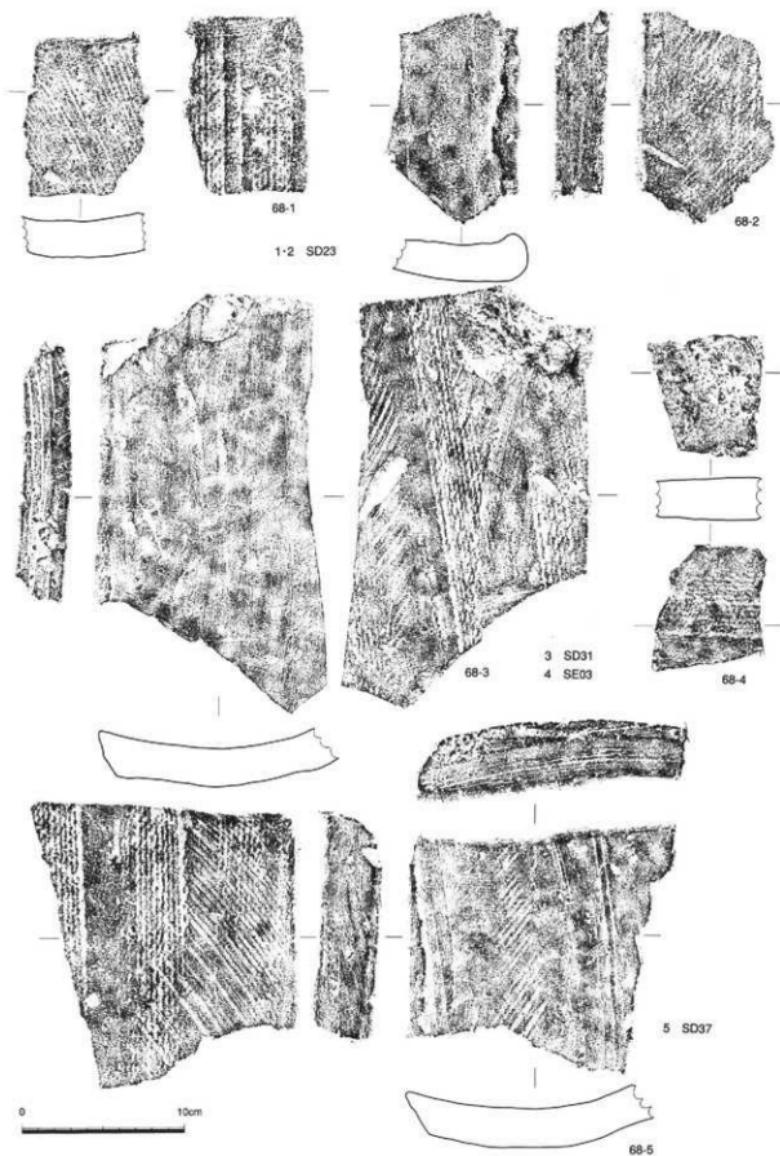
第65図 瓦実測図1



第66図 瓦実測図2

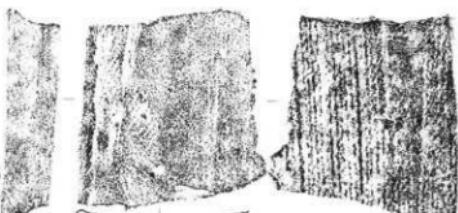


第67図 瓦実測図3

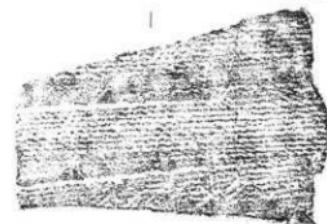
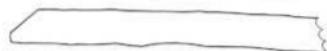


第68図 瓦実測図4

1 SD23



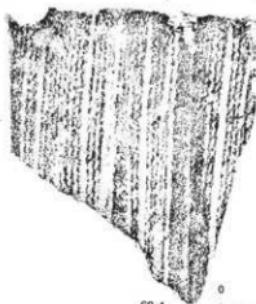
69-1



69-2



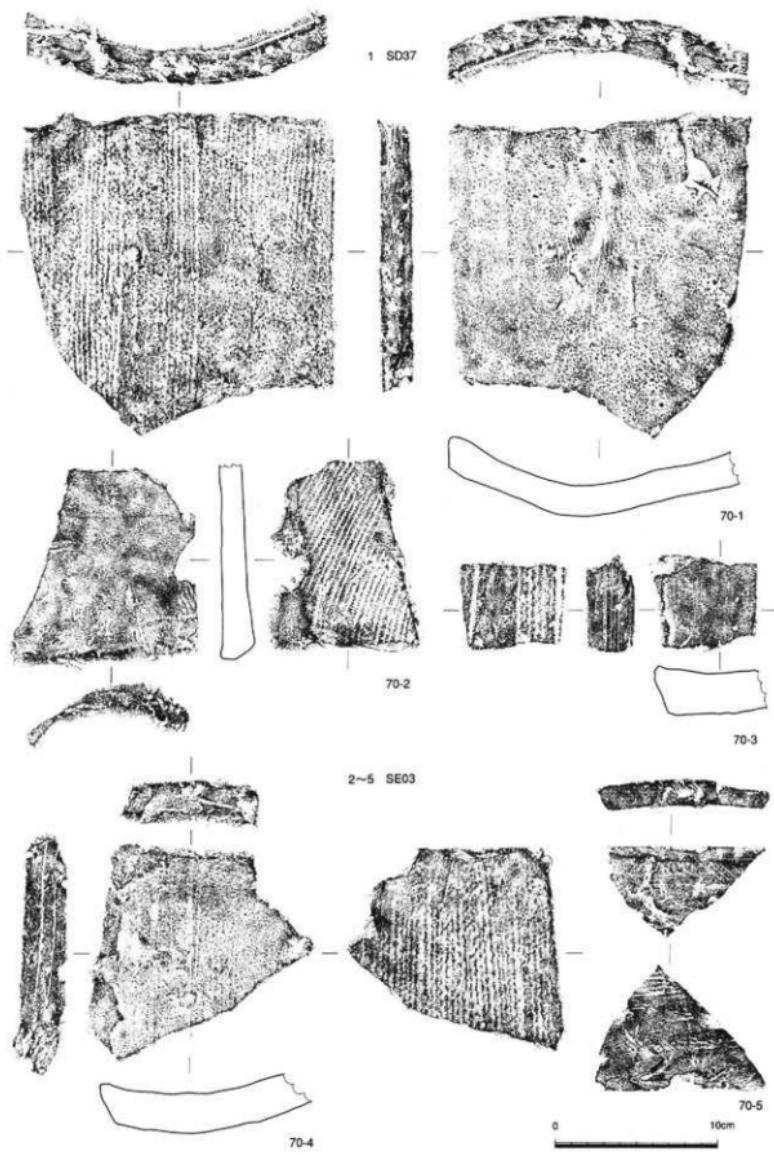
69-3



2~4 SD37

69-4 0 10cm

第69図 瓦実測図5



第70図 瓦実測図6

(2) 土錘

土錘は、数多く出土しており、遺構に伴わないグリッド出土のものが多いが、遺構から出土した土錘は、中世の盛期を示すSD23出土が他を圧倒しており、川辺の遺跡としての性格をよく表している。総数は、387個体を数え、そのうち遺構出土は222個体で、内訳はSD23の77個体を筆頭に溝から152個体、井戸17個体、土抗6個体、ビット47個体となる。グリッドでは、特に5, 6グリッド出土のものが63個体と多い。6グリッドでは、調査区排水溝から、約20個体まとまって出土している。形態は、(71-5)に代表されるような大型で中央部に最大径を持つもの(I)と(71-29)のような棒状のもの(III)、この中间の形態のもの(II)とに分けられる。端部は、両端をヘラ切りするもの、片側をヘラ切りするもの、細く丸めるものとがあるが、形態とあまり関係があるとは言えないようである。ほぼ形態が判明する302個体のうち、Iは、52個体、IIは184個体、IIIは66個体である。土錘の重さは、2g~7g程度のものが多い。

(3) 金属製品

弥生時代の遺構から出土したものは、4号周溝墓の南溝の4点である。(72-1)は、手鎌で、両面の返しが残っている。幅が5.75cmで縦幅2.25cmと小型のものである。(72-2)は、直刃の鎌と思われるが、欠損している。最大幅が3.2cmで摩耗が激しい。(72-3)は、刀子と思われる長さ5.45cmで、幅が1.7cmある。(72-4)は、長さ3.55cmの中茎状を呈しているが、何であるかは不明である。SD54からは、鉄斧状のもの(72-5)が出土しているが、X線で調べたところ3枚重なっている事が判明したが、もろいため肉眼で確認することはできなかった。一番大きいものは、長さ10.8cmで幅3.1cmである。

中世の遺物としては、銭貨や刀子等が出土している。銭貨は4点が、遺構に伴わずに発見され、その内訳は、元豊通宝が1点、皇宋通宝が1点、寛永通宝が2点である。元宝は、北宋の年号であるが、北宋銭には模鋳銭が多く出回っており、これも模鋳銭とみられる。

8は、P913から出土した小刀状のものである。長さが、26.8cmで幅が、2.4cmある。9もP970から出土した刀子状のものである。また、10がSD37、11がSD23、12はP210から出土しているがいずれも用途が分かるものはない。

(4) 土製品・石製品

いずれも弥生時代の遺物である。土製紡錘車は、1号周溝墓の南溝から出土した。最大径が、5.6cmで、厚さが1.8cmである。重さ22.9gで、半分欠損していた。滑石と思われる加工痕がある石製品(72-7)は、SD54の直上から出土したもので、身体の装飾に使用されたものと推定される。半月状の石に穴を穿っている。また、4号周溝墓の南溝からは、打製の石斧(72-6)が出土している。長さが、10.2cmで、幅4.3cm、厚さ1.4cm、重さ87.9gで石英ヘン岩を使用していると思われる。片面に自然面を残しており、使用による摩滅が著しい。

(5) 木製品

祝山遺跡は、微高地に立地しているため、木製品はほとんど残っていない。前回の調査では、井戸から曲物や木枠が出土しているが、中世の井戸SE03から出土した曲物は遺存が悪く図示することができなかった。しかし、SE03からは荷札(73-2)が出土している。文字を書いて使用した後、再度削って使用していたらしく加工痕が明瞭であるが、文字は確認できなかった。(73-1)は、SD38から出土した漆器で、遺存が悪いため朱で描かれた文様もはっきりしない。(73-3)は、9グリッドから出土した杓子で、遺構は検出できなかったが、中世のものと思われる。

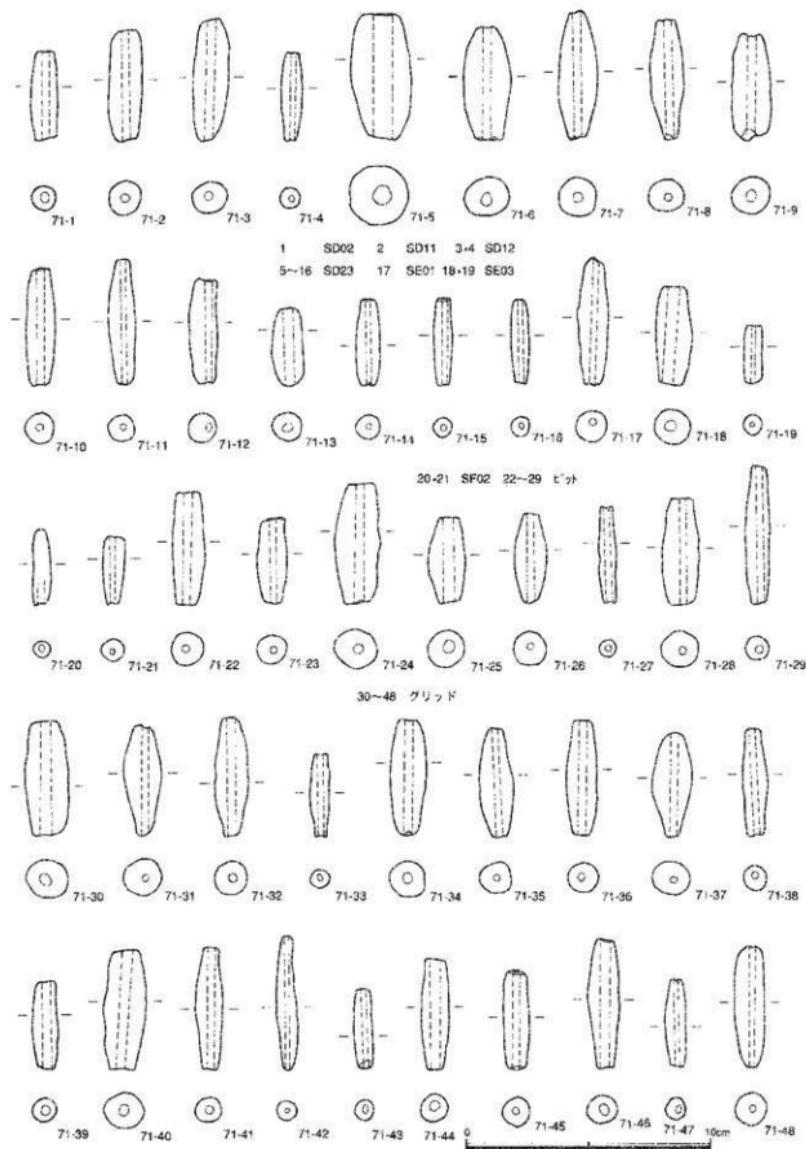
第10表 土錠観察表

長さ・最大径・孔径の単位は(cm) 重さの単位は(g)

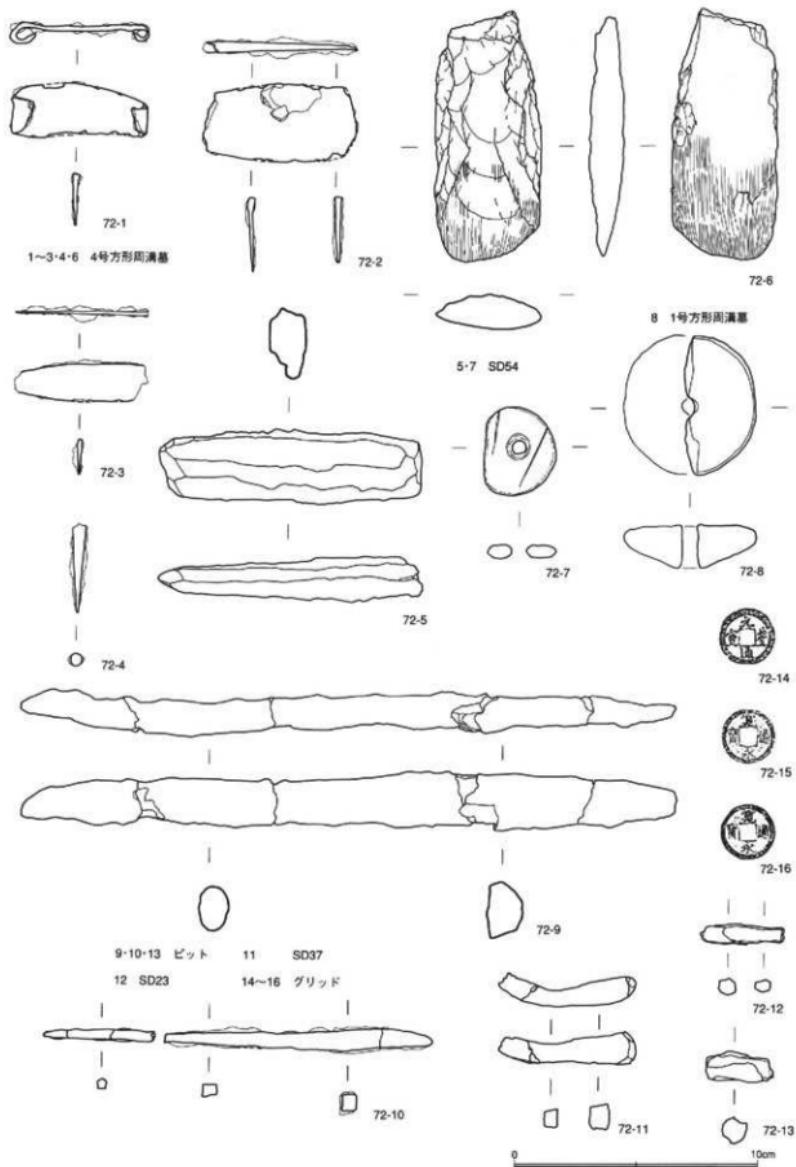
番号	長さ	最大径	孔径	重さ	色調	胎土	備考	番号	長さ	最大径	孔径	重さ	色調	胎土	備考
1	3.6	1.1	0.4	3.4	明赤褐色	密	A	25	3.45	1.5	0.45	7.1	褐	密	A
2	4.5	1.4	0.35	8.9	普	密	B	26	3.65	1.4	0.3	6.0	黒褐色	密	C
3	5.0	1.45	0.35	7.8	橙	密	C	27	3.95	0.7	0.25	1.5	明赤褐色	粗	C
4	3.6	0.85	0.2	2.6	橙	密	C	28	4.3	1.5	0.3	8.1	赤橙	密	A
5	5.2	2.4	0.8	2.8	橙	密	B	29	5.7	1.0	0.3	5.2	褐	密	C
6	4.6	1.9	0.55	13.2	橙	密	B	30	4.65	1.75	0.45	11.9	橙	密	A
7	5.3	1.55	0.3	10.3	赤褐色	密	C	31	4.5	1.55	0.3	7.7	浅黄橙	密	C・欠
8	4.9	1.35	0.3	7.6	赤	粗	C	32	4.9	1.35	0.4	8.7	明赤褐色	密	C
9	4.4	1.6	0.4	11.0	橙	密	C・欠	33	3.3	0.8	0.3	1.6	淡赤橙	密	A
10	4.8	1.15	0.3	7.3	橙	密	C	34	4.7	1.5	0.4	8.5	橙	密	C
11	5.1	1.1	0.25	5.3	橙	粗	C	35	4.5	1.3	0.3	6.3	橙	密	B
12	4.3	1.15	0.3	6.3	明赤褐色	密	C	36	4.65	1.2	0.3	6.5	黄橙	密	B
13	3.2	1.2	0.4	4.1	黄橙	密	C・欠	37	4.2	1.6	0.3	7.0	黄橙	密	C
14	3.5	1.0	0.2	3.5	浅黄橙	密	C	38	4.4	1.05	0.25	4.0	橙	密	C
15	3.6	0.8	0.2	1.7	橙	密	A	39	3.6	1.0	0.4	2.8	灰白	密	C
16	3.4	0.8	0.25	1.9	橙	密	A	40	4.9	1.7	0.4	12.5	橙	密	A
17	5.2	1.3	0.25	8.9	橙	密	C	41	4.9	1.05	0.3	5.1	明赤褐色	密	A
18	4.0	1.5	0.45	8.3	橙	密	A・欠	42	5.5	0.85	0.2	3.4	明赤褐色	密	C
19	2.4	0.75	0.2	1.7	橙	粗	欠	43	3.25	0.85	0.4	2.1	赤褐色	密	B
20	3.1	0.8	0.25	1.5	橙	密	C	44	4.45	1.1	0.4	4.4	橙	密	A
21	2.85	0.9	0.2	1.9	橙	密	C・欠	45	4.1	1.2	0.3	4.8	橙	密	A
22	4.6	1.3	0.3	7.9	明赤橙	密	A	46	5.3	1.3	0.5	7.8	灰	密	C
23	3.5	1.3	0.25	5.3	橙	密	欠	47	3.6	0.9	0.3	2.3	灰黄	密	A
24	4.9	1.8	0.4	14.3	赤	密	A	48	4.95	1.4	0.25	8.0	橙	密	C

備考欄のA・B・Cは、端部の調整形態を表す。

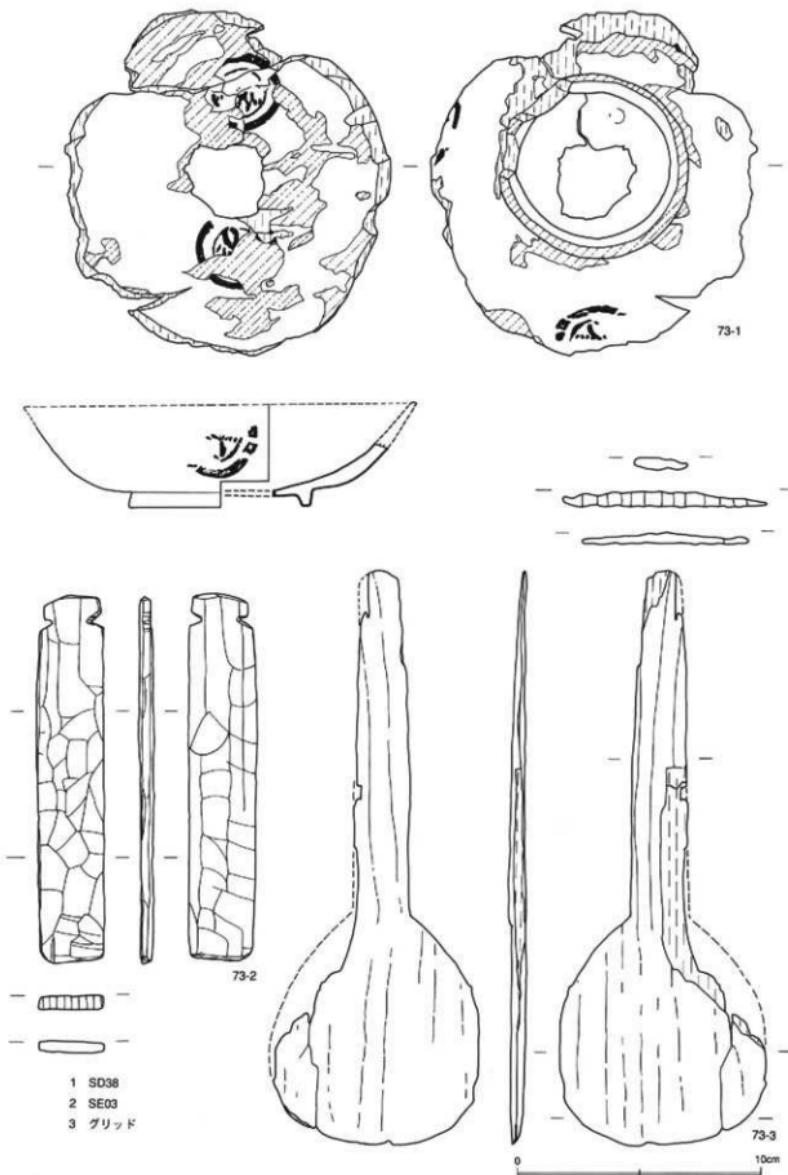
A・両側ヘラ切り B・片側ヘラ切り C・両側丸くナデ



第71図 土鐘実測図



第72図 金属製品・土製品実測図



第73図 木製品実測図

第5章　まとめ

第1節　祝田遺跡出土の山茶碗について

遺物の検討の結果、SD23, SD34, SE03, SF17出土の山茶碗にそれぞれ特徴的な形態が見られたので、若干の検討を加え、形態・技法・胎土から分類を試みた。

(1) 法量について

山茶碗の法量

SD23, SD34, SE03, SF17出土のものを法量散布図に表してみた。(第74図) これは、形態・法量が判明したほぼ完形の山茶碗を図示したもので、縦軸に器高、横軸に口径を表している。どの遺構出土の山茶碗も器高は、5cm~6cmの間に中心があるため、縦軸では差ははっきりとでてこないが、口径は、SD34のグループがほぼ17cmを中心としてまとまりがある。SD34とSF17のグループ、それにSE03のうち比較的口径が大きいグループに重なりがみられる。SF17は出土個体数が少ないため、中心を押さえることはできないが、輪花、漬け掛けがあるのでSD34より体部の内湾が少なくなった形態であるため、SD34の小口径の部分に重なりができたと思われる。また、SE03の大口径のグループは、輪花、灰釉がなくなり体部の直線化傾向がみられるが、SF17出土のものと口径が16.5cm付近のところに重なりができたように思われる。しかし、このグループの中心は、口径16cm、器高15.5cmのところにあると考えられる。

SE03の小口径のグループは、口径15cm、器高15.5cm付近に中心がくる。これは、SD23出土のものの内、灰色の粗い胎土の山茶碗のグループの中心とはほぼ一致する。形態的には、体部が直線化して立ち上がり、外反度も増す。また、高台も低く粗雑化するなど同じ傾向があるためと考えられる。SE03の遺物の中にもSD23と同じ胎土・形態を持つものが見られる。

小碗・小皿の法量

山茶碗と同じ造構に小碗のみ出土したSD29も加えて図にした。(第75図) SD34は、2点のみであるが口径10cm以上で器高も3cm以上のため、他のグループとかけ離れている。SD29の遺物は、高台が低くなるが口径が大きい小碗と、小型で高台を丁寧に成形するものがある。SF17にもこの傾向がみられ、SF17のものは、SD29の小碗をやや小振りにしたものとなり、SE03のグループとSD29の遺物とのちょうど中間に位置する。SE03は、高台がなくなり皿化したもので、碗形状のものは、口径9cm、器高2.2cmぐらいのところに中心を置く。SF17から出土した高台のないものもこのグループに入れることができる。また、SF17まで続いた小型で丁寧に高台を成形するものは、小皿になると見あたらなくなる。SE03のうち体部が直線化して皿形態に変化したものは、口径8.6cm、器高2cmに中心を置いている。なお、山茶碗と同様にSD23の小皿は、胎土が灰色で粗いものを抽出した。これは、口径が7.8cm、器高1.7cm付近に中心がくる。SE03の小皿でも扁平化したものはこのグループと同じ法量を持つ。

以上、山茶碗、小碗・小皿を検討したが、法量的には、SD34→SF17→SE03→SD23出土のものへとの小型化することがみられ、小碗で含めたSD29出土のものは、SD34とSF17の間に位置する。

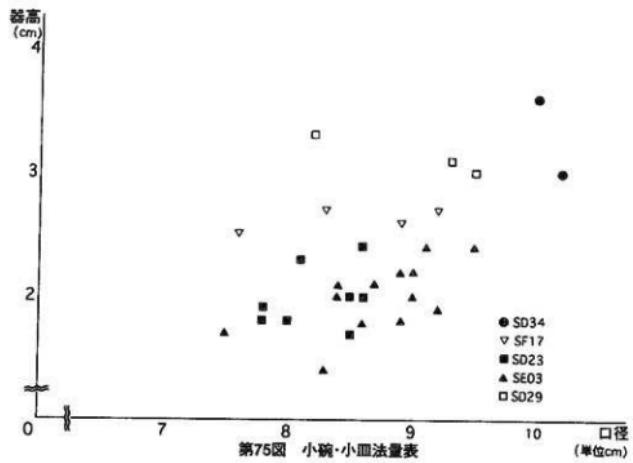
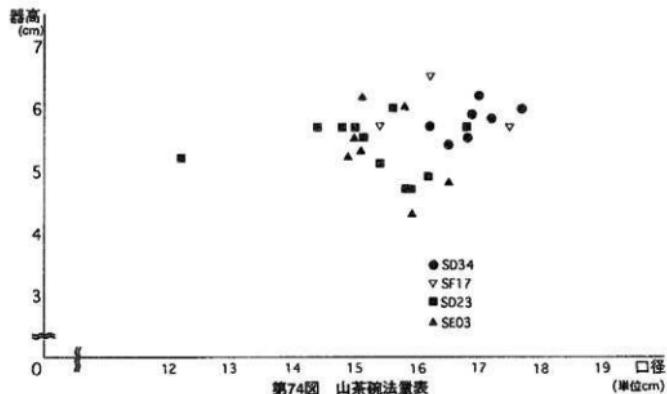
(2) 胎土から

科学的な胎土分析をしたわけではないので、遺物の観察結果から大きな違いがあるものに限り検討を加えてみる。基本的には、茶灰色、乳灰色の胎土を持ち、やや砂粒を含むものが多いが、これは渥美湖西の胎土の特徴で、酸化鉄の噴き出しが見られるものがあるので、浜北系のものが含まれていると考えられるが、明確な差がつかめないため、渥美湖西系としてまとめておく。明確な差が見られるものは、SE03とSD23, SD12出土のもので渥美湖西系のものと灰色または、青灰色で比較

的大きい粒子の粗い胎土のものである。これは、直線化した体部を持ち、剥離が激しい粗雑な高台の山茶碗と小型で偏平な小皿のグループで、特にSD23に多くみられる。(第76図)しかし、SD23でも図示できたものはこの胎土のものが多かったが、破片資料では、やはり渥美湖西系と見られるものが圧倒的である。また、SD23とSE03は共に瓦を多く出土した遺構で、出土瓦ではこの2つの遺構の時期差は押さえられない。

(3) 出土資料の分類

法量、及び胎土により祝田遺跡出土の山茶碗について若干の考察を行ったが、ここでは、形態的な特徴と、技法などを加味して消費地遺跡としての祝田遺跡出土の山茶碗について分類を考えてみる。なお、産地に違いがあるものがあるため、明確な時期については押さえられないが、前回の調査報告書と湖西古窯後群の編年(松井1993)を参考に述べていきたい。



分類は次の観点でおこなった。

- 形態は、体部が内湾して立ち上がるものから、直線化するものへ。
- 山茶碗、小碗の高台の成形・調整が丁寧なものから低く粗雑化するものへ。
- 小皿は、碗形態のものから底部が大きくなり扁平化するものへ。

これらの観点から、SD23, SD29, SD34, SE03, SF17 出土の土器を基に分類する。

I - 1 口径が17cm ぐらいで、腰が張り内面をゆったりつくる。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。高台は、丁寧なナデにより成形・調整し、輪花・濱け掛けが見られる。小碗の口径は10cm 前後で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。高い高台がつく。

I - 2 口径は、1より小さく腰の張りが少ないが、体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部の外反は大きい。高台は、ナデ調整されている。輪花・濱け掛けが見られる。小碗は、口径が大きいものは、高台が低くなり、やや粗雑な調整であるのに対し、小型のものは、丁寧なつくりの三角高台である。SD29出土の小碗は、法量では、1と2の間にに入るが、これに相当する山茶碗が見当たらないため、とりあえずここに分類する。

II II径は、16cm 前後で体部は直線化する傾向がみられるがまだ内湾を意識している。高台は、低くナデ調整も雑になる。輪花が残るものとないものがあり、濱け掛けはほとんどみられない。P851出土のものと6グリッド出土のものがこれにあたる。小皿は、小碗から高台を取った碗形態のもので、底部を厚く切り、底がとびだした形状のものである。SF17からこれに分類できる形態のものが出土しているので、I - 2 と II の違いを山茶碗の直線化傾向と小碗から小皿への変化に求めたが、厳密に区別できるかは確信を持てない。

III - 1 II径は、16cm 前後で体部の直線化が進み、体部から外反させる。高台は粗雑化し、いわゆる濱れ高台と化す。輪花・濱け掛けはみられない。小皿は、II径が9cm 前後で器高が2cm ぐらいで碗形態から皿形態になったもので、体部から外反する。

III - 2 口径は、15cm 前後で体部は直線的に立ち上がる。粘土帶を張り付けただけの高台で、粗雑なつくりである。小皿は、II径に比べ底径が大きくなり、扁平化が進む。

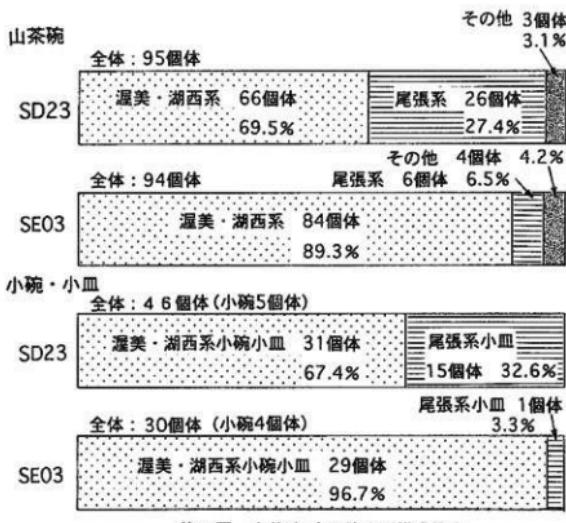
IV 灰色か青灰色の粗い胎土で、口径が15cm 前後で底径がやや小さく、体部が直線的に立ち上がり、端部を内側にとがらせる形態である。高台は、粘土帶を押さえただけで、剥離が激しくほとんど役割を果たしていない。小皿は、器高が2cm 以下で、内面は底部と体部の境がはっきりと屈曲している。端部をとがらせ、内面底部に指で窪みをつくる。

以上のように分類したが、IVとした山茶碗は尾張地方のいわゆる南部系山茶碗と呼ばれるものと思われる。この山茶碗が出土しているSE03とSD23について、渥美湖西系山茶碗の高台の形態を分類し比率を求めたものが(第77図)である。この表にみられるように南部系山茶碗が多く出土するSD23は、III - 2と分類した山茶碗の底部が増加していることが分かる。つまり渥美湖西系の山茶碗でIII - 2と分けたものが多くなった時に南部系山茶碗が多く入ってきたことを伺い知ることができる。両者は共存していたことは明かで時期的に重なるものである。南部系山茶碗は、一つ一つの個体から產地を押さえることが難しいといわれているが、あえて狼投の編年に当てはめるならば7型式に比定できる。(藤澤1982) 時期的には、13世紀中頃と考えられており、III - 2としたものを同時期とするならば渥美湖西系山茶碗の盛期の下限もこの時期で考えられそうである。

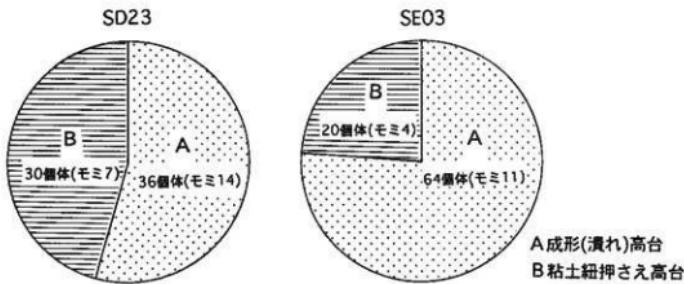
前報告書では、Iとした山茶碗を渥美の大アラコ期に比定し、さらにそれに先行もしくは平行するものとして、前調査の遺構SE03出土の深い形態の山茶碗を上げ、12世紀中葉としている。しかし、この遺構に伴う小碗は、I - 2として検討したものと近似しており、I - 1よりむしろI - 2とし

たい。また、年代を押さえられるものとして東大寺瓦窯の製品があるが、この製品の特徴は、輪花がなく、高台は低く、不定型であるとされる。この時期をⅡからⅢ-1と押さえると上記の分類に年代観を加えることができそうである。

Ⅰ-1は、大アラコ期の12世紀中葉に比定される。しかし、SD34出土のものでも古様相を示すものがあり、この時期もさらに細分できる可能性がある。Ⅰ-2は、12世紀後半に比定できる。小碗から小皿への形態変化した時期ははっきりしないが、概ね12世紀末から13世紀初頭と考えられ、Ⅱをこの時期に置く。Ⅲ-1は、東大寺瓦窯期の13世紀前半に置く。Ⅲ-2とⅣは平行期と捉え、猿投編年から13世紀中葉としたい。以上消費地遺跡の祝田に入ってきた山茶碗について考えたが、あくまで消費地遺跡の様相を述べたものである。



第76図 山茶碗・小皿胎土別構成比率



第77図 温美湖西系山茶碗の高台形態による分類比率

第2節 中世の祝田遺跡

(1) 祝田御厨について

中世神宮領の中心は、御厨・御園である。本来御厨は、魚介類の貢納、御園は果実・蔬菜類の貢納を目的としていたが、徐々に所領と同質化した。その転機となったのは、11世紀の宮司・祭主一族の大中臣氏と禪宣・權禪宜層の荒木田・度会氏との権力争いである。やがて、大中臣氏の支配権の弱体化にともない11世紀末から12世紀初めにかけて本宮庁を確立した内宮の荒木田氏と外宮の度会氏を中心とした神宮勢力の領主的所領として、御厨・御園が体制的確立期を迎えるのである。(棚橋 1991)

[史料1 『静岡県史』資料編4 中世1]

建久三年（1192）の二宮禪宜注進状案（建久神領注文）

（前略）

都田御厨内 紿主神祇少副故公宣等子息

刑部御厨二官 紿主散位大中臣親範等

已上件神領等、子細見于嘉承注文・永久 宣旨也

（後略）

史料1には、都田・刑部両御厨が「於往古神領者、写進嘉承評定注文・永久裁決宣旨」の御厨として上げられている。(棚橋 1983) 都田御厨は、「神宮雜例集」に「遠江国五十戸 都田御厨 為便補所」とあるように封戸の便補所として成立していたものがいつの日か御厨として機能するようになっていたものである。また、刑部御厨嘉承注文に登場することから12世紀初頭の成立が考えられる。いずれにしても、この時にはまだ祝田御厨は登場してはいない。祝田御厨の初見は、「神鳳鈔」である。

[史料2 『静岡県史』資料編4 中世1]

（前略）

内宮 郡（都）田御厨 上分田見作八十九丁、段別一斗

内宮 刑部御厨 上分三十石 紿三十斤 外宮上分三石 百餘丁

内宮 祝田御厨 五十餘丁

（後略）

祝田御厨は、内宮領に含まれ、面積は五拾余町であった。峰前神社の縁起には、八田（祝田）四十五町歩を八日毛止恵という人が開墾したとあり、数字的には似ている。都田・刑部御厨の間に位置する祝田地域もこの頃盛んに行われた神宮の在地領主への上分米貸付とこれを契機とした積極的な所領獲得策等により、「神鳳鈔」が成立したとみられる13世紀中頃までには、伊勢神宮領に組み込まれていた可能性がある。

内山真龍の『遠江国風土記伝』によると祝田の旧名は、「神田、または八都射幾（ヤツザキ）または八田（ハタ）」といい、承久以来「方田」（祝田）というとされている。承久という根拠は不明であるが、祝田御厨の成立と関係するものと考えられよう。

祝田遺跡の東には、善明寺という寺がある。俗に厄除観音と呼ばれる臨濟宗方広寺派に属している。寺伝では、「約1200年前、聖武天皇の御代行基菩薩の建立で、その後、長い間衰退していたが約500年前黙厳禪師が中興して禅宗になった」とある。また、明治初年までは、この寺の北に光西庵、西に慶雲庵という寺があったという。

年次未詳であるが表記の記述から弘安年間と推定される某學状に

[史料3 「静岡県史」資料編4 中世1]

山門西塔仁惠申、遠江□祝田御厨内宗松・是□名聞事、済政僧都状
(後略)

延暦寺西塔の仁恵が、済政僧都の遠江祝田御厨宗松名等に関する訴えを、朝廷に取り次いでいる記事である。伊勢神宮の御厨といえど寺の存在は無視できない。この史料では、延暦寺との関係を示している。また、前掲の『遠江國風土記伝』にも、都田御厨の神明社として、式内社の須倍神社があり、その他にもいくつかの寺院の名を上げている。刑部御厨についても、式内社の乎豆神社の他に田米寺などの名がみえる。祝田には、式内社の峰前神社が鎮座するが、これが神明社としての役割を果たしていたのかは、後の研究に委ねるとして、土地宝典には、祝田遺跡の南側に神宮寺の字名が残っており、神内・出雲坊・神田など関連する字名を入れるとかなり広大な地域を占めている。御厨との関係を考える上で興味深い。

以上、祝田御厨について文献などから考えられることを思うがままに述べてみた。次項は、出土遺物から祝田御厨について考えてみたい。

(2) 出土遺物から

奈良時代末から平安時代初頭の遺物として注目できるものは、風字硯、綠釉陶器、前回の発掘調査で出土している白磁の四耳壺、そして瓦の存在である。これらのものが、祝田遺跡が普通の集落遺跡と違った性格を持った遺跡であることを示す根拠となっている。年代的には、風字硯は、8世紀末から9世紀にかけてのもの、綠釉陶器・白磁の四耳壺は、11世紀から12世紀始めにかけてのものと考えられるが、このうち、瓦については、廃絶した時に他の土器類と共に埋もれたとしてしまえば瓦と土器を同時期のものとして扱われてしまうこととなり、すなわち、13世紀中葉となる。しかし、建物が放置され、荒廃していたものを、その時期に廃絶したとすれば、上器の時期より前の遺構と取り扱われることとなり、遺構がはっきりつかめなかつたため、年代決定にはやや疑問が残る。そこで、瓦当文様からこの瓦を考察してみる。軒丸瓦らの巴文は、12世紀前半に建てられた尊勝寺や鳥羽南殿に見られる。また、東山第61号窯では、巴文を採用して京へ搬入しているが、実年代は12世紀中葉以降と考えられている。(上原)

この頃の巴文を持つ軒丸瓦は、瓦当面の径が130mmと小型化てくる。また、平安末の平泉でも巴文を採用した軒丸瓦がみられるが、径110mmの小型のものであり、軒平瓦の文様は、剣頭文で巴文・剣頭文の組み合わせとなっている。(江谷 1989) 平安後期に入ると瓦当文様が多様化して、在地の瓦が多くなり、研究も進んでいないのが現状であります。しかし、これは分からぬが、祝田遺跡出土の瓦を見ていくと、軒丸瓦は、径が140~155mmのもので、小型化が進んだ上記のものよりもやや大きい。また、文様の組み合わせは、巴文と偏重唐草文である。この瓦に似ているものは、県内では菊川町の潮海寺跡で灰釉陶器と共に出土しているようである。以上ははっきりと年代を決められるものはないが、瓦の年代の上限を平安末から鎌倉初期にかけての建物に使用された瓦と考えてもよいだろう。

(1) で祝田御厨の成立を13世紀代としたことからこの瓦は、御厨開運施設とするより、むしろこの地域にあった寺に関連したものと考えた方が良いと思われる。この寺は、風字硯・綠釉陶器の存在などからも一時的なものではなく、継続して存続していたものであり、微高地の広さからは、大きな伽藍をもつたものとは考えられないが、寺域の中に、時期はずれるが六勝寺に見られるような阿弥陀堂のようなものが造られたのではないだろうか。いずれも遺構で押さえられなかったため、想像の域を出ない。

第3節 おわりに

弥生時代の遺構として今回検出できた環濠（SD54）は、前回調査区では検出できていない。また、方形周溝墓についても前回の調査では、周溝の中層の土器が入り込んだ部分しか掘り切れていない感がある。自然堤防上で、酸化が進んだ覆土を見分けるのは大変困難であることを改めて思い知らされた思いである。しかし、好運にも検出できた環濠もいくつかの問題点を投げかけている。まず、調査方法の問題もあるが、方形周溝墓との切り合いと時期差が曖昧なこと。表採土器が多い調査区北東の善明寺裏付近にかけて集落の本体の存在を考えると伊場遺跡等でみられるように集落→環濠→方形周溝墓の図式が成立したこと。環濠下層の旧河川との関連について。また、4号周溝墓周溝から出土している鉄製品の存在など、今回の調査で解明できなかった点が多く残された。また、調査終了後に調査地域を含め、新堤構築工事でかなり深くまで掘削したところ、かなり下から縄文晩期の遺物が出土し、細江町在住の船越氏が所蔵しているということである。この時期の祝田地域を考える上でも興味深いことと思われる。

中世の遺構は、かなりの搅乱と切り合い、上層が削平されていたことなどにより遺構として検出できたものは掘りの深いものばかりとなり、調査のねらいとして想定していた遺構の存在をはっきりつかむことはできなかった。しかし、風字窯や縁袖陶器の存在、瓦など奈良時代末から普通の集落遺跡とは違った性格を持った遺物が出土している。それらの存在があって、初めて中世の祝田御厨につながっていった様子を想像することができる。

今回の祝田遺跡の一連の調査は、不十分ながらもこの地域の歴史を解明する一つの手段として、また新たなる疑問を投げかけながら終了することとする。今後の研究に期待したい。

最後に、小学校教員から一時的に考古の世界に触れることになり、右も左も分からぬものを心より励まし支えて下さった先輩諸氏及び同僚の皆様方、それに島田事務所スタッフ一同に心よりお礼申し上げたい。

(参考文献)

- 赤塚次郎 『廻間遺跡』 (財) 愛知県埋蔵文化財センター 1990
- 久野正博 『三河・西遠江の後期弥生土器編年と地域性』『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』 1991
- 鈴木敏則 『欠山式の地域性』『転機』創刊号 1985
- 鈴木敏則 『欠山様式とその前後』『欠山式土器とその前後』研究報告編 1987
- 浜松市遺跡調査会 『椿野遺跡』 1982a
- 浜松市遺跡調査会 『椿野遺跡』 1985
- 浜松市教育委員会 『伊場遺跡遺物編3』 1982c
- 浜松市教育委員会 『山の神遺跡』 1989
- 浜松市教育委員会 『梶子遺跡Ⅷ』 1991
- 細江町教育委員会 『川久保船渡遺跡』 1993
- 足立順司 『内耳鉢の研究』『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅱ』 1987
- 足立順司 『中世遠江における坪藏錢』『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅱ』
- 1990
- 上原真人 『平安後期の軒瓦に関する基礎研究』『考古学論考』小林行雄博士古希記念論文集 1982
- 内田智久 『瀬戸窯の山茶碗』『マージナル』No.7 愛知県考古学談話会 1987
- 江谷 寛 『平安京出土瓦から見た平泉出土瓦の年代』『古代文化』vol.45 (財) 古代學協会 1993
- 湖西市教育委員会 『西笠子第64号窯跡発掘調査報告書』 1987
- 湖西市教育委員会 『山口第17地点古窯発掘調査報告書』 1991
- 後藤建一 『渥美・湖西中世古窯跡群』『マージナル』No.7 愛知県考古学談話会 1987
- 後藤建一 『湖西古窯跡群の須恵器と窯構造』『静岡県の窯業遺跡』 静岡県教育委員会 1989
- 静岡県考古学会 『シンポジウム灰釉陶器の時代とその流通』
- 棚橋光男 『社領』『講座日本莊園史2 莊園の成立と領有』 1991
- 棚橋光男 『中世成立期の法と国家』 1983
- 中谷雅治 『平安時代後期の瓦頭文様』『平安博物館研究紀要第2輯 平安文化の研究1』 平安博物館 1971
- 横崎彰・新田 洋 『日本古代の陶硯』『考古学論考』小林行雄博士古希記念論文集
- 横崎彰・新田 洋 『平安時代～中世における煮沸用具－「伊勢型」鍋－に関する若干の観察』『三重考古学研究1』 三重考古学談話会 1985
- 藤澤良祐 『瀬戸古窯址群1』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要I』 瀬戸市歴史民俗資料館 1982
- 松井一明 『宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察』『静岡県の窯業遺跡』 静岡県教育委員会 1989
- 松井一明 『遠江における山茶碗生産について』『静岡県考古学研究』No.25 静岡県考古学会 1993
- 松澤和人 『広久手古窯跡群の出土遺物－瀬戸窯南部系山茶碗第7型式の細分－』『瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要 第1輯』 (財) 瀬戸市埋蔵文化財センター 1993

静岡県、祝田遺跡における自然科学分析

古環境研究所

I. 祝田遺跡の花粉化石

祝山遺跡において検出された弥生時代後期の環濠（SD54）について、当時この環濠がどの様な環境（水の影響など）であったのかを検討する目的で環濠埋積土が採取された。またこの環濠の下より出土土器片から弥生時代中期と考えられている河道跡が検出され、この堆積土についても上記と同様の目的で試料が採取された。ここでは花粉化石から当時の環濠や遺跡周辺の植生について検討し、以下にその結果・考察を示す。

I. 試料および分析方法

分析用試料はSD54環濠より2層と5層の2点が、また河道跡のⅦ層より1点の計3点が採取された。このうち試料2（2層）は青灰褐色のシルト質粘土～粘土質シルトで、酸化鉄の集積がみられ、試料5（5層）は青灰褐色の砂質粘土～シルトでやはり酸化鉄の集積がみられる。試料7（Ⅶ層）は暗青灰褐色の有機質粘土～シルトで、材片が含まれる。

花粉分析はこれら3点について以下のような手順にしたがって行った。

試料（湿重約0.5～1g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後0.5mmの篩にて植物遺体等を取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え30分間放置する。水洗後、酢酸処理、続いてアセトリシス処理（無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残液にグリセリンを滴下し保存用とした。検鏡はこれら残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

2. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉22、草本花粉11、形態分類で示したシダ植物胞子2の計35である。これら花粉・胞子の一覧を表Iに、また主要な花粉・胞子の分布を図1に示した。なお分布図における樹木花粉は樹木花粉総数を基準に、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基準にして百分率で示してある。ハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるが、それぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括していっている。

検鏡の結果、試料2においてはシノキ属一マテバシイ属（以後シイ類と略す）やイネ科などが若干検出されているだけで花粉の検出数としては非常に少なく、分布図として示せなかった。

試料5ではシイ類が50%を越える高い出現率を示して最優占しており、コナラ属アカガシ亜属も20%弱検出されている。その他ではスギ属やクリ属が5%を越えて、イチイ科一イヌガヤ科ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）、コナラ属コナラ亜属などが1%を越えて検出されている。草本類ではイネ科が16%、ヨモギ属が4%以外は1%以下と低率であり、検出種類数も少なかった。

試料7では試料5とは対照的にアカガシ亜属が出現率50%を示して最優占しており、シイ類は20%を越えて出現している。その他ではスギ属やエノキ属一ムクノキ属が5%を、マキ属やコウヤマキ属、ヒノキ類、クマシデ属一アサダ属、コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属が1%を越えて検出されている。草本類はいずれも低率で、キンポウゲ科とマメ科のみである。

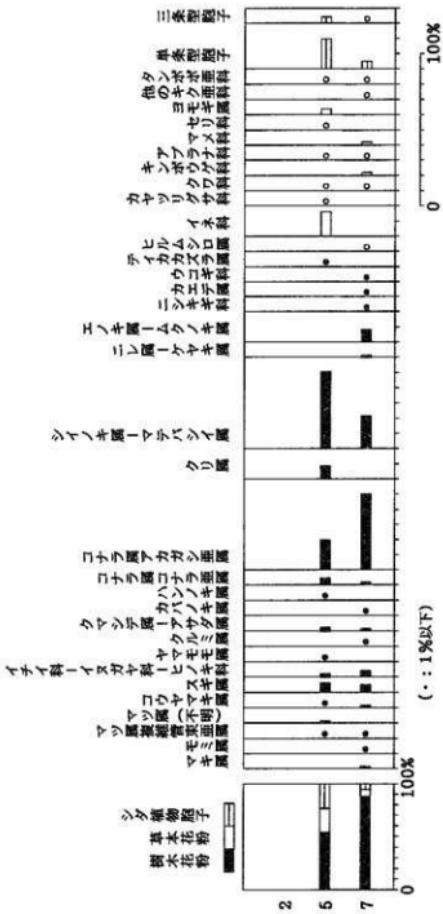
表1 稲田遺跡産出花粉化石一覧表

和名	学名	2	5	7
樹木				
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	-	3
モミ属	<i>Abies</i>	-	-	2
マツ属複管束亞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	-	1	1
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	2	-
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	1	3
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	1	8	11
イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科	T. - C.	2	3	9
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	1	1	-
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	-	1
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	-	3	3
カバノキ属	<i>Betula</i>	-	-	1
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	-	1	-
コナラ属コナラ亞属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	2	6	4
コナラ属アカガシ亞属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	1	26	112
クリ属	<i>Castanea</i>	-	11	-
シイノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis</i> - <i>Pasania</i>	3	66	48
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	-	-	3
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis</i> - <i>Aphananthe</i>	1	-	18
ニシキギ科	<i>Celastraceae</i>	-	-	1
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	2
ウコギ科	<i>Araliaceae</i>	-	-	1
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	1	-	-
ティカカズラ属	<i>Trachelospermum</i>	-	1	-
草本				
ヒルムシロ属	<i>Potamogeton</i>	-	-	1
イネ科	<i>Gramineae</i>	6	38	-
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	-	1	-
クワ科	<i>Moraceae</i>	1	1	2
キンポウゲ科	<i>Ranunculaceae</i>	-	-	5
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	-	1	1
マメ科	<i>Leguminosae</i>	-	-	5
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	-	1	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	-	9	-
他のキク亞科	other <i>Tubuliflorae</i>	-	-	1
タンボボ亞科	<i>Liguliflorae</i>	1	2	1
シダ植物				
單条型胞子	<i>Monolete spore</i>	3	47	12
三条型胞子	<i>Trilete spore</i>	2	10	2
樹木花粉	<i>Arboreal pollen</i>	12	130	223
草本花粉	<i>Nonarboreal pollen</i>	8	53	16
シダ植物胞子	<i>Spores</i>	5	57	14
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	25	240	253
不明花粉	<i>Unknown pollen</i>	2	39	38

T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

楠木花粉

草本花粉・シダ植物胞子



3. 祝田遺跡周辺の古植生

試料5、7の産出傾向をみると、アカガシ亜属とシイ類で70%を占め、これらを主体とした照葉樹林が遺跡周辺に広がっていたのであろう。この照葉樹林について浜名湖の花粉分析結果をみると、主潮最深部への花粉の供給源となる都田川流域の位置する北部ではシイとカシで形成される照葉樹林の繁栄期は約5,000年前以降であり、1,000前頃にマツ林期に移行している (Matsusita・Sanukida 1988)。これからすると当遺跡において広く分布していたアカガシ亜属やシイ類を主体とした照葉樹林はかなり以前より繁栄期にはいっており、分析試料の弥生時代はその一時期に当たっていたのであろう。またこのアカガシ亜属やシイ類は試料5と7では大きく出現率が変化しているのが認められる。しかしながら試料5と7では堆積場が違うなど、この2試料だけでは増加あるいは減少傾向にあるかどうかについては言及できないと考える。

その他遺跡周辺ではスギ属やヒノキ類などの針葉樹林やクマシテ属ーアサダ属などの落葉広葉樹類も一部に生育していたのであろう。

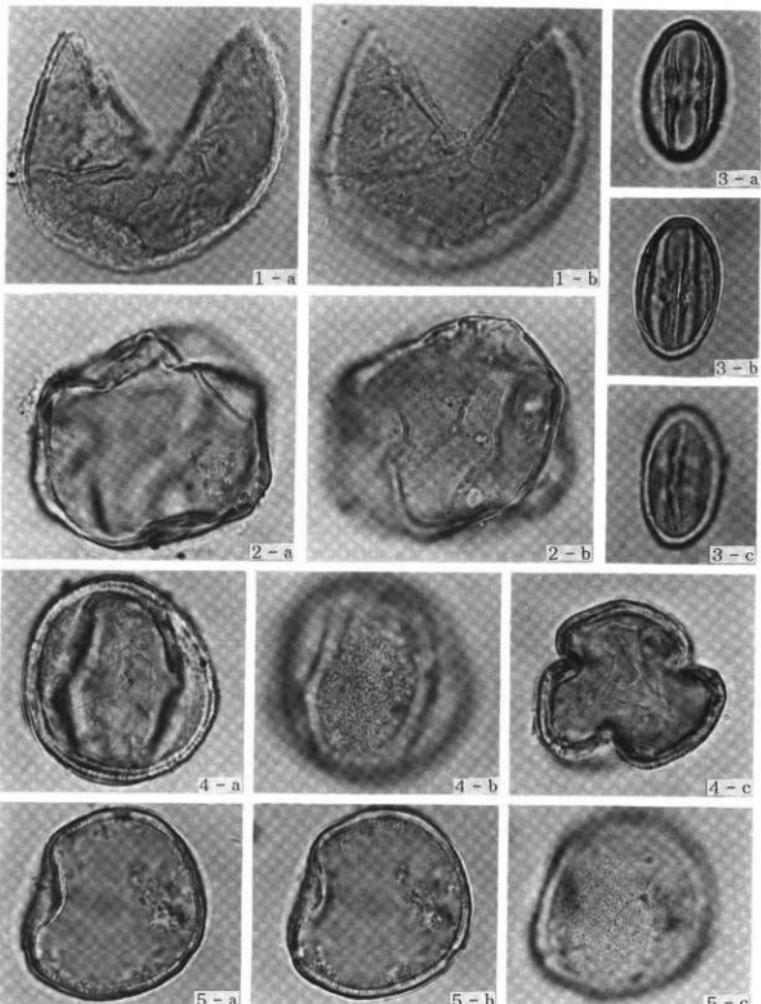
また試料5では草本類においてイネ科やヨモギ属がみられ、環濠周辺はこれらの雑草類が生育していたものと思われる。

4. 堆積環境

先にも記したが試料2においては花粉の検出数が少なく、作成したプレパラートには非常に細かな植物片とみられる粒子が多数観察される。これは試料5においても同様であり、検出された花粉化石も傷んでいるものが多く、比較的多く花粉化石が得られた試料7もこの傾向がみられる (図版参照)。もともと花粉は丈夫な外膜を持ち、水中など還元環境下においてはよい状態で保存されている場合が多い。しかしながら地上に落下した花粉は紫外線などにより酸化分解され、またバクテリアによる食害もうけるなど、化石としては残りにくい。今回の試料も得られた花粉化石は傷みが認められ、分解あるいは食害をうけている可能性が高く、このことは、特に環濠においては水のついた状態ではなかったのではないかと予想される一緒に行われた珪藻分析結果においても乾燥気味の湿地環境に適応したと考えられている陸生珪藻が得られているなど、環濠はそれほど水のついた状態ではなかったと予想されており、こうした環境下に落下した花粉あるいは葉などの植物遺体は分解され、非常に細かな粒子としてプレパラート上で観察されたものと思われる。

引用文献

Mariko Matsushita and Satoshi Sanukida (1988) Holocene Vegetation History around Lake Hamana on the Pacific Coast of Central Japan. The Quaternary Research, 26, p.393-399.



図版 祝田遺跡（試料No.7）の花粉化石

1：スギ属

2：クルミ属

3：シイノキ属—マテバシイ属

4：コナラ属アカガシ亜属

5：エノキ属—ムクノキ属

II. 祝田遺跡の珪藻化石

I. はじめに

珪藻は珪酸質の殻を持つ微小な单細胞の藻類であり、その大きさは10~500 μm 程度である。珪藻類は海水域から淡水域の広範囲の環境下に分布し、更に土壌、岩石あるいはコケの表面などの湿った所にも生育する。まち珪藻は、種によってそれぞれ固有の生育域・生活形態を持っており、堆積物中に化石として良く保存されており、古環境復元、特に堆積環境の指標として古くから利用されてきた。今回、祝田遺跡の弥生後期の環濠を埋積する基底部の試料（試料5）とこの環濠の下位の出土土器片より弥生中期と考えられる黒色の有機質土（試料7）について、その堆積環境を明らかにする目的で珪藻分析を実施した。

2. 分析試料と方法

分析試料は弥生後期と考えられる環濠を埋積する基底部の試料（試料5）とこの環濠の下位の出土土器片より弥生中期と考えられる黒色の有機質土（試料7）の2試料である。

以上の2試料について、以下の手順で試料処理を行い、検鏡用のプレパラートを作成し、珪藻分析を実施した。

- (1) 試料から湿潤重量約1g程度を取り出し、計量した後ビーカーに移し、30%過酸化水素を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行う。
 - (2) 反応終了後、熱湯を加え、1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイド分を捨てる。この作業を上澄み液が透明になるまで繰り返す（5~7回程度）。
 - (3) 残渣から適量を取り、カバーガラスに滴下し乾燥させ、マウントメディアで封入し、プレパラートを作成する。
- 作成したプレパラートは400~1000倍の光学顕微鏡下で観察し、珪藻殻約200個体について同定を行なう。

3. 硅藻化石群集と堆積環境

珪藻化石の優占種・特徴種等の違いから、2帯に区分することができる。

「I帯（試料7）の珪藻化石群集」

試料7ではHantzschia amphioxysが約30%と優占し、Neidium iridis, P.hemiputera, P.viridis, Caloneis bacillum等を伴う群集である（表1, 図1）。

Hantzschia amphioxysは安藤（1990）、小杉（1986）共に陸域指標種あるいは陸生珪藻の主要構成種としており、かなり乾燥した土壌やコケに付着して生育していることが報告されている。また、随伴する種のうち、N.iridis, P.viridis等は沼沢湿地付着生種群の主要構成種であり、産出する殻数のうち、止水種・陸生種が大半を占め、浮遊性種の産出殻数はごくわずかである。したがって、試料7はほとんど水深のない湿地的な環境が推定される。

「II帯（試料5）の珪藻化石群集」

珪藻化石の産出殻数は1gあたり 5.24×10^4 個であり、優占する種はEunotia praeruptaであり、このほかに比較的多く産出する種はAchnanthes inflata, Cymbella tumida, Pinnularia gibba, P.viridis, Stauroneis phoenicenteronなどである（表1, 図1）。

P.gibba, P.viridis, S.phoenicenteron等は安藤（1990）の沼沢湿地付着生種群の主要構成種であり、これらが約30%以上を占める。また、優占するE.praeruptaについては安藤（1990）は沼沢湿

地付着生種群の主要構成種とし、小杉（1986）は陸生珪藻として扱っているが、いずれにしろ水深のほとんどない乾燥気味の湿地環境に適応した種であると推定される。したがって、試料5は試料7と同様、水深の非常に浅い、水の動きのほとんどない湿地的な環境下で堆積したものと推定される。

引用文献

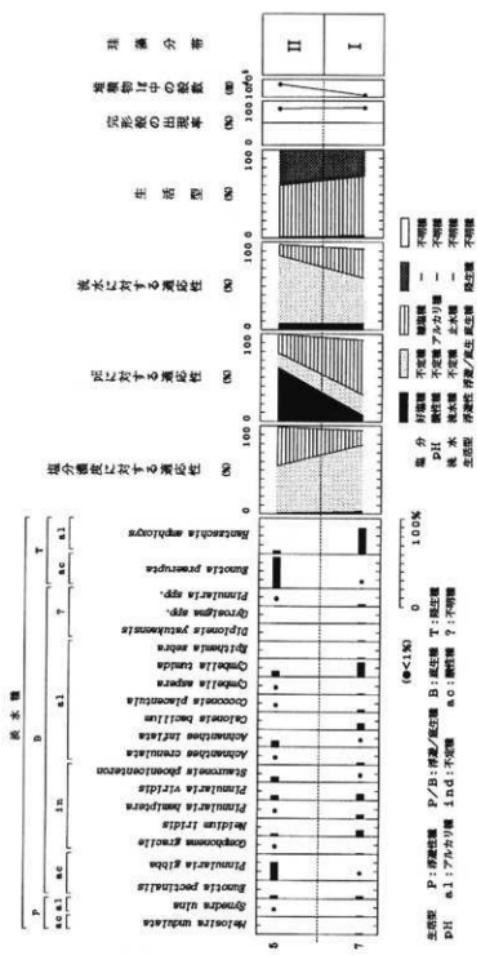
安藤--男（1990）淡水產珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理, vol.42, p.73-88.

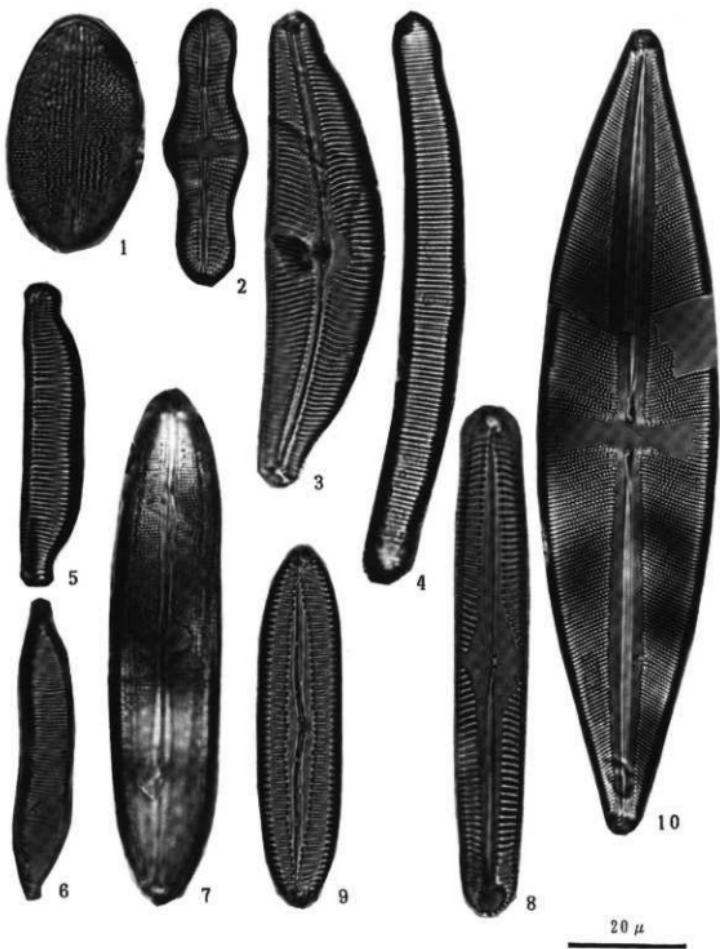
小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望－植生史研究, No.1, P.29-44.

分類群	適応性					5	7
	塩分	pH	流水	生活			
<i>Achnanthes crepulata</i>	F-phi	Alka	?	B	2	4	
<i>A. inflata</i>	F-ind	Alka	Rhe	B	15	1	
<i>Caloneis bacillum</i>	F-ind	Alka	Rhe	B	-	10	
<i>C. silicula</i>	F-ind	Alka	Ind	B	1	-	
<i>Cocconeis placentula</i>	F-ind	Alka	Ind	B	1	5	
<i>Cymbella aspera</i>	F-ind	Alka	Ind	B	1	2	
<i>C. cuspidata</i>	F-ind	Ind	Ind	B	1	-	
<i>C. tumida</i>	F-ind	Alka	Lim	B	12	24	
<i>C. spp.</i>	F-?	?	?	B	-	1	
<i>Diploneis yatukaensis</i>	F-ind	?	Lim	B	-	2	
<i>Epithemia zebra</i>	F-ind	Alka	Ind	B	-	2	
<i>Eunotia pectinalis</i>	F-pho	Acid	Ind	B	?	4	
<i>E. praerupta</i>	F-pho	Acid	Ind	T	74	1	
<i>Frustulia rhomboides</i>	F-pho	Acid	Lim	B	1	1	
<i>F. vulgaris</i>	F-ind	Alka	Ind	B	1	-	
<i>Gomphonema acuminatum</i>	F-ind	Alka	Lim	B	1	-	
<i>G. augur</i>	F-ind	Alka	Ind	B	1	-	
<i>G. gracile</i>	F-ind	Ind	Lim	B	2	2	
<i>G. parvulum</i>	F-ind	Ind	Ind	B	-	1	
<i>Gyrosigma spp.</i>	F-?	?	?	B	-	2	
<i>Hantzschia amphioxys</i>	F-ind	Alka	Ind	T	9	42	
<i>Melosira undulata</i>	F-ind	Acid	Lim	P	-	2	
<i>Micula spp.</i>	F-?	?	?	B	-	1	
<i>Weidm. iridis</i>	F-pho	Ind	Lim	B	7	10	
<i>Plinnularia acrosphaeria</i>	F-ind	Ind	Lim	B	1	1	
<i>P. borealis</i>	F-ind	Ind	Ind	T	-	1	
<i>P. braunii</i>	F-pho	Acid	Lim	B	-	1	
<i>P. divergens</i>	F-pho	Acid	?	B	2	-	
<i>P. gibba</i>	F-ind	Acid	Ind	B	42	1	
<i>P. hemiptera</i>	F-pho	Ind	Lim	B	1	6	
<i>P. major</i>	F-ind	Acid	Lim	B	-	-	
<i>P. microstauron</i>	F-ind	Acid	Ind	B	-	1	
<i>P. viridis</i>	F-ind	Ind	Ind	B	11	11	
<i>P. spp.</i>	F-?	?	?	B	1	3	
<i>Rhopalodia gibberula</i>	F-phi	Alka	Ind	B	-	1	
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	F-ind	Ind	Ind	B	12	1	
<i>Synedra rumpens</i>	F-ind	Ind	Ind	P	1	1	
<i>S. ulca</i>	F-ind	Alka	Ind	P	1	2	
海水種					0	0	
海-汽水種					0	0	
汽水種					0	0	
淡水種					208	147	
計数した総数					208	147	

凡例 (適応性)

塩分濃度	pH	流水	生活型
M : 海水種	Acid : 酸性種	Lim : 止水種	P : 浮遊性種
M-B : 海-汽水種	ind : 不定種	ind : 不定種	B : 底生種
B : 汽水種	Alka : アルカリ種	Rhe : 流水種	P/B : 浮遊性/底生種
F-phi : 淡水-好塩種	? : 不明種	? : 不明種	T : 陸生種
F-ind : 淡水-不定種			? : 不明種
F-pho : 淡水-嫌塩種			
F-? : 淡水-不明種			





主要産出珪藻化石顕微鏡写真

- | | |
|--------------------------------------|--|
| 1. <i>Cocconeis placentula</i> (試料7) | 2. <i>Achnanthes inflata</i> (試料5) |
| 3. <i>Cymbella tumida</i> (試料7) | 4. <i>Eunotia pectinalis</i> (試料5) |
| 5. <i>Eunotia praerupta</i> (試料5) | 6. <i>Hantzschia amphioxys</i> (試料5) |
| 7. <i>Neidium iridis</i> (試料5) | 8. <i>Pinnularia gibba</i> (試料5) |
| 9. <i>Pinnularia viridis</i> (試料5) | 10. <i>Stauroneis phoenicenteron</i> (試料5) |

報告書抄録

ふりがな	ほうだいせき							
書名	祝田遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所報告書							
シリーズ番号	第51集							
編著者名	鈴木光一							
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒424 静岡県清水市江尻台町18-5 TEL 0543-67-1171							
発行年月日	1994年 3月30日							
ふりがな 所蔵遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査 面積 m ²	調査 原因
市町村	遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査 面積 m ²	調査 原因		
はうだいせき 祝田遺跡	いなさぐん はそえちょう なかがわ はうだ 引佐都郷江町 中川祝田地先	22521 No.3-35	細江町 34° 48' 26" 6781	137° 41' 26" 4444 B地点 C-14	1993.04.01 1993.11.17	延2,526 m ²	河川の 改良工事	
所蔵遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
集落跡	弥生後期	溝 5条 方形周溝墓 4基 土坑 4基	弥生土器 鉄製品	環境				
寺院跡？ 集落跡	中世	溝 34条 井戸 2基 土坑 20基 ピット群	山茶碗・土師器 須恵器 灰釉陶器など					

写 真 図 版

調査区周辺空中写真





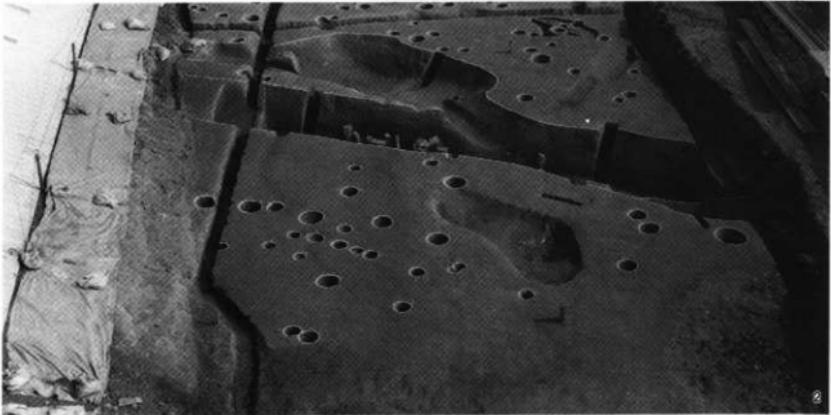
調査区発掘前近景



調査区周辺環境



中世遺構全景



中世遺構全景（排土置場下）



SD11完掘状態



SD11の石組み



SD12遺物出土状況



SD23遺物出土状況



SD23土層断面



SD23完掘状態



SD23丸瓦出土状況



SD34土層断面



SD34土器出土状況



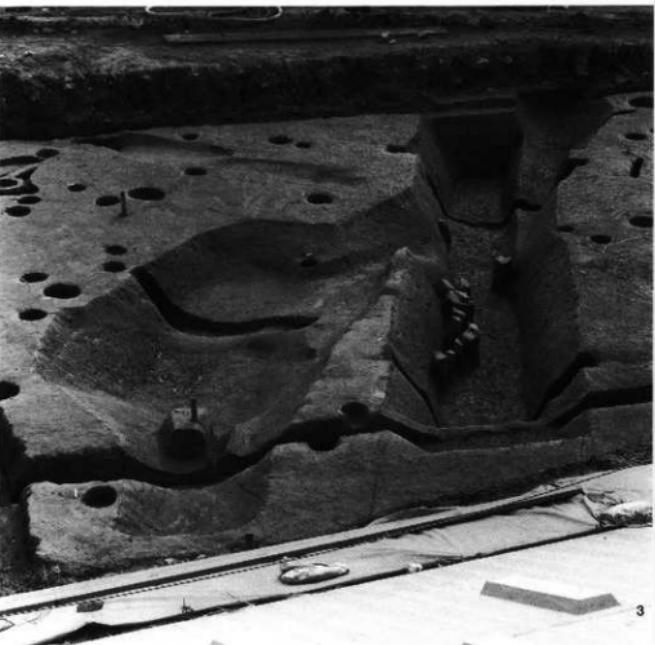
SD34完掘状態



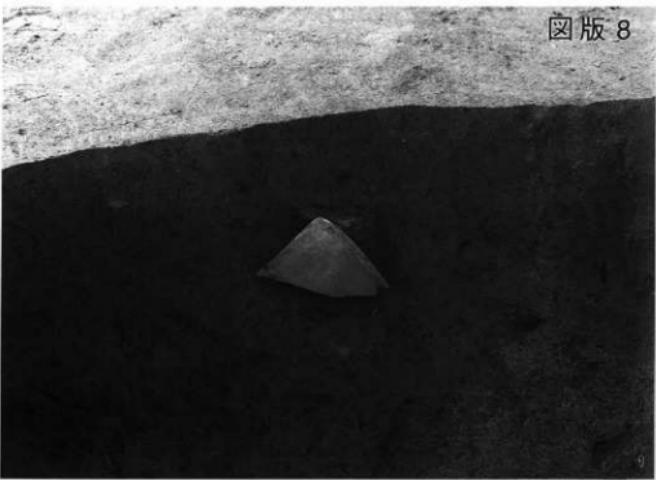
SD37完掘状態



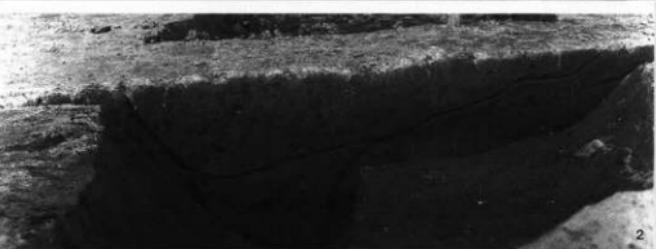
SD37・38土層断面



SD37・38完掘状態



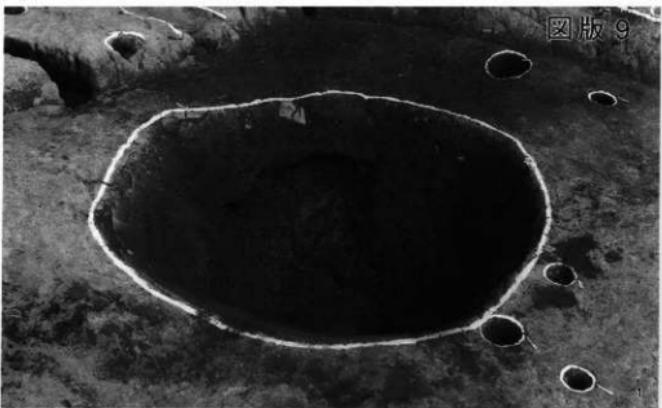
SD40風字現出土状況



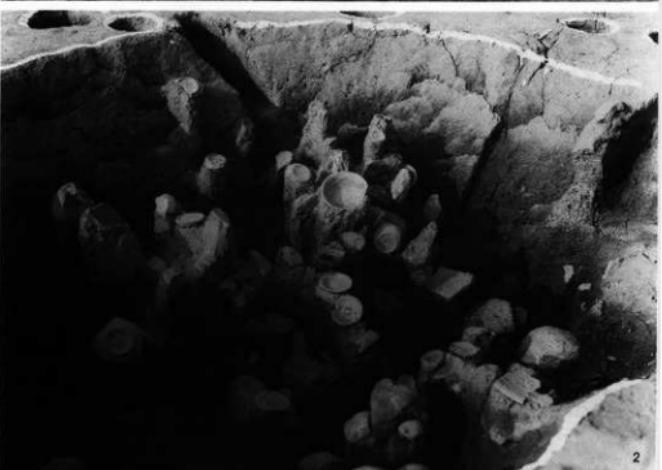
SD40土層断面



SD40完掘状態



SE01検出状況



SE03土器出土状況



SE03完掘状態



SF01完掘状態



SF23完掘状態



P251根固めの石



P306土器出土状況



P521土器出土状況



P913刀子出土状況



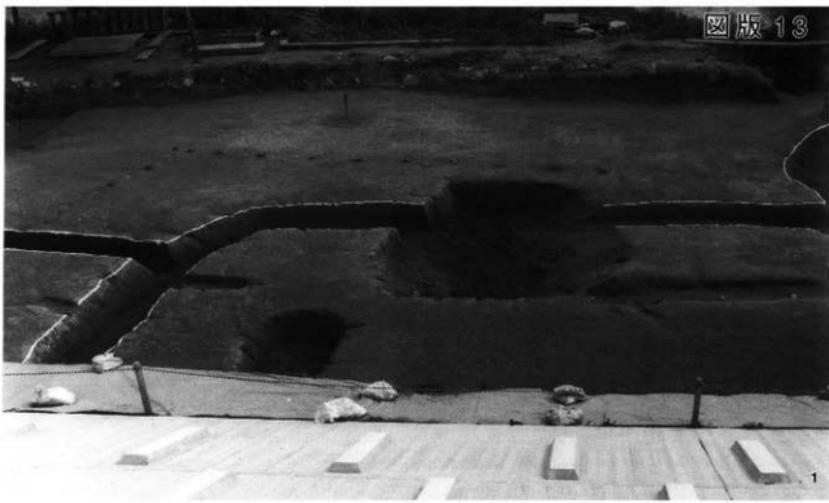
12区の遺構検出状況



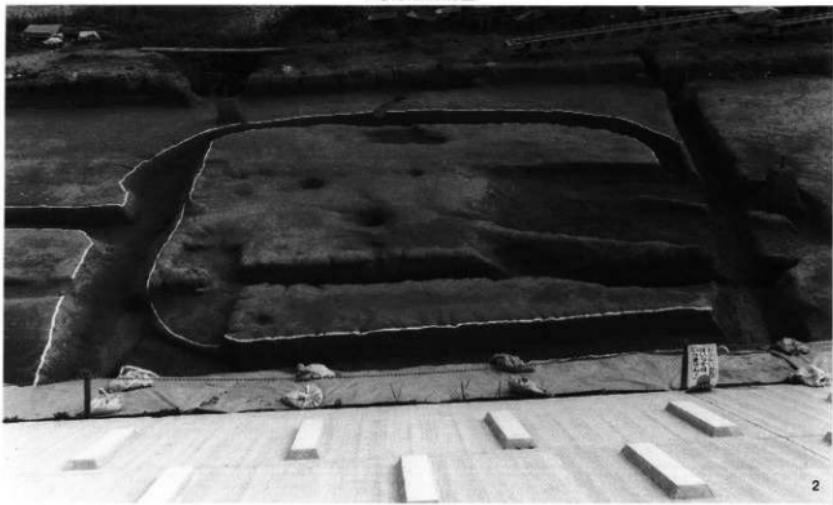
方形周溝墓群 東より



弥生時代の遺構全景



1号方形周溝墓



2号方形周溝墓



2号方形周溝墓土器出土状況



2号方形周溝墓ミニチュア土器出土状況



3号方形周溝墓



1



4号方形周溝墓

2



4号方形周溝墓 鉄製品出土状況



3



SD50土器出土狀況



SD50土器出土狀況

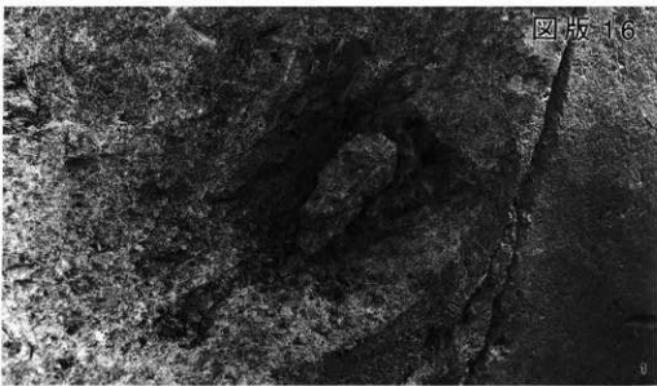


SD50土器出土狀況

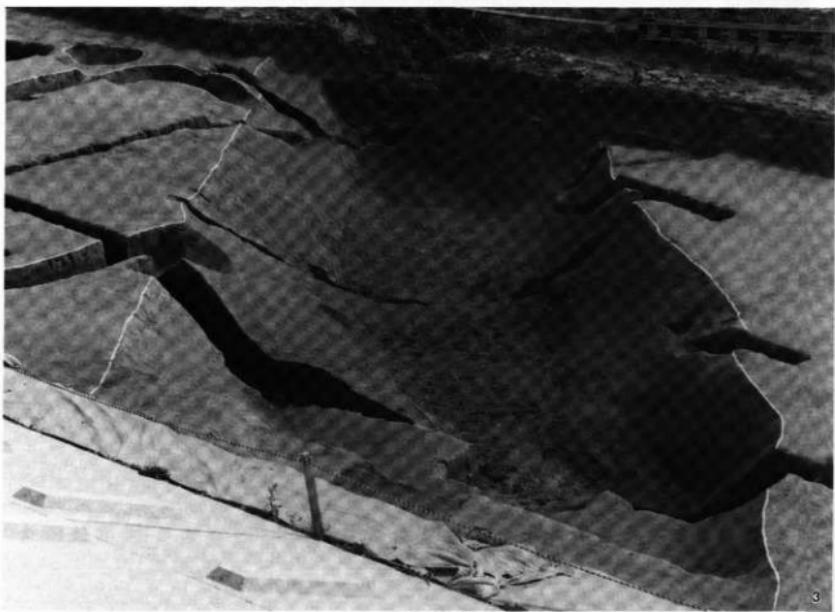
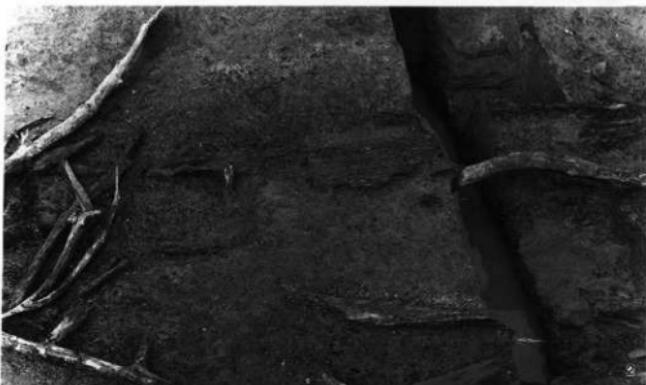


SD50土器出土狀況

SD54鉄製品出土状況



SD54底部遺物出土状況



SD54完壊状態



SF50土器出土状况



SF51土器出土状况



SF53土器出土状况



SX07土器出土状况



SX07土器出土状况



SX11土器出土状况



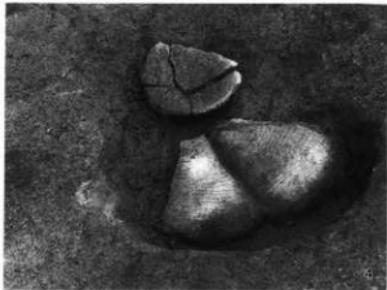
SX12壺出土状況



SX16壺出土状況



SX18壺出土状況



SX19壺出土状況



SD50出土土器集合写真



28-4



27-8



27-1



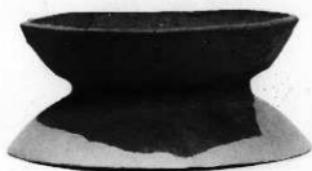
27-3



28-1



29-1



27-10



28-9



27-12



27-13



29-2



30-5



30-7



31-1



31-2



31-4



31-5



31-6



32-1



32-3



32-4



32-5



33-2



33-3



33-4



33-10



33-11



33-7



33-8



33-12



34-1



34-2



34-3



34-6

34-5



34-9

34-8



34-12



36-2



35-9



36-1



35-7



36-3



37-1



37-2



37-3



38-1



38-2



38-4



38-5



39-2



39-4



40-2



40-3



40-4



40-5



42-3



43-1



42-4



41-2



41-3



42-1



41-1



42-8



42-9



43-3



42-10



43-6



43-4



43-5



43-7



43-8



43-9



43-10



43-11



43-12



43-13



43-14



43-15



44-2



44-3



44-6



44-5



44-8



44-7



44-1



44-9



44-10



44-12



45-1



44-13



45-3



45-5



45-7



45-8



46-3



46-4



46-5



46-6



46-7



46-8



47-1



47-2



47-4



47-6



47-7



47-8



48-5



49-3



48-6



48-4



48-1



49-1



49-4



49-8



50-2



50-3



50-6



50-7



50-8



49-6



44-4

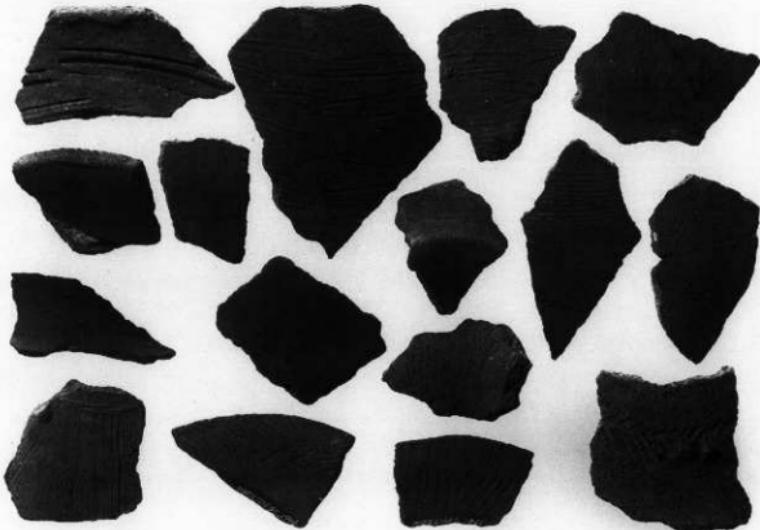
44-2



46-10



46-9



弥生時代溝（SD54）出土土器 12



52-6



52-1



52-4



52-5



52-7



52-2



53-7



52-3



53-2



42-11



53-8



53-9



54-12



54-13

弥生時代溝・土坑・グリッド出土土器



54-2



54-1



54-3



54-7



53-5



54-5

弥生時代土坑及びグリッド出土土器



53-1



54-9



54-8



53-4



72-8

72-7

72-6



第72図

弥生時代土坑及びグリッド出土土器・石製品・鉄製品



SD34出土土器集合写真



SF17出土土器集合写真



56-6



56-9



56-8



56-11



56-10



56-14



56-12



56-4



56-24



56-5



56-27



56-10



56-22



56-8



57-23 ①



57-22



57-23 ②



57-16



57-10



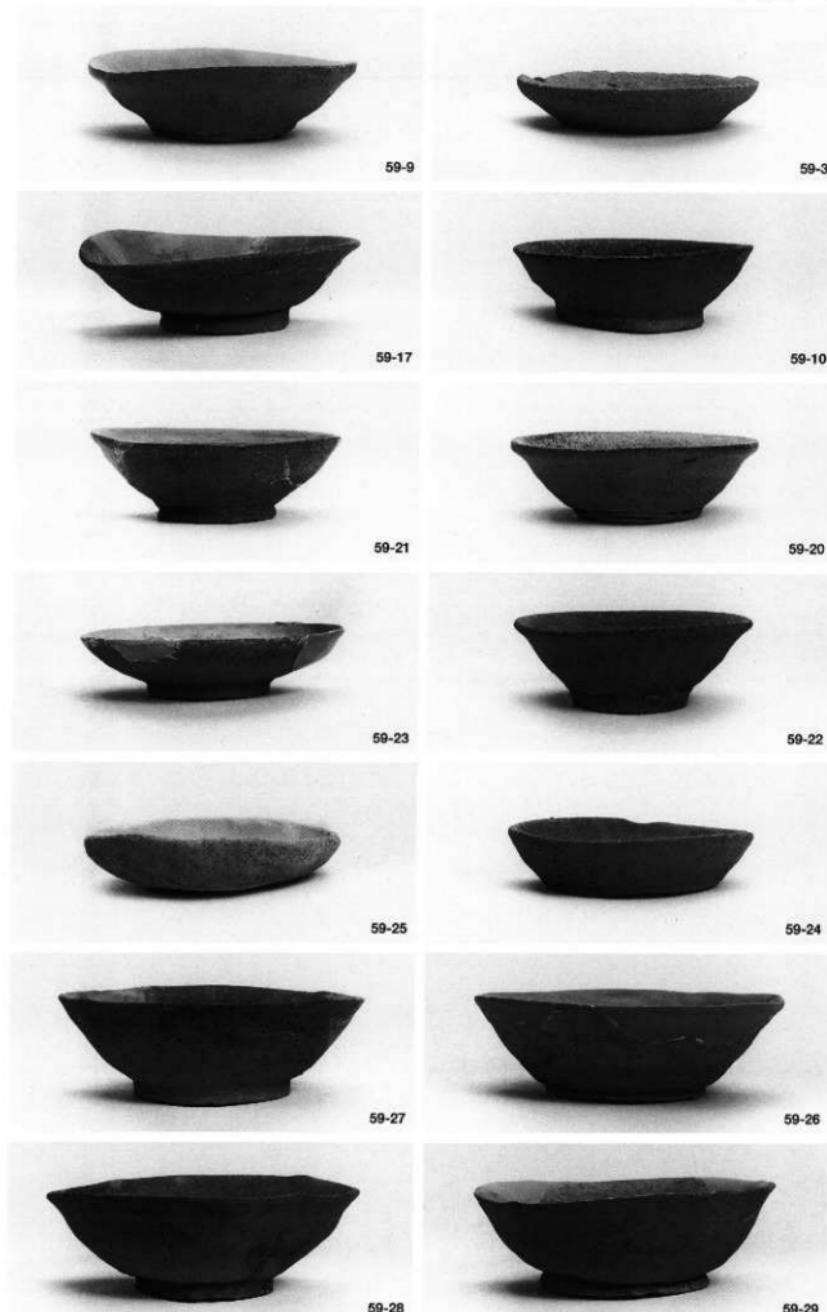
57-14



58-20



58-24





59-31



59-36



59-32



59-34



59-33



59-35



60-1



60-2



60-3



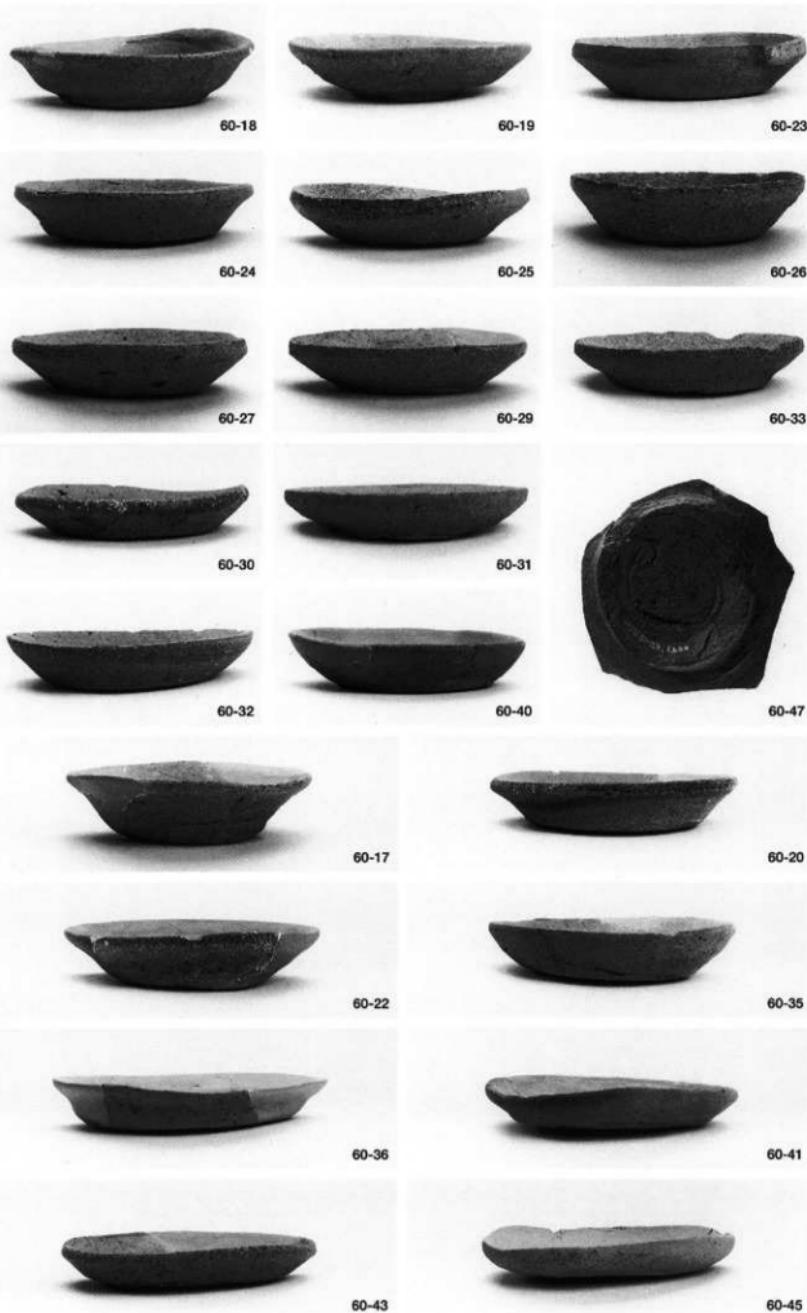
60-7



60-15



60-16



中世満 (SD23) 出土土器、瓦



61-26



61-7



61-8



61-9



61-12



61-13



61-14



61-15



61-16



61-17



61-18



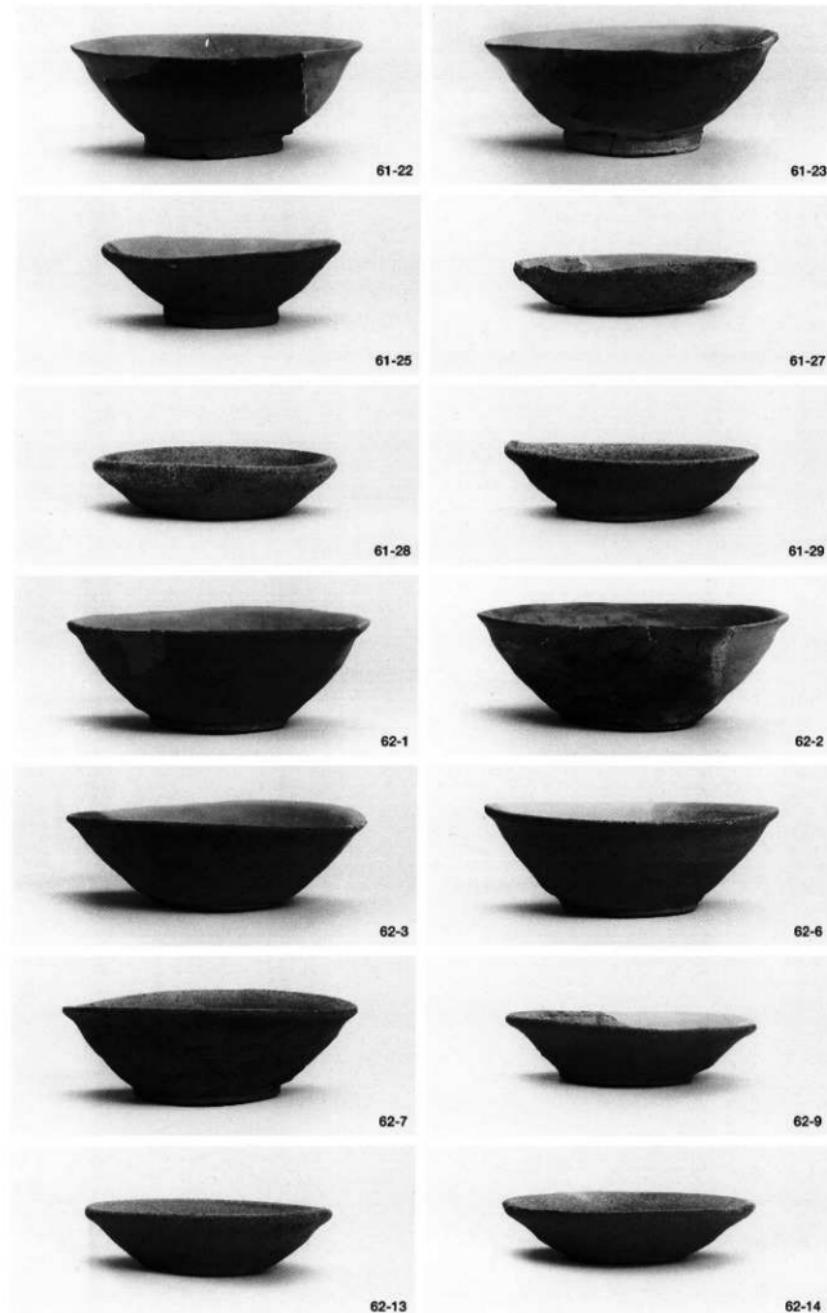
61-19



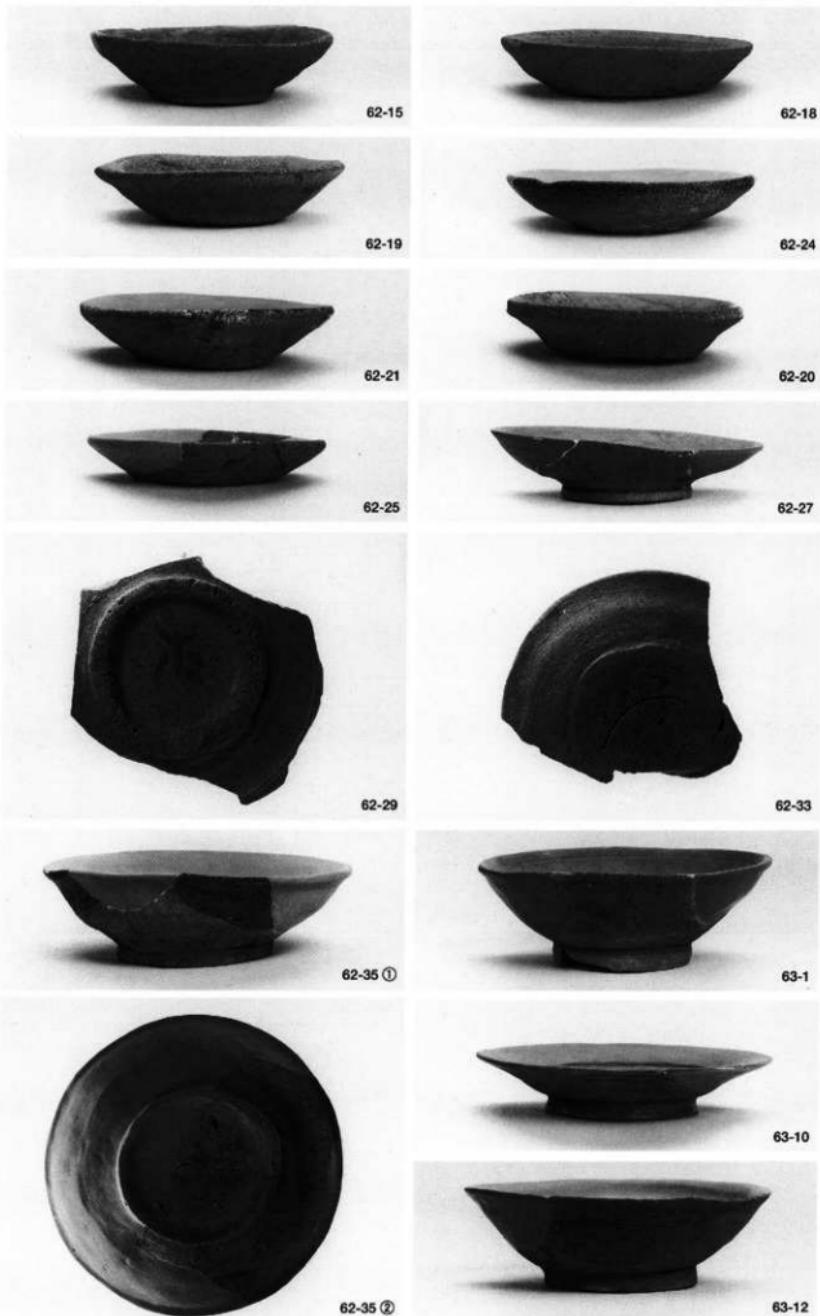
61-20



61-24



中世満・土坑・ピット・井戸出土土器



中世井戸 (SE03) 出土土器



63-13



63-15



63-23



63-28



63-31



63-26



64-6



63-32



63-33



64-1



64-2



64-12



64-3



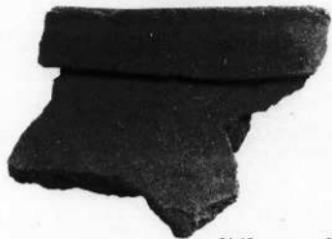
64-4



64-5



64-7



64-10

64-11



56-1



青磁・土鍾



65-1



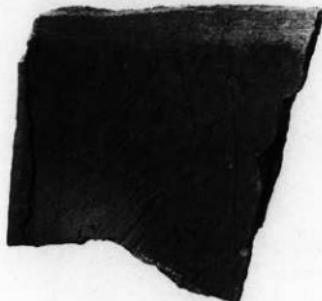
65-5



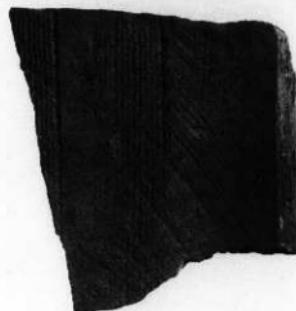
65-4



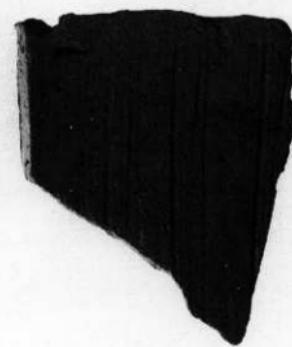
66-3



68-5



68-5



69-2

69-4



66-1

66-1

瓦 2



73-1

73-1



73-2

73-3



72-9

木製品・鉄製品

静岡県埋蔵文化財調査研究報告 第51集

祝田遺跡

平成3年度二級河川都田川住宅関連公共施設整備
促進事業工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成6年3月30日

編集発行 財團法人

静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所 星光社印刷株式会社

静岡市豊田3丁目6番12号

TEL <054>286-3131(代)